史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡25

― 総括編 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1383集

２０１９

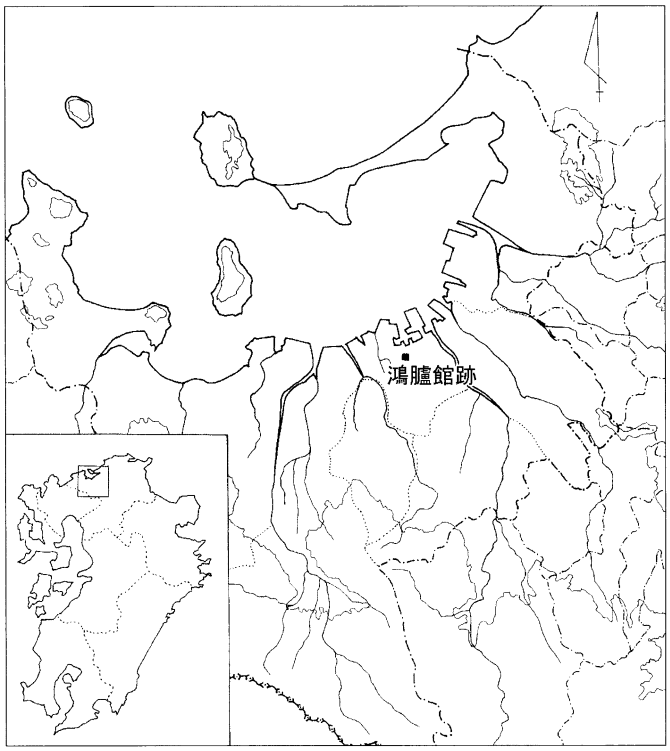
福岡市教育委員会

史跡 鴻臚館 跡

鴻 臚 館 跡 25

— 総括編 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1383 集



２０１９

福岡市教育委員会

序

7 世紀後半に那の津を見下ろす小高い丘を切り開いて造られた筑紫館、のちの鴻臚館は我が国古代の外交施設として、中国・朝鮮半島から来日する使節にとっての玄関口、あるいは遣唐使・遣新羅使等の出国と帰国の拠点としての役割を担っていました。遣唐使の派遣停止など、外交使節の往来が途絶える９世紀には、これに替わって「唐物（からもの）」を初めとする唐文化を日本へもたらす中国や朝鮮の商人らの交易の場へと役割が変わって行きました。約400 年間にわたって日本の古代外交を支えた鴻臚館は、その後土の中に埋もれてやがて福岡城の一部となり、近代には陸軍兵営、戦後には舞鶴公園へとかわり、鴻臚館の遺跡は壊滅したかに見えましたが、昭和63年から続く発掘調査によって遺構や遺物が残っていることが分かりました。27 年に及ぶ発掘調査により、鴻臚館には南北二つの施設があったことや東向きに建っていたこと、丘陵を巧みに取り込んだ立体的な構造であったことなどが明らかになり、平成16年には史跡福岡城跡三の丸の一角が国史跡鴻臚館跡として二重に指定されました。

鴻臚館跡は日本の古代外交史を考える上で重要な史跡であるとともに、市民にとって貴重な歴史遺産でもあります。鴻臚館を現代によみがえらせ、福岡城跡とともに歴史公園として整備公開していくことが、今求められていますが、　整備を行う上で鴻臚館跡の発掘記録をまとめた調査報告書を作成することが不可欠であるため、福岡市ではこの作業を進めているところです。本書はこれまで報告した「南館」「北館」の調査成果を総括したものです。

調査に際し「鴻臚館跡整備検討委員会」をはじめ文化庁、福岡県、財務省福岡財務支局等の関係機関にご協力を頂き、調査や整理を円滑に進めることができましたことを厚くお礼申し上げます。調査に関わられた全ての方々に対し深く感謝申し上げますとともに、この報告書が広く活用され、鴻臚館跡の保存と活用に対する理解を深める一助となることを願います。

平成31年３月25日

福岡市教育委員会

教育長　星子　明夫

例　言

１．本書は福岡市教育委員会が行った、国指定史跡 鴻臚館跡の発掘調査報告書である。
２．鴻臚館跡の発掘調査報告書は、平成２（1990）年度から継続して刊行しており、本書が25冊めであるが、『鴻臚館跡Ⅱ』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第315 集）、及び『鴻臚館跡18～23』（同第1022・1175・1213・1248・1300・1326集）を除き概要報告書である。
３．本報告書の刊行については、調査が長期にわたり相当の分量があるため分割刊行しており、遺構の性格により区分した「谷部分」、「南館（仮称）部分」、「北館部分」の順に刊行している。（鴻臚館跡調査では、谷の北側施設を文献に見える「鴻臚北館」と推定し、相対する南側施設を「南館」と仮称している。）
４．本書は「北館・北館・谷部」の総括であり、これまでの調査成果についてまとめたものである。
５．鴻臚館跡の発掘調査、及び本書の作成は、国庫補助事業として実施した。
６．本書に使用した遺構実測図、遺物実測図、写真は２で記した報告書から転載した。なお、掲載した遺構・遺物の出典は一覧表に示した。
７．本書に用いた座標系は、平面直角座標系第Ⅱ座標系（日本測地系）である。図に使用した方位は全て座標北（Ｙ軸）を示し、この地域では真北より0°19′西偏し、磁北より6°02′東偏する。
８．本書の執筆は菅波正人、遺構・遺物の一覧表の作成は光吉千里が行った。
９．文中の軒瓦の型式は、「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」九州歴史資料館2000 による。
10．図中の瓦分類番号は「鴻臚館跡21」福岡市教育委員会2014 の叩き文様分類に拠る。
11．本書の編集は菅波が行った。
12．本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

遺跡調査番号	8747・8829・8910・9130・9218・9236・9420・9463・9620・9736・9910・0008・0109・0218・0617・0706・0821・0906・1013・1116・1205・1314		
遺跡略号	ＫＲＥ（鴻臚館跡）、ＦＵＥ（福岡城跡）		
所在地	中央区城内１－１	分布地図番号	６０－０１９２
調査対象面積	48,027㎡（国史跡指定面積）	調査面積	計13,654㎡（詳細は Tab.4参照）
調査期間	（Tab.４参照）		

目　次

第一章　はじめに …… 1
　１．調査の経緯と経過 …… 1
　２．調査体制 …… 2
　３．報告書の作成 …… 3
　４．鴻臚館と周辺の遺跡 …… 6
第二章　調査の記録 …… 7
　１．調査の歴史と位置づけについて …… 7
　２．調査の概要 …… 8
　　（１）位置と環境 …… 8
　　（２）旧地形と整地の状況 …… 10
　３．遺構・遺物の変遷 …… 16
　　（１）第Ⅰ期（７世紀後半～８世紀前半） …… 16
　　（２）第Ⅱ期（８世紀前半～末） …… 20
　　（３）第Ⅲ期（９世紀初～後半） …… 28
　　（４）第Ⅳ期以降（９世紀後半～ 11 世紀前半） …… 36
　　（５）出土遺物から見た鴻臚館 …… 64
　４．まとめ …… 112

挿　図　目　次

Fig.1　鴻臚館跡発掘調査計画図(平成 28年 3月現在)　1
Fig.2　周辺遺跡分布図(1/200,000)　6
Fig.3　鴻臚館跡周辺地形及び官道推定図　8
Fig.4　造成前の旧地形推定図(1/2,000)　9
Fig.5　埋立(地業) 遺構全体図(1/2,000　10
Fig.6　北西隅埋立(地業) 全体図 (1/500)　11
Fig.7　第 21次調査トレンチ 03-2 トレンチ土層及び出土遺物実測図(1/100、1/6)　11
Fig.8　鴻臚館跡調査区全景デジタルモザイク写真　14
Fig.9　鴻臚館跡遺構配置図(1/1,000)　15
Fig.10　鴻臚館跡第Ⅰ期主要遺構配置図(1/1,000)　17
Fig.11　第Ⅰ期北館遺構実測図(1/200)　18
Fig.12　第Ⅰ期南館遺構実測図(1/200)　19
Fig.13　鴻臚館跡第Ⅱ期主要遺構配置図(1/1,000)　21
Fig.14　第Ⅱ期北館石垣検出状況及び遺構実測図(1/100、1/200)　22
Fig.15　第Ⅱ期北館遺構実測図(1/200)　23

Fig.16　第Ⅱ期南館遺構実測図(1/100、1/200)　24
Fig.17　第Ⅱ期北・南館東門遺構実測図(1/100)　25
Fig.18　第Ⅱ期北・南館便所状遺構実測図(1/100)　26
Fig.19　第Ⅱ期中央谷土橋及び暗渠遺構実測図(1/60、1/100)　27
Fig.20　鴻臚館跡第Ⅲ期主要遺構配置図(1/1,000)　29
Fig.21　第Ⅲ期北館遺構及び南館建物礎石実測図(1/100、1/200)　30
Fig.22　第Ⅲ期南館遺構実測図(1/200)　31
Fig.23　第Ⅲ期中央谷及び土層実測図(1/100、1/800)　32
Fig.24　第Ⅲ期中央谷木橋橋脚検出状況及び橋脚実測図(1/10)　33
Fig.25　第Ⅲ期北館第Ⅲ期北館礎石建物検出状況及び東側建物実測図(1/100)　34
Fig.26　第Ⅲ期南館遺構検出状況　35
Fig.27　鴻臚館跡第Ⅳ・Ⅴ期主要遺構配置図(1/1,000)　37
Fig.28　第Ⅳ・Ⅴ期南館廃棄土坑遺構配置図(1/600)　38
Fig.29　南館廃棄土坑遺構実測図１(1/60)　39
Fig.30　南館廃棄土坑遺構実測図２(1/60)　40
Fig.31　南館廃棄土坑遺構実測図３(1/60)　41
Fig.32　南館梵鐘鋳造遺構実測図 (1/60)　42
Fig.33　北館北側斜面遺構全体図 (1/1,000)　43
Fig.34　北館北西隅斜面検出状況　44
Fig.35　SX19610検出状況及び遺構実測図(1/100)　45
Fig.36　北館東側斜面遺構全体図(1/600, 1/1,000)　46
Fig.37　北館東側斜面検出状況　47
Fig.38　土師器・須恵器・国産陶器実測図(1/6)　65
Fig.39　軒丸瓦分類図(1/4)　69
Fig.40　軒平瓦分類図１(1/4)　70
Fig.41　軒平瓦分類図2及び鬼瓦実測図(1/4, 1/6)　71
Fig.42　文字瓦分類図１(1/4)　72
Fig.43　文字瓦分類図２(1/4)　73
Fig.44　平・丸瓦叩き目分類１　76
Fig.45　平・丸瓦叩き目分類２　77
Fig.46　第Ⅳ・Ⅴ期陶磁器分類図(1/6)　83
Fig.47　南館廃棄土坑出土第Ⅳ期陶磁器類実測図１(1/6)　84
Fig.48　南館廃棄土坑出土第Ⅳ期陶磁器類実測図２(1/6)　85

Fig.49　南館廃棄土坑出土第Ⅳ期陶磁器類実測図 3(1/6)　86
Fig.50　南館廃棄土坑出土第Ⅳ期陶磁器類実測図 4(1/6)　87
Fig.51　南館廃棄土坑出土第Ⅳ期陶磁器類実測図 5(1/6)　88
Fig.52　南館廃棄土坑出土第Ⅳ期陶磁器類実測図 6(1/6)　89
Fig.53　南館廃棄土坑出土第Ⅳ期陶磁器類実測図 7(1/6)　90
Fig.54　南館廃棄土坑出土第Ⅴ期陶磁器類実測図(1/6)　91
Fig.55　新羅土器実測図(1/6)　94
Fig.56　唐三彩・長沙窯系青磁・イスラム陶器実測図((1/6)　95
Fig.57　墨書土器・陶磁器類実測図 (1/4)　97
Fig.58　木簡実測図(1/3)　98
Fig.59　籌木及び火付け棒、木製品実測図(1/4)　99
Fig.60　硯実測図(1/2, 1/3)　103
Fig.61　特殊遺物、石鍋、鉄製品ほか(2/3, 1/2, 1/3)　104
Fig.62　ガラス製品、るつぼ、羽口、鋳型ほか(1/2, 1/3, 1/4, 1/5)　105
Fig.63　那珂遺跡群第 114次、第 56次調査周辺区画溝及び出土初期瓦実測図　113
Fig.64　第Ⅰ・Ⅱ期建物配置復元図　114
Fig.65　第Ⅱ・Ⅲ期建物配置復元図　116
Fig.66　博多遺跡群古代遺物分布及び出土遺物実測図　118

表　目　次

Tab.1　調査計画表　1
Tab.2　鴻臚館跡調査研究指導委員会委員会(昭和 63年～平成 24年度)　3
Tab.3　鴻臚館跡関係調査報告書一覧　4
Tab.4　鴻臚館跡調査地点一覧　5
Tab.5　鴻臚館跡検出遺構の時期区分　13
Tab.6　主要建物(および区画構造物) 一覧 1　48
Tab.7　主要建物(および区画構造物) 一覧 2　49
Tab.8　主要建物(および区画構造物) 一覧 3　50
Tab.9　主要建物(および区画構造物) 一覧 4　51
Tab.10 主要遺構一覧 1　52
Tab.11 主要遺構一覧 2　53
Tab.12 主要遺構一覧 3　54
Tab.13 主要遺構一覧 4　55
Tab.14 主要遺構一覧 5　56
Tab.15 主要遺構一覧 6　57

Tab. 16 主要遺構一覧 7 58
Tab. 17 主要遺構一覧 8 59
Tab. 18 主要遺構一覧 9 60
Tab. 19 主要遺構一覧 10 61
Tab. 20 主要遺構一覧 11 62
Tab. 21 主要遺構一覧 12 63
Tab. 22 須恵器・土師器出土点数 66
Tab. 23 国産陶器一覧 67
Tab. 24 軒丸瓦分類 73
Tab. 25 軒平瓦分類 74
Tab. 26 主要文字瓦一覧 75
Tab. 27 瓦凸面の敲叩痕分類基準(略式) 77
Tab. 28 遺構出土瓦敲打痕分類 1 78
Tab. 29 遺構出土瓦敲打痕分類 2 79
Tab. 30 遺構出土瓦敲打痕分類 3 80
Tab. 31 遺構出土瓦敲打痕分類 4 81
Tab. 32 一括廃棄土坑における越州窯系青磁と共伴遺物の出土状況 92
Tab. 33 新羅陶器出土点数 93
Tab. 34 文字資料 100
Tab. 35 木製品 1 101
Tab. 36 木製品 2 102
Tab. 37 硯一覧 106
Tab. 38 特殊石製品 107
Tab. 39 金属製品 1 108
Tab. 40 金属製品 2 109
Tab. 41 ガラス製品一覧 109
Tab. 42 生産関係 1 110
Tab. 43 生産関係 2 111

第一章　はじめに

１．調査の経緯と経過

昭和 62 年（1987）、福岡市中央区城内の平和台野球場外野席の改修工事に伴い、鴻臚館跡第３次調査として行った試掘調査により、遺構の残りが想定外に良いことが判明するとともに、土坑から出土した多量の中国陶磁器やイスラムガラス等により、この遺跡が鴻臚館跡である可能性が極めて高いことが明らかとなった。

翌昭和 63 年度から確認調査を開始し、緑地部分の南側テニスコート（第Ⅰ期調査）やその周囲の福岡城土塁下部（第Ⅲ期調査）、平成 11 年からは、撤去された平和台野球場跡地内南半（第Ⅳ期調査）の調査を実施し、平成 18 年度から平成 25 年度に実施した野球場跡地北半（第Ⅴ期調査）をもって、鴻臚館跡の主要部分の確認調査は終了した。これらの調査により、筑紫館以来の施設の構造や変遷が明らかになるとともに、大宰府における外交、交易面での鴻臚館の在り方の理解につながった。

Tab. 1　調査計画表

長期計画	調査対象地	調査面積	実施及び計画期間	調査目的
第Ⅰ期	平和台野球場南側	6,456㎡	昭和 63～平成 4年度	鴻臚館跡の遺構の有無と範囲の確認
第Ⅱ期	舞鶴公園西広場	1,410㎡	平成5～6年度	鴻臚館跡の範囲確認、及び福岡城築城時旧地形の復元と藩主邸の確認
第Ⅲ期	平和台野球場南側土塁ほか	2,114㎡	平成7～10年度	平和台野球場南側土塁下の遺構確認・平和台野球場解体工事立会・試掘
第Ⅳ期	平和台野球場跡南半分	15,095㎡	平成 11 ～ 17年度	鴻臚館跡の史跡指定に向けての範囲確認・鴻臚館時代の地形復元
第Ⅴ期	平和台野球場跡北半分	対象面積16,000㎡	平成 18 ～ 25年度	鴻臚北館の構造確認と北側汀線の確認、外郭施設の検出
第Ⅵ期	舞鶴球技場とその周辺	対象面積12,000㎡	平成 26 ～ 30年度	鴻臚館客館部分（第Ⅰ期～第Ⅴ期調査区）に隣接する諸施設の確認
第Ⅶ期	福岡高等裁判所とその周辺	対象面積12,000㎡	平成 31 ～ 39年度	鴻臚中島館の可能性が指摘されており、その確認

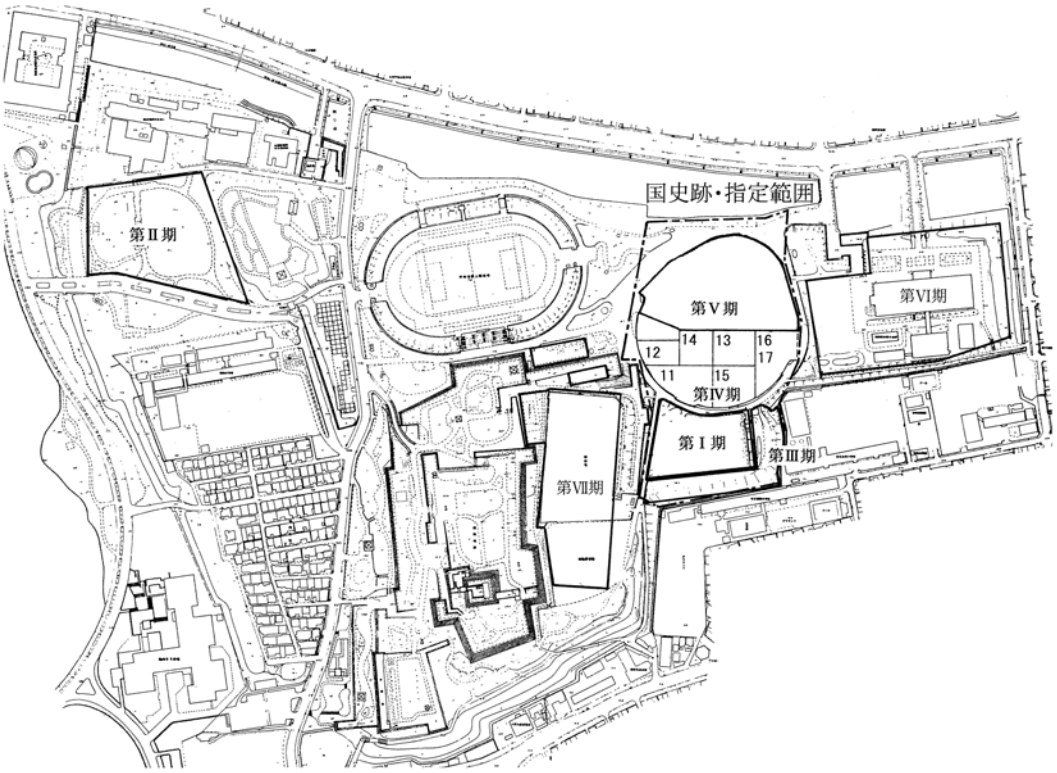


Fig.1　鴻臚館跡発掘調査計画図（平成 28 年 3 月現在）

鴻臚館の全容解明は、いまだ目標の域を出ないが、平和台野球場跡地でまとまった面積での遺構の状況や地形・建物の構造が推定可能になったことをもって、文化庁に国史跡指定を申請、平成 16 年９月 30 日付官報において指定が告示された。

現在、鴻臚館の全容解明に向けて、史跡指定地外の遺構確認調査（第Ⅵ期、第Ⅶ期調査）の継続とともに、発掘調査が終了した史跡指定部分の環境整備にどのように取り組んでいくかが課題となっている。このため、平成 25 年度にはこれまでの「鴻臚館跡調査研究指導委員会」に代わって新たに鴻臚館跡整備検討委員会 」を組織し、発掘調査や今後の整備について学識経験者等の指導･助言を受け、また文化庁や福岡県とも協議を行いながら事業を進め、平成 26 年度には鴻臚館跡の将来にわたる整備の考え方を示す「国史跡鴻臚館跡整備基本構想」を策定した。基本構想では、整備理念の柱となる以下の４つの観点から、

①「アジアの交流拠点の歴史－古来より続く国内外の人々が行き交う場－」の認識

②「鴻臚館とその時代－古代日本の交流の結節点の役割が理解できる場－」の再現

③「歴史の重層性－福岡の都市形成の歴史を物語る場－」の保存

④「交流と学び－国際交流で育んだ歴史・文化を継承する場－」の振興

基本理念として、

「アジアの交流拠点都市福岡の原点 鴻臚館－時をたどり、人々が行き交う場に－」

を掲げた。さらに､平成 27 年度からは早期に整備事業を推進するため｢国史跡鴻臚館跡整備基本計画｣を策定に着手した。

２．調査体制

第Ⅴ期調査より前の組織体制については「鴻臚館跡 18」に詳細があるので、ここでは第Ⅴ期調査にかかる平成 18 年以降の体制を示す。

調査主体	福岡市教育委員会教育長		植木とみ子（～ H18 年度)、山田裕嗣（～ H22 年度)、酒井龍彦（H23 ～ 27 年度)、星子明夫（H28 年度～)
	〃	教育次長	陶山博通（H18 年度)、貞刈厚仁（H18 ～ 19 年度)、中島淳一郎（H21 ～ 22 年度)、中沢浩（H23 年度)
調査総括		文化財部長	山崎純男（～ H18)、矢野三津夫（H19 ～ 20 年度)、宮川秋雄（H21 ～ 22 年度)、藤尾浩（H23 ～ 24 年度)、西嶋祐二（H25 ～ 26 年度)、菊田浩二（H27 ～ 29 年度)、髙山嘉樹（H29 年～)
		文化財整備課長	横山邦継（H18 ～ 20 年度)、井澤洋一（H21 年度）、秋吉誠（H22 年度）、有川由美（H23 年度)
	大規模史跡整備推進課長		田中壽夫（H24 ～ 25 年度)、宮井善朗（H26 ～ 28 年度)
	史跡整備活用課長		宮井善朗（H29 年度)、長家伸（H30 年度)
調査担当	整備第２係長		大庭康時（H18 ～ 20 年度)､吉武　学（H21 ～ 22 ､24 年度)
	行政企画担当主査		常松幹雄（H23 年度)
	鴻臚館跡整備係長		菅波正人（H25 ～ 29 年度)、中村啓太郎（H30 年度)
	専門調査員		山口譲治、池崎譲二
整理協力	熊埜御堂和香子、田中克子、吉岡涼子（技能員)、石田晴美、後藤富美、		

Tab. 2　鴻臚館跡調査研究指導委員会委員（昭和63年～平成24年度）

専門	氏名	就任時の所属(就任期間 /退任時の役職)	氏名	就任時の所属(就任期間 /退任時の役職)
国史学	平野邦雄	東京女子大学教授(S.63～ H.8/委員長)	田村圓澄	九州歴史資料館館長(S.63～H.4)
	川添昭二	九州大学教授(S.63～H.16)	八木　充	山口大学教授(S.63～H.24)
	笹山晴生	東京大学教授(S.63～ H.16/委員長)	狩野　久	岡山大学教授(H.4～)
	佐藤　信	東京大学助教授(H.6～)	服部英雄	九州大学教授(H.16～H24)
考古学	坪井清足	大阪文化財センター理事長(S.63～H.22)	横山浩一	九州大学教授(S.63～ H.16/委員長)
	小田富士雄	福岡大学教授(S.63～)	西谷　正	九州大学教授(S.63～H24)
	田中　琢	奈良国立文化財研究所所長(H.6～10)	町田　章	奈良国立文化財研究所所長(H.11～16)
	田辺征夫	奈良文化財研究所所長(H.17～22)	松村恵司	奈良文化財研究所所長(H.23～)
	河原純之	川村学園女子大学教授(H.14～28)	高島忠平	佐賀女子短期大学学長(H.16～H24)
	渡辺正気	県文化財保護審議会委員(S.63～H.8)	石松好雄	九州歴史資料館副館長(H.4～8)
建築史学	鈴木嘉吉	奈良国立文化財研究所所長(S.63～H27)	澤村　仁	九州芸術工科大学教授(S.63～H.16)
	上野邦一	奈良女子大学教授(H.16～19)	島田敏男	奈良文化財研究所(H.19～23)
	林　良彦	奈良文化財研究所(H.23～H24)		
造園学	中村　一	京都大学教授(S.63～H.20)	杉本正美	九州芸術工科大学教授(S.63～)
	安原啓二	元文化庁調査官(H.16～22)	田中哲雄	前東北芸術工科大学教授(H.22～H24)
都市工学	渡辺定夫	東京大学教授(S.63～H.24)		

篠田千恵子、徳田裕子、富永静子、安田美哉、吉野満美子、吉本久美子（五十音順、敬省略）

【鴻臚館跡整備検討委員会】（平成 31 年 3 月現在）
岩永省三（考古学）、小田富士雄（考古学／ 委員長）、包清博之（環境設計学）、、坂上康俊（国史学）、佐藤　信（国史学／ 副委員長）、沢村明（文化経済学）、杉本正美（造園学）、箱崎和久（建築史）、松村恵司（考古学）（五十音順、敬称略）

３．報告書の作成

報告書は調査が先行した谷部分・南館部分の報告書作成にまず取り組み、次に北館へと移行し、20 年度に『鴻臚館跡 18- 谷（堀）部分の調査 -』で谷部分について報告した。ついで 23 年度に『鴻臚館跡 19- 南館部分の調査（1）-』で南館部分の建物遺構について、24 年度に『鴻臚館跡 20- 南館部分の調査（2）-』で建物遺構以外の遺構のうち第Ⅰ・Ⅲ期調査分について報告した。25 年度に『鴻臚館跡 21- 南館部分の調査（3）-』として、建物遺構以外の遺構のうち第Ⅳ期調査分（平和台野球場跡地南半）について報告し、南館部分の鴻臚館関係遺構の調査報告は完了となった。北館については 27 年度に『鴻臚館跡 22- 北館部分の調査（１）-』として､建物遺構を中心に報告し､28 年度に『鴻臚館跡 23- 北館部分の調査（２）-』として、建物遺構以外の遺構について報告し、北館部分の鴻臚館関係遺構の調査報告は完了となった。29 年度に『鴻臚館跡 24- 総括概要編 -』として、南館、北館の遺構・遺物の概要を報告した。今回の報告はこれまでの調査で確認した遺構・遺物を総括したものである。

Tab.3 鴻臚館跡関係調査報告書一覧

No.	発行	報告書名	刊行年
1	福岡県教育委員会	「史跡福岡城発掘調査概報」 福岡県文化財調査報告書第 34集	1964
2	高野孤鹿	『平和台の考古史料』 稿本	1972
3	福岡市教育委員会	「福岡城址 .内堀外壁石積の調査 .」 福岡市第 101集	1983
4	池崎譲二・森本朝子	「福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション」 福岡市第 101集	1983
5	弓場知紀	「出光美術館の高野コレクション」 福岡市第 101集	1983
6	田崎博之・矢野佳代子	「九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物」 福岡市第 101集	1983
7	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅰ発掘調査概報」 福岡市第 270集	1991
8	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅱ」 福岡市第 315集	1992
9	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅲ」 福岡市第 355集	1993
10	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡4　平成4年度発掘調査概要報告」 福岡市第 372集	1994
11	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡5　平成5年度発掘調査概報」 福岡市第 416集	1995
12	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡6　平成6年度発掘調査概要報告」 福岡市第 486集	1996
13	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡7　.鴻臚館跡第Ⅰ期整備報告 .」 福岡市第 487集	1996
14	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡8　.平成7・8年度発掘調査概要報告 .」 福岡市第 545集	1997
15	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡9　平成9年度発掘調査概要報告」 福岡市第 586集	1998
16	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡10　平成 10年度発掘調査概要報告」 福岡市第 620集	1999
17	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡11　平成 11年度発掘調査報告」 福岡市第 695集	2001
18	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡12　平成 12年度発掘調査報告」 福岡市第 733集	2002
19	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡13　平成 13年度発掘調査報告」 福岡市第 745集	2003
20	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡14」 福岡市第 783集	2004
21	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡15　平成 14年度発掘調査報告書」 福岡市第 838集	2005
22	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡16　平成 15年度発掘調査報告書」 福岡市第 875集	2006
23	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡17　平成16・17年度発掘調査報告書」 福岡市第 968集	2007
24	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡18　谷(堀)部分の調査」 福岡市第 1022集	2009
25	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡19　南館部分の調査(1)」 福岡市第 1175集	2012
26	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡20　南館部分の調査(2)」 福岡市第 1213集	2013
27	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡21　南館部分の調査(3)」 福岡市第 1248集	2014
28	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡22　北館部分の調査(1)」 福岡市第1300集	2016
29	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡23　北館部分の調査(2)」 福岡市第1326集	2017
30	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡24　総括概要編」 福岡市第1357集	2018
31	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡25　総括編」 福岡市第1383集	2019

Tab. 4　鴻臚館跡調査地点一覧

平成31年3月現在

年度	調査番号	鴻臚館跡調査次数	福岡城跡調査次数	調査地	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者
S.26	5102	1		三の丸中央部	ﾃﾆｽｺｰﾄ建設		5108（3日間）	九州文化総合研究所
S.38	6301	2	1	三の丸東郭	裁判所建設	596	631007～ 631105　64032	福岡県教育委員会
S.62	8747	3	9	三の丸中央部	野球場改修	650	871225 ～ 880120	山崎純男・吉武学
S.63	8829	4	10	三の丸中央部	範囲確認	856	880727 ～ 881210	山崎純男・吉武学
H.1	8910	5	13	三の丸中央部	範囲確認	1,200	890420 ～ 891207	山崎純男・吉武学
H.2	9005	6	15	三の丸中央部	範囲確認	1,300	900409 ～ 910131	山崎純男・吉武学
H.3	9130	7	17	三の丸中央部	範囲確認	1,000	910501 ～ 920331	山崎純男・瀧本正志
H.4	9218	8	19	三の丸中央部	範囲確認	1,670	920615 ～ 921030	山崎純男・瀧本正志
	9236	9	20	三の丸中央部	範囲確認	430	920910 ～ 930331	山崎純男・瀧本正志
H.5	9326	10	22	三の丸西郭	範囲確認	450	930816 ～ 940228	田中壽夫・瀧本正志
H.6	9420	11	27	三の丸中央部	史跡整備	50	940606 ～ 940731	田中壽夫・瀧本正志
	9432	11	28	三の丸西郭	範囲確認	850	940801 ～ 950320	田中壽夫・瀧本正志
	9463	11	30	三の丸東郭土塁	範囲確認	60	950201 ～ 950217	田中壽夫・瀧本正志
H.7	9537	12	31	三の丸西郭・中央部	範囲確認	300	951101 ～ 960329	田中壽夫
H.8	9620	13	35	三ノ丸中央郭	範囲確認	450	960704 ～ 961204	田中壽夫
H.9	9736	14	39	三ノ丸中央郭	範囲確認	204	970818 ～ 980131	田中壽夫
H.10	9807	15	41	野球場解体	公園整備	230	980410 ～ 980416	田中壽夫・池崎譲二
	9831	16	42	野球場跡全体	試掘	930	980922 ～ 990120	塩屋勝利・池崎譲二
H.11	9910	17	43	野球場跡南半	範囲確認	3,500	990422 ～ 000315	塩屋勝利・池崎譲二
H.12	0008	18	44	野球場跡南半	範囲確認	1,750	000425 ～ 010316	塩屋勝利・池崎譲二
H.13	0109	19	47	野球場跡南半	範囲確認	2,000	010521 ～ 020329	折尾学・池崎譲二
H.14	0218	20	49	野球場跡南半	範囲確認	1,200	020513 ～ 030331	折尾学・大庭康時
H.15	0309	21	50	野球場跡南半	範囲確認	2,425	030506 ～ 040331	折尾学・大庭康時
H.16	0415	22	51	野球場跡南半	範囲確認	2,110	040401 ～ 050331	折尾学・大庭康時
H.17	0502	23	52	野球場跡南半	範囲確認	2,110	050404 ～ 060331	横山邦継・大庭康時
H.18	0617	24	57	野球場跡北半	範囲確認	820	060401 ～ 070331	大庭康時・中村啓太郎
H.19	0706	25	59	野球場跡北半	範囲確認	504	070401 ～ 080331	吉武学・中村啓太郎
H.20	0821	26	60	野球場跡北半	範囲確認	860	080701 ～ 090331	吉武学・中村啓太郎
H.21	0906	27	61	野球場跡北半	範囲確認	900	090401 ～ 000331	吉武学・中村啓太郎
H.22	1013	28	62	野球場跡北半	範囲確認	970	100602 ～ 110331	吉武学・久住猛雄
H.23	1116	29	65	野球場跡北半	範囲確認	500	110601 ～ 111222	常松幹雄・吉武学
H.24	1205	30	69	野球場跡北半	範囲確認	1,180	120417～130329	吉武学
H.25	1314	31	70	野球場跡北半	範囲確認	860	130701～140328	菅波正人

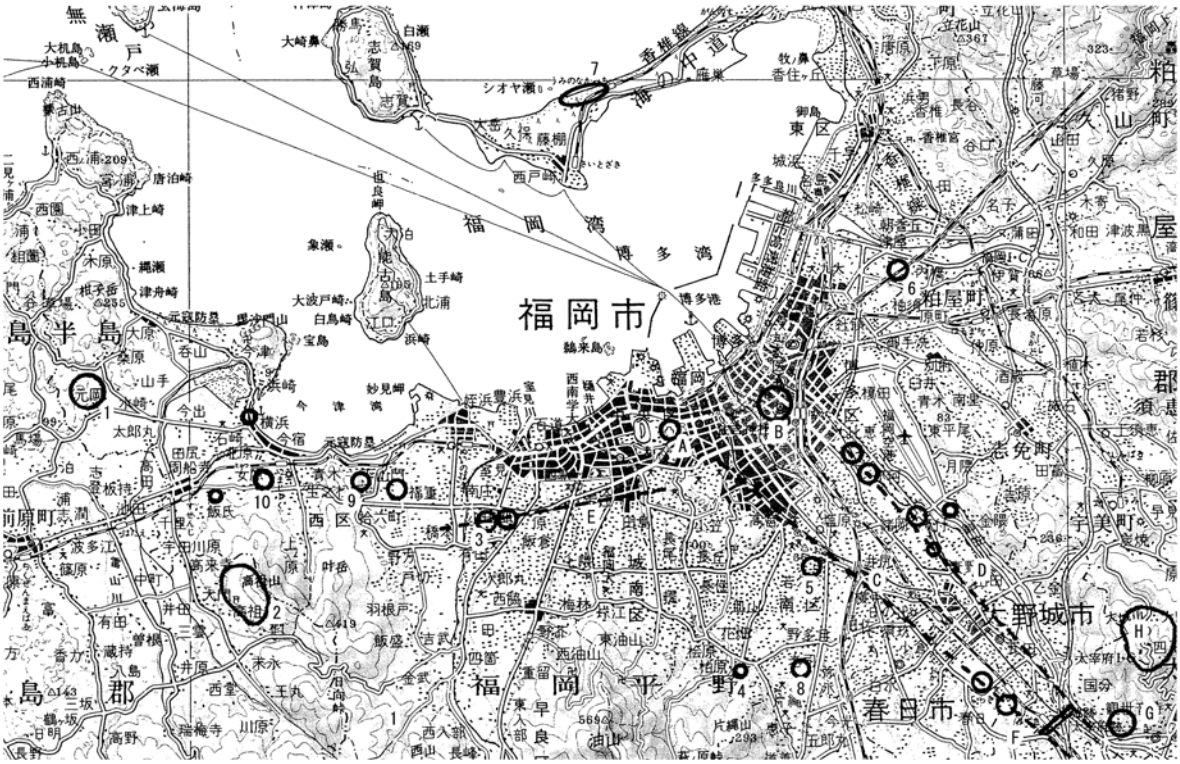


Fig.2 周辺遺跡分布図（1/200,000）

A 鴻臚館跡 B 博多遺跡群 C・D・E 官道 F 水城 G 大宰府政庁跡 H 大野城跡
1 元岡・桑原遺跡群 2 怡土城跡 3 有田遺跡群（早良郡衙跡） 4 柏原 M 遺跡（「郷長」墨書）
5 三宅廃寺跡 6 多々良込田遺跡 7 海の中道遺跡 8 老司瓦窯跡 9 斜ヶ浦瓦窯跡 10 女原瓦窯跡

４．鴻臚館と周辺の遺跡

古代の博多湾は大宰府の外港であり、そこに設置された施設が筑紫の鴻臚館である。『日本書紀』の持統天皇２年（688）の記事に初出する筑紫館が鴻臚館の前身とされ、７世紀後半の緊迫する対外関係の中で、大宰府の外交施設として、出入国管理・迎賓などを行った。更に、対外関係の変化に伴い、交易や博多湾の防衛など多岐にわたる役割を担った。そのため、博多湾岸には当該期の交易や生産などに関わる遺跡が多く見られ、大宰府を支え、鴻臚館を維持するための諸施設が点在していたと推測される。

大宰府と鴻臚館とは水城西門を通過して延びる古代官道で結ばれていたとされる。西門からのルートは市内では不明確であるが、北館、南館の東側に取り付くと考えられている。

那珂川河口の入江を挟んで東側に位置する博多遺跡群では８世紀以降、区画の溝や竪穴住居跡、井戸などの遺構、官人層の存在を示す帯金具や墨書土器、硯、また、初期貿易陶磁器などの遺物が確認されており、鴻臚館に関連して対外交易に関わった場所と考えられている。史料にある「鴻臚館中島館」「津厨」といった施設の存在が指摘されている。

玄界灘に面する砂丘上に営まれた海の中道遺跡は製塩や海産物の加工に関わる遺構・遺物が確認されており、大宰府に附属して、海産物を調進した施設が想定されている。

西部の早良、糸島地域では斜ヶ浦瓦窯跡や女原瓦窯跡、元岡瓦窯跡などで鴻臚館所用瓦を焼成していることが確認されている。また、元岡・桑原遺跡群では奈良時代の大規模製鉄遺跡が確認されており、大宰府による新羅対策に関連した鉄生産と指摘されている。

第二章　調査の記録

１．調査の歴史と位置づけについて

（１）調査の歴史

今よりは秋づきぬらしあしひきの山松かげにひぐらし鳴きぬ 「万葉集　巻一五　三六五五」

この歌は 736 年（天平 8)、筑紫館に滞在した遣新羅使の一行が故郷を思い詠った 4 首の内の 一つである。筑紫館は筑紫の鴻臚館の前身施設であり、江戸時代以来、鴻臚館は現在の博多部（官内町＝中呉服町付近）に所在したとされてきた。1915 年（大正 4)、九州帝国大学医学部の中山平次郎は、遣新羅使の一連の歌から想定される風景は博多部にはなく、福岡城をおいて他にはないと考え、それを実証すべく、当時軍の施設があった城内に調査に向かう。市民に開放されるドンタクの２日間の調査で、古代の瓦を採集する等の成果を得て、中山は説を補強した。

戦後になって、中山が推定した鴻臚館跡は競技場建設等により、破壊の危機に晒されることになるが､1950 年（昭和 25）頃から城内の開発工事の折り､中山に私淑していた高野孤鹿氏や大場憲郎氏が、大量の瓦や越州窯系青磁等の遺物を採集した。また、1951 年（昭和 26)、平和台野球場南側のコートの造成に伴う発掘では鴻臚館の遺構の一部と考えられる礎石や奈良・平安時代の古代瓦や越州窯系青磁等が出土した。これらの成果から城内に鴻臚館跡が存在したことは疑いのないものとなったが、鴻臚館跡は既に破壊されたと考えられた。しかし、1987 年（昭和 62)、当時の野球場の改修工事に伴う発掘調査で、大規模な建物の跡や大量の瓦、輸入陶磁器などが発見され、遺構が残っていることが分かった。以来、計画的に行われた確認調査で、南北に並ぶ施設の構造や新羅土器や中国産陶磁器、イスラム陶器などの多彩な交易品などの様相が明らかになり、古代の国際交流の拠点であった鴻臚館の往時の姿がようやく浮かび上がってくることになった。

（２）鴻臚館の歴史的位置づけ

鴻臚館とは、平安時代初期に外国からの賓客を接待し、滞在させるために平安京、難波、筑紫の３ヶ所に設けられた客館（迎賓館）である。筑紫の鴻臚館（以後、鴻臚館）の前身は、『日本書紀』持統天皇二年（688）に初出する「筑紫館」とされ､設置の経緯は朝鮮半島における白村江の敗戦（663 年）後、唐や新羅に対する防衛、外交政策に伴うものと評価される。

筑紫館は、遣唐使や遣新羅使の風待ちの場所でもあったが、一義的には新羅との外交政策のための施設と言えよう。外国の使節が来航するとそれに臨み、朝廷にその来意が報告され、筑紫館において使節を収容し衣食を提供した。また、わが国から唐や新羅に派遣された使節は、筑紫館で風待ちし、九州沿岸を西航、船出して行った。筑紫館は、内外使節の出入国窓口として大きな役割を負ったといえる。

８世紀の日本と新羅の関係は、朝貢という形態を求める日本とそれに改めたい新羅の姿勢により、次第に亀裂を生じていく。天平６年（734)、国号を「王城国」に改めたと告げた新羅の使節を返して以来､一時は新羅討伐の計画が立てられるほどの状況になる(『続日本紀』)。一旦､小康状態が続いた後、宝亀 10 年（779）を最後に新羅使の行き来が途絶えることになる。これにより外交施設としての筑紫館の役割は低下していくことになる。

９世紀になると、施設の名称は鴻臚館に改められたようで、史料の上でも天安２年（858)「鴻臚北館門楼」、貞観三年（861)「鴻臚北館」などが見られる。この頃、唐・新羅との外交使節の往来は

途絶え、９世紀前半には新羅海商、後半以降は唐海商の来航が増加していった。海商が来航すると大宰府から朝廷に報告され、朝廷の判断を待って鴻臚館に入館させる。その後、鴻臚館に唐物使が派遣され、唐物の検査・選別・購入が行われ、国家の優先的な交易（官司先買）が行使されることになる。こうして、鴻臚館は次第に中国海商らによる滞在・交易の場へと変容していく。それに伴って、わが国から入唐を目指す僧らも、鴻臚館にいったん入って機会を待ち、中国海商の船で中国に渡航するようになる。

鴻臚館は貿易の最前線となった一方で、海賊などのリスクを負うことになる。９世紀後半の新羅海賊の入寇により、兵員や武器が配置され、「博多警固所」の設置に至る。鴻臚館は出入国窓口、交易機能に加え、博多津の防備といった、国防機能も担うことになる。

11 世紀中頃以降、『扶桑略記』の永承２年（1047）の「大宋国商客宿房」放火犯人捕縛の記事に対応するように、鴻臚館に関わる遺構や遺物は皆無となることから、施設の再建はなされなかったと考えられる。廃絶後、貿易の拠点は博多遺跡群に移り、「博多津唐房」と称された地区に居住した中国商人により、交易が行なわれる。中世最大の貿易都市博多の隆盛が始まる。

２．調査の概要

（１）位置と環境

鴻臚館跡の立地する場所は、南の「大休山」から博多湾に伸びる「福崎」と呼ばれた丘陵の先端にあたる（Fig. ３）。この丘陵は早良郡と那珂郡の境界をなす。丘陵の先端は南東～北西方向に伸び、現在の福岡城の天守台と本丸北側、御鷹屋敷の３ケ所に丘陵の頂部がある。鴻臚館の時代は、丘陵西側は「草ヶ江」の入江で、その対岸は「荒津山」に向って砂洲が伸びていた。荒津山の裾部の海は水深があり、古代には大型船の停泊地になったと考えられる。東側は那珂川下流の入江となっていたと想定されており、現在、この入江の南東隅にあたる場所に式内社の住吉神社が存在する。また、その北東側の砂丘上には鴻臚館との関連が想定される博多遺跡群が立地する。博多遺跡群は弥生時代以来、奴国の海上交易の拠点であり、古代では鴻臚館に関連した官衙の存在が指摘されている。大宰府と鴻臚館、博多の間には水城の東側と西側からそれぞれ伸びる官道があり、両者はその結節点となっている。入江の中は大型船の停泊は困難であるが、河口には艀等の船着き場が存在したと考えられる。

鴻臚館（筑紫館）は本丸北側から東側に枝分かれした小丘陵を二つの平坦地とした場所に造営される（Fig. ４）。鴻臚館の東側は谷部を経て小さな丘陵があり、その周辺は沖積地が広がっていたと推定される。鴻臚館北辺は丘陵先端から４ｍ以上崖下に海浜砂丘があり、古墳時代前期の蛸壺な

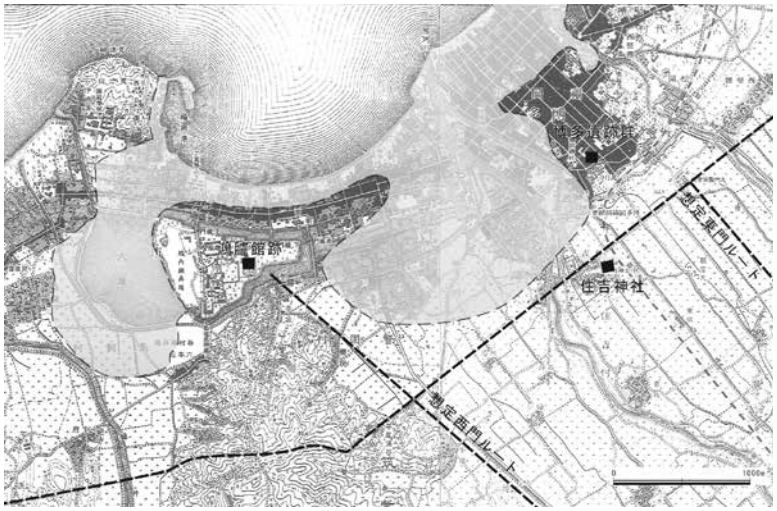


Fig.3 鴻臚館跡周辺地形及び官道推定図

ども出土している。この砂丘は海に向かって浅く窪んだのち高まり、遠浅の海に続いていたと考えられる。丘陵上では、古墳や鏡などの遺物が検出されており、筑紫館造営以前は海を望む場所に古墳群が造営されたと推測される。鴻臚館の東側から南東側も同様の段差があり、この形状は造営以来、踏襲されることになる。両側を入江で挟まれた丘陵の先端に立地した鴻臚館は、郡境にあたり、郡の中心施設や駅家などとも一定の距離があった。しかも出入りする者を監視しやすい場所にあり、隔離性、防備性を備えた施設であったと言える。

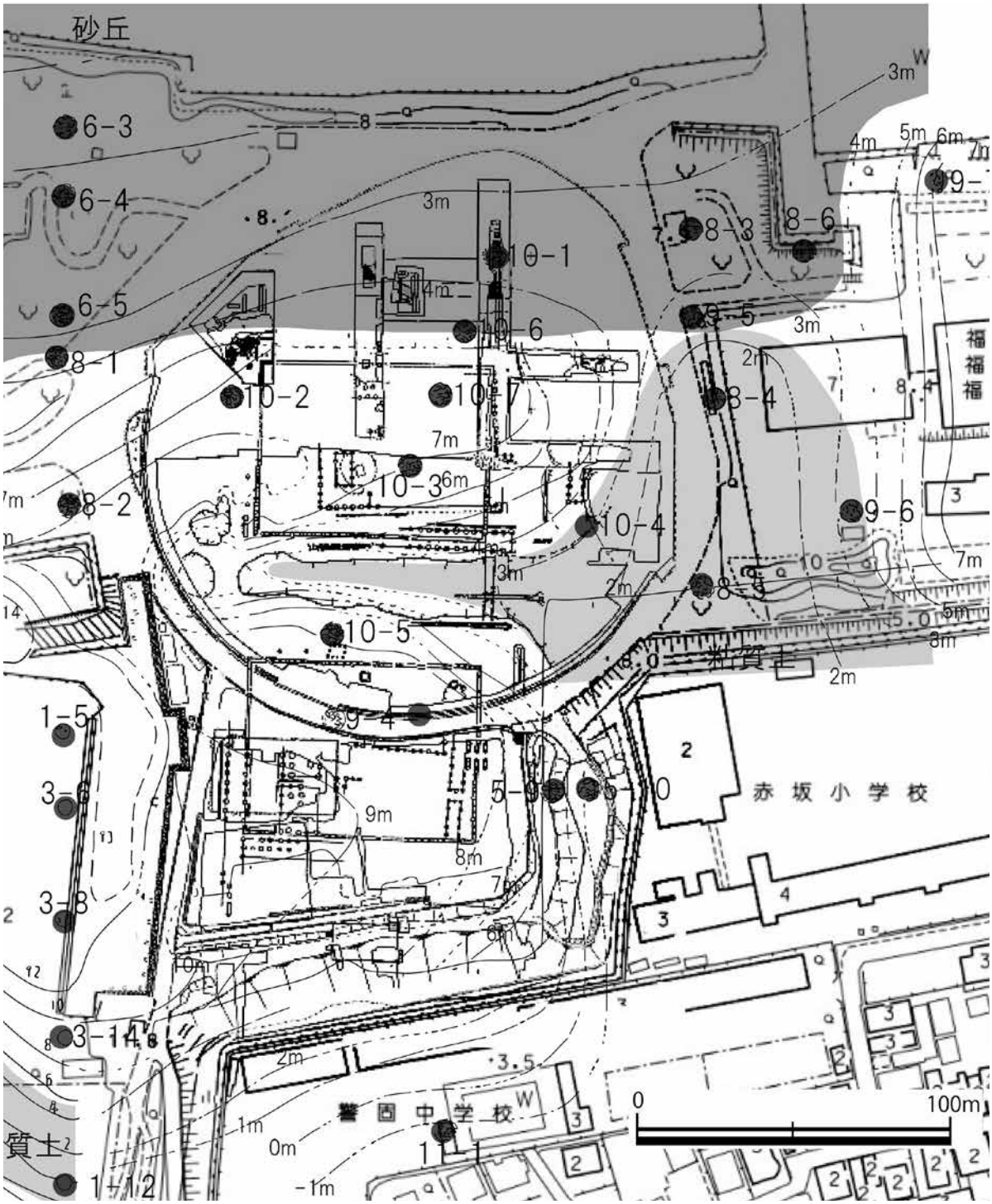


Fig.4 造成前の旧地形推定図（1/2,000）

（２）旧地形と整地の状況

鴻臚館（筑紫館）は東へ伸びる二つの小丘陵を削り、土砂を周辺に落とし込んで平坦面を確保し、南北二つの館を造営しており、南北 200 m、東西 100 m程度の範囲に中央谷を挟んで二つの平坦台地が広がっている。鴻臚館の正面入り口にあたる東側の埋没地形の状況は、谷底にあたるボーリング 8-3 地点付近を境に北と南へ傾斜が分かれており、特に 8-4 地点では黒灰砂が低いレベル（標高 1.54 m）に検出されることから後背湿地が埋没しているものと推定される。これまでの発掘調査成果により鴻臚館東面の標高は２～４ｍと推定されるが、ボーリングデータ 8-4、9-5 では地山砂層が標高 1.54 ～ 2.46 ｍと低く、この砂層の上部に存在する「盛土」中に鴻臚館造成に伴う整地層が含まれている可能性がある。

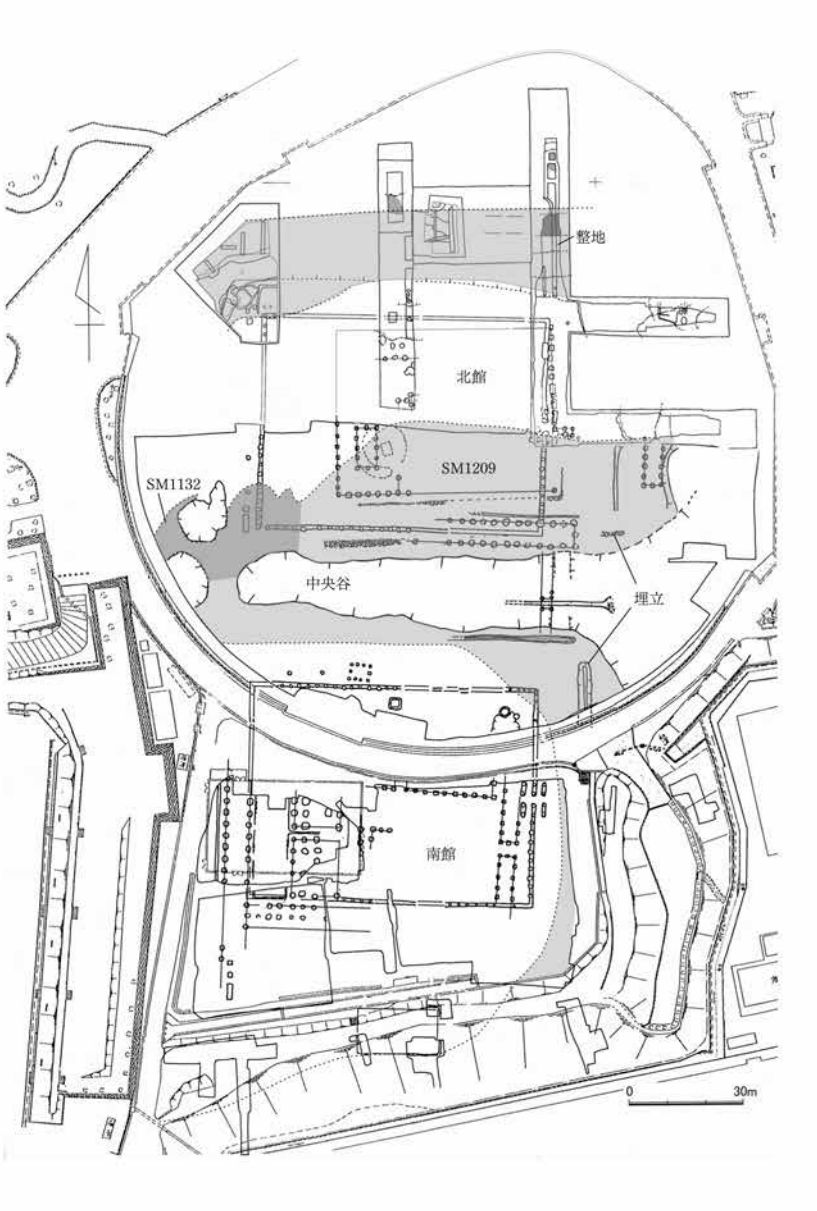


Fig.5 埋立（地業）遺構全体図（1/2,000）

Fig. ５にアミで示した範囲は小丘陵の周囲を埋め立てて整地を行った遺構が確認された範囲である。埋め立ては南館よりも北館で広範囲に行われており、南館に比べて北館の乗っている丘陵の幅が狭く痩せ尾根であったものと考えられる。この平坦台地の周辺をみてみると、西側は本来の丘陵へと続いていた可能性が高いが、他の縁辺は斜面となって落ちており、北は海へ至る砂丘へと続き、南は谷となり、鴻臚館の入口が面する東側は緩斜面となって落ちていき現地表から深さ５ｍ以上の深い谷となっていたことがボーリングデータや発掘調査成果から窺うことができる。

鴻臚館の造成については、台地上で確認される第Ⅰ期建物柱穴の深さが南館で５～ 10 ㎝程度、北館では 70 ㎝以下といずれも浅く、これに比べて第Ⅱ期布掘り塀柱穴は南館・北館ともに 1.3 ｍ前後あることから、第Ⅰ～Ⅱ期の間に南館で１ｍ以上の、北館でその半分程度の大規模な削平が行われたと推定される。北館北西隅のトレンチ１では調査区南端から約７ｍ北に基盤の風化頁岩と整地層の境界を確認した（Fig. ６）。Ⅱ期の布掘り塀はこの境界部分に掘り込まれていることから、布掘り塀の造営に先だって、整地が行われたと考えられる。北西隅の矩形のコーナーと中央の堀の西側の立ち上

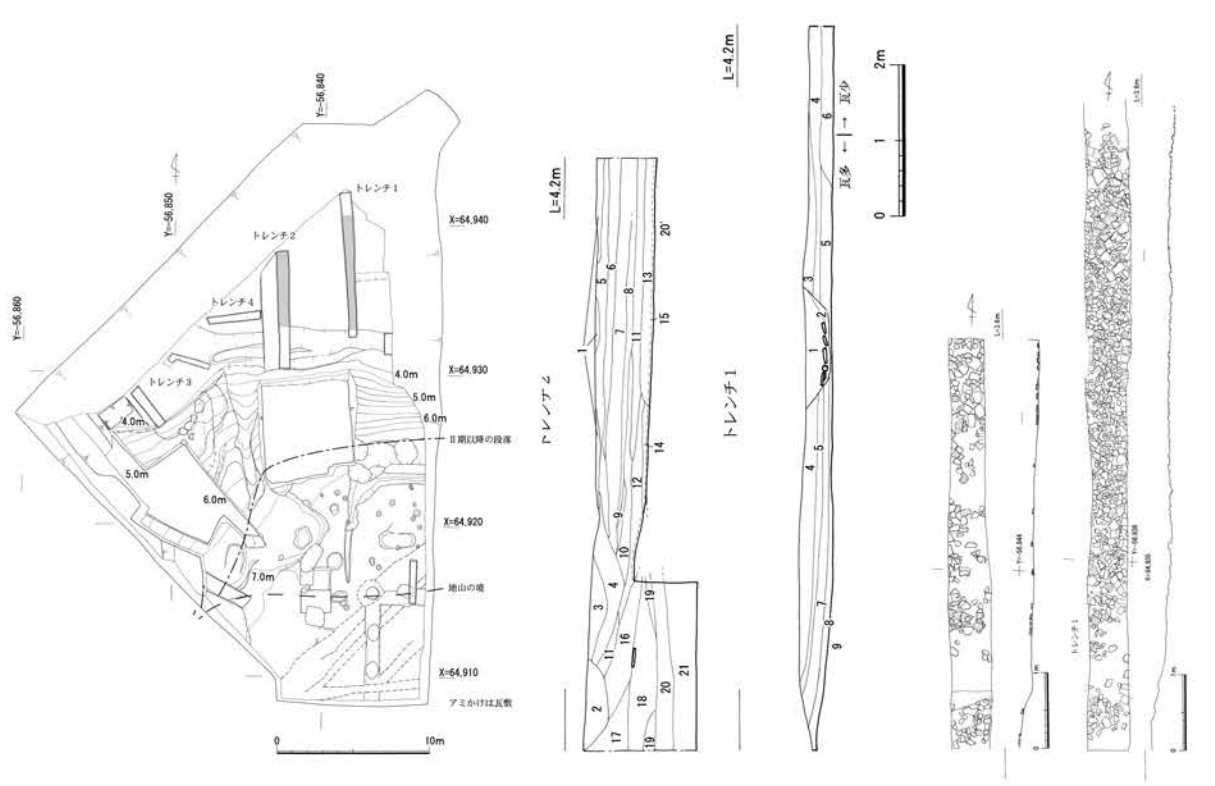


Fig.6 北西隅埋立（地業）全体図（1/500）

がり、南館の西側の造成ラインはほぼ一直線上に並ぶことから、このラインが設計の基準線の一端を示すものと推測される。北側の崖下は標高約３ｍの砂丘面に瓦を敷き、盛土造成して平坦面を形成している。

次の第Ⅲ期への建て替えに際しても平坦台地の拡張が行われているが、この時の削平は大きなものではない。削平によって生じた土砂は台地周囲の埋め立てに使用されたものとみられ、中央谷の北斜面では特に埋め立てが顕著で、土留めの石垣や石積みが重複して構築されており、繰り返し造成が行われたことが窺われる。

遺構・遺物の検討の結果、鴻臚館跡の建物遺構は五時期（第Ⅰ～Ⅴ期）に区分される（Tab. ５）。時期区分の指標は以下のとおりである。

第Ⅰ期は北館の石垣内の須恵器の年代観から７世紀後半に位置づけられる。第Ⅱ期は北館の石垣にかかわる盛土の出土遺物から石垣は８世紀前半に位置づけられる。切り合いから石垣に後出する布掘り塀は、８世紀中頃～後半以降に位置づけられる。南館の布掘り塀と便所遺構の造営時期は８世紀前半～中頃に比定されており、時期差を生じることになるが、８世紀中頃～後半に北館側の大規模な盛土造成と布掘り塀やそれに伴う施設の造営が行われる。これらは９世紀前半までには第Ⅲ期の礎石建物に建て替わり、第Ⅲ期の建物は９世紀後半には廃絶する。

建物関係遺構は第Ⅰ～Ⅲ期で確認しており、第Ⅳ・Ⅴ期については区画溝の一部を確認したが、明確な建物遺構は確認できない。ただし、この時期に比定される瓦が多数出土することから瓦葺建物が存続したことは間違いないであろう。また、概ね 11 世紀代とみられる瓦が谷の北斜面に多く出土する状況から、鴻臚館末期には建物が北館に集約された可能性が高い。

遺跡の変遷を簡単に示すと、第Ⅰ期の南館は規模東西 52 ｍ、南北 37 ｍ程度で、長舎が中心建物を取り囲む構造となる。北館での数棟程度の建物を塀で囲む構造と比較すると、両者に儀礼空間と宿舎

空間といった機能差があったことが想定される。

第Ⅱ期は掘立柱式の東門と布掘り塀が検出されたが、塀の内部で柱穴が確認できないことから、建物は礎石式であったと想定される。

第Ⅲ期は第Ⅱ期の中軸線と踏襲し、施設の拡張と大型の礎石建物を回廊で取り囲む構造に改変している。大型の礎石建物は宿舎と考えられ、第Ⅱ期でも同様の建物があったと想定される。

第Ⅳ・Ⅴ期については区画溝 SD15052・15098 を除き、明確な建物遺構を確認していない。南館の土坑群は貿易陶磁器や瓦、獣骨などを廃棄したもので、概ね第Ⅳ・Ⅴ期に位置づけられる遺構である。

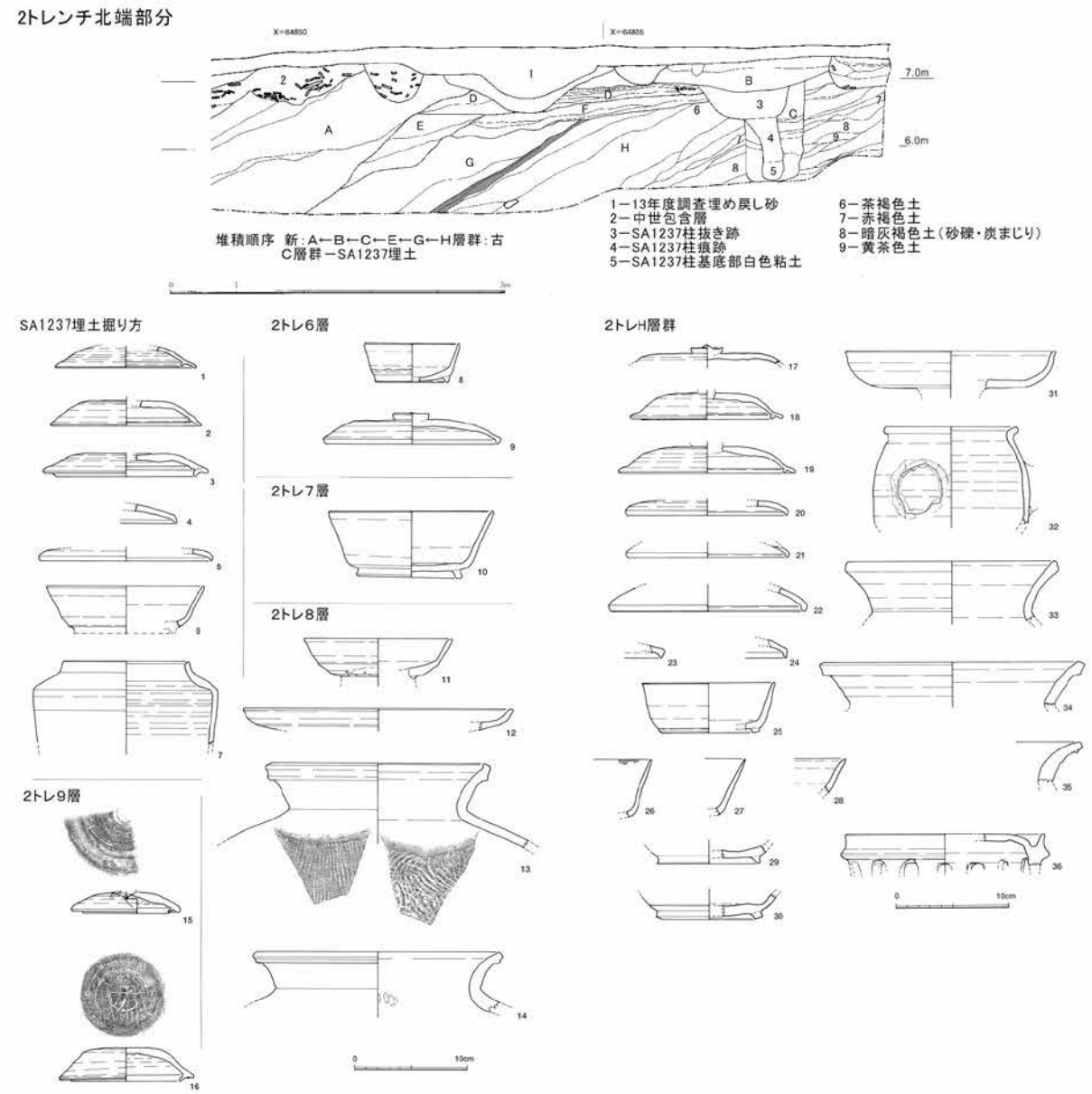


Fig.7 第 21 次調査トレンチ 03-2 トレンチ土層及び出土遺物実測図（1/100、1/6）

Tab. 5　鴻臚館跡検出遺構の時期区分

時期	区画	主な遺構（数字は基数）	年代観	時期比定の根拠・問題点
Ⅰ	北館	土留め石垣1	7世紀後半～	石垣内から7c半ば頃の須恵器が出土することから、直後の7c後半造営と推定。
		掘立柱建物1、柱列1	不明	主軸方位が石垣と同じため第Ⅰ期に比定。第Ⅰ期遺構に先行する遺構がある。
	南館	掘立柱建物5	不明	主軸方位から最も古く位置づけた。
Ⅰ期後	中央谷	中央谷大規模な整地、土留め石積み1	Ⅰ期との前後は不明。	遅くとも8c 初頭までに複数回の整地を行って、敷地を拡大。盛土には瓦を含む。
Ⅱ	北館	布掘り塀＋東門1、便所2	8世紀前半～中頃	布掘りに切られる整地層から8c 中頃～後半の須恵器出土。布掘り柱抜き穴から白磁（8c 半ば以降）、便所から8c 後半の土器が出土し、南より遅れて造営した可能性がある。
		盛土整地層、瓦敷遺構	8世紀中頃～後半	崖下の盛土整地層下面には縄目叩きの瓦敷。鴻臚館式軒瓦に伴う時期の瓦か。
	中央谷	池2、陸橋、堀＋石垣、土橋（瓦暗渠）	8世紀前半～後半の早い段階	石垣を覆う埋土の出土遺物より、8c後半の早い段階に石垣を埋めたと推定した。土橋は第Ⅲ期より古い。
	南館	布掘り塀＋東門1、地下地業1、便所3	8世紀前半	遺構方位から一連の遺構と推定し、便所遺構出土遺物から時期比定。布掘りと地下地業から鴻臚館式軒丸瓦出土。
		布掘り状遺構		遺構の形状・方位・出土遺物から第Ⅱ期に比定。
Ⅲ	北館	礎石建物1	8世紀後半～9世紀前半	布掘りとの重複から早くて8c後半の造営。9c後半には建物に重複して土坑を掘る。
	中央谷	池1、陸橋、堀、木橋	9世紀？	木橋は土橋を切る。
	南館	礎石建物3、梵鐘鋳造遺構	8世紀後半～9世紀前半	雨落ち溝等から8c代の遺物が出土し、9c後半の土坑が建物に重複する。礎石抜き穴から陶磁器出土。（礎石建物SB32 下に礎石据え付け穴や瓦排水溝があり、建て替えている。）
		推定南門	9世紀？	調査範囲が狭く明確さを欠く。
Ⅳ	北館	土坑のみ		土坑から瓦が出土しており、建物の存続を示す。
		崖下盛土遺構（築地か）	9世紀後半～ 10 世紀前半	盛土層から越州窯系青磁や9 世紀後半～ 10 世紀前半の瓦類（単斜格子文や鳥脚文叩き）が出土している。
	中央谷	陸橋、堀、溝		
	南館	土坑のみ	9世紀後半～10世紀前半	土坑から瓦が出土しており、建物の存続を示す。
Ⅴ	北館	土坑	10 世紀後半～ 11 世紀半ば以前	
		北斜面整地層	10 世紀後半～ 11 世紀半ば以前	瓦や炭化物を多量に含む整地層→火災後の整地か
	中央谷	陸橋、堀、木樋	10世紀後半～11世紀半ば以前	堀の北斜面に11c代の瓦が多い→終末期には建物が北に収斂か。
	南館	北東隅を区画する溝2、土坑	10世紀後半～11世紀半ば以前	
不詳	北館	第Ⅱ期東門の東外に掘立柱建物2（主軸方位からみて第Ⅱ～Ⅲ期に伴う）		
	南館	中央部の基壇状高まりと通路（SF272）、柵列（SA273・316）、基壇的役割を持つ斜面（SX1037）		

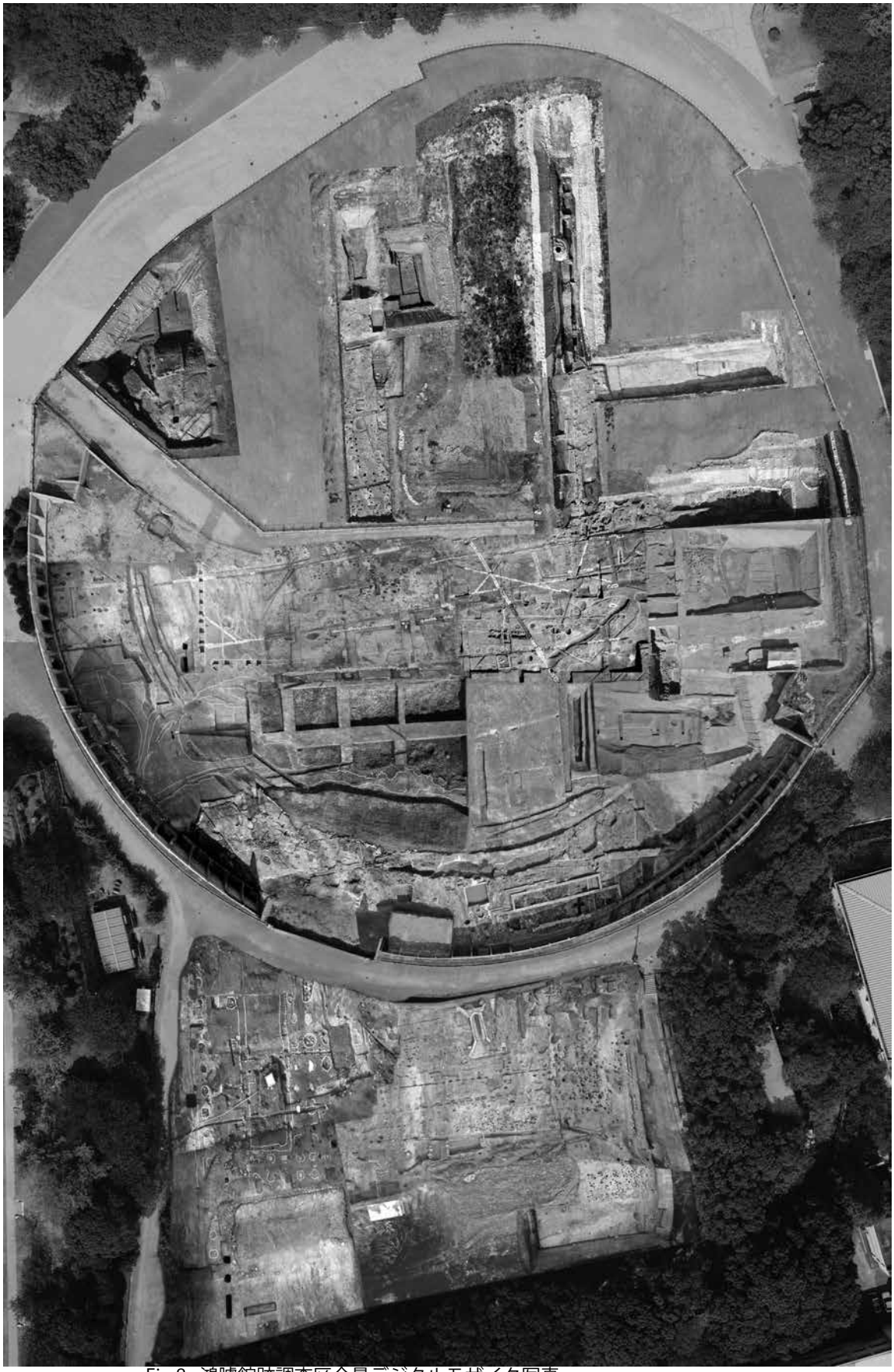


Fig.8 鴻臚館跡調査区全景デジタルモザイク写真

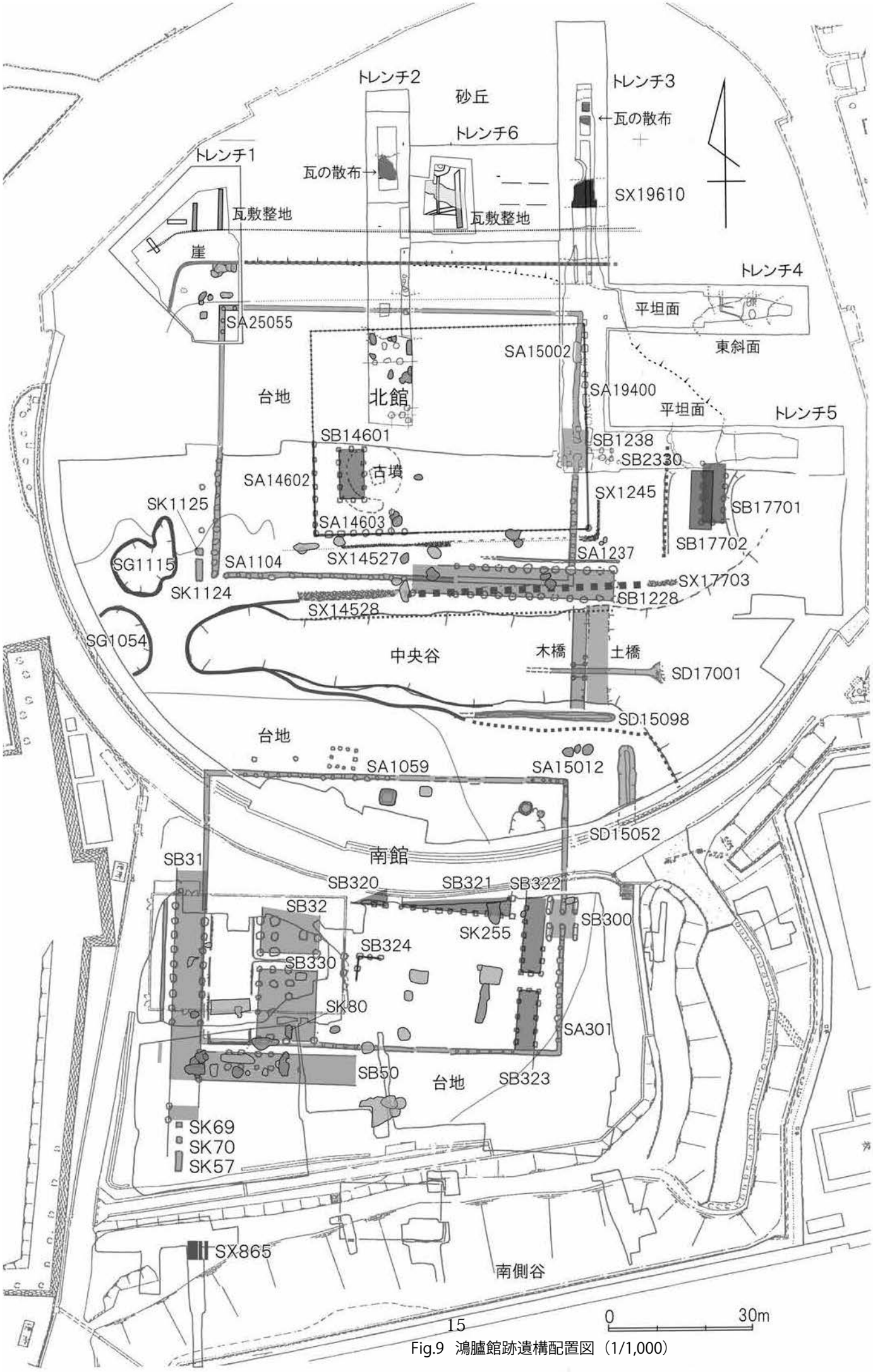


Fig.9 鴻臚館跡遺構配置図（1/1,000）

３．遺構・遺物の変遷

（１）第Ⅰ期（7 世紀後半～８世紀前半）

第Ⅰ期は、丘陵に入り込む谷で南北に隔てられた施設（以後、それぞれを南館、北館と呼ぶ）が造営される（Fig.10）。南館、北館とも掘立柱建物で構成される。瓦の出土が見られないことから、屋根は板葺と考えられる。

北館では石垣（SX1245 ほか）と長方形に巡る柱列（SA14602 ほか）を検出した（Fig.11）。

石垣 SX1245（南東コーナー）、SX14527（南辺）は柱列に沿って積み上げられている。柱列との距離は３ｍを測る。石垣の南東コーナーでは７石が積まれ、高さ約 1.6 ｍを測るが、北側と西側に向って次第に段数を減らし、両端では１～２石となる。石材は礫岩で、部分的に玄武岩を用いる。石垣は、石を据えながらその背面に土を詰めて次第に嵩をあげていく方法で築かれており、裏側の盛土については、版築もなされていない。石垣前面は、一気に埋め立てられた傾斜に沿った堆積で、石垣背面の比較的細かい単位の堆積とは異なっている。このことから、石垣前面は露出していて、その後埋め立てられたと想定される。

柱列 SA14602（西辺）、SA14603（南辺）、SA19400（南東コーナー）の柱穴はおおむね長方形の掘り方となり、柱痕跡から径 25 ～ 30 ㎝の丸柱と推定される。柱間はまちまちで西辺は心々で 2.8 ｍ、南辺は心々で 2.6 ｍ、南東コーナーは北半部分では心々で 2.6 ｍとなるが、門が想定される部分では 1.6 ｍと狭くなる。主軸方位はＮ－1°　30′　－Ｗをとり、復元規模は東西約 54 ｍ×南北約 39m となる。

柱列の東側では門の一部と考えられる柱穴群 SB23330 を検出した。1　間×　1　間の掘立柱建物で、門に関連する遺構の可能性があるが、SA19400 の中軸線から北へ折り返した位置には近世の池があり対称配置をとるか否か不明。柱穴は隅丸長方形で長径 105 ～ 150㎝、深さ 35 ～ 55 ㎝。柱間は東西２ｍ、南北 1.8 ｍ前後。この建物は柱列（柵）の外側に付設された構造物の可能性があるが、具体的には明らかにし難い。

柱列の内部は２×４間の側柱建物 SB14601 を検出した。柱穴は一辺 100㎝ 前後のほぼ正方形をとる掘り方で、そのほぼ中央に径 30 ～ 40㎝ の丸柱を立てる。柱間は、心々で 260㎝ を測る。柱の底には、白色の粘土を敷いた痕跡が認められる。掘り方の深さは、北で浅く、南に下るにつれて深くなる。全体に削平を受けて平坦にならされていることを考え合わせれば、SB14601 造営時の地表は北が高く、南に傾斜したもので、自然地形の起伏をとどめていた可能性が高い。

南館は北館より約 1.5 ｍ高い場所にあり、ここでは主軸方位Ｎ－85°　－Ｗをとる、梁行２間以上、桁行９間の東西棟 SB321 と柱筋をそろえる同様の建物 SB320 を検出した。また、それらに直行する主軸方位Ｎ－５°　－Ｅをとる、梁間２間、桁行５間以上の側柱建物の南北棟 SB322 と柱筋をそろえる同様の建物 SB323 を検出した。更に、南北・東西棟に内側で建物 1 棟 SB324 を検出した（Fig.12）。

SB321 は東西棟で桁行９間、梁間は SB322・323 と同じ２間の建物である可能性が強い。柱間寸法の平均値は、東西柱間が 255 ㎝、南北柱間が 2.1 ｍである。柱穴の平面形は隅丸方形で径 90 ～ 140 ㎝で、110 ㎝前後の規模の柱穴が多い。

SB320 は SB321　と主軸方位が等しく、東西に並ぶ。調査区北壁際に一部を確認し、現況で柱が東西に二つ並ぶのみである。SB321 との柱間が 310 ㎝と他の部分より少し開いており、別の建物と考えられる。柱間は 2.5 ｍ前後。柱穴の平面形は隅丸方形で、東西長 105 ～ 110 ㎝。

SB322 は SB323 と柱筋が揃う南北棟建物である。SB323 との柱間が 337 ㎝と他より広く、別棟の建物と考えられる。梁行２間、桁行は現状５間で、北側が攪乱や第Ⅱ期東門に切られており、全長は不

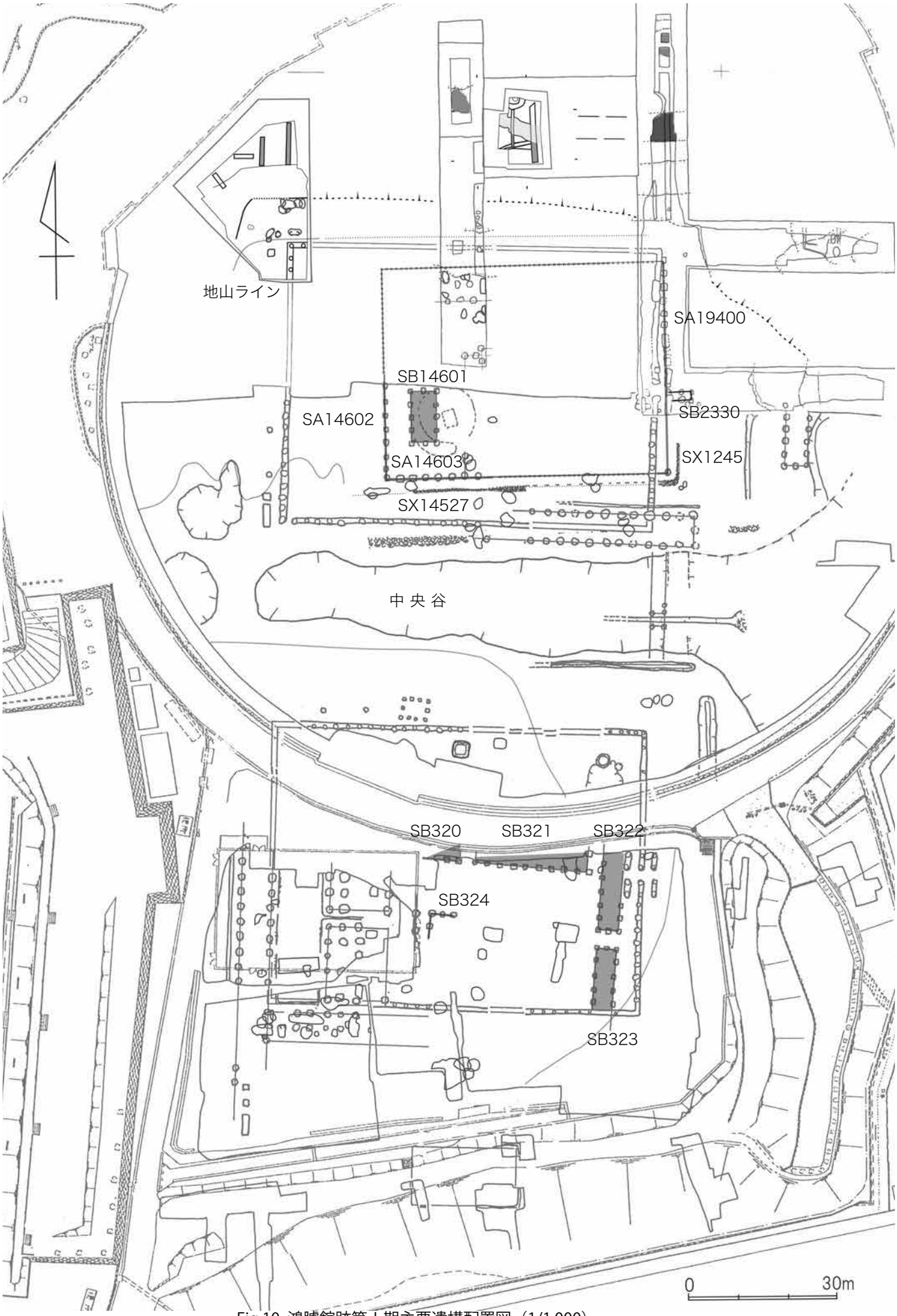


Fig.10 鴻臚館跡第Ⅰ期主要遺構配置図（1/1,000）

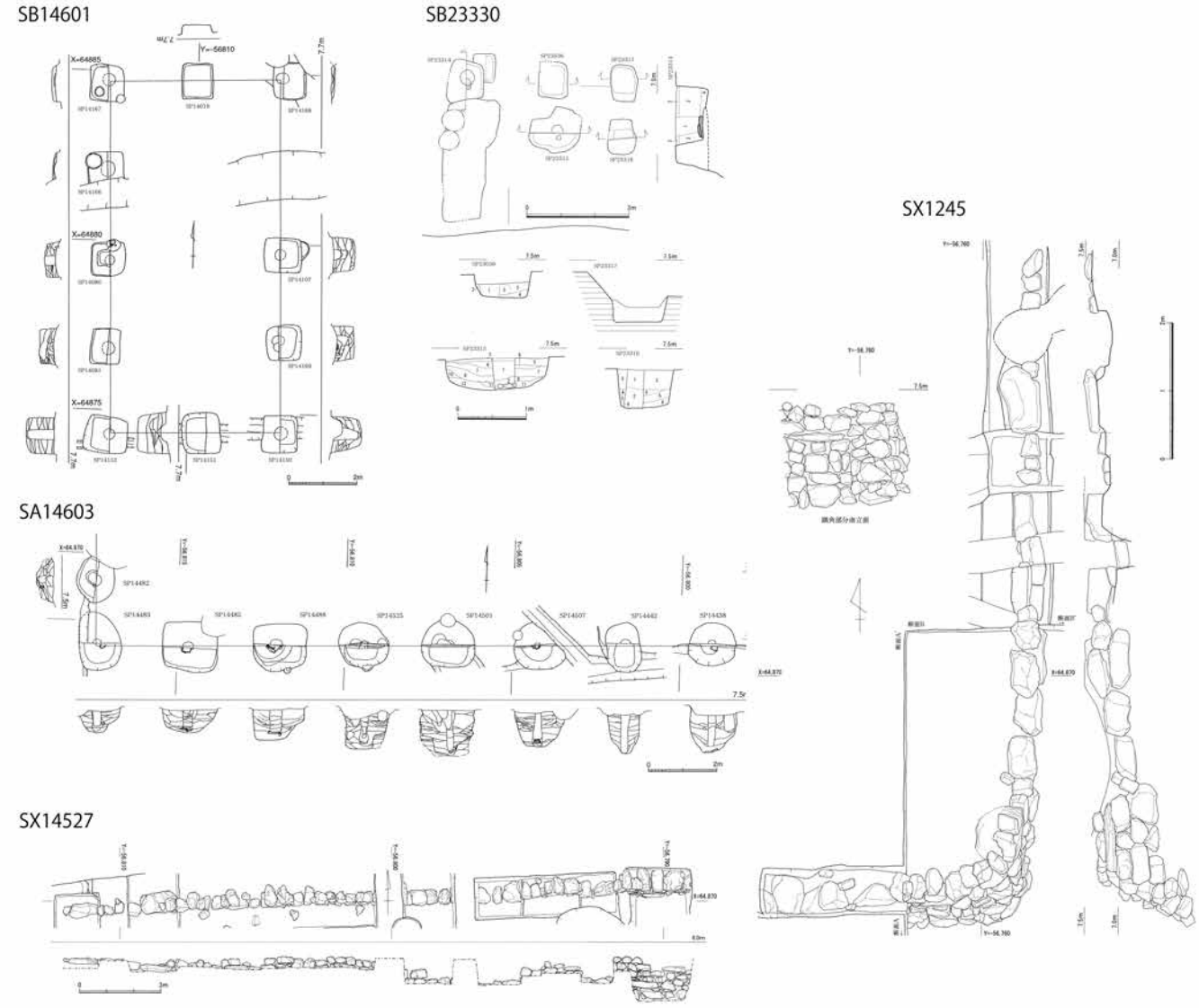


Fig.11 第Ⅰ期北館遺構実測図（1/200）

明である。梁間は2.1mの等間、桁行柱間は平均値で2.7mである。主軸方位は座標北から5°東偏する。柱穴平面形は隅丸方形で、長さ90～130㎝。

SB323は梁行２間、桁行は現状４間だが途中の柱穴を欠くとともに、南側は遺構面の削平が著しく全長は不明。梁間はSB322と同じく2.1ｍ。桁行の柱間の平均値は278.5㎝とSB322に近似する。主軸方位はSB322と等しい。柱穴平面形は隅丸方形で、径80～110㎝を測り、SB323と比べると一回り小さい。

SB324は４つの柱穴（SP825～827・831）で構成され、現状で東西２間、南北１間である。柱穴は隅丸方形プランで、径90～130㎝。柱痕跡は検出していないが、掘り方の間隔から柱間は2.3～2.5ｍ前後と推定される。建物の北辺柱筋はSB320・321と平行し、同じ主軸方位をとる。SB324 は各柱穴において掘り方底部の状況が他の礎石建物と類似している。

第Ⅰ期は後世の造成により、不明確な点も多いが、南館と北館では建物等の主軸方位や構成が異なっていることが分かる。検出した建物の状況から、南館建物群は長舎建物をロの字形に配置したものであったと想定される。内部にある建物は中心建物であった可能性が高い。北館は建物を塀で囲む

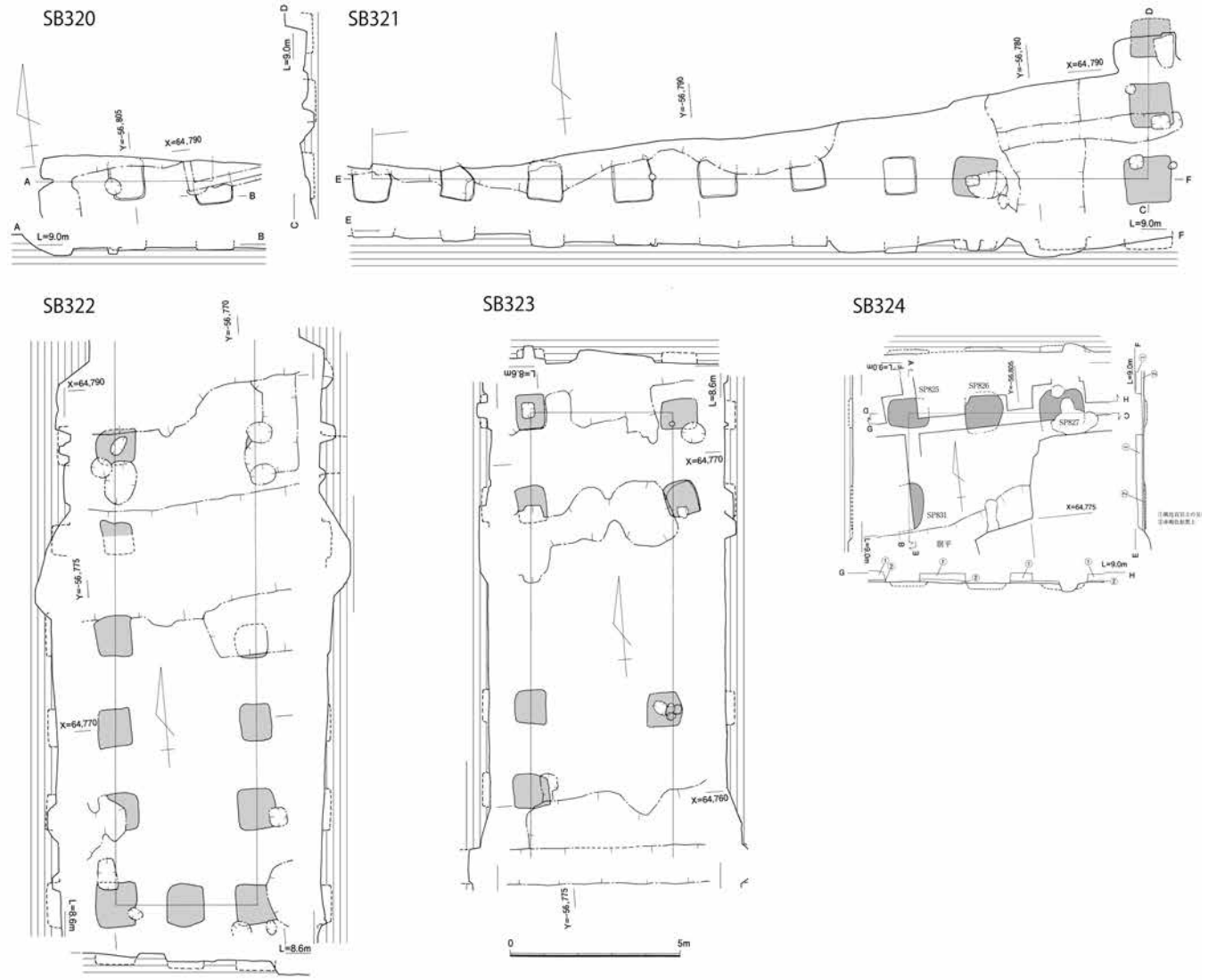


Fig.12 第Ⅰ期南館遺構実測図（1/200）

もので、内部に数棟程度の建物が想定される。遺構や地形などを考慮して復元すると、南館は東西長約 52m、南北長約 37m の規模と推定される。

建物構成に注目すると、長舎建物が中心建物を取り囲む構造は初期の郡庁の建物配置に類似する。また、時期はさかのぼるが、7 世紀中ごろの斎明朝の饗宴施設とされる奈良県石神遺跡の A3 期東区画建物群は、四面庇の中心建物を長舎で取り囲む構造で、饗宴施設の建物配置モデルとして取り上げられている。これらの事例を参考にすると、第Ⅰ期の南館には儀式や饗宴施設の機能を想定できる。一方、北館の構造は建物を塀で取り囲むものであり、その構造から部外者との接触が避けられた外交使節が滞在する館（宿舎）の機能を想定できる。つまり、海側に近い北館は宿舎であり、一段高い位置にある南館は儀式や饗宴施設となり、外交使節の宿泊、管理、饗応の機能を備えた施設の姿が浮かんでくる。

（２）第Ⅱ期（８世紀前半～末）

第Ⅱ期は、敷地を広げるため、およそ南北二町、東西一町の範囲を大規模に造成し、規格性の高い建物配置を行う。南北を隔てる谷は埋め立てにより狭められ、幅約 20 ｍの堀となる。堀の開口部では土橋を確認しており、南北の施設の連絡路と考えられる（Fig.13）。

北館の南側では盛土造成を行い、谷の北側斜面に石垣 SX14528、SX17703、17704（Fig.14）が築かれる。高さ約 4.2 ｍを測り、下部の 1.5 ｍは 80°前後でほぼ直に、上部は 55°前後の勾配をもつ。石材は礫岩や玄武岩が用いられている。裏込め石や版築はなく、盛土しつつ積み上げられたと考えられる。北館の北側は、盛土造成で第Ⅰ期より北側に約 10 ｍ平坦面を広げて高さ約４ｍの崖面を形成し、拡張した平坦面には布掘り塀が設けられる。崖下には砂丘面に瓦を敷いて、幅約 10 ｍの盛土造成を行っている（Fig. ６）。

北館の布掘り塀 SA1104（南西コーナー）、SA1237（南東コーナー）、SA19400･15002（北東コーナー）、SA25055（北西コーナー）（Fig.15）は、全体形は東西に長い長方形区画をなし、東辺の中央に東門 SB1238 が取り付く。心々距離で西辺長 55.7 ｍ、東辺長 56.1 ｍ、南辺長 73.7 ｍ、北辺長 73.7 ｍを測り、東側に僅かに開くが正しく長方形となる。南西コーナーには布掘りが途切れた部分があり、出入り口の可能性がある。塀の主軸方位はＮ－1°30′－Ｅをとる。掘り方は幅 1.0 ｍ前後の溝状をなし、最も残りの良い部分で遺構検出面から底面まで 1.5 ｍを測る。底面レベルは東辺が約 50 ㎝低く、当時の地表面も東へ傾斜していたものと推定される。柱抜き取り痕は平均 2.3 ～ 2.4 ｍの間隔で確認され、西辺では西（外）へ、南辺では南（外）へ、東辺では西（内）へ、北辺では南（内）へそれぞれ柱を倒して抜き取っている。

東門 SB1238（Fig.17）は桁行３間、梁行２間の八脚門で、布掘り塀 SA1237 が南に、同 SA15002 が北に取り付く。基壇、階段、雨落ち溝は残存しない。柱抜き取り痕の位置から、梁間 2.65 ｍ、中央間 3.5 ｍ、脇間 2.0 ｍの柱間が計測される。門の規模としては梁行 5.3 ｍ、桁行 7.5 ｍとなる。柱径は柱抜き取り痕跡から 40 ㎝前後と推定される。また、土層の観察から、柱穴を掘り直して版築状に突き固めた痕跡があり、建物の建替えが行われたと考えられる。主軸方位はＮ－1°30′－Ｅとなり、布掘り塀と同一である。

南館の布掘り塀 SA303（南西コーナー）、SA301（南東コーナー）、SA15012（北東コーナー）（Fig.16）は北館と相似形をなす布掘り掘り方の掘立柱列で、塀と推定される遺構である。全体形は東西に長い長方形プランで、東辺の中央に東門 SB300 が取り付く。心々距離で西辺推定長 56.08 ｍ、東辺長 56.431 ｍ、南辺長 74.169 ｍ、北辺推定長 73.85 ｍを測り、東側と南側に僅かに開く区画をなす。北東角及び南東角と東門中心までの距離は北半 28.077 ｍ、南半 28.354 ｍで、ほぼ等しい。塀の主軸方位はＮ－1°30′－Ｅをとる。掘り方は幅 1.2 ｍ前後の溝状をなし、最も深い西辺中央で底面まで 1.6 ｍを測る。底面レベルは全体的に東辺が 50 ㎝前後低いことから、当時の地表面も東へ傾斜していたと推定される。

東門 SB300（Fig.17）は桁行３間、梁行２間の八脚門で、規模は北館と布掘り塀 SA301 が南に、同 SA15012 が北に取り付く。基壇、階段、雨落ち溝等は残存しない。柱間は、梁間 2.66 ｍ、中央間 3.55 ｍ、脇間 2.07 ｍを測る。柱径は柱抜き取り穴に残る痕跡から 40 ㎝前後と推定される。

便所状遺構は北館の南西隅外側で２基（SK1124、1125）、南館の南西隅外側で３基（SK 57、69、70）（Fig.18）を検出した。平面形は隅丸長方形プラン（SK57、1124）と隅丸方形プラン（SK69、70、1125）のものがあり、前者は長さ約 3.3 ～ 3.8 ｍ、幅約 1.1 ｍ、深さ 2.9 ～ 3.4 ｍを測る。後者は一辺約 1.2 ～ 1.4 ｍ、深さ 3.0 ～ 3.5 ｍを測る。本来の深さは４ｍほどあったと考えられる。坑内は床

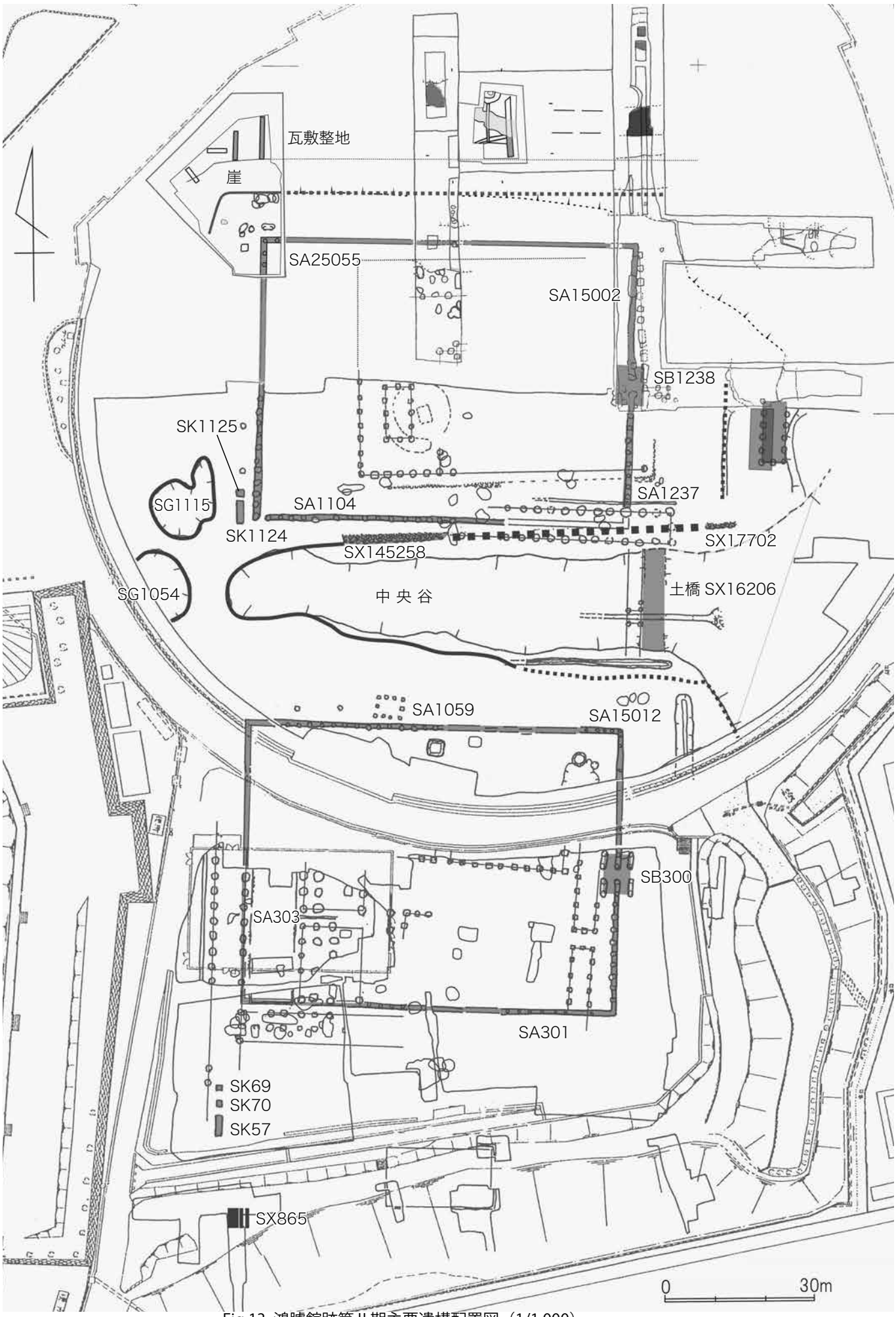
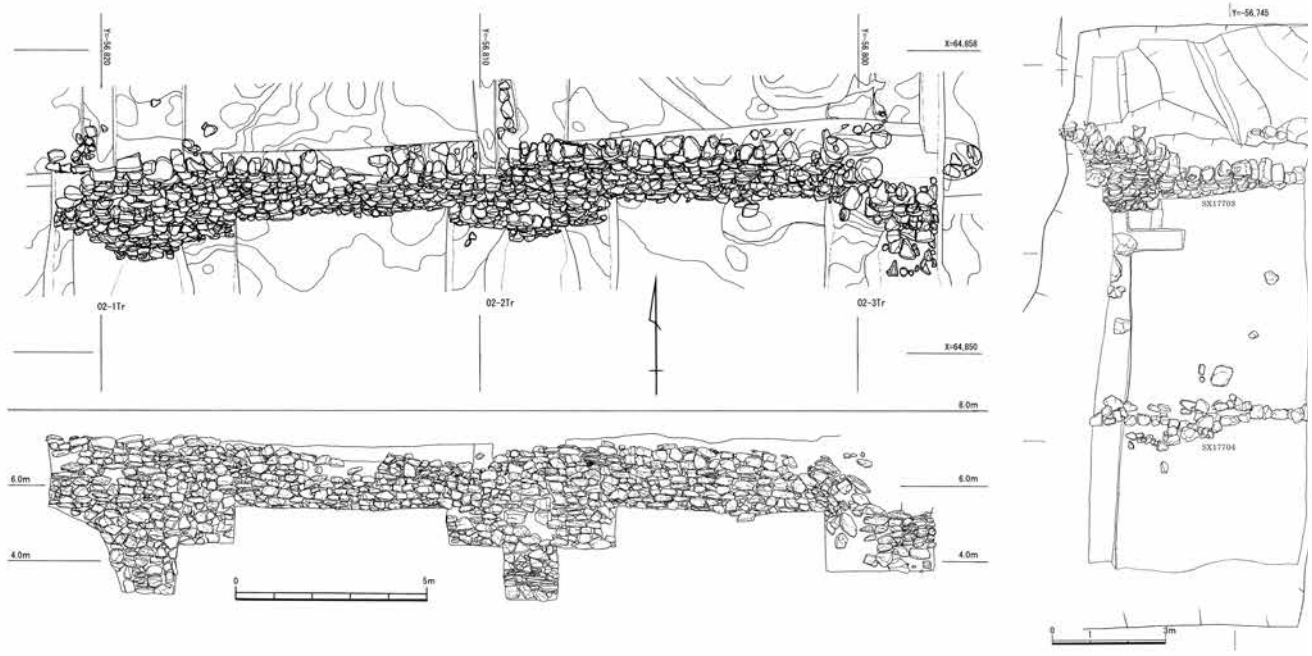


Fig.13 鴻臚館跡第Ⅱ期主要遺構配置図（1/1,000）



石垣 SX14528（南から）

SX17703、17704（南か

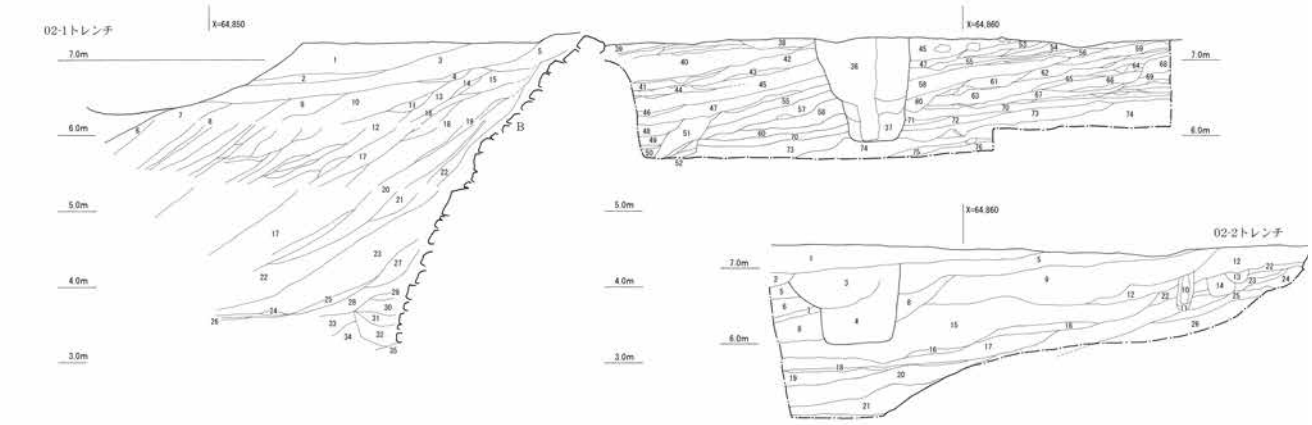


Fig.14 第 II 期北館石垣検出状況及び遺構実測図（1/100、1/200）

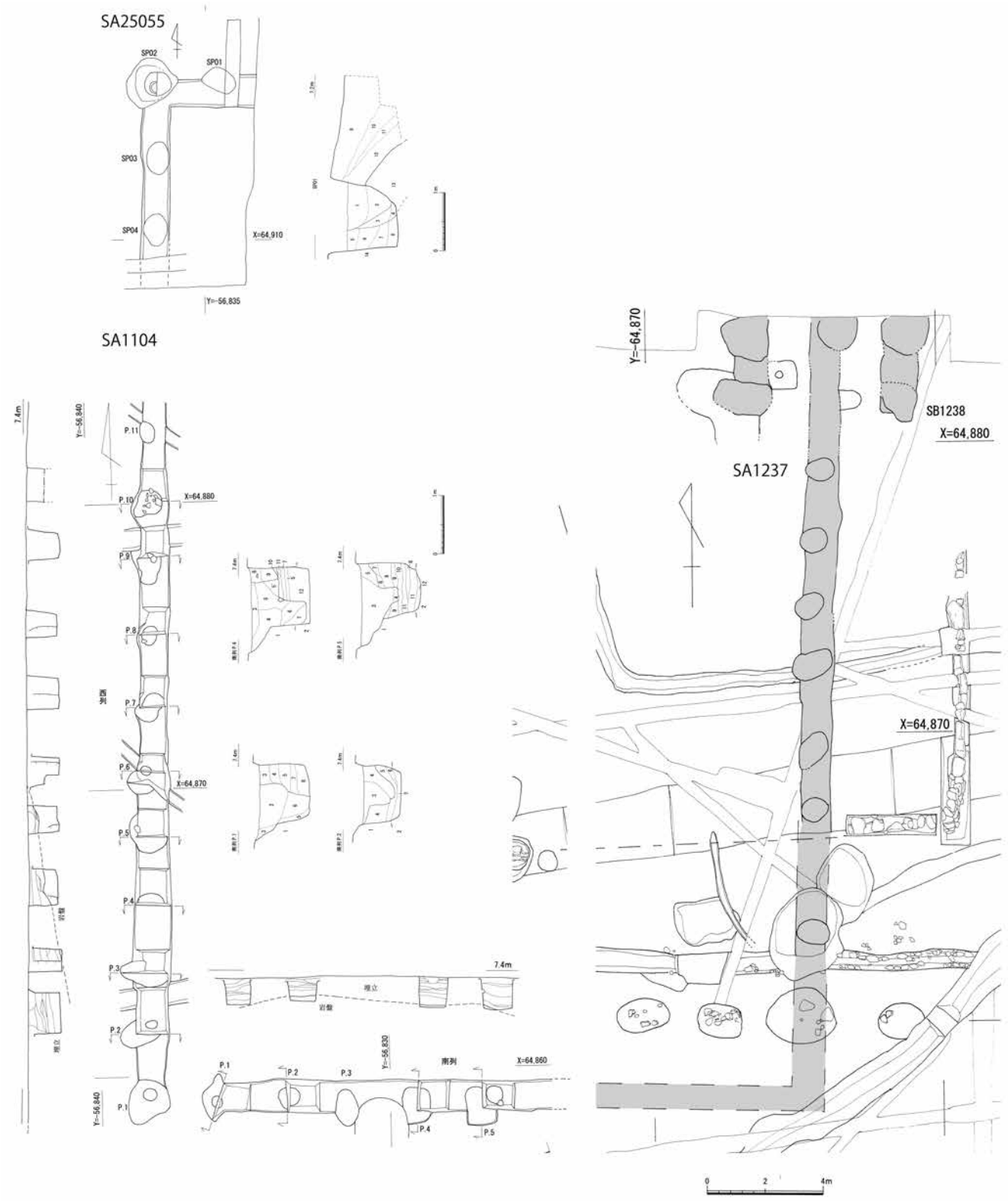


Fig.15 第Ⅱ期北館遺構実測図（1/200）

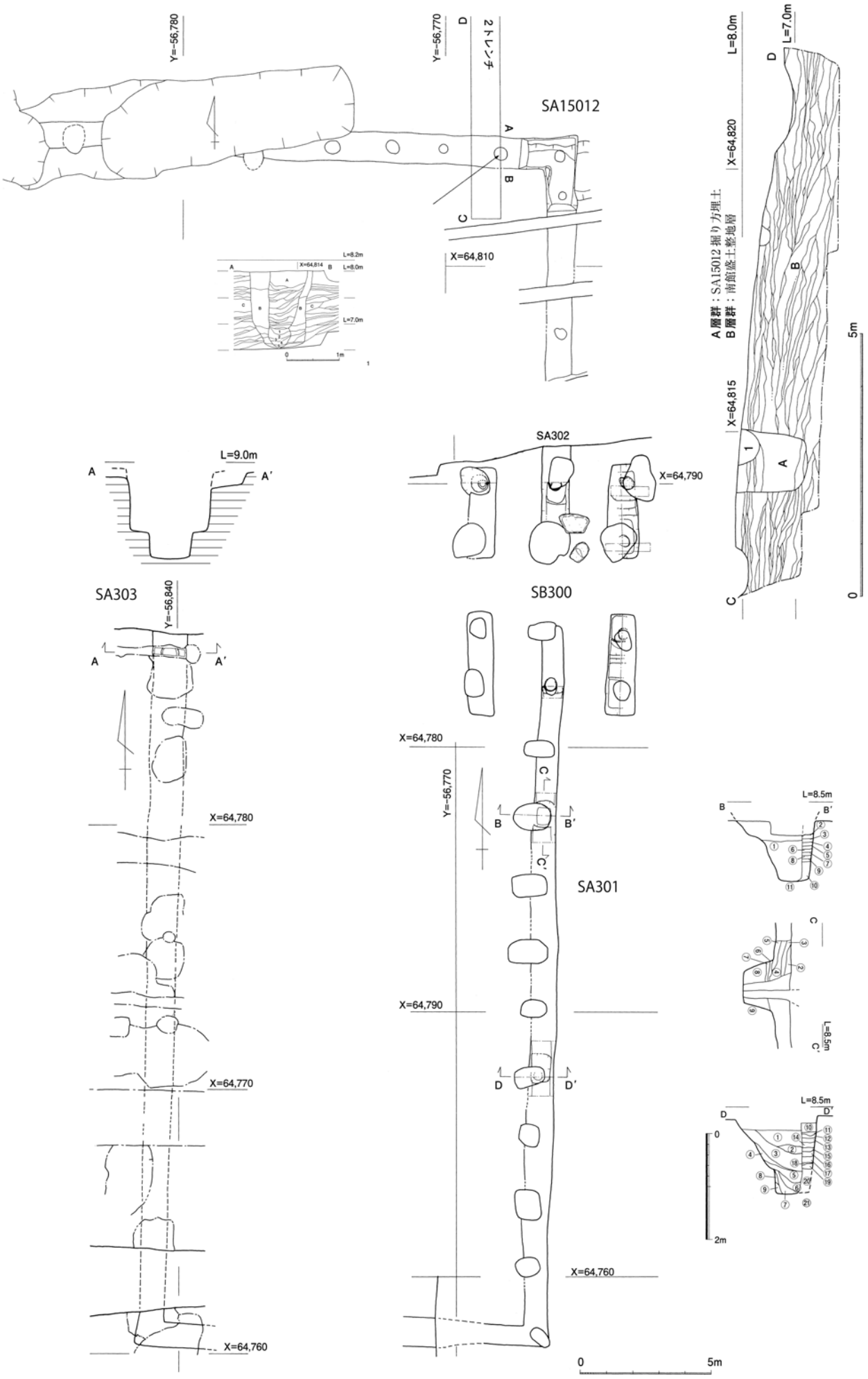


Fig.16 第Ⅱ期南館遺構実測図（1/100、1/200）

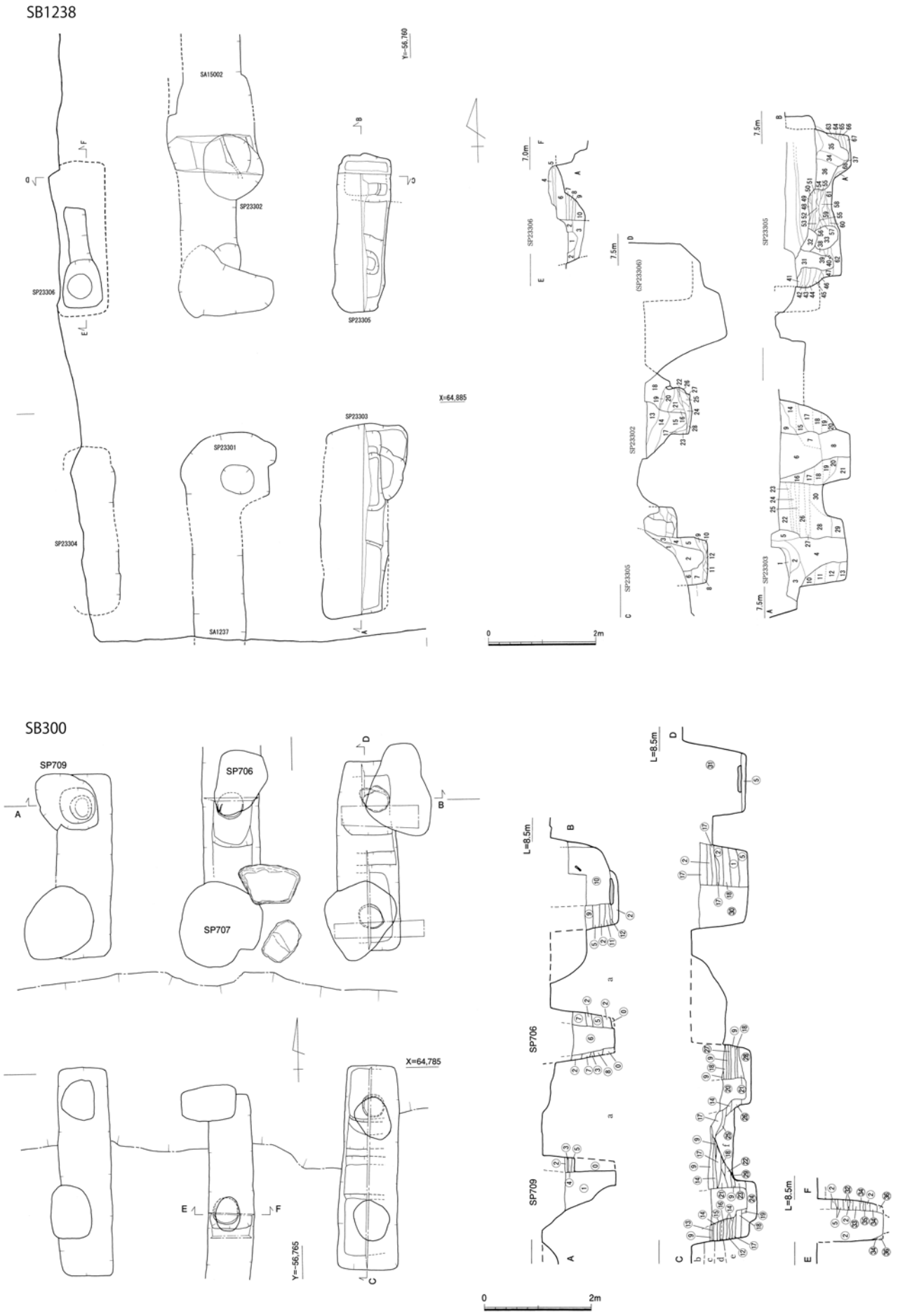


Fig.17 第Ⅱ期北・南館東門遺構実測図（1/100）

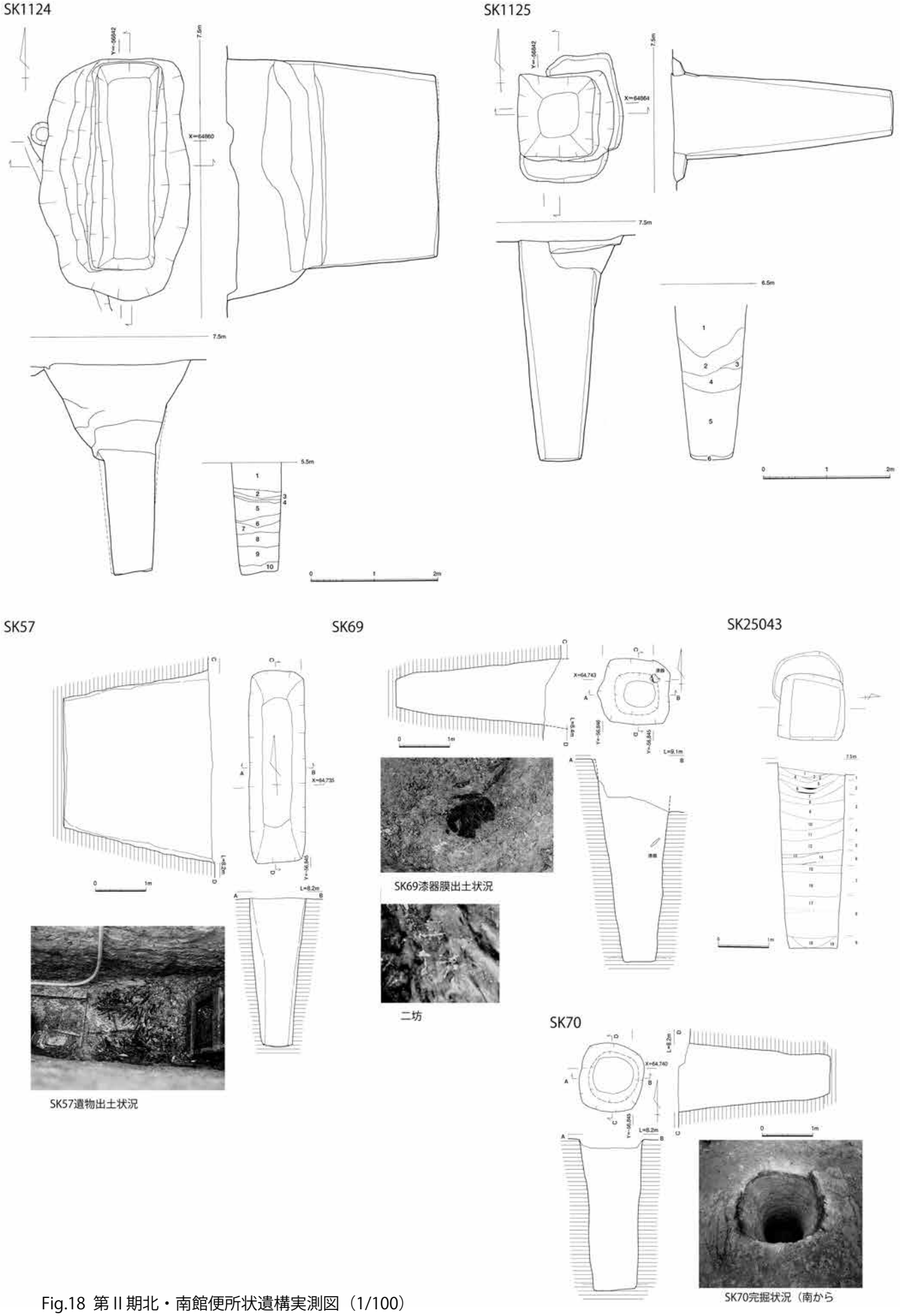


Fig.18 第Ⅱ期北・南館便所状遺構実測図（1/100）

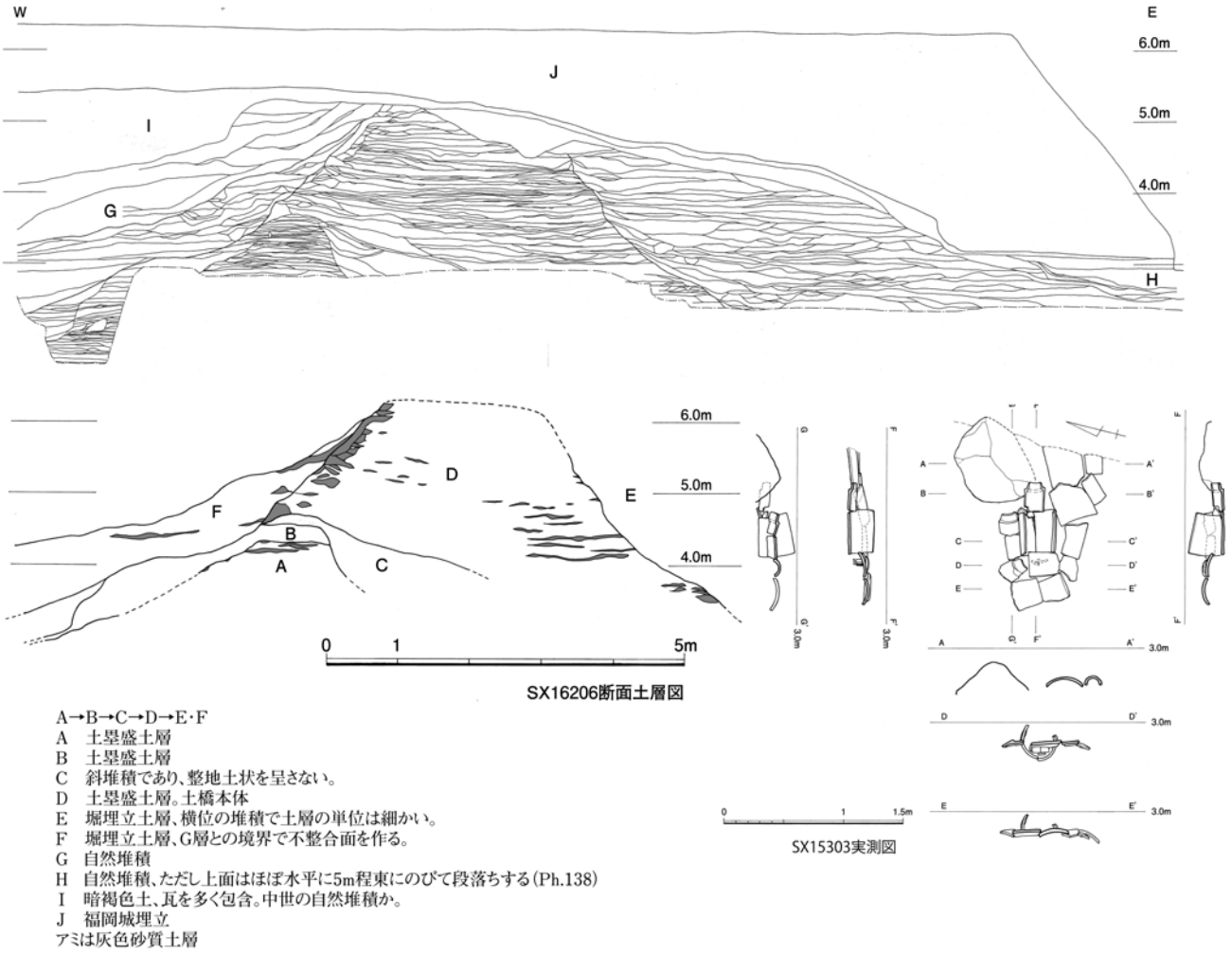


Fig.19 第Ⅱ期中央谷土橋及び暗渠遺構実測図（1/60、1/100）

面から 1.5 m程の厚さで、籌木や食物残滓などを含む排せつ物が堆積する。排泄物の中に含まれる種子や花粉、寄生虫卵の分析からウリ、ヤマモモ、ナツメ、ミズアオイ、アブラナ、コイ、アユなどが食されたことが想定されている。その内、南館の SK69、70 からはブタやイノシシなどの寄生虫卵が出土している。

土橋状遺構 SX16206（Fig.19）は谷部の開口部にあり、標高 5.4m を頂部とする低い土塁が築かれ、それを東西に拡張、最後は一気に標高 7.2m 付近まで積み上げるものである。上端の幅は約 1.8m、裾幅は調査区北壁土層断面で 12.5m 以上、堀底からの高さは 5m 強と推定される。土橋の長さは、堀の南岸が確定できないので明らかではないが 30m 以上となる。土橋遺構 SX16206 の基底部で検出した SX15303 は瓦敷きの遺構で、おそらく SX16206 の暗渠排水機能を担ったものと推測される。

池状遺構 SG1054、1115 は谷の埋め立てによりできた池で、中央谷との間は南北間の通路となっていたと考えられる。SG1054 と 1115 の間は西側に向う通路の可能性が推測される。

（３）第Ⅲ期（９世紀初～後半）

第Ⅲ期は、乱積みの基壇を持つ礎石建物が設けられた時期で、第Ⅱ期の主軸方位Ｎ－1°　30′　－Ｅを踏襲しながら、大型の礎石建物群から構成される。中央の堀は埋め立てにより狭められる。土橋は木橋に変わる（Fig.20）。

北館の礎石建物 SB1228（Fig.21）は、南東側でⅡ期の布掘り塀の南辺に重なる位置で検出した。雨落ち溝は建物の北側にのみ確認され、南側には確認できない。建物の南東隅では台地が落ちており、鴻臚館廃絶後に地形が浸食を受けたとみられ、礎石の一部がずり落ちている。柱間が３ｍ（10 尺）等間の桁行 11 間以上の建物で、さらに西に伸びている。SB1228 の南側礎石列延長線上において、礎石据付穴とみられる遺構 SP14535 を確認しており、ここまで東西 42 ｍ（14 間）となる。建物の東側は地形が落ちることや雨落ち溝が切れることから、ここで収束するものとみられる。梁行は２間で、柱間は３ｍ（10 尺）である。主軸方位はＮ－88°　30′　－Ｗをとり、第Ⅱ期布掘り塀の主軸方位に等しい。布掘り塀 SA1237 南列が SB1228 の中央を通り、東列は SB1228 の東端から３間目の柱位置を通ることから、布掘り塀 SA1237 の軸線をそのまま踏襲し、これを南北に１間ずつ、東へ３間分広げた建物であるといえる。建物基壇は削平され、礎石の大部分は失われているが、礎石据付穴の多くが残っている。据付穴は径 1.3 ～ 2.4 ｍの不整な円～楕円形プランを呈し、深いもので 40 ㎝ほどが残るが、大半は 10 ㎝前後と浅い。坑内に花崗岩、玄武岩等の根固め石が残るが、一部は中世溝に破壊されている。礎石は２個が現存しており、南東隅の SP02 は 1.8 ｍ× 1.15 ｍの大きな玄武岩円礫を用いたものだが元位置になく、地形浸食により南東斜面にずり落ちている。その西隣の SP01 は、2.3 ｍ× 1.3 ｍの更に大振りな玄武岩扁平礫を用いており、ほぼ元位置にあるが、戦前の軍隊による破壊で打ち欠かれており、ずれて上面が南へ傾いている。SB1228 は、南館で検出した礎石建物 SB31 と棟方向が直交するが、主軸方位や規格、礎石据付穴の形状等において共通する礎石建物である。

南館では比較的残りの良い西南側で、軒を連ねた身舎２間で、東西に庇が付く南北棟 SB32、330、その西側で梁間２間、桁行 16 間（48 ｍ）以上の南北棟 SB31、それに直行する梁間２間、桁行７間（21 ｍ）以上の東西棟 SB50 とそれに伴う雨落ち溝を検出した（Fig.22）。

SB32・330 は、身舎が２間で、東西に廂が付く建物である。梁行４間（12.0 ｍ＝ 40　尺）、桁行９間以上（27 ｍ以上）を確認した。礎石の残りが良く、7 個が現存していた。礎石には花崗岩と玄武岩の自然石が利用されており、SB31 の礎石と比べて上面のレベルが約 15 ㎝低い。礎石が抜かれた据付け穴では、下部の根固め石まで抜かれたものが多い。据付け穴の掘り方は、ほぼ径 1.5 ｍ前後の円形プランをなすが、規格性に乏しい印象を受ける。束柱を相対する２ヶ所に検出し、その間は柱間が 3.3 ｍと他（３ｍ等間）よりやや開いており、この部分に建物を横断する東西方向の排水溝が造られ、馬道となっている。排水溝は礎石の高さからみて蓋石がなく開渠であった可能性が強い。排水溝の下層には瓦を立てた別の溝が確認でき、石組み溝以前の古い溝と考えられる。馬道から南を SB330 として区別しており、仮に SB50 に接する部分で建物が収束するとすれば、SB330 は桁行５間となる。主軸方位は、SB31 と等しく、主軸方位はＮ－1°　30′　－Ｅとなる。

SB31 は最も西に位置する礎石建物である。南北棟で、乱石積みの基壇を持ち、両側に雨落ち溝がある。基壇幅は９ｍ（30 尺）で、梁行２間（６ｍ＝ 20 尺）、桁行 16　間以上（48 ｍ以上）を確認した。主軸方位はＮ－1°　30′　－Ｅとなる。北側は調査区外に伸びていき、南端部分は近世～近代に破壊を受けて消滅しており、全長は不明である。昭和 26　年の第１次調査において礎石列が確認されていた遺構に相当する。礎石据付け穴は、径 1.4 ｍ前後の隅丸方形～円形プランをなし、内部に花崗岩・玄武岩・砂岩の根固め石が良く残るものが多い。柱列間の２ヶ所に束柱があり、少なくとも３部屋以上

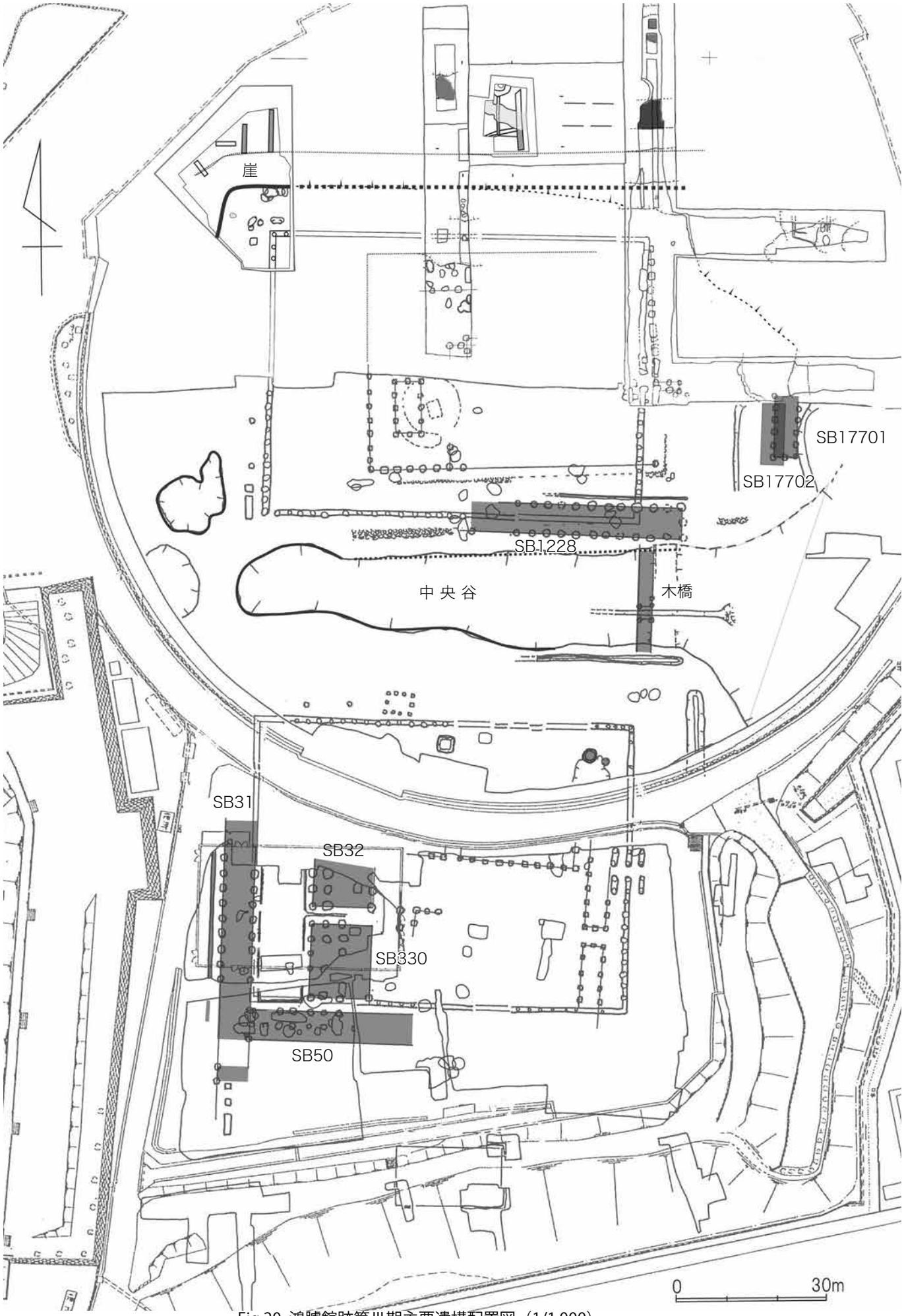


Fig.20 鴻臚館跡第Ⅲ期主要遺構配置図（1/1,000）

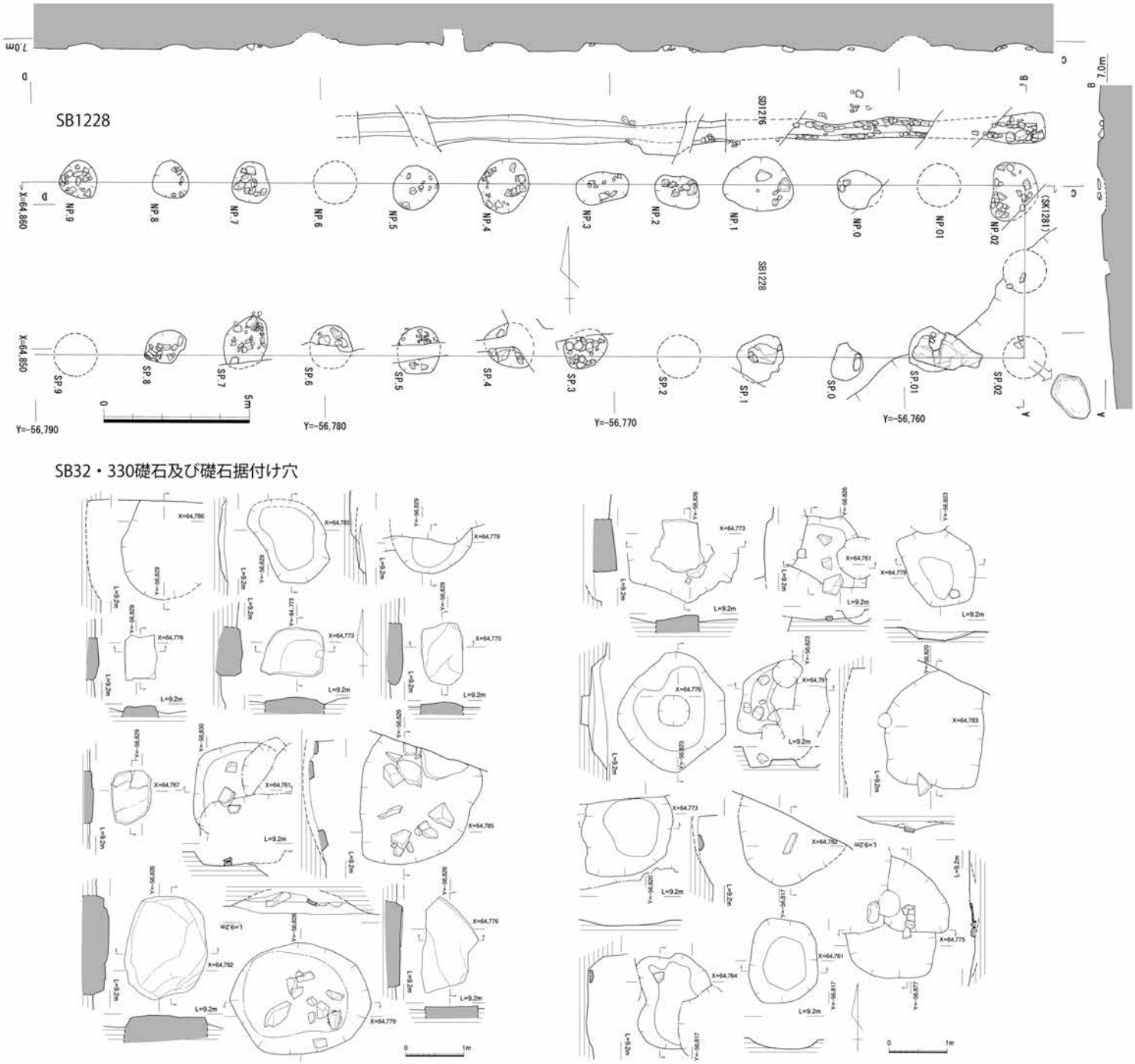


Fig.21 第Ⅲ期北館遺構及び南館建物礎石実測図（1/100、1/200）

に間仕切りされていたと推定される。間仕切られた部分の中央の柱間が 3.3 mと広く、この東に方形の石列が基壇から張り出す部分があり、瓦敷きであることから出入り口の可能性がある。基壇の石積みには花崗岩・砂岩を用いている。石積みは東辺の５カ所に数個ずつが残るのみだが、礎石の高さからみて２段に積まれていたものと想定される。基壇の東西両側には雨落ち溝があり、西溝は幅 60 ～ 90 ㎝、深さ 10 ㎝、東溝は幅 1.2 m、深さは基壇石積み天端から 30 ㎝を測る。SB31 と SB330 に挟まれた北辺部分には雨落ち溝があり、それぞれの建物の雨落ち溝に続くため平面「コ」字形をなす。雨落ち溝は、残りの良いところでは幅約 1 m、深さ 30 ㎝で、断面はU字形をなす。

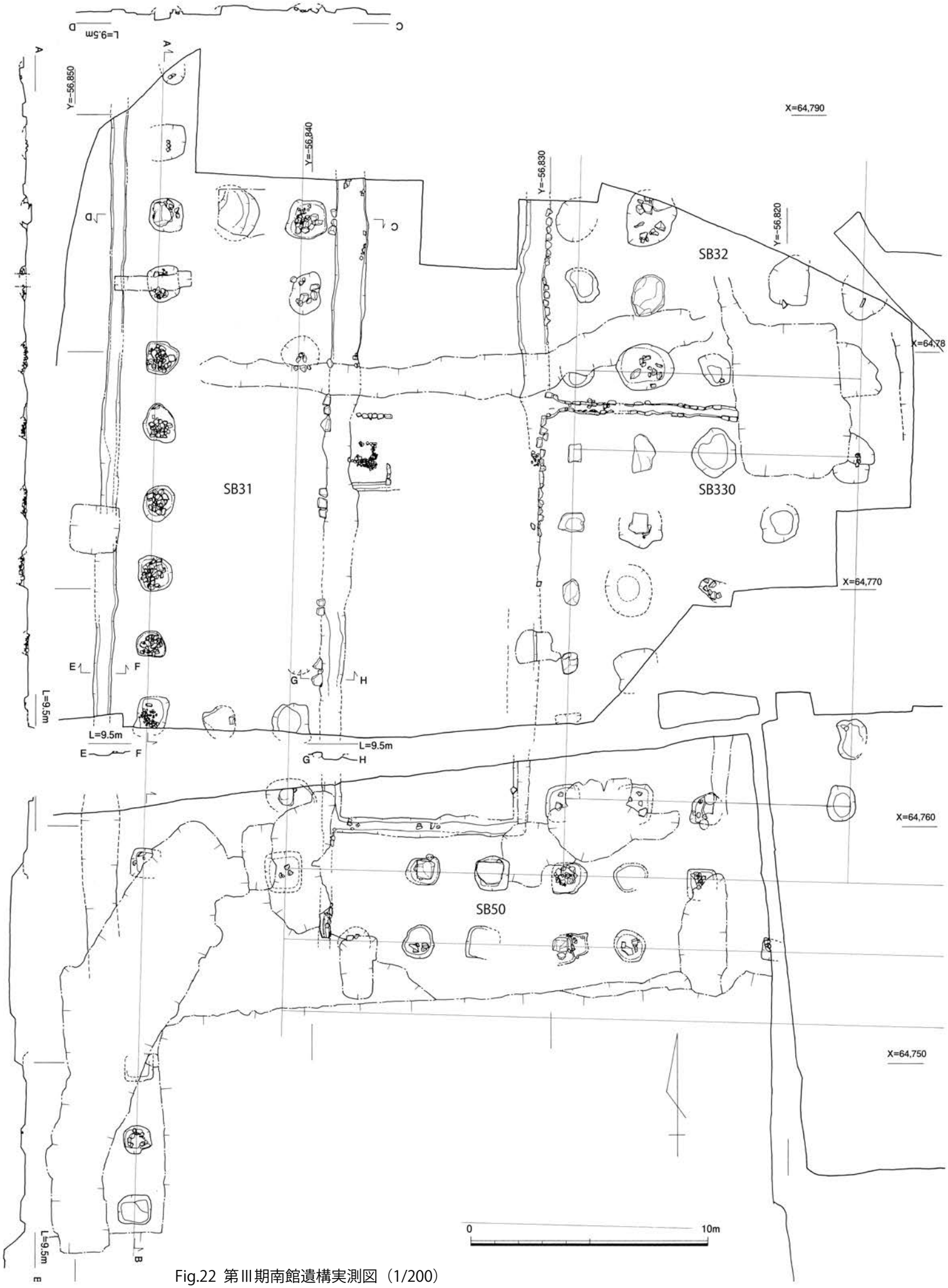


Fig.22 第Ⅲ期南館遺構実測図（1/200）

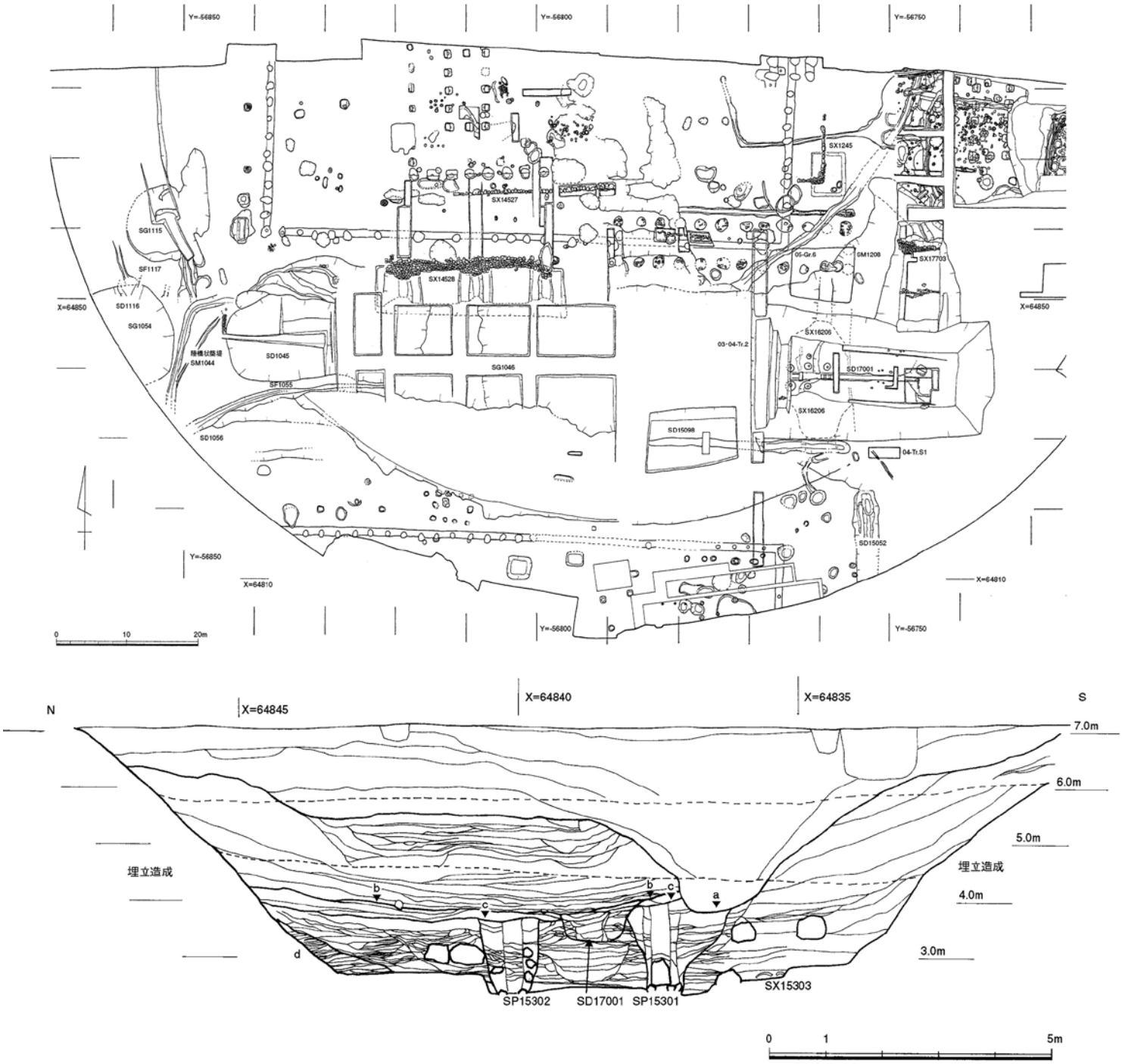
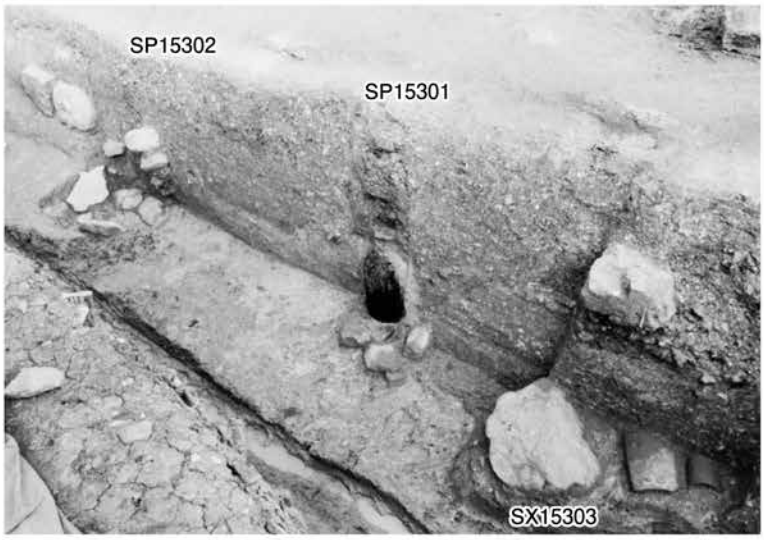


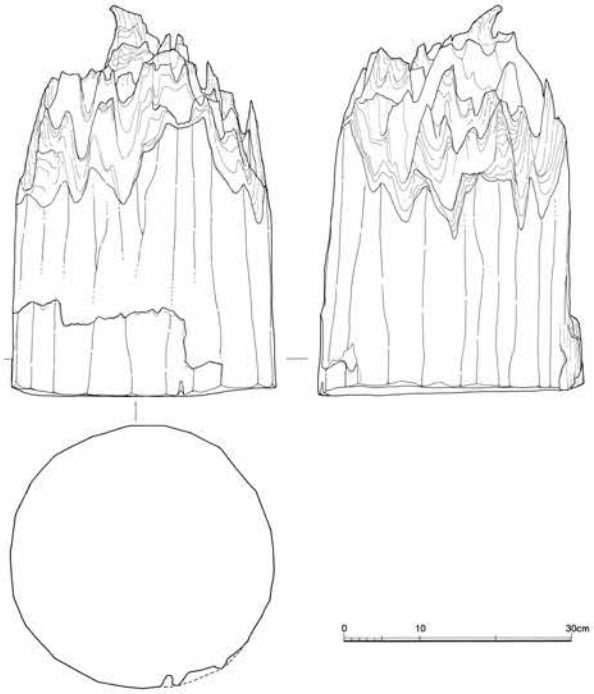
Fig.23 第Ⅲ期中央谷及び土層実測図（1/100、1/800）

SB50 は基壇化粧石が残っていないが、SB31 等と同様の基壇構造を持つと考えられる。礎石は３個が現存しており、いずれも花崗岩自然石を使用する。礎石は 60 cm× 60 cm× 30 cm、70 cm× 65 cm × 26 cm、100 cm× 80 cm× 20 cmと大きさにばらつきがある。礎石上面レベルは標高 9.2 m前後で、SB32･330 とほぼ同レベルで、SB31 より約 15 cm低い。礎石据付け穴は土坑や攪乱、削平により失われ、計 12 基が残る。平面プランが隅丸方形ないし円形を呈し、径 1.2 ～ 1.45 mを測る。根固め石は花崗岩・砂岩・玄武岩板石等を使用している。主軸方位はN－88° 30′ －W で、SB31・32・330 と直交する。



SP15301・SP15302（南西より）

SP15302断面（西より）



SP15301柱根検出状況（西より）

Fig.24 第Ⅲ期中央谷木橋橋脚検出状況及び橋脚実測図（1/10）

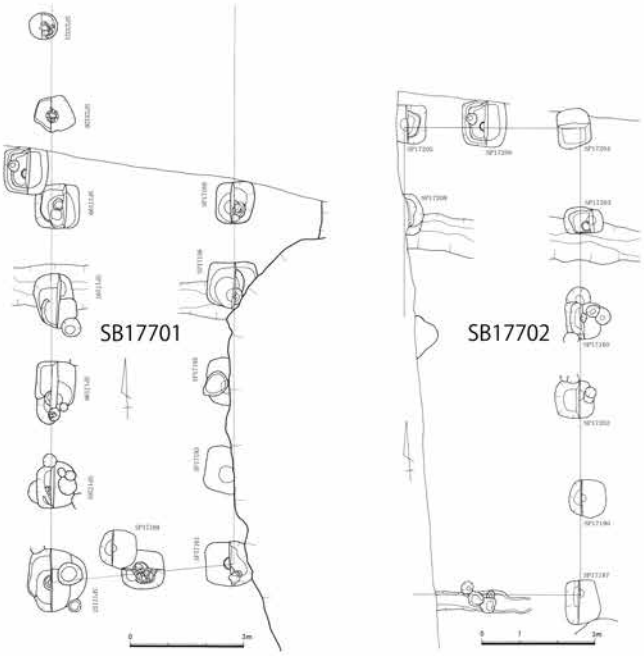
この他、SB50 に伴うとみられる排水溝が４ヶ所に認められた。

第Ⅲ期の中央の堀は、さらに狭めて敷地を拡張し礎石建物を営んでいるが、明瞭な岸を確認することはできず、堀幅は明らかではない。第Ⅱ期にはその中央に土橋 SX16206 は造られるが、堀の底面で土橋に変る橋梁と考えられる木柱を検出した（Fig.23、24）。木柱は、基部から 50cm 分が残っていた。基部で直径 35cm をはかる。杉の丸太材で、周囲は面取りされて多角形を呈している。基底面には、伐採痕が多数残されている。ウィグルマッチ法を利用した AMS 炭素 14 測定を実施、708 年が最も確立が高いという結果が出ている。この木柱を含めて検出できた柱穴は、2.5 ～ 2.6m 間隔で５本、南北一間、東西二間のグリッド上に配置されており、亀甲型に配置された８本の柱をセットとした橋

脚基礎が推定され、幅約６m、高さ３m強で南北をむすんでいたと復元される。

この他、SB17701、17702（Fig.25）は北館の東側の一段下がった平坦面にある掘立柱建物である。SB17701は梁間２間、桁行５間以上で、柱間寸法は240㎝をはかる。SB17702は前者に後出する建物で、梁間二間、桁行五間で、柱間寸法は240㎝をはかる。柱痕跡から柱材の直径は20㎝程度と推定される。北館の東側入り口部にあることから、施設への入出に関わる建物であった可能性が指摘されている。

第Ⅲ期の建物配置は、第Ⅱ期の建物方位や中軸線を踏襲した回廊状の建物とその内部に長大な南北建物を配置したものが復元される。門は検出できなかったが、文献史料にはこの時期に当たる天安２年（858）、唐から帰国した円珍にむけての唐海商の送別詩の題に「鴻臚北館門楼」という記載があり、この時期の北館は重層の門であったと想定される。



礎石建物SB1228（東から）

Fig.25 第Ⅲ期北館礎石建物検出状況及び東側建物実測図（1/100）

南館礎石建物SB31、32、330全景（上が北）

南館礎石建物SB50全景（上が北）

Fig.26 第Ⅲ期南館遺構検出状況

（４）第Ⅳ期以降（９世紀後半～ 11 世紀前半）

第Ⅳ期以降は、中国商人の来着の記事が多くみられ、この場所が唐物の取引の場として、活況を呈していたと推測される。ただし、建物遺構の遺存状況は悪く、施設構造は不明である。しかし、瓦類は多量に出土しており、特に 10 ～ 11 世紀代の特徴を示す瓦も多く含まれることから、瓦葺き建物は存在したことは確かであろう。第Ⅳ期（９世紀後半～ 10 世紀前半）と第Ⅴ期（10 世紀後半～ 11 世紀前半）は主に廃棄土坑の出土遺物から時期区分している（Fig.27）。

南館の SD15052、15098（東西溝）は第Ⅴ期の北東角を形成する。ただし、SD15052 と SD15098 とは連結せず、６ｍ弱の陸橋状部分を掘り残している。この陸橋状部分に南館への出入口機能を想定することも可能である。SD15052 は、調査した部分で幅 340cm、深さ 90cm を測る。土層断面の観察では５回程度の掘り直しがある。ＳＤ 15098 は、調査した範囲で、幅 95 ～ 175cm、探さ 75 ～ 140cm をはかる。３回程度の掘り直しが想定できる。Ⅱ期、Ⅲ期と同様の規模を区画するのであれば、１辺 100 ｍに及ぶことになる。

南館では多くの廃棄土坑を検出した（Fig.28）。第Ⅳ期（９世紀後半～ 10 世紀前半）に位置付けられるものは 21、第Ⅴ期（10 世紀後半～ 11 世紀前半）は 23 であり、その他の 33 は第Ⅳ～Ⅴ期のものとみられるが詳細時期不明である（第Ⅳ期遺構に切られるものを５含む）。うち、第Ⅳ期に含めた土坑 SK155・224 は時期的にやや古相であり、第Ⅲ期（９世紀前半～後半）に遡る可能性を持つ。第Ⅲ期の礎石建物があった場所に掘り込まれるものも多く、第Ⅳ期以降、建物配置は大きく変化したことが想定される。

これらの土坑の用途は、多くが廃棄物を処理したものであるが、SK01・02・54・208（Fig.29）などは方形プランの整った形状を持つ土坑であり、本来他の目的で造られたものがゴミ穴に転用された可能性を持つものである。その他、魚骨や馬の歯などの獣骨類などの食物残滓が出土した土坑 SK56・75 等は生活ゴミを廃棄するための土坑、建物を壊した際に礎石を埋め込んだ土坑 SK62、不要になった瓦を廃棄した瓦溜りである SK24・27・36・37・66 など、様々な性格のものがある。第Ⅳ期の土坑は陶磁器等の廃棄遺物に獣骨類等の自然遺物が混じるゴミ穴が多いのに対し、第Ⅴ期の土坑は瓦を処理するための瓦溜りが多いことは指摘できよう。また、土坑は南館の調査区全体に広がって位置しており、特定のエリアに集中するわけではないが、第Ⅳ期の土坑は第Ⅲ期建物基壇と重複する位置に掘られているものが多い傾向が伺える。

中国産陶磁器、特に越州窯系青磁が大量に出土した土坑は、SK38・56・61・75・80・82・255、及び SK246（Fig.31）がある。いずれも第Ⅳ期に属するが、出土した陶磁器が二次的に火を受けていることから、倉庫等に保管されていた商品が火事にあい、一括投棄されたものとみられる。これらの土坑から出土した越州窯系青磁の組成には顕著な差が認められる。ひとつは福建省産とみられる粗製の越州窯系青磁（Ｂ群）が過半数を占める土坑で、特にＢ群の碗が大半を占める SK80 の構成は特異である。もう一つは産地や器種にバリエーションがあり、複数の産地の様々な器種を集めたような構成で、SK56、255 等が相当する。また、第Ⅴ期の SK160・208 からも相当量の遺物が出土しているが、破片の状態で廃棄されており、完形品が少ない。廃棄の様相が異なるものと考えられる。

第Ⅳ期以降の建物遺構は不明確であるが、出土する瓦の種類に偏りが見られる。調査で出土した軒瓦は鴻臚館式（丸瓦 223 型式、平瓦 635 型式）が大半で、それに軒丸瓦 082A 型式、082B 型式、軒平瓦 662 型式、663 型式が加わったものが主たる構成となる。10 世紀～ 11 世紀に位置づけられるものは少量であるが、軒丸瓦 049 型式と軒平瓦 605 型式がある。これらは主に北館で見られるもので、南館ではほとんど出土しない。第Ⅳ期以降、維持管理は北館に力が注がれたと想定される。

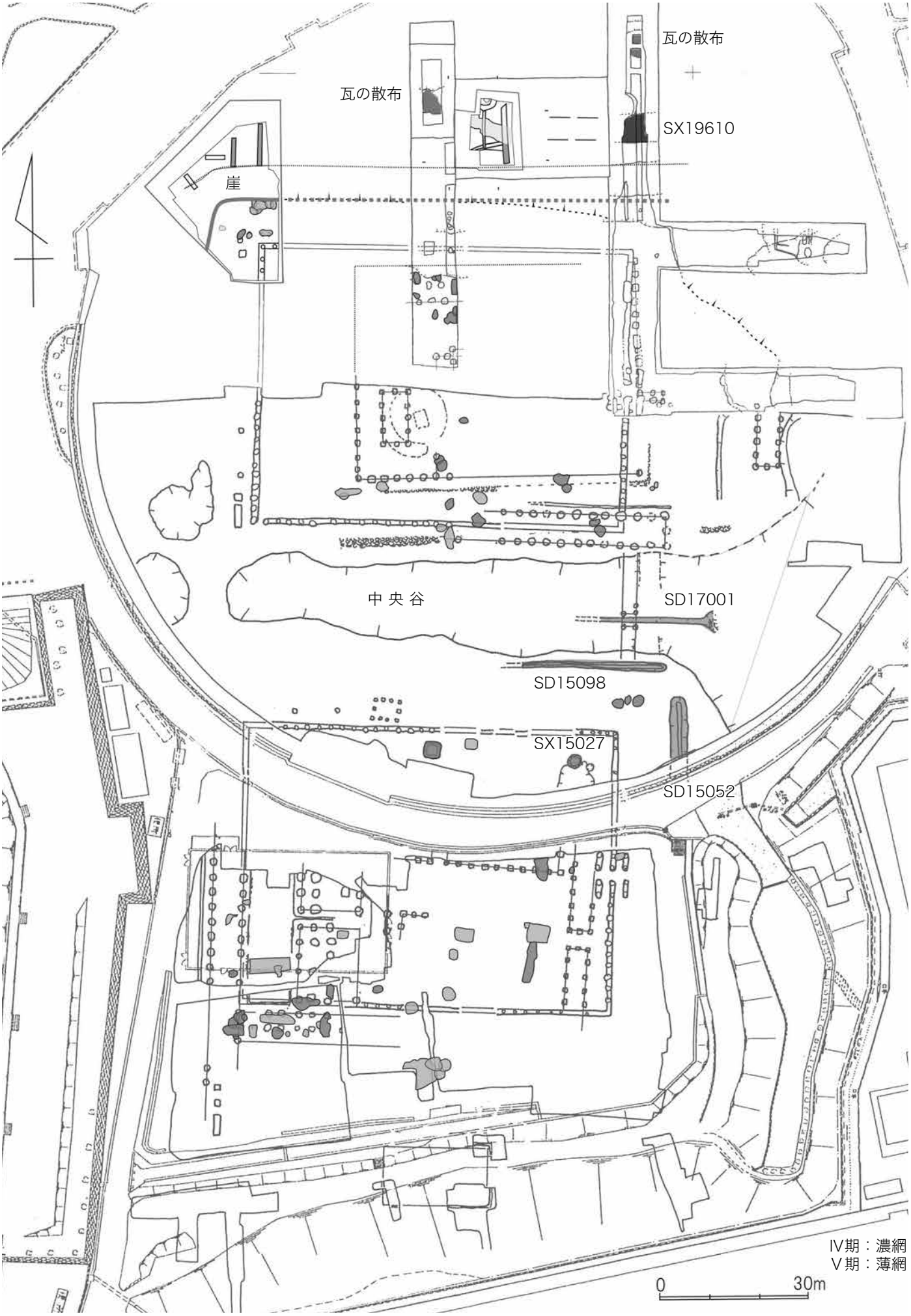


Fig.27 鴻臚館跡第Ⅳ・Ⅴ期主要遺構配置図（1/1,000）

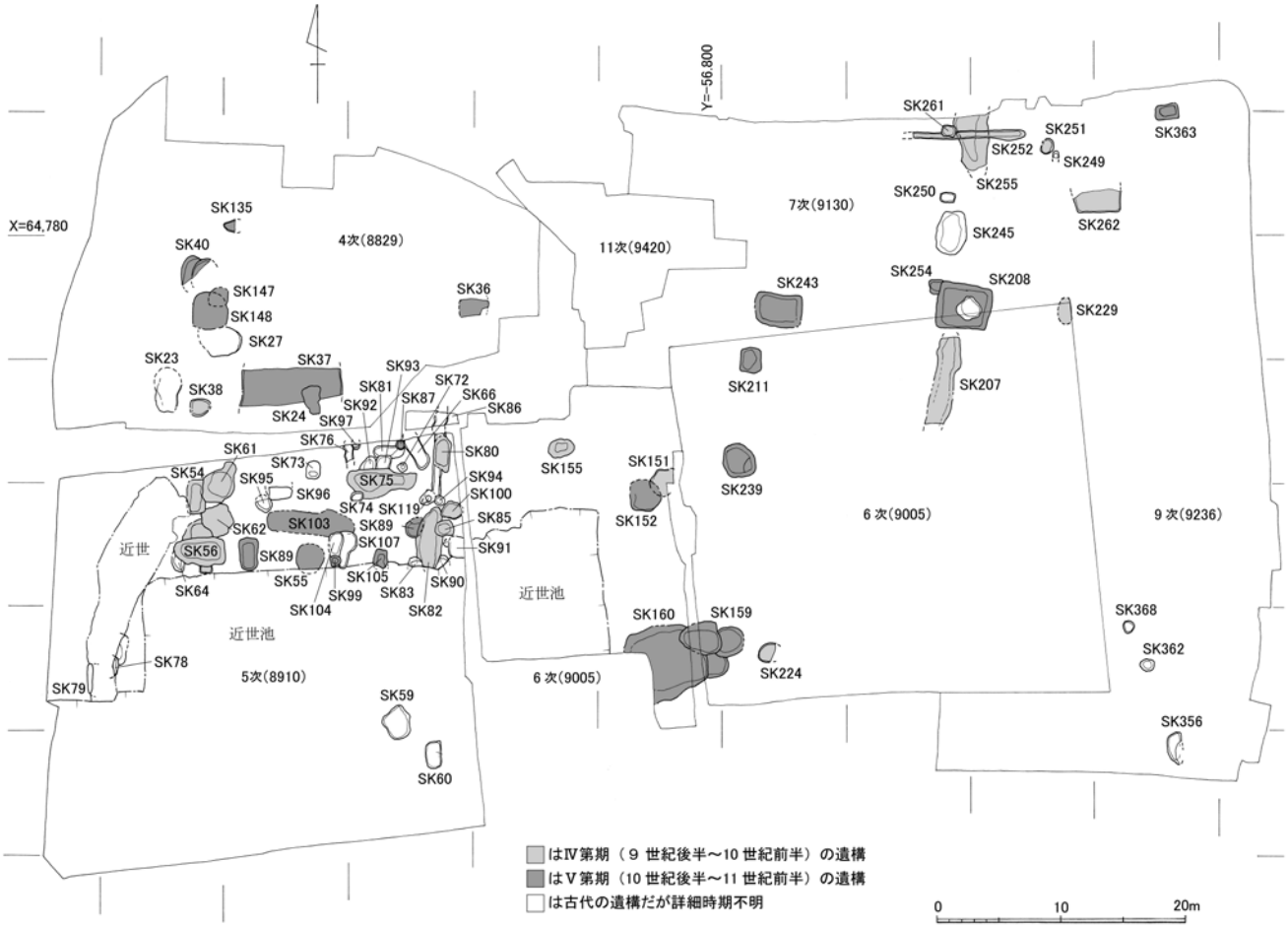


Fig.28 第Ⅳ・Ⅴ期南館廃棄土坑遺構配置図（1/600）

北館では貿易陶磁器を大量に廃棄した土坑はほとんど見られないが、完形の土師器坏や碗を大量に廃棄した土坑が多く見られた。それらの遺構は第Ⅳ期以降、北館の堀や崖際などの縁辺で点在して分布する。遺構からは食物残滓などは検出できていないが、機種が坏や碗に集中することから宴会や飲食などに使用された可能性が考えられる。

以上、瓦の出土状況や廃棄土坑の様相から南北の機能の差を窺うことができ、南館には貿易陶磁器類の管理や取引、北館には宴会や飲食、宿坊といった役割が想定できるのではないかと考える。

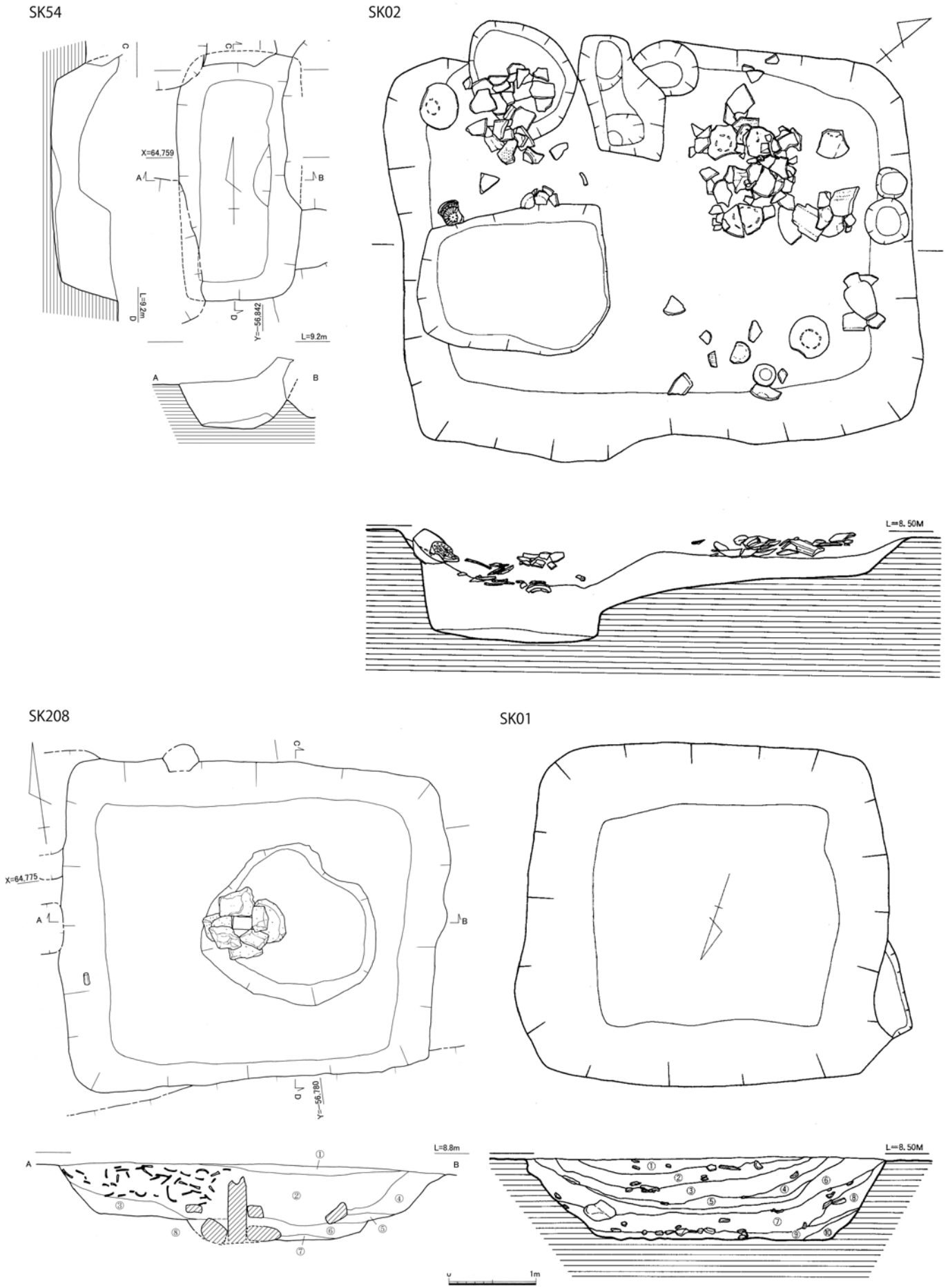


Fig.29 南館廃棄土坑遺構実測図１（1/60）

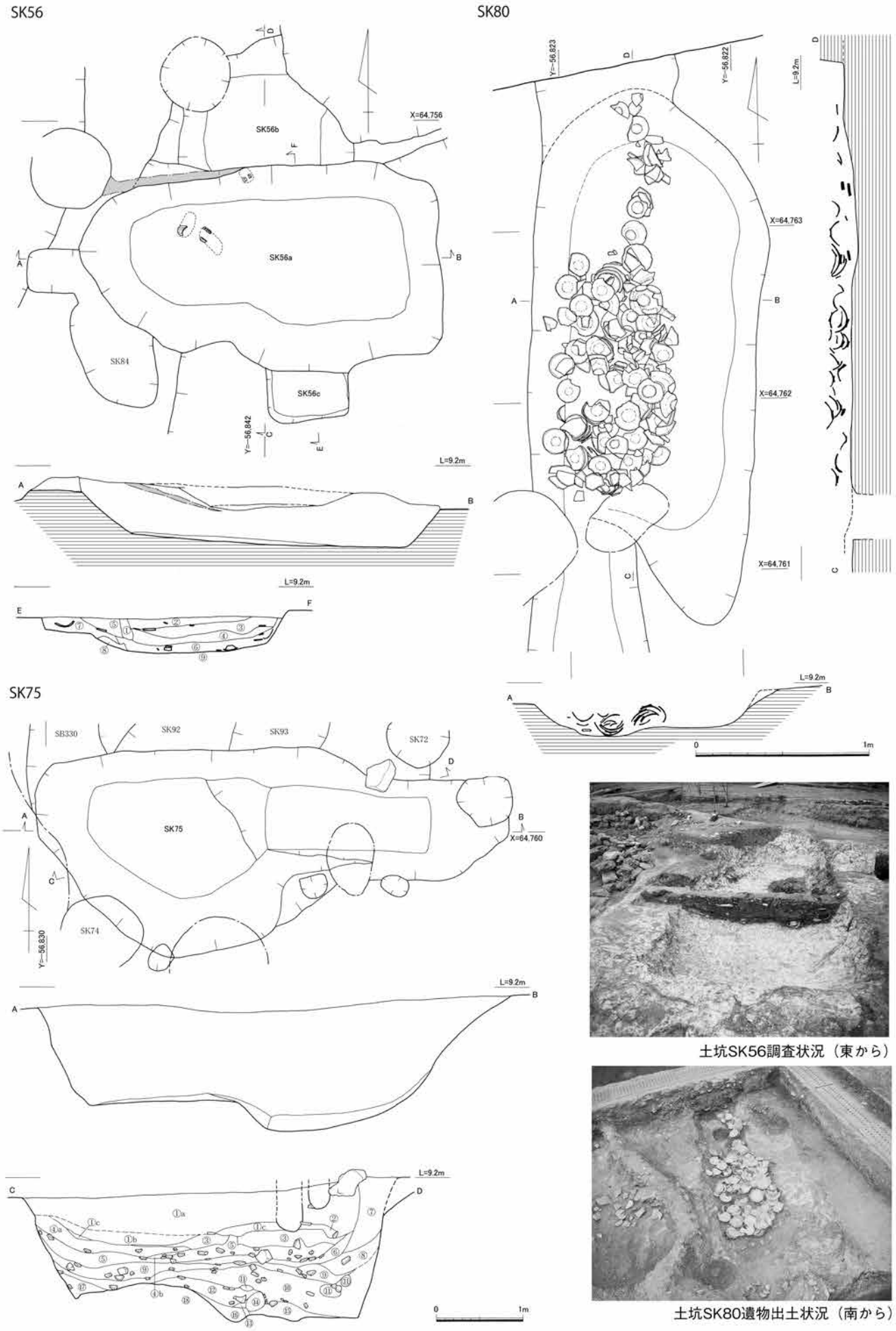
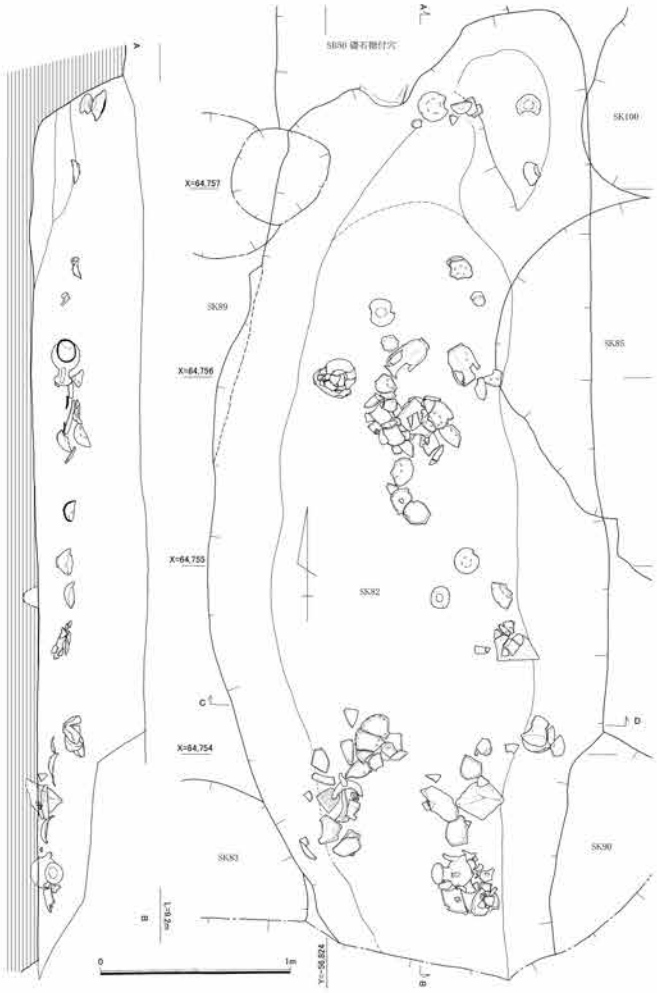


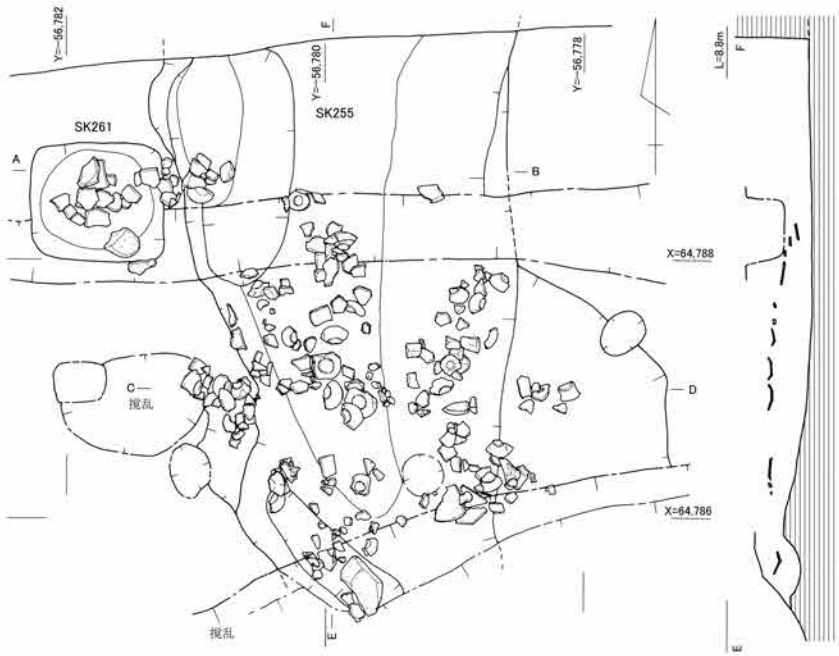
Fig.30 南館廃棄土坑遺構実測図 2（1/60）

SK82



土坑SK82遺物出土状況（南から）

SK255



土坑SK255遺物出土状況（西から）

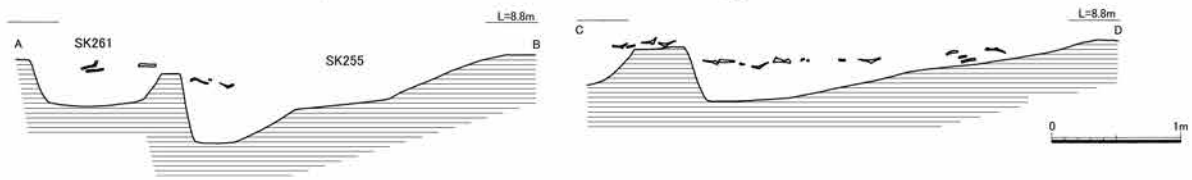


Fig.31 南館廃棄土坑遺構実測図 3（1/60）

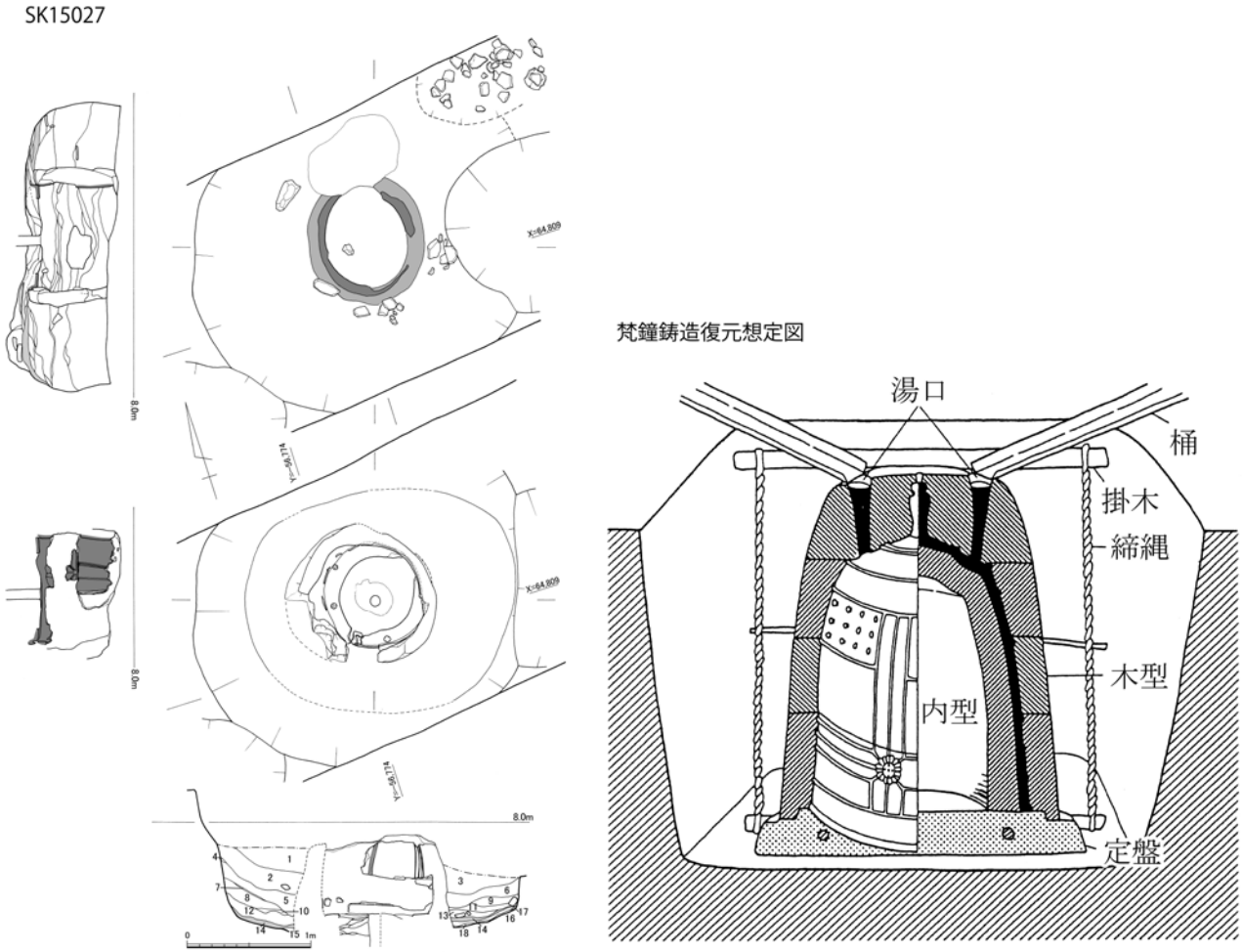


Fig.32 南館梵鐘鋳造遺構実測図（1/60）

梵鐘鋳造遺構 SK15027（Fig.32）は、南館の北東隅に位置する。掘方は直径 270cm、深さ 120cm をはかる円形を呈し、外型の遺存状況は比較的良好で、池の間以下の外型が、全周の 80％分ほど遺存する。鋳型は、その表面に薄く鋳物土を用い、その背面には一様に厚く粘土を貼り付けていた。鋳物土の厚さは 0.5 ～ 0.7cm、粘土の厚さは 15cm をはかる。鋳型表面には水平方向の旋条痕がみとめられる。縦帯は４ヶ所で、中央の縦線は一条、左右の縦線は二条からなる。下帯は底型からやや外傾気味に立ち上って上部の横線部分まで確認できる。原形を保っていると思われる部分で、高さ 10cm をはかる。明瞭な駒の爪はなく、若干下端が張り出す程度にとどまる。底型の外径は 82cm、幅 10.5cm の環状を呈する。土坑掘り方の床面に、板を敷き、地山粘土を貼り付けて基盤を造っている。遺存する鋳型から想定される梵鐘は、底径（駒の爪の外径）84 ㎝、総高は 150 ㎝にせまる大型の梵鐘であったと推測される。出土遺物や放射性炭素年代測定から、10 世紀前半に位置づけるものと想定される。

梵鐘がどの場所で使用されたかは不明確であるが、遺構が位置する南館よりもこの時期に建物が想定される北館で使用された蓋然性が高いと考えられる。

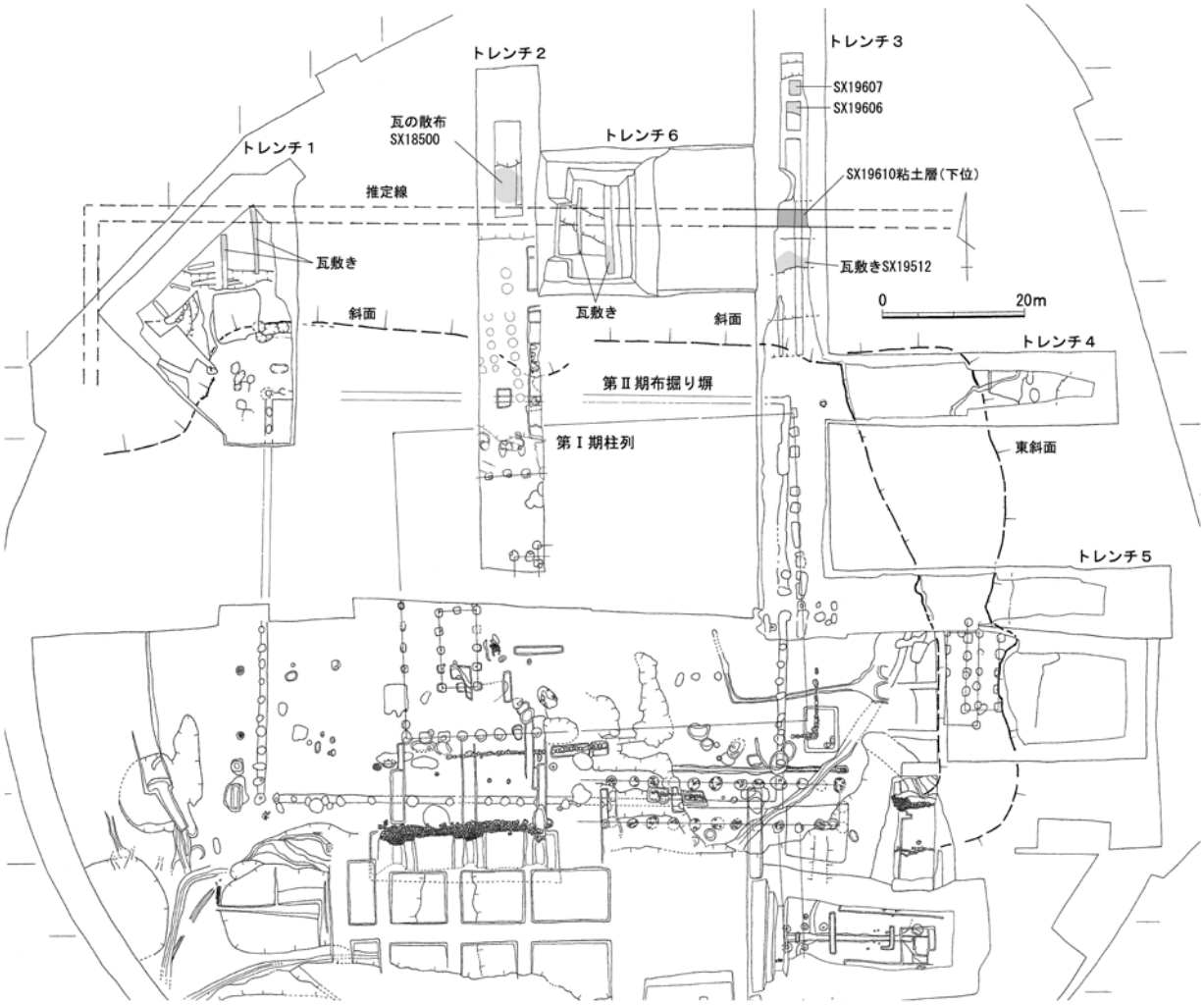


Fig.33 北館北側斜面遺構全体図（1/1,000）

これまでの調査で鴻臚館の北側は斜面となって約３ｍ落ち、海岸へ至る砂丘へと続くこと、東側は門の前面に広場状の平坦地があって雛壇状に落ち、緩やかに東へ傾斜すること等が明らかとなった。残念ながら中世段階で集落等の利用を受けたことによる破壊が著しく、斜面や斜面下の遺構の状況が今ひとつ明確ではないが、鴻臚館が比高差３ｍ以上の高台に建つ立体的な構造であったことや、斜面下の砂丘上にも構造物が展開していたことが明らかとなった。

トレンチ１　北西隅斜面中世整地層堆積状況（北西から）

トレンチ１　北西隅斜面11世紀代整地層堆積状況（北から）

トレンチ１　北西隅斜面及び斜面下（北から）

Fig.34 北館北西隅斜面検出状況

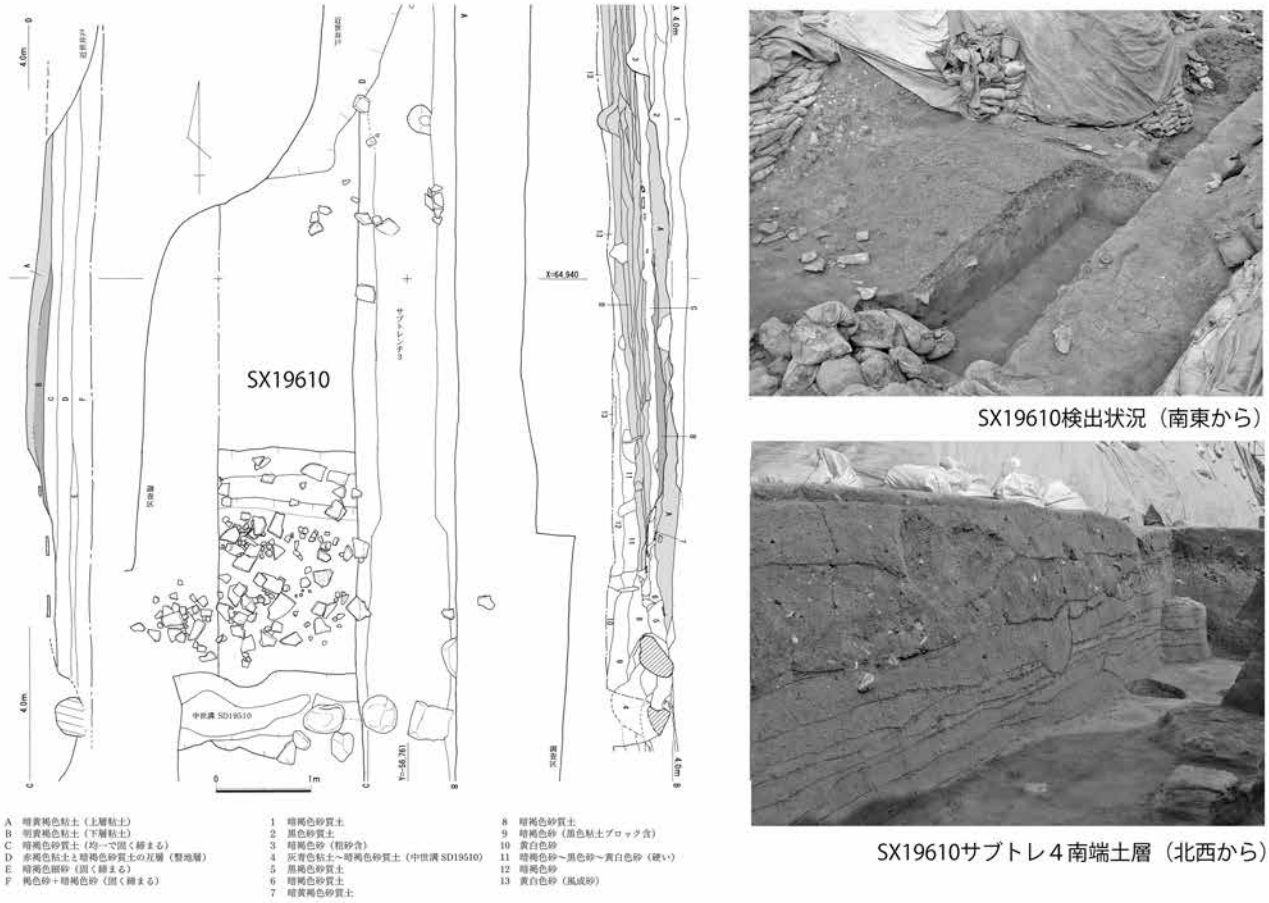


Fig.35 SX19610 検出状況及び遺構実測図（1/100）

鴻臚館廃絶後の北側の斜面については、14 世紀～ 16 世紀にかけて幾度かの造成で埋められており、斜面に沿って約 50 ～ 100cm の厚さがある。造成土の中には多量の瓦を含んでいる。整地層の下層では中世の遺物を含まない層があり、この層には焼土や炭化物を多く含んでいる。第Ⅳ期の土坑等を覆っていることから、鴻臚館の終末期（もしくは火災後）にかけて行われた整地を考えられる。斜面下でも厚さ約 30cm 前後のこの造成土を確認したが、北側にいくにつれて薄くなる。これらを除去すると、鴻臚館の終末期の平坦な整地面となる。

鴻臚館の外郭に関して、トレンチ３下層調査で検出した SX19610 は塀の積土もしくは崩落した積土の堆積を確認している。ここから出土した遺物には越州窯系青磁五輪花大碗のほか、単線斜格子叩きの瓦や女原瓦窯跡（９世紀中頃～ 10 世紀前半の操業）で焼成された瓦の特徴をもつ瓦があり、第Ⅳ期以降に位置づけられている。この遺構は西側のトレンチ６、トレンチ１では確認されておらず、全容は不明であるが、第Ⅴ期まで継続したと想定される。なお、第Ⅱ期、Ⅲ期の外郭を示す遺構については確認されていない。第Ⅳ期以降の鴻臚館の役割は外交施設から中国海商との取引の場と変わり、合わせて新羅海賊などへの防備も強化される。貞観 11 年（869）5 月 22 日に、新羅海賊に豊前国年貢の絹綿が略奪されたことに対応して、同年 12 月には鴻臚館へ統領１人・選士 40 人、甲冑 40 具、翌年正月には甲冑 110 具を移している。また、延喜式には大宰府の兵馬 20 疋のうち 10 疋、牧馬 10 疋を分置するとあり、防備の拠点強化も進められている。それらのことから、想定される外郭施設も外交施設としての外観より、防備を重視したものの可能性も考えられる。

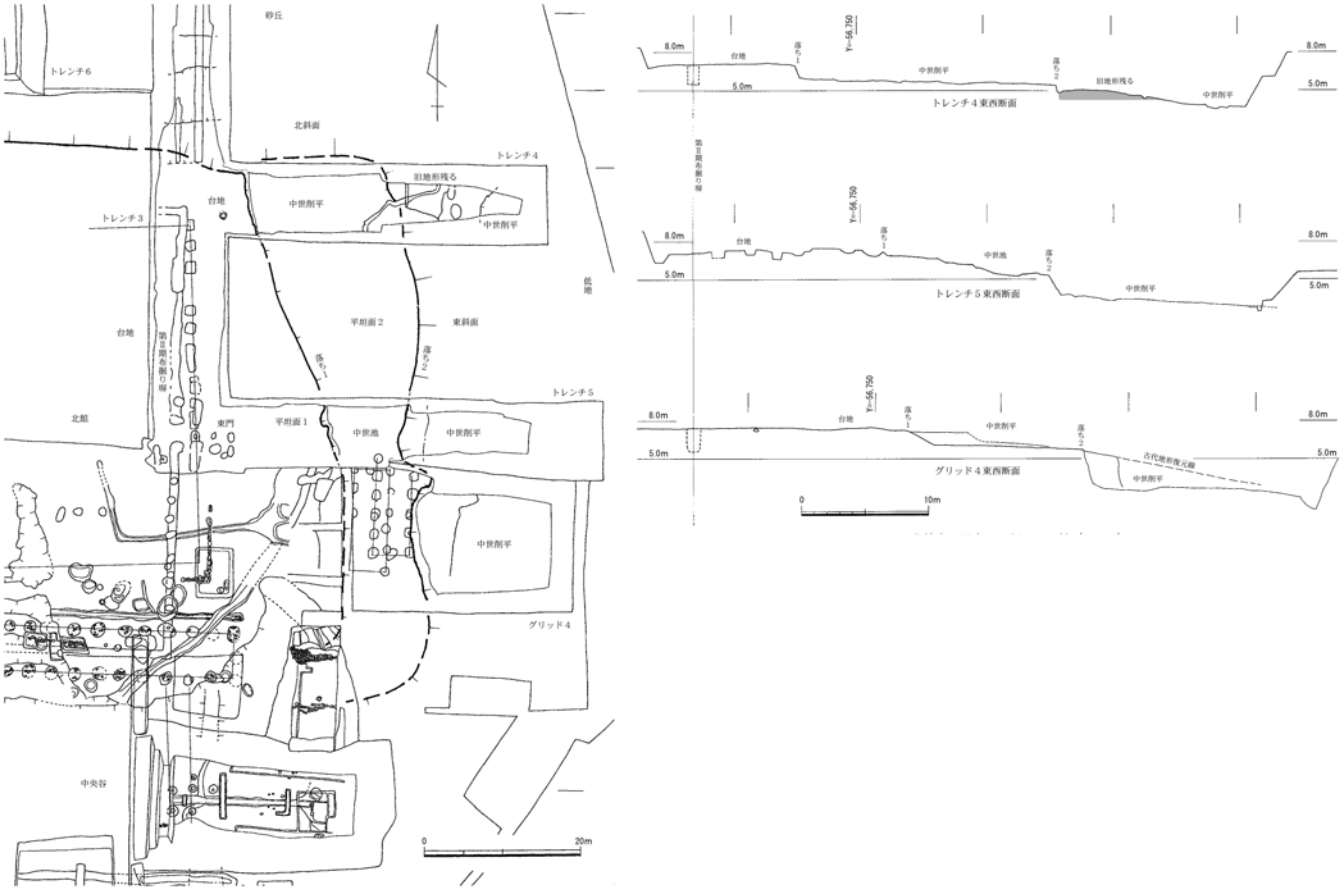
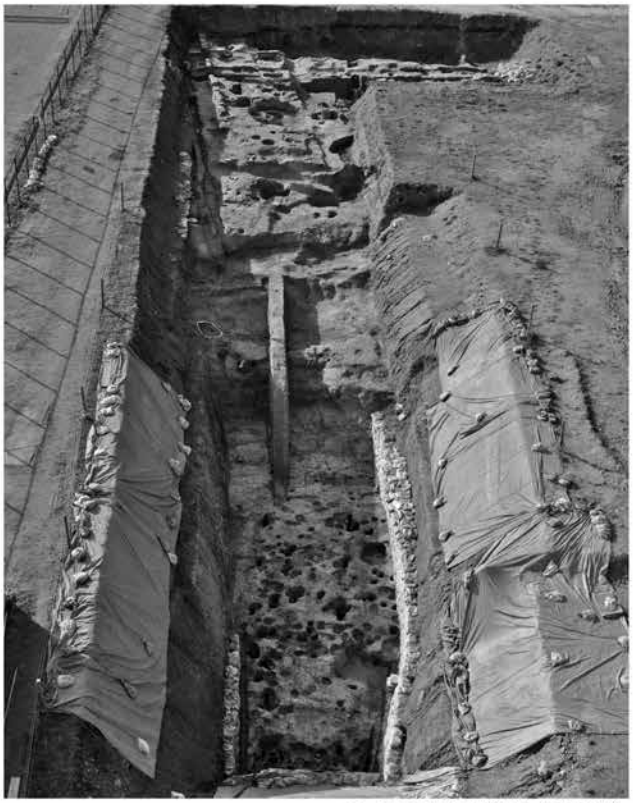


Fig.36 北館東側斜面遺構全体図（1/600，1/1,000）

鴻臚館の入り口にあたる東面の状況については、中世の地形改変が著しいが、遺構面が西から東へ向かって大きく段状に下降することを確認した（Fig. 36）。調査壁の土層堆積などから推定して、鴻臚館東門から東へ 20 m前後の位置に段差（落ち 1）があり、僅かに東へ下がる平坦面となり、さらに 10 m前後をおいて斜面（落ち 2）となって緩く下っていたと推定される。トレンチ 4 では斜面下が標高 4 m弱まで降下して岩盤が露呈するが、ここは中世に削平を受けており、古代面はこれより上位に想定される。以上から鴻臚館東面の地形を復元すると、東門前面に奥行 20 mの広場状の平坦面 1（標高 7 m強）があり、この東は 1 mほど落ちて次の平坦面 2（標高 6　m前後）となり、10 mほど東で緩やかな斜面へと移行し標高 4 m前後まで降下していく状況であったと推定される。

中央の谷は筑紫館時代に堀を造ったものであるが、火災や建て替え時の瓦等の廃棄場所として利用されている。築造当初から徐々に自然堆積は始まっているが、始めに北側から大量の瓦が廃棄され、次ぎに南側から火災に起因すると思われる焼土、木炭が廃棄される。以後南北から自然堆積と数回の瓦廃棄を繰り返すが、中段の平坦面近くまで堆積が進んだ段階で焼土層と大量の瓦を廃棄する層（4 層上部）がみられる。この層以上は長期間廃棄等の人為的行為が認められない自然堆積層で、遺物も小破片が見られるのみとなる。鴻臚館での積極的な活動はこの層を境として見られなくなる事から、鴻臚館の廃絶時期は 4 層上部焼土層の時期、すなわち 11 世紀半ばに求めることができる。また、北館の北側斜面では大量の瓦や焼土、炭化物を含む整地土層を検出しており、出土遺物から谷の４層上部焼土層に対応するものではないかと考えられる。このことは『扶桑略記』永承２年（1047）の「大

トレンチ４下層全景（東から）



トレンチ５下層全景（東から）

Fig.37 北館東側斜面検出状況

宋国商客宿房」放火犯人捕縛の記事と整合して、放火後に大規模な整地が行われたことをうかがわせる状況である。

11 世紀中頃以降は鴻臚館に関わる遺構や遺物は皆無となり、焼失した鴻臚館は再建されなかったと考えられるが、史料と考古学的な変遷とではまだ、整合性の取れていない点も多い。11 世紀中ごろ史料である藤原明衡『雲州消息』下末所収文書に見られる「客館」「鄭十四客房」や『香要抄』にある「唐人王満之宿坊」などは鴻臚館焼失後のものであり、その場所が鴻臚館であるか博多であるかの検証が必要である。

Tab.6 主要建物（および区画構造物）一覧 1

時期	地区	遺構番号	種 別	平面規格		平面規模(m)		柱間寸法(m)		主軸方位	遺構情報	調査次数	報告書	頁-挿図番号
				梁行	桁行	梁行	桁行	梁行	桁行		◆柱穴規模等	(調査番号)		
Ⅰ期	北	SB 14601	掘立側柱	2間	4間	5.0	10.4	2.48	2.6	N 2° W	柱基部に白色粘土 ◆方形 1.0m±α ; 柱0.3～0.4m	20次(0218)	1300集	p.48-fig.48
		SA 14602	掘立塀	—	(5間)	—	(14.2)	—	2.8	N1.5° W	西辺(39m)の南側一部,SA14603と直交 ◆掘方不統一; 柱0.25m+α	20次(0218)	1300集	p.41-fig.39
		SA 14603	掘立塀	—	(7間)	—	(18.1)	—	2.6	N88° E	南辺(54m)の西側一部,SA14602と直交,SX14527と平行,柱基部に白色粘土 ◆柱0.25～0.35m	20次(0218)	1300集	p.42-fig.41
		SA 19400	掘立塀	—	(12間)	—	(31.2)	—	2.6	N1.5° W	東辺(43.3m)の北半,南寄りに東門の可能性(柱2本分布掘り柱穴あり) ◆方形 1.2m±α	26次(0821) 29次(1116)	1300集	p.45-fig.44
		SB 23330	掘立側柱	1間	1間	1.6	4.6	1.8	2	N88.5° E	SA19400東側で直交,1件で根石(板石)あり,東門関連施設の可能性 ◆隅丸長方形 1.05～1.5m	20次(0218)	1300集	p.47-fig.46
	北・中央	SX 1245	石垣	—	—	—	—	—	—	N88° E N2° W	南東隅角部,角丸,築部は塀区画推定線に平行,西方向SX14527と連結	19次(0109)	1300集	p.51-fig.51
		SX 1278	石垣	—	—	—	(8.0)	—	—	N85° W	SX1245の土留めか	19次(0109)	1300集	p.54-fig.54
		SX 14527	石垣	—	—	—	—	—	—	N88° E	塀区画推定線に平行,東方向でSX1245と連結	20次(0218)	1300集	p.53-fig.53
	南	SB 320	掘立	—	—	—	—	—	2.5±α	N85° W	調査区北壁際で柱穴2基のみ確認 ◆隅丸方形 1.05～1.1m	7次(9130)	1175集	p.12-fig.9
		SB 321	掘立側柱	(2間)	9間	(4.2)	23.0	2.1	2.55	N85° W	◆隅丸方形 1.1m±α	7次(9130)	1175集	p.12-fig.9
		SB 322	掘立側柱	2間	(5間)	4.2	(13.5)	2.1	2.75±α 1ヵ所のみ2.47	N 5° E	北側でⅡ期東門に切られる ◆隅丸方形 0.9～1.3m	7次(9130)	1175集	p.12-fig.10
		SB 323	掘立側柱	2間	(4間)	4.2	(11.1)	2.1	2.79	N 5° E	南側で削平を受ける ◆隅丸方形 0.8～1.1m	7次(9130)	1175集	p.12-fig.10
		SB 324	礎石か	(1間)	(2間)	—	—	—	2.4±α	N85° W	南側・東側で削平を受ける,礎石残存せず ◆隅丸方形 0.9～1.3m	11次(9420)	1175集	p.12-fig.11
Ⅰ～Ⅱ期	北	SX 17703	石垣	—	—	—	—	—	—	—	東西100m石垣の一部,西方向でSX14528と連結	23次(0502)	1300集	p.59-fig.60
		SX 17704	石列	—	—	—	—	—	—	N89° E	SX17703の土止めか	23次(0502)	1300集	p.67-fig.68
	北・中央	SX 14528	石垣	—	—	—	(23.0)	—	—	N88° E	東西100m石垣の一部,東方向でSX17703と連結	20次(0218)	1300集	p.56-fig.56
Ⅱ期	北	SA 18601	掘立塀	—	—	—	—	—	—	—	北辺(73.7m)中央の*一部,布掘り,上面*遺構保存のためトレンチ調査	24次(0617)	1300集	p.79-fig.81

Tab.7 主要建物（および区画構造物）一覧 2

時期	地区	遺構番号	種 別	平面規格		平面規模(m)		柱間寸法(m)		主軸方位	遺構情報 ◆柱穴規模等	調査次数 (調査番号)	報告書	頁-挿図番号
				梁行	桁行	梁行	桁行	梁行	桁行					
Ⅱ期	北	SB 1238 (東門)	掘立門	2間	中央1間 両脇1間	5.3	7.5	2.65	中央3.5 脇2.0	N1.5° E	八脚門,東辺中央,両脇は柱2本分布掘り,建替痕跡あり,SA1237･SA15002と連接 ◆隅丸方形 1.3m; 柱0.4±α	19次(0109)	1300集	p.83-fig.84
		SA 1104 (西列)	掘立塀	—	(10間)	—	(24.0)	—	2.3±α	N1.5° E	西辺(55.7m)の南半,布掘り,SA1104南列とは連結しない,南西隅に通用口か ◆上面削平掘方不明1.0m±α; 柱0.2～0.4m; 布掘り幅1.2m±α	18次(0008)	1300集	p.71-fig.71
		SA 1104 (南列)	掘立塀	—	(5間)	—		—	2.3±α	N88.5° W	南辺(73.7m)の西側一部,布掘り,SA1104西列とは連結しない,南西隅に通用口か ◆上面削平掘方不明1.0m±α; 柱0.4m±α; 布掘り幅1.2m±α	18次(0008)	1300集	p.71-fig.71
		SA 1237 (南列)	掘立塀	—	—	—	—	—	2.4±α	N88.5° W	南辺(73.7m)の東側一部,SA1237東列と直角連結,布掘り,上面遺構保存のため未調査	19次(0109)	1300集	p.74-fig.74
		SA 1237 (東列)	掘立塀	—	(7間)	—	(16.0)	—	2.4±α	N1.5° E	東辺(56.1m)の南半,SA1237南列と直角連結,SB1238と北側で連結,布掘り,上面遺構保存のため未調査	19次(0109)	1300集	p.74-fig.74
		SA 14526	掘立塀	—	(12間)	—	(28.0)	—	2.4±α	N88.5° W (報告は91.5° E)	南辺(73.7m)の西寄中央一部,布掘り ◆不整円形 1.0m±α; 柱0.2～0.4m; 布掘り幅1.0m±α	20次(0218)	1300集	p.76-fig.77
		SA 25055	掘立塀	—	(西辺2間) (北辺1間)	—	西辺7 北辺4	—	2.4±α	—	北西角,布掘り,トレンチ調査 ◆柱0.8～1.1m; 布掘り幅1.1m±α	31次(1314)	1300集	p.81-fig.83
	南	SB 300 (東門)	掘立門	2間	中央1間 脇1間×2	5.7	8.1	2.66	中央3.55 脇2.07	N1.5° E	八脚門,東辺中央,両脇は柱2本分布掘り,SA301･SA302と連接 ◆隅丸方形1.2m; 柱0.4m±α	9次(9236) 20次(0218)	1175集	p.24-fig.21
		SA 15	掘立塀	—	(2間)	—	(4.0)	—	2.2	N88.5° W	北辺(73.85m)中央の一部,布掘り,西方向でSA1059と連結 ◆柱0.5±α; 布掘り幅1.0m±α	3次(8747)	270集	p.33-fig.16
		SA 150	掘立塀	—	33間	—	74.2	—	2.3+α	N88.5° W	南辺,布掘り ◆柱0.5m±α; 布掘り幅1.2m±α	5次(8910) 6次(9005)	1175集	p.18-fig.14
		SA 301	掘立塀	—	(10間)	—	(24.4)	—	2.4±α	N1.5° E	東辺(56.431m)の南半,SB300の南側で連接,布掘り ◆柱0.5m±α; 布掘り幅1.1m±α	9次(9236)	1175集	p.17-fig.13
		SA 302	掘立塀	—	—	—	—	—	—	N1.5° E	東辺(56.431m)の北半,SB300の北側で連接,一部確認のみ,規模等はSA301と同,布掘り	9次(9236)	1175集	p.17-fig.13

Tab.8 主要建物（および区画構造物）一覧 3

時期	地区	遺構番号	種 別	平面規格		平面規模(m)		柱間寸法(m)		主軸方位	遺構情報 ◆柱穴規模等	調査次数 (調査番号)	報告書	頁-挿図番号
				梁行	桁行	梁行	桁行	梁行	桁行					
Ⅱ期	南	SA 303	掘立塀	—	23間	—	56.1	—	2.4±α	N1.5° E	西辺,一部検出のみ,布掘り ◆柱0.4m±α	10次(8829)	1175集	p.17-fig.13
		SA 1059	掘立塀	—	(12間)	—	(31.0)	—	2.33±α	N88.5° W	北辺(73.85m)西側の一部,東方向でSA15と連結,布掘り ◆柱0.6m±α; 布掘り幅1.0m±α	17次(9910)	1175集	p.19-fig.15
		SA 15002	掘立塀	—	12間	—	27.3	—	2.3±α	N1.5° E	東辺(56.1m)北半と北東隅部,SB1238と南側で連結,布掘り ◆布掘り幅1.0m-α	21次(0309)	1300集	p.77-fig.78
		SA 15012	掘立塀	—	—	—	—	—	2.4±α	N1.5° E N88.5° W	北東角,溝は平面直角・断面垂直,布掘り ◆柱0.4m±α; 布掘り幅1.2m±α	21次(0309)	1175集	p.20-fig.16
Ⅲ期	北	SB 1228 SP 14535	礎石側柱	2間	(14間)	6	(42.0)	3	3	N88.5° W	雨落ち溝(19次SD1216)あり,中世溝により束柱消失か,礎石2残存うち1遊離 ◆不整円～楕円形1.3～2.4m	19次(0109) 20次(0218)	1300集	p.113-fig.112
Ⅲ～Ⅴ期		SB 17701	掘立側柱	2間	(5間)	4.8	(12.2)	2.4	2.4	N1.5° E	桁行6間(14.7m)の可能性,Ⅱ期布掘り塀の外東側, 掘り直しの痕跡あり,SB17702に先行 ◆隅丸方形 1.1m±α; 柱0.2m±α	23次(0502)	1300集	p.122-fig.124
		SB 17702	掘立側柱	2間	5間	4.6	12.3	2.4	2.4	N5° E	Ⅱ期布掘り塀の外東側,SB17701より後出,西側削平,調査区外壁と南接 ◆隅丸方形 1.1m±α; 柱0.2m±α	23次(0502)	1300集	p.124-fig.126
Ⅲ期以降		SX 19610	築地塀か	—	—	(6)	(1.4)	—	—	—	主軸東西方向,整地層の上に粘土層を積み上げたもの,鴻臚館外郭施設の可能性,南側を中世溝SD19510に破壊される(溝内に散乱する大振りの礫は元来SX19610に帰属するものか),トレンチ調査につき一部を調査	25次(0706) 26次(0821)	1300集	p.165-fig.166
Ⅲ期	南	SB 31	礎石側柱	2間	(16間)	6.2	(48.0)	3.1	3±α 束柱の間3.3	N1.5° E	乱積基壇(幅9m)・雨落ち溝あり,束柱2あり,礎石5確認・1残存 ◆隅丸方形～円形1.4m±α	1次(S26年) 4次(8829) 5次(8910)	1175集	p.48-fig.45
		SB 32・330	礎石側柱 両庇	2間/庇込4間	(9間)	6.3/庇込12	(27.0)	3.1	3±α 束柱の間3.3	N1.5° E	乱積基壇(幅15m)・雨落ち溝・馬道・束柱2あり,礎石7残存 ◆円形 1.5m±α	4次(8829) 5次(8910)	1175集	p.48-fig.45 / p.57-fig.53
		SB 50	礎石総柱	2間	(13間)	6.0	(38.0)	3.0	3.0±α	N88.5° W	SB330の南側で連接・SB31の東側で連接,基壇構造か,雨落ち溝・排水溝(石組暗渠SD270を含む)あり,礎石3残存 ◆隅丸方形～円形1.2～1.5m	5次(8910) 6次(9005)	1175集	p.48-fig.45 / p.68-fig.63
Ⅲ期以降	南	SX 1037 (SB 11)	基壇状遺構	—	—	—	(6.0)	—	—	EW ほぼ平行	北面,地山削り出し,瓦大量出土,直上に築城時造成土	3次(8747) 17次(9910)	1175集	p.131-fig.133

Tab.9 主要建物（および区画構造物）一覧 4

時期	地区	遺構番号	種 別	平面規格		平面規模(m)		柱間寸法(m)		主軸方位	遺構情報 ◆柱穴規模等	調査次数 (調査番号)	報告書	頁-挿図番号
				梁行	桁行	梁行	桁行	梁行	桁行					
Ⅲ期以降	南	SD 65 SX 64 SK 63 (推定南門)	基壇状遺構	—	—	(8)	(2.0)	—	—	—	推定東西21m･南北12.4m,雨落ち溝(SD65)あり,福岡城土塁下で確認,トレンチ調査	11次(9420)	1175集	p.133-fig.135
不明	南	SA 273	掘立	—	(3間)	—	(6.4)	—	2.0～2.4	N3° E	柱間不統一 ◆隅丸方形; 柱0.4～0.8m	9次(9236)	1175集	p.123-fig.120
		SA 316	掘立	—	(3間)	—	(7.8)	—	2.6	N86° W	◆隅丸方形～楕円 0.7～1.1m	6次(9005)	1175集	p.123-fig.120
		SP 824 SP 828 SP 829	礎石	—	(2間)	—	(6.4)	—	3.2	N2° W	◆隅丸方形 1.4m	11次(9420)	1175集	p.124-fig.122
		SP 822 SP 830	礎石	—	(1間)	—	(3.2)	—	3.2	—	◆隅丸方形～楕円形 1～1.3m	11次(9420)	1175集	p.124-fig.122
		SB 1070	掘立側柱	2間	3間	3.6	4.9	1.6～1.9	1.4～1.8	N10° E	◆楕円形～隅丸方形 0.6～0.9m	17次(9910)	1175集	p.126-fig.125
		SX 895	地山成形	—	—	—	(3.2)	—	—	—	東面,地山掘り下げ,SB31のⅢ期遺構面(標高9.1m)より1m程高い(標高9.9m),鴻臚館敷地の西限を表すか,近世溝に切られる,トレンチ調査につき一部のみ調査	13次(9620)	1175集	p.97-fig.93

Tab.10 主要遺構一覧 1

時	地区	遺構番号	種別	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺構情報	出土遺物	調査次数(調査番号)	報告書	頁-挿図番号
古墳	北	SO 14512	石室	2.8～3.0	1.6～2.0	—	床面検出,周囲の窪地は腰石抜き痕か,周溝SD14530を伴う,径10mの円墳を想定	ガラス玉,瑪瑙玉,耳環,鉄鏃,鉄剣か	20次(0218)	1300集	p.35-fig.31 p.36-fig.32
	北	SD 14530	周溝	—	—	—	SO14512の周溝,馬蹄溝の痕跡のみ(浅い窪み状),坏蓋が重ねて出土(合口ではない)	須恵器	19次(0109)	1300集	p.35-fig.31 p.36-fig.33
Ⅰ	北	SD 15269	溝	(4.8)	(1.3)	0.5	主軸N85° W,SK15027に先行,土錘集中出土	須恵器,土錘,埴輪,韓式土器	23次(0502)	1248集	p.189-fig.143
Ⅰ/Ⅱ間	北	SM 1209	地業	—	—	—	谷の北側,岩盤上に盛土,平面確認のみ	—	19次(0109)	1300集	p.34-fig.29
	北	SM 1132	地業	—	—	—	谷頭北側をならして平坦にしたもので小規模,造成土は削った岩盤の残土,間に旧表土が形成される,Ⅱ期布掘り塀はこれに切り込む	須恵器,朝鮮半島陶器,瓦	18次(0008)	1300集	p.34-fig.29
	中央	SM 1044 (SD06含)	地業	—	—	—	谷の南側,細かく破砕した風化礫と風化粘土使用	中国陶磁少量(越系)	17次(9910) 18次(0008)	1022集	p.29-fig.13
	南	SK 140	地業	12	6	2.6	隅丸長方形掘り込みを5cm互層の版築状で埋め戻し,南側途中にテラス,上部に構造物は未確認	瓦,須恵器,新羅陶器	7次(9130)	1175集	p.27-fig.26
Ⅱ	北	SX 19512	瓦敷き遺構	(3.9)	(2.8)	—	整地後に瓦を割って平坦に敷き詰める,軟弱地盤なので通行の便を図って構築されたか,SX19520に切られる	須恵器,瓦(主に小),磚,中国陶磁(中世白磁)	25次(0706) 26次(0821)	1300集	p.161-fig.162
	北	SK 1124	便所状遺構	復元値3.3	復元値1.1	(3.4)	ほぼ直立した箱形,上半は崩落し漏斗状,SA1104の南端西側に位置し同遺構と平行,SK1125と直列,埋め立て後沈下した窪みは廃棄土坑として利用される	土師器,須恵器,瓦,木質(木簡・籌木・木製品),動植物遺存体	21次(0309)	1300集	p.88-fig.91
	北	SK 1125	便所状遺構	1.2	1.2	3.5	隅丸方形,SA1104の南端西側に位置し同遺構と平行,SK1124と直列,Ⅲ期に下る可能性も	土師器,須恵器,瓦,木質(籌木・木製品)	21次(0309)	1300集	p.98-fig.98
	北	SK 25043	土坑	1.3	1.3	3.6	略方形,SA1104の北端西側に位置,トイレ遺構を想定するも籌木・寄生虫卵など便所関連遺物はなし,後世の土坑が上方で重複	土師器,須恵器,中国陶磁(白磁・越系・鬼瓦,瓦,磚,鞴羽口	31次(1314)	1300集	p.104-fig.104
	中央	SM 1044	陸橋状築堤	12.8	≧7.6	—	造成により成形,上部埋め立て平坦面より低くSD1045の下段犬走りにつながる	—	17次(9910) 18次(0008)	1022集	p.25-fig.11
	中央	SG 1054	池	(6)	(13)	(1.5)	用水池か,雨水引き込み溝(SD1116)あり,水位上昇時に陸橋状築堤を超えてSD1045に流出,鴻臚館式瓦単純一括廃棄層2層あり,調査区以西に延びるため調査未完	瓦類(大量),須恵器,土師器(製塩土器1点含む),中国陶磁(越系・越系卸皿・長沙・定),新羅陶器	17次(9910) 18次(0008)	1022集	p.73-fig.42
	中央	SF 1117	平坦面	(9)	≧4	—	瓦破片を敷き詰めたテラス状	須恵器,新羅陶器,中国陶磁(唐三彩・越系)	17次(9910) 18次(0008)	1022集	p.98-fig.60
	中央	SX 16206	土橋	(30)	上端1.8 裾≧12.5	≧5	南北軸,灰色砂質土巻き土塁,南壁断面で土嚢積みか,SX15303を伴う可能性,裾部標高2.7m付近	—	21次(0309) 22次(0415) 23次(0502)	1022集	p.138-fig.87
	中央	SX 15303	瓦集積	1.35	0.8	0.3	東西軸,SX16206に伴う可能性,標高2.7～3m地点,瓦材で暗渠を構成か	瓦類(格子目・縄目)	21次(0309) 22次(0415) 23次(0502)	1022集	p.126-fig.79

Tab.11 主要遺構一覧 2

時	地区	遺構番号	種別	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺構情報	出土遺物	調査次数(調査番号)	報告書	頁-挿図番号
Ⅱ〜Ⅴ	中央	SD 1045 (SD07含)	堀	(108)	22	4.2	2段掘り,堀内に犬走り(SF1055:Ⅴ期),側溝(一部),自然堆積・人工物投棄により埋没のち窪地(SG1046)を残す	須恵器(刻書1点含む),土師器少量,新羅陶器,中国陶磁(越系・長沙・白磁うち墨書1点・青白磁・褐釉陶),高麗陶器,鬼瓦,瓦類(刻書1点),丸鞆,滑石製陽物,鞴羽口	17次(9910) 18次(0008)	1022集	p.25-fig.11
	中央	SG 1115 (SD08・10含)	池	11	4.5	2	谷の一部を埋め立てて造られた人工窪地,流出溝SD1114・SD1116を伴う,自然堆積層中位で瓦大量廃棄あり,瓦層以下は未調査	瓦類(大量),土師器,新羅陶器,中国陶磁(越系・白磁Ⅰ・陶器),須恵器転用硯	3・17次(9910) 18次(0008)	1022集	p.85-fig.51
	中央	SD 1116	溝	(3.2)	2.2	推定値0.2-α	SG1115水位上昇時SG1054に流出する	須恵器,瓦類(大量・老司系多),中国陶磁(長沙),灰釉陶転用硯	17次(9910) 18次(0008)	1022集	p.84-fig.51
Ⅱ	南	SK 57	便所状遺構	3.8	1.1	(2.9)	隅丸長方形,N-2°-E,SK69・SK70と直列,当初の深さ4m程度を想定,長辺壁85°,短辺壁76〜80°,底面平坦2.55×0.6,下層から大量の木製品出土	木質(木簡・籌木),瓦(多量),須恵器(墨書1点含む),土師器,中国陶磁(越系・緑釉陶器),新羅陶器,炉壁(後世遺物),動植物遺存体, 糞塊	5次(8910)	1175集	p.29-fig.28
	南	SK 69	便所状遺構	1.3	1.4	(4)	隅丸方形,上部削平の影響,SK57・SK70と直列,壁面83〜85°,底面平坦0.5×0.6,下層から大量の木製品出土	木質(木簡・籌木・木製品),須恵器,土師器,中国陶磁(越系・邢系),新羅陶器・高麗陶器,瓦類,漆器(上層)	5次(8910)	1175集	p.41-fig.38
	南	SK 70	便所状遺構	1.3	1.25	(3)	隅丸方形,上部削平の影響,SK57・SK69と直列,当初の深さ4m程度を想定,壁面84〜87°,底面平坦0.73×0.8,下層から大量の木製品出土	木質(籌木・木製品),須恵器,土師器,新羅陶器,瓦,炉壁(後世遺物),動植物遺存体, 糞	5次(8910)	1175集	p.44-fig.41
	南	SX 865	布掘り状遺構	(2.4)	3.4	(0.45)	福岡城土塁下で確認,東西軸,長方形土坑様で検出,埋土状況は布掘りに同じ,当初の深さ70cm以上を想定,SD866に切られる,トレンチ調査につき一部のみ調査	須恵器	12次	1175集	p.26-fig.24
Ⅱ/Ⅲ間	中央	SM 1209	地業	—	—	—	地山(風化頁岩層)を削り谷の一部を埋めてテラス状に,数次に亘り南進造成	須恵器,中国陶磁(越系Ⅰ・白磁Ⅰ)	19次(0109) 20次(0218)	1022集	p.29-fig.13
Ⅲ	北	SK 14274	土坑	(0.75)	1.2	—	SK14308に先行(Ⅲ期か)	(SK14308と一括取り上げ)	20次(0218)	1326集	p.48-fig.45
	北	SK 14308	土坑	3.3	1.8	0.4	3層に亘って粘土(被熱なし)が敷かれその直上から炭出土,SK14274より後出	土師器多量,中国陶磁少量(越系・陶器),土師器素材,石製品	20次(0218)	1326集	p.48-fig.45
	北	SK 14310	土坑	1.2	1.2	—	略円形,SP14501上位,保存のため未調査	瓦多数,中国陶磁(白磁・越系・陶器)	20次(0218)	1326集	p.58-fig.55
	北	SK 14511	土坑	1.55	1.15	0.4	床面付近で炭混じりの粘土層と一部被熱した粘質土を確認	土師器,中国陶磁(白磁・越系・陶器),国産陶器,瓦,土製品	20次(0218)	1326集	p.69-fig.68

Tab.12 主要遺構一覧 3

時	地区	遺構番号	種別	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺構情報	出土遺物	調査次数(調査番号)	報告書	頁-挿図番号
Ⅲ	北	SK 15257	土坑	2.6	2.0	0.5	小判形,遺物は上半に集中,兵舎基礎に一部破壊を受ける	土師器,須恵器,中国陶磁(越系・陶器),瓦, 動物遺存体	23次(0502)	1248集	p.178-fig.134
Ⅲ～Ⅴ	北	SX 19500	斜面	—	—	—	トレンチ3で検出,礎石が斜面の旧表土層に埋没した状態で出土,斜面裾に須恵器甕片と礫の集積検出・祭祀行為か	弥生土器,古式土師器,土師器,須恵器,中国陶磁(白磁・越系)朝鮮半島陶器,土製品,瓦,鞴羽口	25次(0706) 26次(0821)	1300集	p.152-fig.152
Ⅲ以降	北	SX 21110	斜面	—	—	—	傾斜角度8° 前後,粘土層基盤・斜面下位で岩盤層に,斜面上に細砂層・灰青色粘土層(中世)が覆う	—	27次(0906) 28次(1013)	1300集	p.172-fig.173 p.173-fig.174
	北	SX 23200	斜面	—	—	—	中世遺構に削平される	—	29次(1116)	1300集	p.174-fig.176
	北	SK 1246	土坑	0.9	0.9	0.9	円形,Ⅱ期布掘り塀を切る,礎石据え付け穴の可能性も	須恵器,瓦	19次(0109)	1326集	p.14-fig.9
	北	SK 1110	土坑	2	2	0.3	不整円形,廃棄土坑か,Ⅱ期布掘り塀SA1104を切る	瓦(多量),中国陶磁少量(邢系・越系)	18次(0008)	1326集	p.10-fig.6
	北	SX 19520	掘り込み	(6.5)	—	0.7	SX19512を切る,(参考)掘り込み壁面に最大厚10cmの鉄分沈着層あり	土師器,須恵器,中国陶器少量	25次(0706) 26次(0821)	1300集	p.152-fig.152
Ⅲ	中央	SP 15301 SP 15302 SP 15501 ～ 15504	橋脚	(4.5)	芯々5.3	(1.2)	南北軸,総柱か SP15301:根石あり・柱根(径35cm)残存・杉材・多角形面取り・708年伐採か SP15302:根石あり・柱痕(径35cm)のみ・掘方一部に石詰 SP15501～15504:平面確認のみ	—	21次(0309) 22次(0415) 23次(0502)	1022集	p.141-fig.89
Ⅲ～Ⅴ	中央	SX 1078	瓦敷遺構	2.7	0.6	—	瓦破片3列で重ね配置,SM1044陸橋状築堤と同時期に機能,埋め戻し保存	瓦類(主に格子目)	17次(9910) 18次(0008)	1022集	p.83-fig.49
Ⅲ	南	SK 15014	土坑	3.7	1.8	0.3	径1.8mの不整円形土坑2基(東西)の切り合いを確認するも双方に接合可能遺物が存在するなど遺物廃棄に時期差なし,貿易陶磁ほとんど被熱	土師器,中国陶磁(白磁・越系・陶器),朝鮮半島陶器,瓦,磚,銅銭,動物遺存体	21次(0309)	1248集	p.82-fig.61
	南	SK 15041	土坑	0.85	0.8	0.33	掘り直し痕跡あり,上半から瓦片出土	土師器,中国陶磁(越系),瓦	21次(0309)	1248集	p.160-fig.119
	南	SK 15068	土坑	0.6	0.6	0.3	円形	中国陶磁少量(越系),瓦	21次(0309)	1248集	p.163-fig.122
	南	SX 15186	大型土坑	(5)	(2.6)	(0.6)	楕円形,池状遺構か,若干堆積したのちにSX15193構築後に溝の掘り直し痕跡あり	瓦少量	21次(0309)	1248集	p.169-fig.128
	南	SX 15193	石敷土坑	2.2	0.8	0.45	敷石間に水成粘土,排水機能の可能性は低い,敷石は溝西部寄りで幅35cm・南端は板石留,SK15027に先行	—	21次(0309)	1248集	p.170-fig.129
Ⅲ～Ⅳ	南	SK 155	土坑	2.0	1.5	0.3	不整隅丸長方形,他遺構との重複なし	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・越系・陶器),イスラム陶器,瓦	6次(9005)	1213集	p.100-fig.103

Tab.13 主要遺構一覧 4

時	地区	遺構番号	種別	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺構情報	出土遺物	調査次数(調査番号)	報告書	頁-挿図番号
Ⅲ～Ⅳ	南	SK 224	土坑	(1.5)	1.4	0.15	楕円形か,東～南は削平	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・越系・明龍泉・陶器),朝鮮半島陶器,瓦,石製硯,近世陶磁	6次(9005)	1213集	p.134-fig.137
	南	SK 1015	土坑	2.8	(0.6)	(0.1)	溝状遺構,南半は野球場排水管により破壊される,主軸方位N82° W,当初の深さ1m以上を想定	土師器,須恵器,瓦,磚,近世陶磁少量	17次(9910)	1248集	p.61-fig.41
	南	SK 15023	土坑	1.6	1.5	0.4	不整長方形,下半から比較的大振りな瓦片が出土	土師器,中国陶磁(越系),瓦,炭化物,骨	21次(0309)	1248集	p.118-fig.87
Ⅲ～Ⅴ	南	SK 03	土坑	(2.4)	2.1	0.15	不整円形か,整地層に掘り込み,南側一部破壊,北側調査区外	中国陶磁(白磁・青磁),瓦	3次(8747)	315集	p.50-fig.24
	南	SK 04	土坑	1.7	1.15	0.45	不整楕円形,整地層に掘り込み	瓦,須恵器,土師器,中国陶磁(白磁・青磁・陶器)	3次(8747)	315集	p.50-fig.24
	南	SK 05	土坑	2.35	1.95	0.7～0.95	検出時不整楕円形,SK05'(推定径2.6m 深20cmか)と重複するが切り合い不明,整地層に掘り込み	瓦,須恵器,土師器,中国陶磁(白磁・青磁・陶器)	3次(8747)	315集	p.50-fig.24
	南	SK 23	土坑	2.3	2.2	0.1	後世の破壊が著しい	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・越系・陶器),朝鮮半島陶器,瓦,磚,土錘	4次(8829)	1213集	p.7-fig.6
Ⅲ以降	南	SK 27	土坑	4	2.3	—	瓦溜まり,不整楕円形,SK39と西で接する,上面把握のみ,展示館で展示中	瓦(大量),土師器,須恵器,中国陶磁(越系・白磁・陶器),朝鮮半島陶器,近世陶磁,土錘	4次(8829)	1213集	p.10-fig.10
	南	SK 39	土坑	—	—	—	瓦溜まり,SK27と接する,未調査,展示館で展示中,上面にSK24掘り込み	瓦	4次(8829)	1213集	—
Ⅳ	北	SK 14271	土坑	4.5	1.8	0.1	木の葉形,SX14528直上	主に瓦小,土師器,中国陶磁(白磁・越系・長沙： 陶枕など含む),瓦,磚,石製品	20次(0218)	1326集	p.40-fig.37
	北	SK 14273	土坑	4.8	(1.3)	0.3	瓦廃棄土坑,推定復元幅1.5m,SK14524に後出	土師器,中国陶磁(定？ほか白磁・越系),瓦	20次(0218)	1326集	p.44-fig.41
	北	SK 14277	土坑	2.4	2.2	0.2	不整形,上層で土師器・瓦・陶磁器などが出土,下層で北よりに固まって須恵器・土師器が出土	土師器,須恵器,中国陶器(越系・陶器),石製品,瓦	20次(0218)	1326集	p.53-fig.49
	北	SK 14307	土坑	3.3	2.9	0.5	SA14526上位,SK14338に切られる	土師器,須恵器(転用硯1点含む),中国陶磁(白磁・越系・陶器),国産陶器,石製品	20次(0218)	1326集	p.56-fig.53
	北	SK 14513	土坑	復元値3.1	2.2	0.3	瓦廃棄土坑,半裁調査のち埋め戻し	主に瓦,土師器,中国陶磁少量(白磁・越系・長沙),	20次(0218)	1326集	p.72-fig.71
	北	SK 14524	土坑	1.7	1.0	0.4	隅丸長方形,SK14273下部で検出,	主に土師器・瓦,須恵器,中国陶磁(越系)	20次(0218)	1326集	p.81-fig.80
	北	SK 15122	土坑	1.0	1.0	2.7	円形,中位に鉄分含有粘土塊(草本由来のものか),草本投棄土坑か,分析の結果トイレ遺構としての可能性はなし	土師器,須恵器,中国陶磁(白磁・越系),瓦, 植物遺存体	23次(0502)	1248集	p.172-fig.130

Tab.14 主要遺構一覧 5

時	地区	遺構番号	種別	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺構情報	出土遺物	調査次数(調査番号)	報告書	頁-挿図番号
Ⅳ	北	SK 25045	土坑	1.2	1.1	0.3	円形,炭を多く含む	土師器,中国陶磁(越系),瓦	31次(1314)	1326集	p.118-fig.123
	北	SK 25049	土坑	2.35	1.0	0.2	隅丸長方形	土師器少量,瓦少量	31次(1314)	1326集	p.118-fig.123
	北	SK 25051	土坑	1.5	1.4	0.4	不整円形	土師器,須恵器少量,中国陶磁少量(越系),瓦	31次(1314)	1326集	p.117-fig.122 p.118-Ph.12右
	北	SK 25052	土坑	1.5	1.1	0.4	不整円形	土師器,中国陶磁(越系),瓦	31次(1314)	1326集	p.117-fig.122 p.118-Ph.12左
Ⅳ～Ⅴ	北	SK 1264	土坑	2.1	1.5	0.5	不整楕円形,内面で数回の焼却	土師器,須恵器,中国陶磁(越系・陶器)	19次(0109)	1326集	p.23-fig.17
	北	SK 14339	土坑	(3.8)	(1.5)	0.75	楕円形か,Ⅰ期石垣SX14527を破壊して掘り込む,Ⅲ期礎石らしき玄武岩が土坑内から出土	瓦,土師器,輸入陶磁少量	20次(0218)	1326集	p.59-fig.57
	北	SK 18286	土坑	(2)	(1.1)	(0.2)	不整形(方形か)	主に瓦,土師器少量,須恵器少量	24次(0617)	1326集	p.94-fig.92
	北	SK 18310a	土坑	1.8	1.8	0.15	不整隅丸方形,瓦が密に詰まる,SK18310bより後出	主に瓦,土師器,須恵器,近世陶器,鉄滓少量	24次(0617)	1326集	p.100-fig.98
	北	SK 18310b	土坑	1.15	1.15	0.2	円形,底面直上に炭化物層,SK18310aに先行	(SK18310aと一括取り上げ)	24次(0617)	1326集	p.100-fig.98
	北	SK 18364	土坑	0.8	0.7	0.2	不整円形,覆土は炭化物を含む	土師器少量,瓦	24次(0617)	1326集	p.106-fig.105
	北	SK 18376	土坑	3	1.1	0.1	不整形,SK18396を切る	土師器少量,須恵器少量,中国陶磁少量(越系)	24次(0617)	1326集	p.108-fig.107
	北	SK 18377	土坑	1.4	1.0	0.2	SK18376より後出する可能性	土師器少量,中国陶磁少量(白磁・越系),瓦	24次(0617)	1326集	p.109-fig.109
Ⅳ以降	北	SK 1273	土坑	2.7	2.3	0.15	不整形,SB1228南北礎石列間に位置,内面で数回の焼却,廃棄物処理土坑	土師器,須恵器,中国陶磁(越系),朝鮮陶器(新羅),瓦	19次(0109)	1326集	p.23-fig.17
	北	SK 1274	土坑	1.5	1.5	0.3	略円形,内面で数回の焼却,廃棄物処理土坑	土師器,中国陶磁(白磁),瓦	19次(0109)	1326集	p.27-fig.22
	北	SK 1276	土坑	(2.5)	2.1	0.5	内面で焼却・灰層あり,廃棄物処理土坑,SK1264・1273に切られる	瓦	19次(0109)	1326集	p.23-fig.17
	北	SK 1277	土坑	1.4	1.2	0.5	灰・炭混じり,内面で焼却,廃棄物処理土坑,SX1278南に位置,SA1237を切る	土師器,須恵器,中国陶磁(越系・長沙),瓦	19次(0109)	1326集	p.27-fig.22
Ⅳ～Ⅴ	中央	SD 17001	木樋	(18)	0.6	0.3	三面側溝,上部に30～40cm間隔で桟木を渡す,先行するSD17000を掘りなおし木樋を設置,排水機能向上のためか	須恵器,瓦磚	21次(0309) 22次(0415) 23次(0502)	1022集	p.141-fig.89
Ⅳ以前	南	SK 84	土坑	1.2	0.95	0.2	不整楕円形,SK56に先行	須恵器,中国陶磁(越系)朝鮮半島陶器,瓦	5次(8910)	1213集	p.77-fig.78

Tab.15 主要遺構一覧 6

時	地区	遺構番号	種別	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺構情報	出土遺物	調査次数(調査番号)	報告書	頁-挿図番号
Ⅳ以前	南	SK 83・90	土坑	3.1	(1)	0.4	隅丸方形か,SK82の東側をSK90西側をSK83としているが同一土坑の可能性大	SK83：中国陶磁(越系),瓦 SK90：須恵器,中国陶磁(越系),朝鮮半島陶器(外面黒色顔料),瓦,磚(墨書)	5次(8910)	1213集	p.77-fig.78
	南	SK 92	土坑	1.3	1.1	0.6	楕円形,SK75に切られる	土師器,中国陶磁(景徳鎮・越系・陶器),朝鮮半島陶器,ガラス小玉	5次(8910)	1213集	p.82-fig.81
	南	SK 93	土坑	1.1	1.1	0.3	不整隅丸方形	土師器,中国陶磁(邢系・越系・陶器),朝鮮半島陶器,瓦	5次(8910)	1213集	p.82-fig.81
Ⅳ	南	SK 02	土坑	2.4	1.8	(0.3)	長方形,底面から10cmの高さに遺物集中,後世ピットの重複が多い,完形品に近い遺物がセットで出土	土師器,中国陶磁(白磁・青磁・陶器),瓦,ガラス製品	3次(8747)	315集	p.41-fig.20
	南	SK 38	土坑	1.7	1.6	0.3	不整円形,遺物ほぼ被熱	完形に近い中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系・長沙),瓦,磚	4次(8829)	1213集	p.16-fig.17
	南	SK 54	土坑	復元値2.85	1.4	(0.8)	SK61・62より後出	土師器,中国陶磁(白磁・越系・陶器),瓦	5次(8910)	1213集	p.30-fig.32
	南	SK 56	土坑	4.15	3.85	(0.8)	掘方(a)に直交する掘方(b)(c)あり,下層はⅣ期・上層は後世遺物を含む,土層上切り合いなし,人工遺物は被熱,食糧残滓を多く出土,遺構に先行する地震痕跡あり	瓦,土師器類,須恵器,中国陶磁(邢系・定・越系・長沙・陶器)朝鮮半島陶器,近世陶磁,動植物遺存体,鉄製釘・刀子,ガラス連玉,砥石	5次(8910)	1213集	p.34-fig.37
	南	SK 61	土坑	2.8	2.5	0.6	青磁50点被熱・一括廃棄,SK56下層出土遺物と接合するものがある,埋土には多量の炭化物と食糧残滓	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系・陶器),朝鮮半島陶器,磚,瓦,ガラス4連玉・小玉,鉄釘,動植物遺存体, 銅鏃(古墳時代)	5次(8910)	1213集	p.45-fig.47
	南	SK 62	土坑	2.5	2.25	0.5	不整形,SK54に先行・SK56より後出,現代の溜桝に破壊される,	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・越系・長沙・陶器),朝鮮半島陶器,瓦,磚,鉄鏃(古墳時代)	5次(8910)	1213集	p.51-fig.53
	南	SK 75	土坑	5.5	2.4	1.6	不整楕円形,上層は人為的な埋め土	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・定・越系・長沙・陶器,明青花),朝鮮半島陶器,鬼瓦,瓦,自然遺物,土玉,銅製品,ガラス小玉	5次(8910)	1213集	p.57-fig.59
	南	SK 80	土坑	5.5	0.7	0.2	約200個体の青磁が一括出土,SK86と重複するも明確な切り合いなし	須恵器,土師器,中国陶磁磁(邢系・定・越系・長沙・陶器),朝鮮半島陶器,近世陶磁,瓦	5次(8910)	1213集	p.67-fig.68
	南	SK 82	土坑	5.1	2.1	0.7	SK83・SK90より後出	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系：墨書1点含む・陶器),朝鮮半島陶器,瓦,磚,銅銭「開元通宝」,近世陶磁	5次(8910)	1213集	p.67-fig.68

Tab.16 主要遺構一覧 7

時	地区	遺構番号	種別	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺構情報	出土遺物	調査次数(調査番号)	報告書	頁-挿図番号
Ⅳ	南	SK 85	土坑	1.7	1.65	0.85	不整円形	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系・長沙・陶器),朝鮮半島陶器,瓦,磚,製塩土器	5次(8910)	1213集	p.77-fig.78
	南	SK 86	土坑	(5.5)	0.6～1.1	0.15～0.25	溝状土坑,SK80と重複するも明確な切り合いなし,本土坑埋没前にSK80として利用されたか,SK119と重複・先後関係不明,底面に比高差なし	瓦少量	5次(8910)	1213集	p.77-fig.78
	南	SK 97	土坑	0.73	0.5	0.5	楕円形,坑内に礎石(径≧50cm)あり,礎石廃棄土坑か	土師器,中国陶磁(越系)	5次(8910)	1213集	p.85-fig.85
	南	SK 100	土坑	1.6	1.6	0.3	不整形,SK85に先行,SK82より後出	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・定・越系・陶器),朝鮮半島陶器,瓦,動物遺存体,炭化物,有孔円盤,土錘,鉄滓	5次(8910)	1213集	p.86-fig.89
	南	SK 151	土坑	1.6	1.4	0.2	楕円形か,SK152と重複(先後関係不明),Ⅲ期建物関連施設(石組暗渠SD270)を破壊する	土師器,須恵器,緑釉陶器,中国陶磁(邢系・越系・長沙・陶器),朝鮮半島陶器,瓦,磚,石製品,土製品	6次(9005)	1213集	p.96-fig.99
	南	SK 207	土坑	(7)	1.4～2.5	0.1～0.15	溝状,蛇行気味,近世遺構による破壊のため一部確認のみ	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・越系・陶器),瓦,磚	6次(9005)	1213集	p.120-fig.123
	南	SK 229	土坑	—	—	0.1	楕円形か,近世遺構・攪乱坑に大幅に切られ平面形不明	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・越系・陶器),瓦	6次(9005)	1213集	p.135-fig.139
	南	SK 246	遺物集積	—	—	—	土坑か,削平のため形態・規模等不明,SK229北に隣接	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系・陶器),瓦,磚	7次(9130)	1213集	PL.16下段(参考P.6-fig.5)
	南	SK 249	土坑	0.65	0.53	0.2	中世溝(道)SD244に南側を削平される。	土師器,中国陶磁(邢系・越系),朝鮮半島陶器,瓦	7次(9130)	1213集	p.144-fig.148
	南	SK 251	土坑	1.3	0.9	0.15	楕円形	土師器,須恵器,中国陶磁少量(邢系・越系・陶器),瓦	7次(9130)	1213集	p.147-fig.151
	南	SD 252	溝	9	0.45～1.4	0.2～0.35	SK255より後出,主軸N-88.5°-E(Ⅱ・Ⅲ期建物群主軸方位から3°西偏)	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・越系・陶器),朝鮮半島陶器,瓦,磚,近世陶磁	7次(9130)	1213集	p.147-fig.151
	南	SK 254	土坑	1.5	1.4	0.3	隅丸長方形,SK208に先行	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系),朝鮮半島陶器,瓦	7次(9130)	1213集	p.147-fig.151
	南	SK 255	土坑	4.5	2.8	0.65	不整楕円形,南は中世溝(道)SD244に切られる,SD252に先行	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・定・景徳鎮・越系・長沙・陶器),国産陶器,瓦,磚,石製品,鉄製品,動物遺存体, 近世陶磁	7次(9130)	1213集	p.151-fig.155
	南	SK 261	土坑	1.0	0.9	0.3	隅丸長方形,SD252に先行	土師器,中国陶磁(邢系・越系・長沙・陶器),朝鮮半島陶器少量,瓦	7次(9130)	1213集	p.151-fig.155

Tab.17 主要遺構一覧 8

時	地区	遺構番号	種別	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺構情報	出土遺物	調査次数(調査番号)	報告書	頁-挿図番号
Ⅳ	南	SK 262	土坑	3.7	1.8	0.1～0.15	隅丸長方形,Ⅱ期東門柱穴の上面で検出,北側は中世溝(道)SD244に大きく削平される	土師器,須恵器,中国陶磁(白磁・越系・陶器),朝鮮半島陶器,青釉陶器(イスラム陶器か),瓦	7次(9130)	1213集	p.164-fig.166
	南	SK 1042	土坑	1.75	1.35	0.3	不整隅丸方形,礎石建物の一部の可能性	瓦,須恵器,土師器,中国陶磁(邢系・越系・陶器)	17次(9910)	1175集	p.98-fig.95
	南	SK 15015A	土坑	2	2	0.2	略隅丸方形か,西半部に遺物集中,兵舎基礎により全容不明	土師器,須恵器,中国陶磁(白磁・越系・陶器),鬼瓦,瓦,磚	21次(0309)	1248集	p.96-fig.70
	南	SK 15017	土坑	5.4	(3.2)	≦0.2	不整形,瓦廃棄土坑,	土師器,須恵器,中国陶磁(唐三彩・越系・陶器),瓦,磚,鉄鏃	21次(0309)	1248集	p.104-fig.75
	南	SK 15022	土坑	1.2	0.7	0.3	小判形,上半から遺物出土,下半からは焼土,本来火を焚いた土坑に遺物を投棄したものか	土師器,中国陶磁(白磁・越系・朝鮮半島陶器(新羅),瓦	21次(0309)	1248集	p.115-fig.84
	南	SK 15027	梵鐘鋳造遺構	2.7	2.7	1.2	径1.8mの不整円形土坑2基(東西)の切り合いを確認するも双方に接合可能遺物が存在するなど遺物廃棄に時期差なし,貿易陶磁ほとんど被熱	梵鐘外型,鞴羽口,土師器,中国陶磁(白磁・越系・陶器),朝鮮半島陶器(新羅),国産陶器,瓦,磚,石鍋	21次(0309)	1248集	p.123-fig.91
	南	SK 15027B	土坑	(1.1)	(0.6)	—	SK15027より後出(大きな時期差なし),SK15028に先行	土師器,須恵器,朝鮮半島陶器(新羅),中国陶磁(越系),瓦,動物遺存体	21次(0309)	1248集	p.123-fig.91北東隅 p.124-Ph.44-(2)
	南	SK 15028	土坑	2	(1.5)	(0.8)	円形,SK15027Bを切る,下半で炭層+灰層が上下2ヵ所にあり,炭化藁束下から遺物出土	土師器,須恵器,中国陶磁(白磁・越系・陶器),瓦,磚,土製品,動物遺存体	21次(0309)	1248集	p.148-fig.109
Ⅳ～Ⅴ	南	SK 105	土坑	1.6	1.2	0.5	隅丸長方形,断面擂鉢状	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・越系・陶器),朝鮮半島陶器,瓦	5次(8910)	1213集	p.93-fig.95
	南	SK 1014	土坑	1.3	0.75	(0.75)	不整隅丸長方形,当初の深さ2mを想定	須恵器少量,中国陶磁少量(白磁・越系・陶器),瓦少量	17次(9910)	1248集	p.60-fig.39
	南	SK 1016	土坑	2.2	0.45	(0.1)	主軸方位はⅡ期布掘り塀の軸線とほぼ一致するが関係は不明	—	17次(9910)	1248集	p.63-fig.43
	南	SK 1058	土坑	(1.4)	1.0	0.1	明確な掘方なく窪みに遺物・大礫・炭化物が集積,後世の整地による形成の可能性も	中国陶磁少量(越系),朝鮮半島陶器少量,瓦少量(被熱)	17次(9910)	1248集	p.71-fig.51
Ⅳ以降	南	SK 66	土坑	(2.55)	0.7	—	瓦溜まり,上面把握のみ	土師器類,中国陶磁(定・越系),近世陶磁,瓦,鉄製包丁	5次(8910)	1213集	p.54-fig.56
	南	SK 72	土坑	径0.7	—	0.15	円形	須恵器,中国陶磁(越系・陶器),朝鮮半島陶器,瓦	5次(8910)	1213集	p.55-fig.57
	南	SK 73	土坑	1.5	1.15	0.3	隅丸長方形,覆土上面に粘土層	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・越系),瓦,鉄製品	5次(8910)	1213集	p.55-fig.57
	南	SK 74	土坑	1.0	0.85	0.2	略楕円形	土師器,須恵器,中国陶磁(越系・陶器),瓦	5次(8910)	1213集	p.55-fig.57
	南	SK 76	土坑	(1.5)	0.6	0.15	隅丸長方形,北が調査区外に延びる	中国陶磁少量(越系・陶器),瓦少量	5次(8910)	1213集	p.65-fig.66

Tab.18 主要遺構一覧 9

時	地区	遺構番号	種別	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺構情報	出土遺物	調査次数(調査番号)	報告書	頁-挿図番号
Ⅳ以降	南	SK 78	土坑	2.2	1.0	0.3	隅丸方形	朝鮮半島陶器	5次(8910)	1213集	p.65-fig.66
	南	SK 91	土坑	1.7	1.2	0.25	隅丸方形,SK98と重複(先後関係不明)	土師器,須恵器,中国陶磁(景徳鎮・越系),朝鮮半島陶器,瓦	5次(8910)	1213集	p.82-fig.81
	南	SK 94	土坑	0.8	0.75	0.4	隅丸方形,SK86と重複	須恵器,中国陶磁(邢系・定・越系・陶器),朝鮮半島陶器,瓦	5次(8910)	1213集	p.82-fig.81
	南	SK 96	土坑	1.85	0.95	0.25	Ⅲ期建物より後出,SK95と重複か	瓦	5次(8910)	1213集	p.84-fig.83
	南	SK 98	土坑	—	—	0.35	SK91と重複,SK85に大半が切られているため形状不明	土師器,須恵器,中国陶磁(景徳鎮・越系・龍泉),瓦	5次(8910)	1213集	p.82-fig.81
Ⅴ	北	SK 1255	土坑	3	2	0.4	不整長方形,中間に炭層,廃棄物処理土坑か	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系：墨書1点含む・越系・陶器)・朝鮮半島系陶器(新羅),瓦	19次(0109)	1326集	p.16-fig.11
	北	SK 14187	土坑	1.9	1.9	0.1	不整形,SK1488に先行	土師器,中国陶磁(白磁・越系)	20次(0218)	1326集	p.35-fig.30
	北	SK 14188	土坑	2.3	1.7	0.4	上半部に遺物集中,土坑ほぼ中央の無遺物箇所を粘土と瓦が巻く(柱痕を想定),SK14187より後出	土師器,中国陶磁(白磁・越系),瓦	20次(0218)	1326集	p.36-fig.32
	北	SK 14510	土坑	1.8	1.3	0.5	楕円形,葺いた状態で下端を被熱した瓦を多量に廃棄する	主に瓦(大振り破を多く含む),土師器,輸入陶磁,石製品	20次(0218)	1326集	p.62-fig.60
	北	SK 14529	土坑	(2.5)	(2.5)	—	不整形窪み,遺物集積,SA14526上位,明瞭な掘り方なし,削平により土坑床面のみ検出か	土師器,中国陶磁少量(白磁・越系),瓦	20次(0218)	1326集	p.81-fig.81
	北	SK 14534	土坑	—	—	—	中世池状遺構SX14340B下位,トレンチで落ち方検出,中世池保存ののため未調査	土師器,中国陶磁(白磁・越系)	20次(0218)	1326集	p.86-fig.85
	北	SK 18313 SK 18385	土坑	(3)	1.4	—	掘り方不明瞭,遺物集積,西側をSK18313・東側をSK18385として整理,一連の溝状遺構か	土師器,須恵器,中国産陶磁(白磁・越系・景徳鎮白磁),中世土器(口禿白磁・土師器・須恵器),近世陶器,鉄滓少量,瓦	24次(0617)	1326集	p.103-fig.101
	北	SK 18328	土坑	0.7	0.4	—	瓦廃棄土坑,近世以降の破壊削平により遺存状態が極めて悪い	瓦少量	24次(0617)	1326集	p.105-fig.103
	北	SK 21125	土坑	1.6	0.9	0.3	下層に炭化物を多く含む	土師器少量,須恵器少量,中国陶磁少量(白磁・越系・陶器),朝鮮半島陶器少量,瓦少量	27次(0906) 28次(1013)	1326集	p.115-fig.119
	北	SK 25044	土坑	1.85	1.2	0.25	不整楕円形,上層から炭を多く含み下層に炭化物層	土師器,中国陶磁(邢系),瓦	31次(1314)	1326集	p.118-fig.123
	中央	SF 1055	平坦面	(13.5)	1.3～2.8	—	西側で側溝(SD1056：東で徐々に消失)を伴う,Ⅱ～Ⅴ期埋没過程においても段階的に使用された堀(SD1045)の犬走り	須恵器,新羅陶器,中国陶磁(越系・長沙・邢系・白磁XⅠ)	17次(9910) 18次(0008)	1022集	p.80-fig.46

Tab.19 主要遺構一覧 10

時	地区	遺構番号	種別	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺構情報	出土遺物	調査次数(調査番号)	報告書	頁-挿図番号
V	中央	SD 1114	溝	7	2±α	0.7	2段掘り状(掘りなおしか),SG1115水位上昇時SD1045に流出する	中国陶磁(白磁XⅠ)	17次(9910) 18次(0008)	1022集	p.84-fig.50
V以降	中央	SG 1046	池	(40)	(13)	(1.0)	鴻臚館廃絶後SD1045上に残った窪地,底面に青灰色粘質シルトと流砂が堆積,築城時埋め立てにより消失,軒丸049型式・軒平605型式瓦(11C)が北岸寄りに集中,中世遺物は北岸寄りで多	瓦類(大量),鬼瓦(大宰府式),須恵器,中国陶磁(越系・邢系・同安・龍泉・中世白磁:墨書1点含む),統一新羅陶器,高麗陶器,瀬戸卸皿・天目,備前擂鉢,瓦質土器,土師器(鍋)	17次(9910)	1022集	p.52-fig.27
V以前	南	SK 356	土坑	2.5	1.1	0.25	楕円形,SK358に南東部を削平される	土師器,須恵器,中国陶磁(景徳鎮・越系・陶器),朝鮮半島陶器少量,瓦	9次(9236)	1213集	p.164-fig.166
	南	SK 15015B	土坑	—	—	—	重複下位につき形状不明,SK15015Cに先行	—	21次(0309)	1248集	p.96-fig.70
V	南	SD 357	溝	(7)	1.5	0.8	SK353とともに一連の溝(N-3°-E)の可能性,福岡城土塁下へ延びる,SK358に先行	瓦(大量),須恵器・土師器・中国陶磁(越系・邢系・青白磁・洪塘・褐彩・陶器),朝鮮陶磁(新羅陶・高麗陶・朝鮮白磁),瓦質,磚,近世陶磁	9次(9236)	1175集	p.75-fig.71
	南	SD 864	溝	(3.7)	1.8～1.9	0.25～0.32	福岡城土塁下で確認,SD866と西側で平行,SD866より後出,トレンチ調査につき一部のみ調査	瓦類(銘入1点含む),須恵器,土師器,中国陶磁(越系・景徳鎮)	13次(9620)	1175集	p.97-fig.93
	南	SD 866	溝	(12.6)	0.5～0.7	0.2～0.25	福岡城土塁下で確認,SB31東側柱列の延長上に位置するがSB31に直接伴わない,SD864に先行,トレンチ調査につき一部のみ調査	中国陶磁(越系・邢系)	13次(9620)	1175集	p.97-fig.93
	南	SD 884	溝	(1.9)	(0.8)	(0.15)	SD864とほぼ平行。SB31西側雨落ち溝の延長上に位置するがSB31に直接伴わない,近世溝に大きく切られる,トレンチ調査につき一部のみ調査	—	13次(9620)	1175集	p.97-fig.93
	南	SD 15052	溝	(12.5)	3.4	0.9	4～5回程度の掘り直しを想定	須恵器少量,土師器類,灰釉陶器,中国陶磁(越系・青白磁・陶器),新羅陶器,鬼瓦,瓦,滑石製容器,石印,石鍋	21次(0309)	1175集	p.104-fig.101
	南	SD 15098	溝	(32)	0.95～1.75	0.75～1.4	3回程度の掘り直しを想定	土師器少量,中国陶磁(越系・白磁・陶器:墨書1点含む),瓦	21次(0309)	1175集	p.104-fig.101
	南	SK 01	土坑	3.33	3.15	(0.75)	隅丸方形,廃棄土坑	土師器,須恵器,中国陶磁(白磁・越系・陶器),朝鮮半島陶器,瓦,磚,土製品,鉄製品,滑石製品,貨幣,動植物遺存体	3次(8747)	315集	p.10-fig.5
	南	SK 24	土坑	2.05	1.2	0.25	不整楕円形,瓦溜まり,埋土黒色粘質土,SK37を切り込む	土師器,須恵器,中国陶磁(景徳鎮・越系・陶器),朝鮮半島陶器,瓦質,近世陶磁少量,鬼瓦,瓦,鉄製品・鉄塊	4次(8829)	1213集	p.9-fig.8

Tab.20 主要遺構一覧 11

時	地区	遺構番号	種別	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺構情報	出土遺物	調査次数(調査番号)	報告書	頁-挿図番号
V	南	SK 36	土坑	2.7	1.4	—	瓦溜まり,平面形不明瞭,Ⅲ期整地層上面で検出,近世土坑(SK33)に切られる,上面把握のみ,展示館で展示中	瓦(大量),土師器,中国陶磁(邢系・越系),瓦,磚	4次(8829)	1213集	p.11-fig.12
	南	SK 37	土坑	6.8	(3)	0.05	瓦溜まり,平面形不明確,埋土焼土混じり粘質土,上面把握のみ,展示館で展示中	瓦(大量),土師器,須恵器,中国陶磁(越系・長沙・陶器),朝鮮半島陶器,近世陶磁	4次(8829)	1213集	p.13-fig.14
	南	SK 40	土坑	3	2.7	(0.25)	隅丸方形か	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系・陶器),朝鮮半島陶器,近世陶磁,鬼瓦,瓦,磚	4次(8829)	1213集	p.19-fig.20
	南	SK 53	土坑	復元値2.8	(1.6)	(0.8)	近世池(SG51)に破壊される	土師器,須恵器,中国陶磁(越系),鬼瓦,瓦	5次(8910)	1213集	p.27-fig.29
	南	SK 55	土坑	2.3	2	(0.25)	近世池(SG51)に破壊される,底面に南北方向溝状(幅50cm×深10cm)の窪みあり,	土師器,須恵器,中国陶磁(景徳鎮・越系・陶器),朝鮮半島陶器少量,瓦	5次(8910)	1213集	p.33-fig.35
	南	SK 87	土坑	0.75	0.65	0.65	円形,SK66と接しSK81と重複(先後関係不明)	須恵器,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系),瓦,鉄製品(釘・刀・鏃)	5次(8910)	1213集	p.77-fig.78
	南	SK 89	土坑	1.4	(1)	0.25	円形か,SK82と重複するも切り合いは不明確,	土師器,須恵器,中国陶磁(景徳鎮・越系・陶器),朝鮮半島陶器,瓦	5次(8910)	1213集	p.77-fig.78
	南	SK 99	土坑	0.9	0.8	0.3	円形,SK107より後出	中国陶磁(景徳鎮・越系),朝鮮半島陶器(内面一部に黒色顔料),瓦	5次(8910)	1213集	p.86-fig.87
	南	SK 103	土坑	7.0	1.7	0.15	隅丸長方形,SK104・SK107と重複	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系・陶器),瓦	5次(8910)	1213集	p.91-fig.93
	南	SK 135	土坑	(1.5)	(1.3)	(0.2)	楕円形か	土師器,須恵器,中国陶磁(景徳鎮・越系・陶器),瓦	4次(8829) 5次(8910)	1213集	p.21-fig.23
	南	SK 147	土坑	1.5	1.45	≦0.1	SK148より後出	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系・陶器),朝鮮半島陶器,瓦,近世陶磁	4次(8829) 5次(8910)	1213集	p.22-fig.24
	南	SK 148	土坑	2.8	2.7	0.5	SK147に先行	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系・長沙・陶器),朝鮮半島陶器,瓦,磚,近世陶磁	4次(8829) 5次(8910)	1213集	p.22-fig.24
	南	SK 152	土坑	2.6	2.4	0.2	隅丸方形か,SK151と重複(先後関係不明),Ⅲ期建物礎石据え付け穴を切る	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系・長沙・陶器),朝鮮半島陶器,瓦	6次(9005)	1213集	p.96-fig.99
	南	SK 159	土坑	3.5	2.7	0.7～0.8	楕円形,SK160に先行,底面に径0.85×深0.2mの窪みあり	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・景徳鎮:墨書1点含む・越系・陶器),イスラム陶器,瓦,銅製品,動物遺存体,近世陶磁	6次(9005)	1213集	p.102-fig.105

Tab.21 主要遺構一覧　12

時	地区	遺構番号	種別	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺構情報	出土遺物	調査次数(調査番号)	報告書	頁-挿図番号
V	南	SK 160a	土坑	2.8	2.8	0.8	不整円形,160b・160cに先行,SK159より後出,	土師器,須恵器,国産陶器,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系・長沙・陶器,明白磁・龍泉),イスラム陶器,瓦,鉄製品,土製品,近世陶磁(a～c一括取り上げ)	6次(9005)	1213集	p.102-fig.105
	南	SK 160b	土坑	2.2	2.2	0.6	円形,160aより後出,160cに先行		6次(9005)	1213集	p.102-fig.105
	南	SK 160c	土坑	7	6.1	0.7	隅丸長方形,160bより後出		6次(9005)	1213集	p.102-fig.105
	南	SK 208	土坑	4.4	3.8	0.6	ゴミ捨て用の土坑,底面中央に1.85×2.0mの不整円形掘り込みあり・掘り込み西側に柱痕・柱基部に固定礫(30～50cm)あるも近世以降の可能性大	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系・長沙・陶器),朝鮮半島陶器,中世国産陶器,瓦,石製品,土製品	6次(9005)	1213集	p.123-fig.126
	南	SK 211	土坑	2.0	1.65	0.25	上層に30cm前後礫2あり	土師器,須恵器,中国陶磁(越系・陶器),朝鮮半島陶器,瓦	6次(9005)	1213集	p.133-fig.135
	南	SK 239	土坑	2.7	2.6	0.35	不整円形	土師器,須恵器,中国陶磁(景徳鎮・越系・陶器),瓦	6次(9005)	1213集	p.137-fig.141
	南	SK 243	土坑	3.7	2.6	0.4	隅丸長方形,ゴミ捨て用土坑か,古墳時代遺物が混入	土師器,須恵器,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系・長沙・陶器),朝鮮半島陶器,瓦,銅鏃,耳環	7次(9130)	1213集	p.135-fig.143
	南	SK 351	土坑	3.3	2	0.5	SK352・354・355・358とともに一連の溝(N-1°-E)の可能性,略楕円形	土師器,中国陶磁(越系・龍泉・景徳鎮・洪塘・陶器,明青花),高麗陶器,瓦質,瓦,石錘	9次(9236)	1175集	p.75-fig.71
	南	SK 352	土坑	2.3	1.5	0.55	SK351・354・355・358とともに一連の溝(N-1°-E)の可能性,不整形	須恵器,土師器小片,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系・長沙),備前,朝鮮陶器,瓦類	9次(9236)	1175集	p.75-fig.71
	南	SK 353	土坑	2.4	1.8	0.6	SD357とともに一連の溝(N-3°-E)の可能性,略楕円形	須恵器,中国陶磁(越系・邢系・景徳鎮),瓦質,瓦類,土錘	9次(9236)	1175集	p.75-fig.71
	南	SK 354	土坑	3.0	2.3	0.4	SK351・352・355・358とともに一連の溝(N-1°-E)の可能性,不整形	須恵器,土師器小片中国陶磁(越系・長沙,明青花),瓦,近世陶磁	9次(9236)	1175集	p.75-fig.71
	南	SK 355	土坑	1.6	0.9	0.3	SK351・352・354・358とともに一連の溝(N-1°-E)の可能性,楕円形	瓦,土師器,中国陶磁(越系)	9次(9236)	1175集	p.75-fig.71
	南	SK 358	土坑	(2.5)	1.6	0.7	SK351・352・354・355とともに一連の溝(N-1°-E)の可能性,福岡城土塁下へ延びる,SD357より後出	瓦(大量),須恵器,土師器,中国陶磁(邢系・景徳鎮・越系・長沙・褐彩・陶器),朝鮮陶器,完形磚	9次(9236)	1175集	p.75-fig.71
	南	SK 363	土坑	2.0	1.25	0.55	隅丸長方形,Ⅱ期東門の柱穴を切る	土師器,須恵器,中国陶磁(越系,明青花少量),朝鮮半島陶磁,瓦,中世土師質土器少	9次(9236)	1213集	p.164-fig.166
	南	SK 15015C	土坑	2.3	1.5	0.4	不整長方形,下半から遺物出土	土師器,中国陶磁(白磁・越系),朝鮮半島陶器,瓦,磚	21次(0309)	1248集	p.96-fig.70
	南	SK 15185	土坑	0.9 1.0	0.7 0.8	0.1 0.2	深浅土坑2基(不整楕円形)からなる,南土坑(浅)から陶器・土師器が埋置された状況で出土	土師器,中国陶磁小(青磁・陶器),瓦	21次(0309)	1248集	p.167-fig.126
V以降	南	SK 1041	土坑	3.4	2.1	0.3	ゴミ廃棄土坑か,最下層から木炭・焼土・遺物・礫石が出土	土師器,中国陶磁(景徳鎮・越系・陶器・青白磁),朝鮮半島陶器,瓦,磚,動植物遺存体	17次(9910)	1248集	p.65-fig.46

（５）出土遺物から見た鴻臚館

鴻臚館跡ではこれまでの調査により、コンテナ約１万箱出土している。それらは７世紀後半から11 世紀中ごろまでの時期に及び、鴻臚館が大宰府の附属機関として、外交・交易・防備を担っていたことを物語る多様なものが見られる。ここではそれらを種類ごとに概略を示し、出土遺物からみた鴻臚館について述べていきたい。

①須恵器・土師器・国産陶器類（Fig.38、Tab.22、23）

鴻臚館跡は約 370 年間継続した施設であり、外国使節や商人の安置・供給の場という割には、須恵器・土師器の量はそれほど多くないという印象である。遺構の削平なども考慮する必要があるが、恒常的な使用でないということを踏まえれば理解することもできる。そこで各時期の須恵器・土師器の様相についてみていき、鴻臚館での在り方を考えたい。

第Ⅰ期は掘立柱建物や柵から構成されることあり、須恵器・土師器がまとまって出土する遺構がない。整地層からは小田編年Ⅵ期の内側にかえりがつく蓋や高台付坏、甕などが出土している。

第Ⅱ期はトイレ状遺構から比較的まとまって出土している（Fig.38 の上段）。須恵器は坏蓋、高台付坏、皿、横瓶、甕などがある。土師器は坏蓋、高台付坏、皿、高坏、甕がある。SK1124 からは都城系土器が出土しているが、胎土や焼成から在地の模倣品とされる。都城系土器は他の遺構からも数点出土しているが、いずれも模倣品である。これ以外に黒色土器はＡ類の碗や鉢などが見られる。

第Ⅲ期では須恵器が少なくなり、土師器、黒色土器が主体となる（Fig.38 の上段右下）。土師器は坏や碗、甕、黒色土器はＡ類の碗や鉢などがある。国産陶器では少数ではあるが、緑釉陶器がある（Tab.23）。Ⅳ期以降も見られるが、鴻臚館ではほとんど使用されなかったと考えられる。

第Ⅳ期は廃棄土坑から土師器、黒色土器が多数出土している（Fig.38 の中段）。土師器は坏、皿、碗、甕があり、黒色土器はＡ類が主で碗や鉢がある。Ｂ類は碗や皿などがある。

第Ⅴ期は廃棄土坑から土師器、黒色土器が多数出土している（Fig.38 の下段）。土師器は坏、皿、丸底坏、碗、甕などがある。黒色土器はＡ類が主で碗や鉢がある。Ｂ類は碗や皿などがある。

器種構成（Tab.22）を見ていくと、須恵器は坏、坏蓋、甕、壷が多く、高坏、鉢などは少ない。硯は定型化したものは少なく、転用品が少量見られる程度である。土師器は坏、坏蓋、碗、甕が大半を占める。両者で共通するのは坏や碗などの食膳具が器種構成の主体となっていることがわかる。また、貯蔵用の須恵器甕や煮沸用の土師器甕も多く出土している。鴻臚館が外国使節や商人を安置・供給する施設という性格を考えると、このような器種構成は理解できる。ただ、冒頭でも述べたが、不定期であるが多くの人々を受け入れる施設において、食器である須恵器、土師器の量は十分とは言えない。他の施設からの搬入してくることも考慮する必要もある。

鴻臚館跡第Ⅱ期に相当する太宰府市の客館跡では、佐波理の碗や皿、匙などの高級食膳具が出土しており、新羅の使節の饗応ではそれらを使用したと考えられている。鴻臚館跡では佐波理の碗や皿などはみられず、漆器がわずかに出土しているが、それらが鴻臚館での食膳具であったかもしれない。食膳具については両者で違いがあった可能性も含めて検討する必要があろう。

使節等への給食・給仕に関わる遺構については、鴻臚館跡では今のところ確認されていない。しかし、食材を記した木簡の存在、トイレ遺構から出土した獣骨や魚骨、種子などの状況から周辺に関連する遺構が想定される。外国使節への料理の調理形態や食膳具など、これまで不明確であった点であり、解明に期待したい。

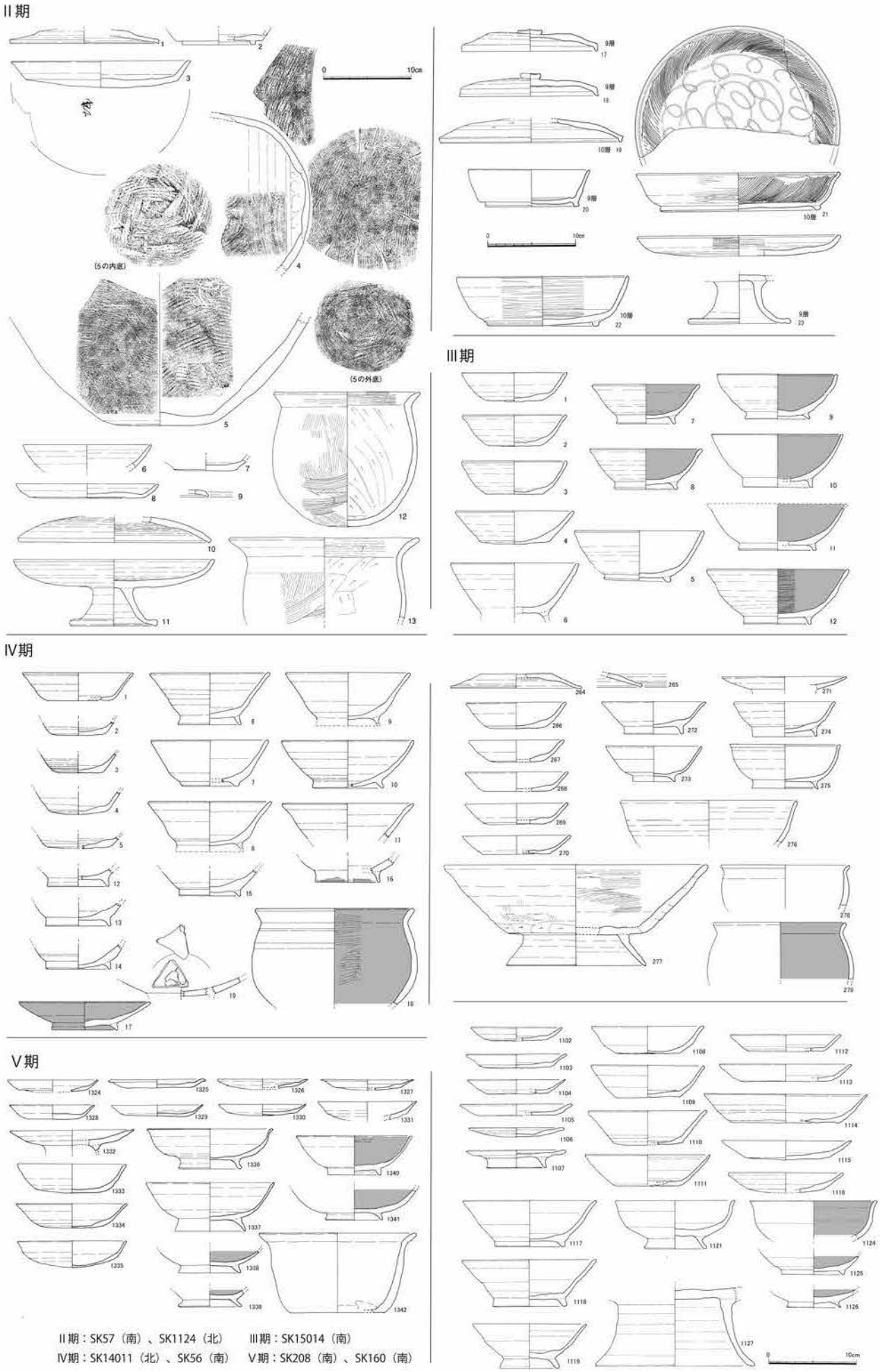


Fig.38 土師器・須恵器・国産陶器実測図（1/6）

Tab.22 須恵器・土師器出土点数

	器形	計			調査次数 /(調査番号) 北													中央谷		南									
		谷込合計	北館	南館	18次 (0008)	19次 (0109)	20次 (0218)	22次 (0415)	23次 (0502)	24次 (0617)	25次 (0706)	26次 (0821)	27次 (0906)	28次 (1013)	29次 (1116)	30次 (1205)	31次 (1314)	17次 (9910)	21次 (0309)	3次 (8747)	4次 (8829)	5次 (8910)	6次 (9005)	7次 (9130)	9次 (9236)	11次 (9420)	12次 (9537)	13次 (9620)	14次 (9736)
須恵器	坏蓋	210	101	46	8	9	13	1	26	1	2	21	1	4	6	2	7	42	21	12	12	7	6	5	2	1		1	
	坏蓋転用硯	6	2		1		1											4											
	坏身	181	89	48	4	12	14		24	2	4	16		6	2		5	27	17	12	12	13	5	2	1	2		1	
	椀	7	3		1		1							1				4											
	皿　0821盤	12	4	4					1	1		1					1	2	2	1	2	1							
	高坏　0415高盤	13	7	6	1			1	2	1	1	1									2	1	2	1					
	蓋（坏蓋以外）	40	14	22	1	5	1		2		1	3					1		4	4		14	2		1	1			
	はそう	5	1	4					1											3				1					
	瓶・横瓶・平瓶	9	6	3					2		1	2			1						1	1			1				
	鉢	17	6	4			4										2	7				3		1					
	壺	130	52	33	2	3	2		25	2	3	10			2	1	2	32	13	5	6	9	6	4	3				
	甕	159	70	63	8	2	11	1	14	3	3	18		2		1	7	18	8	12	33	9		4	1	1		3	
	硯（円面硯）	1																	1										
	硯（転用 坏蓋以外）	5	5		1	1	2		1																				
	移動式竈	2	1						1										1										
	不明・小片	14	2	4		2												8		2	1	1							
		811	363	237	27	34	49	3	99	10	15	72	1	13	11	4	25	144	67	51	69	59	21	18	9	5		5	
土師器	坏蓋	7	3	4					2								1			1	1		1			1			
	坏身	388	198	144	1	30	113		8	1		3					42	6	40	20	17	29	35	37	6				
	椀	389	207	105	1	6	137		5	4		2	1	8	1		42	21	56	41	6	7	11	33	7				
	皿	178	63	81		16	3		3	6	22			2		4	7	14	20	31	10	10	21	7		2			
	高坏	16	9	4	2	1	1					2		1			2	2	1	1		3							
	蓋（坏蓋以外）	10		8														1	1		2	5	1						
	托台	2		2																2									
	器台	1		1																	1								
	鉢（脚付を含む）	9	3	5					2								1	1				4	1						
	壺	11	4	4					2			2						2	1			2	1	1					
	甕	92	33	56	3	2	4		12			5		2			5	1	2	2	10	16	14	10	3	1			
	すり鉢	1	1			1																							
	鍋	5																5											
	甑	7	6	1					3			3									1								
	把手	3	2	1								2												1					
	移動式竈	3	3				1				1						1												
	支脚	1	1									1																	
	灯火器・灯明皿	9	8							2	6								1										
	手あぶり	1																1											
	不明・小片	11	2	1								1		1				5	3			1							
	計	1144	543	417	7	56	259		37	13	29	21	1	14	1	4	101	59	125	98	48	77	85	89	16	4			
黒色土器	椀　A類	77	11	43			8					1		1			1	1	22	20	2		5	13	2				1
	椀　B類	52	4	37			2							2				1	10	31			3	3					
	碗　A/B不明	9	3	4		1	1						1					1	1	4									
	皿　A/B不明	1	1				1																						
	坏　A類	9		9																		4	5						
	坏　B類																												
	鉢	1	1				1																						
	壺	9		8															1			4	3	1					
	甕	3		3																				3					
	不明・小片	1																1											
		162	20	104		1	13					1	1	3			1	4	34	55	2	8	16	20	2				1

Tab.23 国産陶器一覧

No.	種類	法量(cm)	遺物情報	遺構時期	地区	遺構番号	調査次数（調査番号）	掲載報告書	頁-挿図番号
1	緑釉陶器碗	底径(8.5) 高(2)	萌木色釉,胎土淡黄色	—	北	中世造成時崩落古代層	31次 (1314)	1326集	p.133-fig.135-7
2	緑釉陶器破片	—	東濃窯,口縁部小破片	—	北	表採	20次 (0218)	1326集	p.89-fig.87-8
3	緑釉陶器破片	—	東濃窯,口縁部小破片	—	北	包含層	20次 (0218)	1326集	p.89-fig.87-9
4	緑釉陶器破片	底径(6) 高(1.5)	洛西窯,底部破片	—	北	表採	20次 (0218)	1326集	p.89-fig.87-10
5	緑釉陶器破片	—	長門産か,小破片	Ⅲ期	中央・南	SK 15027	21次 (0309)	1248集	p.134-fig.96-254
6	緑釉陶器皿	残存部径(13.5) 高(2)	猿投,見込ヘラ描花文,若草色釉を薄く全面に施釉,黒笹90号窯か,2片未接合	Ⅲ期	北	SK 14511	20次 (0218)	1326集	p.70-fig.69-19
7	緑釉陶器皿	口径(17.5) 高3	猿投,見込ヘラ描花文,30%残	—	中央	SM 1208 (16c)	19次 (0109)	1022集	p.100-fig.62-1
8	緑釉陶器碗	高(2.8)	破片	Ⅳ期	南	SK 151	6次 (9005)	1213集	p.97-fig.100-984
9	緑釉陶器碗	高(2.3)	破片	Ⅳ期	南	SK 151	6次 (9005)	1213集	p.97-fig.100-985

②瓦類（Fig.39 ～ 45、Tab.27 ～ 31）

鴻臚館跡では、博多区那珂遺跡群でみられる泥条盤築技法の初期瓦や百済系単弁軒丸瓦などの 7 世紀代の瓦は出土しておらず、第Ⅰ期の建物に瓦が葺かれたかは不明確である。

第Ⅱ期では鴻臚館式に代表される瓦がみられるようになり、鴻臚館が大宰府の附属機関であることからも、軒瓦は大宰府史跡のものとほぼ一致する。瓦には軒瓦、鬼瓦、平瓦、丸瓦のほか、図示していないが熨斗瓦や面戸瓦といった道具瓦や磚などがある。

軒丸瓦（Fig.39）は第Ⅱ期の創建瓦である鴻臚館式（223 型式）が最も多く、その数は全体の約 70％を占め、ついで 082A 型式（10 数％）、082B 型式（約 10％）となる。その他の瓦は少数に留まる。223 型式は複数の瓦范があり、細分類される。082A 型式、082B 型式は単弁素弁で、弁数や連珠文の相違から分類される。老司系の 291 型式は北館から中央谷に流れ込む溝からまとまって出土している。遅れて造営された北館で所用されたと考えられる。065 型式、135Bb 型式、243 a 型式は西区女原瓦窯跡で焼成されたもので、第Ⅲ～Ⅳ期の建物に使用されたものと考えられる。これらは瓦当と丸瓦の接合技法や瓦当文様の特徴などから新羅の工人の関与が指摘されている。049 型式は西区斜ケ浦瓦窯跡でも焼成されたもので、中央谷や北館で多く見られ、鴻臚館の最末期段階に使用された軒瓦と考えられる。

軒平瓦（Fig40、41）は鴻臚館式（635 型式）が最も多く（約 60％）、662 型式（約 10 数％）、663 型式（10 数％）がこれに続く。数量、及び胎土・色調からも 223 と 635 型式、082A と 662 型式、082B と 663 型式 の組み合わせで、鴻臚館の主たる軒先瓦となる。560Ba 型式は老司Ⅱ式で、老司系の軒丸瓦 291 型式と同様の出土状況にあり、北館で使用された型式である。515E と 666Ab 型式は女原瓦窯跡で焼成されたものである。605 型式は南館では出土例がなく、北館で使用されたもので軒丸瓦 049 型式との組み合わせとなる。

鬼瓦は北館、中央谷、南館で 20 点出土している（Fig.41）。大宰府式鬼瓦はＡ類が大半でＢ類は２点ほどである。Ａ類はいずれも破片で全形が分かるものはないが、幅 30cm ほどの小ぶりのものである。１、２は同一遺構出土で別個体であるが、全形を推測できる。額の力瘤は縦方向の弧状線となり、眉間に釘穴が１つある。外区の珠文は細かい。歯は４本である。大宰府式鬼瓦Ⅱ式に分類される。３もⅡ式か。４は南館 SK24 出土で、額の力瘤の表現は５段、その上部の釘穴がある。外区の珠文は細かい。大宰府式鬼瓦ⅢＢ式に分類される。５もⅢＢ式か。７～９は口の部分で、歯は４本である。Ⅱ式か。６は外区の珠文が大きく、Ⅰ式の可能性がある。Fig.42-1 は口の部分の破片で、外区に珠文はない。遠賀町墓ノ尾遺跡出土品に類似する。Ⅱ式は出土した遺構の時期からⅡ期に、ⅢＢ式はⅣ期以降の廃棄土坑から出土しており、Ⅲ期以前に使用されたものと考えられる。

文字瓦は「平井」「佐」「賀茂」「大国」「伊貴作瓦」「今行」「門司」などがある（Fig.42、43）。このうち、「平井」は南館でのみ、「今行」「門司」は主に北館で出土する。また、「Ｊ」形や「弓」形が入る叩き文様は主に北館でみられるものである。

平瓦・丸瓦は叩き目で分類（Tab.27）し、南館、中央谷、北館での出土状況を示した（Fig.44、45、Tab.28 ～ 31）。この内、最も多く出土するのは鴻臚館式軒瓦に伴う縄目叩きである。西区女原瓦窯跡や元岡瓦窯跡で見られる５類はⅢ～Ⅳ期に、4 類はⅤ期以降に出現する。出土傾向を見ると、南館では格子叩きの 3Ac2 類、4 類、6 類の一部（Ab、E、F、G、J）などは少なく、特に 3Ac2-1 ・3Ac2-2 ・4Ba 類については北館のみである。

このように瓦類は各段階で様々な瓦が使用されており、また、南館と北館では相違が見られる。特にⅣ期以降、北館への偏りが看取される。

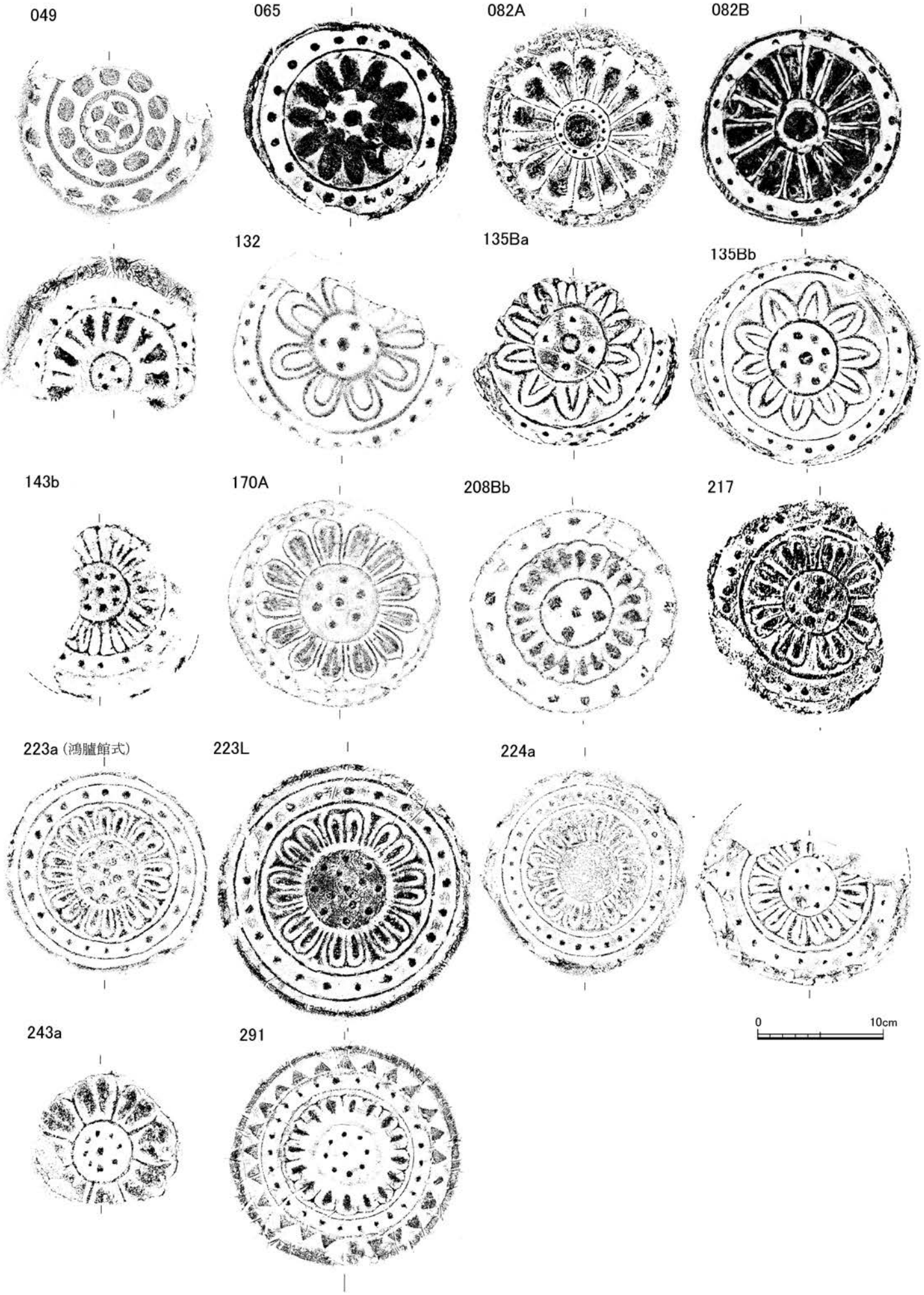


Fig.39　軒丸瓦分類図（1/4）

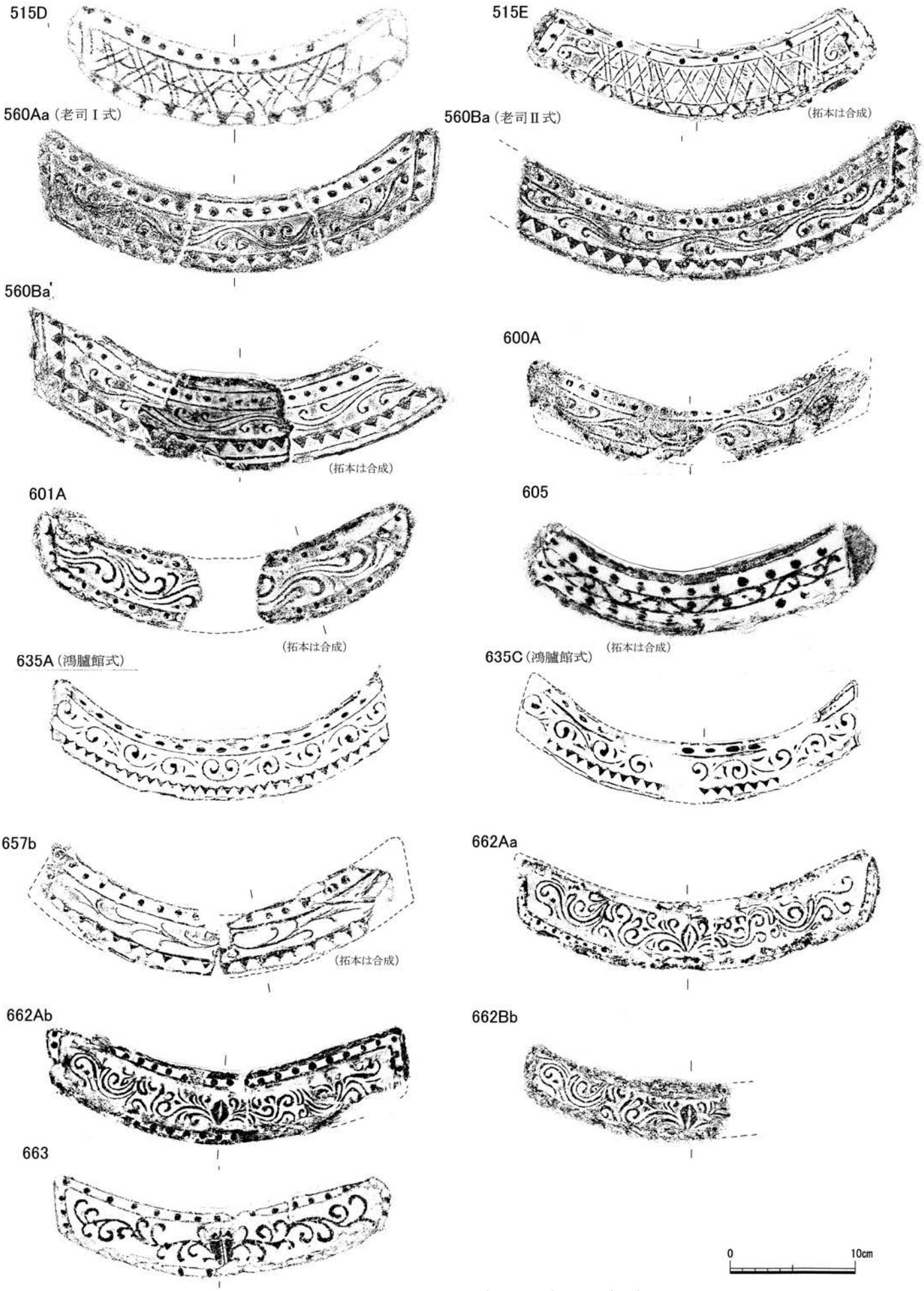


Fig.40 軒平瓦分類図１（1/4）

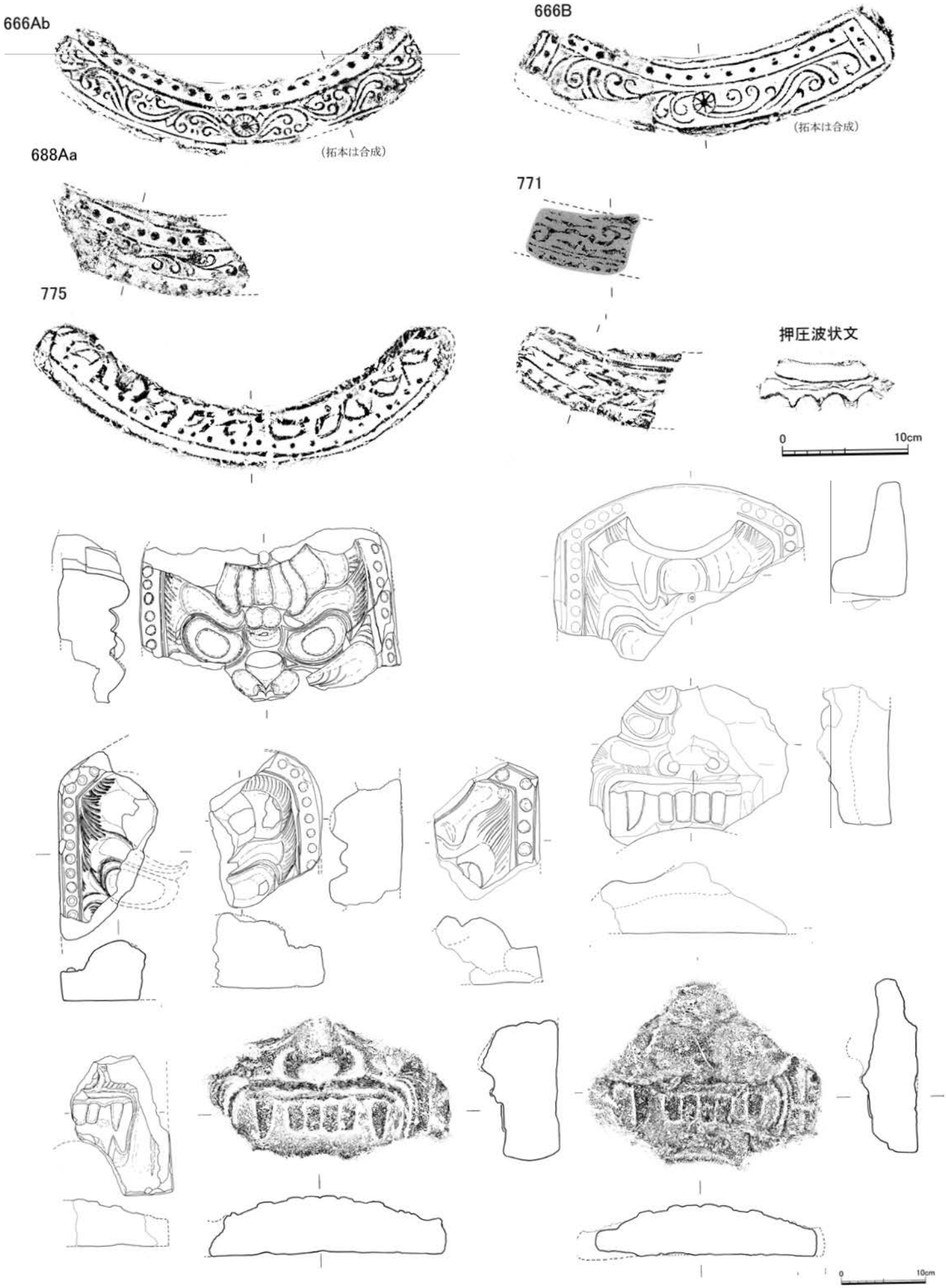


Fig.41　軒平瓦分類図 2 及び鬼瓦実測図（1/4、1/6）

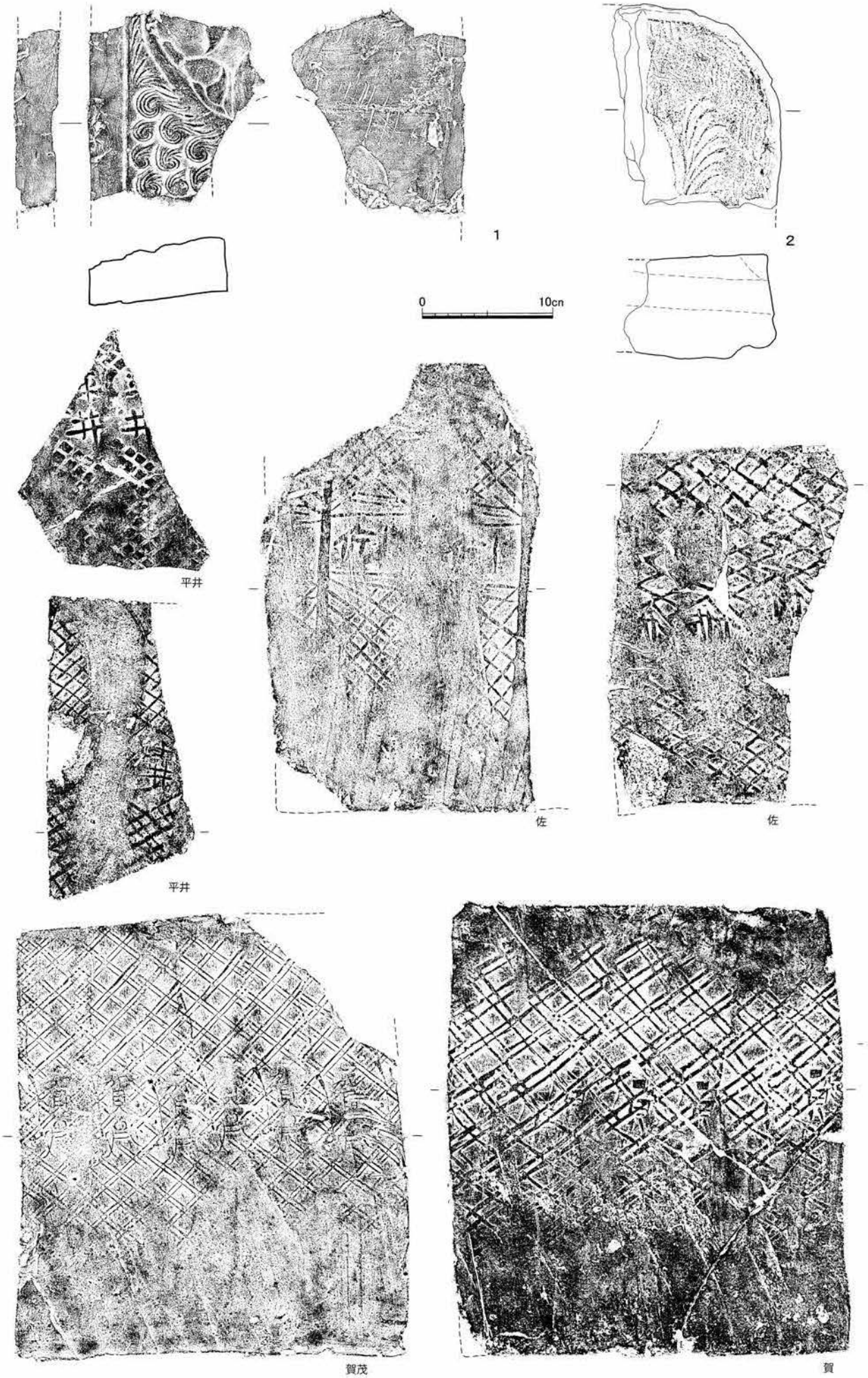


Fig.42 鬼瓦及び文字瓦分類図１（1/4）

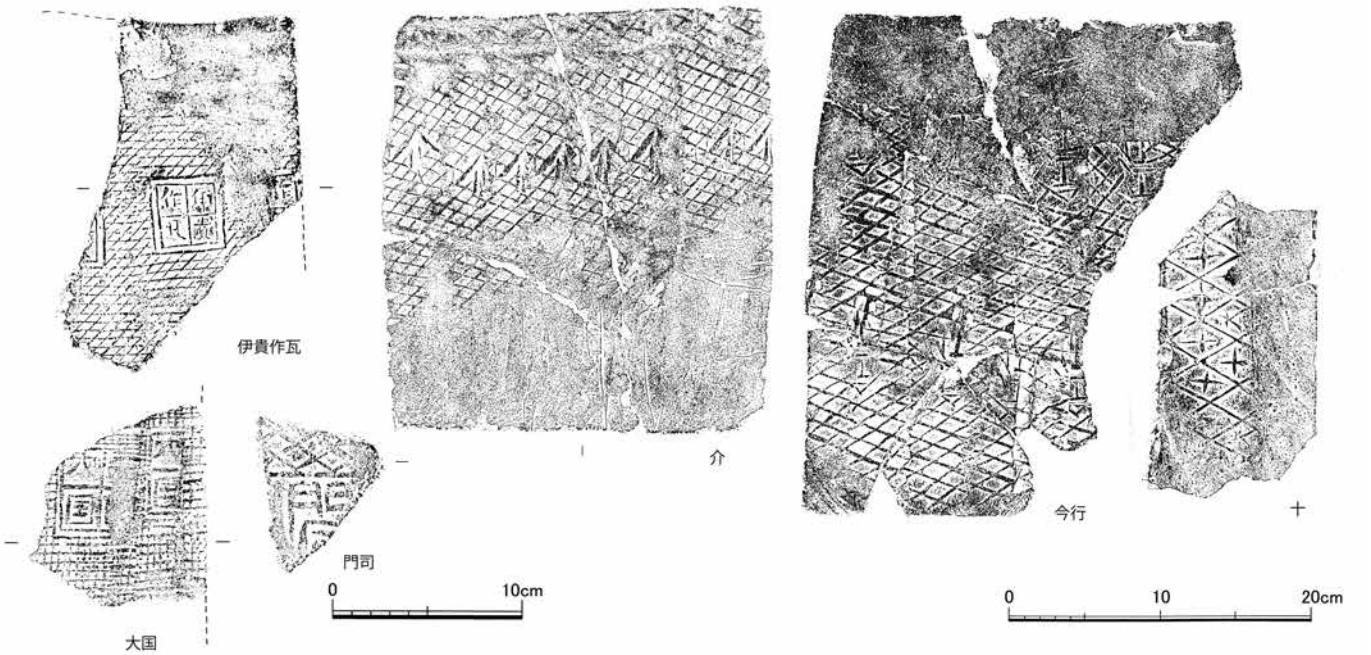


Fig.43 文字瓦分類図 2（1/4）

Tab. 24 軒丸瓦一覧

	型 式	計			調査次数 / 調査番号 北														中央谷		南									
		谷込全量	北館	南館	18次 (0008)	19次 (0109)	20次 (0218)	22次 (0415)	23次 (0502)	24次 (0617)	25次 (0706)	26次 (0821)	27次 (0906)	28次 (1013)	29次 (1116)	30次 (1205)	31次 (1314)	17次 (9910)	21次 (0309)	3次 (8747)	4次 (8829)	5次 (8910)	6次 (9005)	7次 (9130)	9次 (9236)	11次 (9420)	12次 (9537)	13次 (9620)	14次 (9736)
軒丸瓦	049型式	28	24	1			3		1	3		2			5		10	3						1					
	065型式	17	3	8					1						1		1	4	2				2	6					
	082A型式	67	10	48			3	2	2			1			1		1	3	6	1	7	5	15	12	8				
	082B型式	39	2	34					1						1			2	1		6	5	20	3					
	未分類(1248集fig.29-7)	1	0	1																	1								
	132型式	14	9	2			1		1	2							5	3						2					
	135型式	4	1	0			1												3										
	135B型式　135Ba	2	0	1															1					1					
	135Bb	7	0	6														1				1	1	2	2				
	143b型式	3	1	2						1												1	1						
	170A型式	11	6	4		1				2		1		1			1		1			1		3					
	208B型式	12	10	1			2			2					3		3		1										1
	217型式	2	1	1								1								1									
	(鴻臚館式) 223型式　223	253	147	79	4	28	18	6	20	12	1	15		8	8	2	25	3	24	3	16	22	13	15	9	1			
	223か	92	1	90			1												1		20	12	42	12	4				
	223a	78	28	42				3	5					4	15		1	6	2	4	12	5	17	4					
	223aか	10	0	10																	7	1	1	1					
	223b	2	0	1														1		1									
	223L	4	3	1				2	1											1									
	224a型式　224a	9	1	8										1						1	2		2		3				
	224aか	4	0	4																	1		2		1				
	未分類(1248集fig.31-21)	1	0	1																			1						
	243a型式	3	2	1						1				1										1					
	(老司式) 291型式	24	23	1	22										1							1							
	型式不明	46	0	46																	15	13	9	9					

Tab.25 軒平瓦一覧

	型式	計 谷込全量	計 北館	計 南館	北 18次(0008)	北 19次(0109)	北 20次(0218)	北 22次(0415)	北 23次(0502)	北 24次(0617)	北 25次(0706)	北 26次(0821)	北 27次(0906)	北 28次(1013)	北 29次(1116)	北 30次(1205)	北 31次(1314)	中央谷 17次(9910)	中央谷 21次(0309)	南 3次(8747)	南 4次(8829)	南 5次(8910)	南 6次(9005)	南 7次(9130)	南 9次(9236)	南 11次(9420)	南 12次(9537)	南 13次(9620)	南 14次(9736)
軒平瓦	無紋	1	0	1																			1						
	515型式 515	1	0	1																1									
	515D	12	10	2					1	3							6			1		1							
	515E	6	0	4														1	1	1			2	1					
	(老司系) 560型式 老司式	3	3	0			1						2																
	560Aa(老司Ⅰ)	2	1	0	1													1											
	560Ba(老司Ⅱ)	6	6	0	5										1														
	560Ba'	1	0	1																					1				
	600A型式	7	0	5															2	1	1		2	1					
	601A型式	6	3	3						3														3					
	605型式	27	25	0					2	1				1	9		12	2											
	(鴻臚館式) 635型式 635	432	153	242	7	27	23	10	29	9		10		1	30		7	4	33	18	55	48	54	33	34				
	635か	53	6	47		1									5					1	21	5	11	4	5				
	635A	18	7	10		1			4			1			1			1		1		2	7						
	635C	3	1	2		1																	1	1					
	637型式 採集資料にあり																												
	657b型式	12	3	9					1	1							1					1	3	3	2				
	662型式 662	53	2	44						2								2	5	1	10	11	13	6	3				
	662Aa	5	1	4					1													1	1	1	1				
	662Ab	26	2	22						1					1			1	1	1	7	5	5	1	3				
	662Abか	10	0	10																			1	6	3				
	662Ba	1	0	0															1										
	662Bb	1	0	0														1											
	663型式	66	0	64															2	2	11	11	29	10	1				
	666型式 666Ab	17	3	11						1							2		3	1	1		2	6	1				
	666B	9	1	7									1					1		2	1		1	2	1				
	688Aa型式	3	2	1		1				1													1						
	691型式 691Ab	4	3	0						2					1				1										
	771型式	1	0	1																		1							
	775型式	7	0	7																	1	1	4		1				
	未分類(1248集fig.37-49)	1	0	1																			1						
	型式不明	29	0	29																	12	5	7	3	1	1			
	鬼瓦	20	4	7													4	9		1	3	3							
	鴟尾	1	0	1																1									
	施釉瓦	8	8	0		1				7																			
	磚	73	11	49		1	1	1	4			2				1	1	6	7	13	9	12	7	6	2				
	文様磚	2	2	0				1	1																				
	墨書磚	1	0	1																		1							

Tab.26 主要文字瓦一覧

種類	型式：敲打痕分類	形式	北館	南館	谷込合計	調査次数 / 調査番号 北													中央谷		南										
						18次 (0008)	19次 (0109)	20次 (0218)	22次 (0415)	23次 (0502)	24次 (0617)	25次 (0706)	26次 (0821)	27次 (0906)	28次 (1013)	29次 (1116)	30次 (1205)	31次 (1314)	17次 (9910)	21次 (0309)	3次 (8747)	4次 (8829)	5次 (8910)	6次 (9005)	7次 (9130)	9次 (9236)	11次 (9420)	12次 (9537)	13次 (9620)	14次 (9736)
平井(正字)	901E：格子陰文	丸瓦	0	1	6															5				1						
(左字)	901 J	丸瓦	0	1	1																		1							
(左字)	901 J	平瓦	0 0	6 8	6 13																	1	1	1	3					
佐(正字)	902E：5D方形窓	丸瓦	4	24	31					1					1			2		3			2	1	18	3				
(正字)	902E	平瓦	11	6	18					1								10		1				1	3	2				
(正左未判別)		平瓦	1	0	1	1																								
(左字)	902F：5D6角窓中央に文字	丸瓦	0	2	4															2					2					
(左字)	902F	平瓦	0	1	1																			1						
佐？(正字)	902 J：5D6角窓左寄りに文字	丸瓦	0	20	20																				20					
佐？(正字)	902 J	平瓦	0	14	14																	2	2	4	5	1				
佐？(正左未判別)		不詳	1 17	0 67	1 90		1																							
賀茂(正字)	903D	丸瓦	4	1	7					1	2				1					2		1								
(正字)	903D：3Ba2-1	平瓦	34	25	75					2	8		6		7	1		10		16		1	10		4	9	1			
(正字)	903G：タテ菱	丸瓦	0	2	2																		1		1					
(正字)	903G	平瓦	0	8	8																	2	4	2						
賀茂	3Ba2	丸瓦	2	0	3											1		1		1										
	3Ba2	平瓦	16	0	25					1						3	1	11		9										
	3Aa2-1	平瓦	1	0	2						1									1										
賀茂？		丸瓦	0	2	2																				1	1				
賀茂？		平瓦	0	8	11															3		4	1		1	2				
賀(左字)？	3Aa2-1	丸瓦	0	0	1															1										
賀(左字)？	3Ba2-2	丸瓦	0	12	15															3		1	2		3	6				
	3Ba2-2	平瓦	2 59	14 72	18 169						2									2			5	2	1	6				
伊貴作瓦(正字)		平瓦	0 0	23 23	29 29															6	1	1	11	4	3	2				1
大国(左字)	907	平瓦	0 0	2 2	2 2																		1		1					
介(正字)	912	丸瓦	6	3	11			3	2	1										2				1	2					
	912	平瓦	1	1	3						1									1			1							
(正左未判別)		丸瓦	2 9	0 4	2 16		2																							
今行(左字)	913：3Aa2-2	丸瓦	53	0	53		2	1	1	2			42		2	1		2												
	913	平瓦	202	0	262		19	5	1	6	1		137	2	10	6		15		60										
	913	不詳	6	1	7		6																			1				
今？		平瓦	0 261	0 1	1 323															1										
門司(左字)		平瓦	5 5	0 0	5 5													5												
七月七日	082190259	平瓦	1 1	0 0	1 1								1																	
「J」形		丸瓦	3	0	3					1					2															
	6F	丸瓦	3	0	3					1						2														
		平瓦	24	0	24					5						18		1												
	6F	平瓦	3	0	3										3															
		不詳	2 35	0 0	2 35	2																								
「弓」形		丸瓦	23	0	24		5			9	2		1			6				1										
	3Bd	平瓦	102 125	1 1	124 148		22	1		35	4		4	3	1	28		4		21	1									
「一」形		不詳	1 1	0 0	1 1		1																							

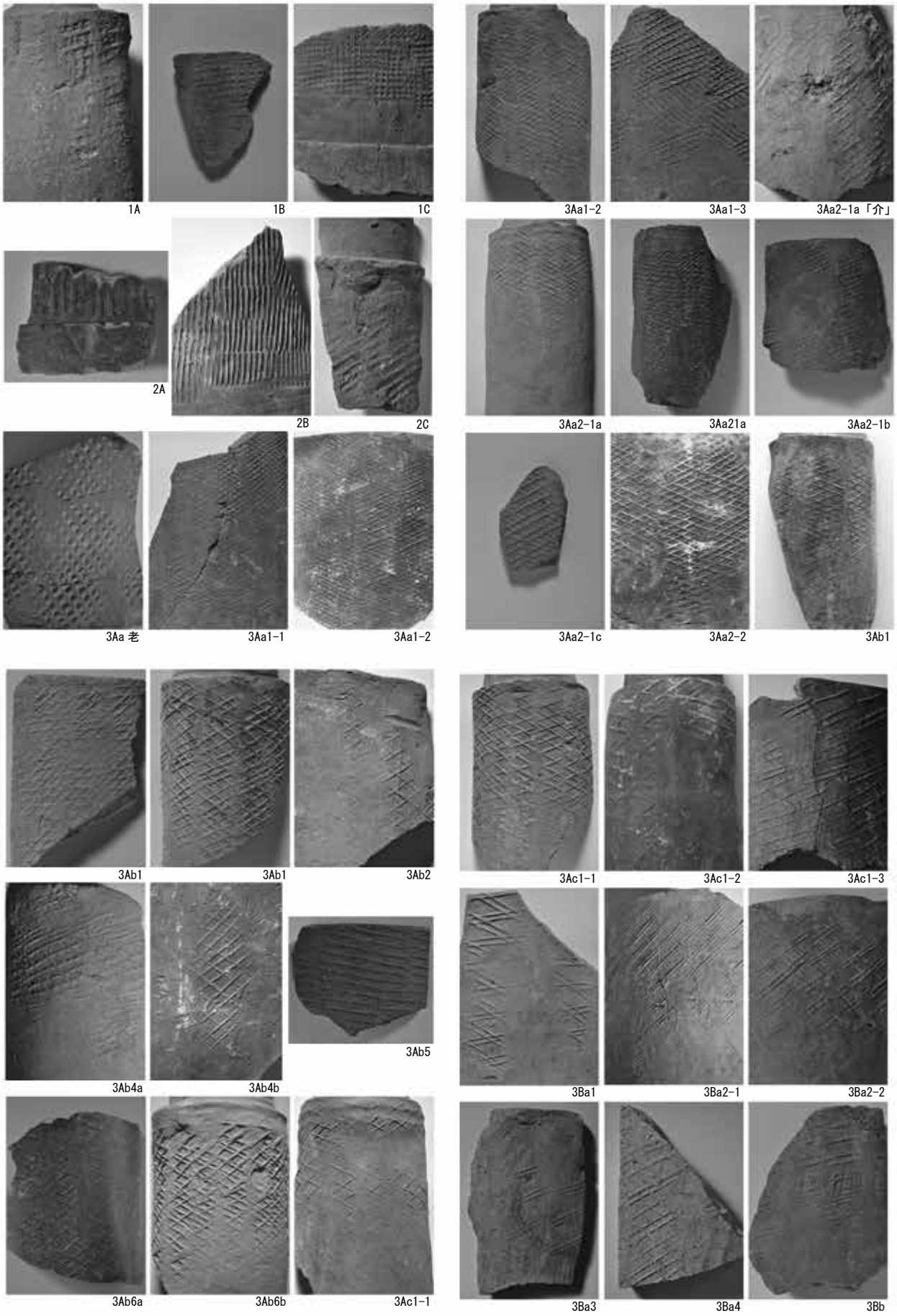


Fig.44　平・丸瓦叩き目分類１

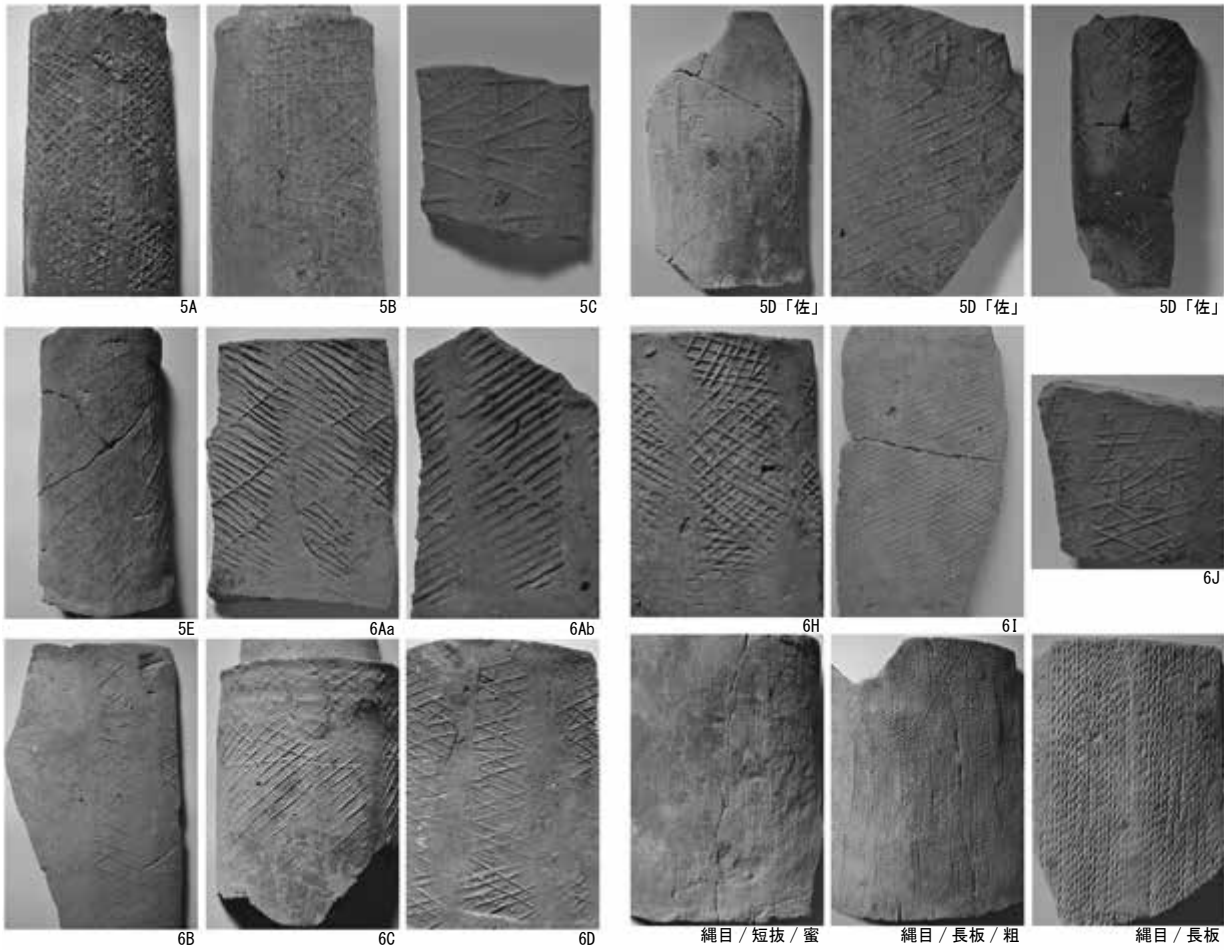


Fig.45 平・丸瓦叩き目分類 2

Tab.27 瓦凸面の敲叩痕分類基準（略式）

1 叩き板の軸と平行する格子（格子） A-形状不揃い，B-大きさ不揃い，C-細線(小さな正方形)
2 叩き板の軸と平行な線（平行線） A-太線，B-細線，C-極太(間隔広い)
3 叩き板の軸に斜交する格子（斜格子） A-単線 ⇒ a **格子の長辺が15㎜未満**—老：方形斜格子(老司式) 1：10㎜未満 1)～5㎜ 2)5～10㎜ 3)一部平行線 2：10～15㎜ 1a)10～13㎜ 1b)歪格子 1c)片方細線 2)13～15㎜ b **格子の長辺が15～20㎜**—1)15～18㎜ 2)18～20㎜ 3)格子とクロスする縦線あり※ 4)格子と平行な線あり 5)格子の長辺20㎜ 細長い菱形 6)格子内部に細線の格子を加える c **格子の長辺が20㎜以上**—1：区画内文様なし 1)20～23㎜ 縦線入るものも 2)23㎜～ 3)不規則な大格子 2：区画内文様あり 1)「×」 2)花弁文 3)短縦線※ 4)「×」「・」 B-二重線⇒ a **規則的**—1：特大整然 2：略方形 1)整然 2)やや不整 3：菱に近い 4：菱内に細線斜格子 b **不規則**—1：線の間隔が一定しない菱形※ 2：線の間隔が一定 平行四辺形※ d **片側三重線**(cは欠番) e **片側単線**※ (※:小片のため不明確)
4 区画内に「大」「十」などを持つ特大斜格子（斜格子バリエーション） A-斜格子に縦平行線「大」「十」「×」等，B-斜格子のみ⇒a **菱に近い格子**「大」「十」「◆」等 b **方形に近い格子**「十」「×」等
5 斜格子に線（斜格子バリエーション） A-縦線，B-縦線と一部横線，C-縦・横・斜線で記号様，D-横線等で区画「佐」銘，E-幅広縦線粗雑
6 その他（斜格子・線の組み合せバリエーション） A-斜線にクロス線，D-「Y」字あり，F・G-意匠区画あり，ほか各種

分類詳細は「鴻臚館跡(南館)瓦凸面の敲叩痕分類基準」（1248集pp.16-17 Tab.6）参照

Tab.28 遺構出土瓦敲打痕分類

遺構名	遺構時期	縄目		1								2						3Aa																3Ab																		3Ac													
				A		B		C		D		A		B		C		老		1						2								1		2		3		4						5		6				1						2							
																				1		2		3		1a		1b		1c		2								a		b		c				a		b		1		2		3		1		2		3		4	
		平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK 57	Ⅱ	●	●											●				●				●	●	●			●																									●	●												
SK 69	Ⅱ	●	●									●						●				●								●				●																															
SK 70	Ⅱ	●	●																			●	●			●	●							●	●	●														●	●														
SD 235	Ⅲ	○	○																																																													
SD 270	Ⅲ	○	○																○	○	○	○																																									
SK 155	Ⅲ？	○	○										○	○					○	○	○	○																																									
SK 224	Ⅲ？	○	○																																																												
SB 11	Ⅲ以降	●																																																													
SD 06	Ⅲ～Ⅴ	●																															●																															
SK 05	Ⅲ～Ⅴ																																	●																															
SK 23	Ⅲ～Ⅴ	●	●												●			●			●	●	●																	●			●									●	●												
SK 66	Ⅲ～Ⅴ	●	●												●						●	●	●								●		●		●				●						●																			
SK 72	Ⅲ～Ⅴ																			●		●	●									●																																	
SD 252	Ⅳ	○	○										○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							○	○																	○	○												
SK 100	Ⅳ	●	●												●	●	●		●	●	●	●	●		●	●														●										●	●													
SK 151	Ⅳ	●	●	●										●				●		●		●	●	●		●						●		●						●												●													
SK 207	Ⅳ	○	○															○	○	○	○	○	○									○	○																																
SK 229	Ⅳ																			○	○	○	○											○	○											○	○					○	○												
SK 246	Ⅳ	○	○																	○	○					○	○					○	○	○	○											○	○																		
SK 249	Ⅳ	○	○															○	○	○	○	○	○																																										
SK 251	Ⅳ	○	○															○	○	○	○			○	○																																								
SK 255	Ⅳ	○	○												●	●	●		●	●	●	●	●		●	●					●	●		●	●										●						●		●											
SK 261	Ⅳ	○	○												○	○	○	○	○	○	○	○			○	○					○	○																					○	○										
SK 262	Ⅳ	●	●			○	○									○	○	○	○	○	○	●	●			○	○					●	●	●	●																	○	○												
SK 38	Ⅳ	●	●														●		●	●	●	●	●				●	●																				●						●													
SK 54	Ⅳ	●	●		●										●	●	●				●	●	●										●	●																	●													
SK 56	Ⅳ	●	●	●											●		●		●	●	●	●	●		●	●					●	●	●	●	●				●						●			●	●	●	●												●	
SK 61	Ⅳ	●	●									●				●	●	●				●	●	●		●	●					●	●	●	●			●			●					●					●	●													
SK 62	Ⅳ	●	●											●		●	●	●		●	●	●	●	●	●	●								●						●	●								●	●	●		●	●		●									
SK 75	Ⅳ	●	●	●		●								●		●		●		●	●	●	●	●		●	●	●				●		●		●				●								●	●		●	●	●												
SK 80	Ⅳ	●	●														●		●	●	●	●	●		●	●							●															●		●	●	●												
SK 82	Ⅳ	●	●		●												●		●	●	●	●	●		●	●	●							●																	●	●												
SK 90	Ⅳ	●	●																		●	●	●		●						●																																		
SK 92	Ⅳ	●	●												●				●	●	●	●	●		●	●													●												●													
SK 93	Ⅳ	●	●																		●				●	●									●	●																												
SK 83	Ⅳ以前	●	●																			●											●																															
SK 84	Ⅳ以前	●	●																●	●	●	●																	●																									
SD 357	Ⅳ～Ⅴ	●	●										●				●		●	●	●	●	●		●	●	●				●	●	●	●	●				○	○					●					●	●													
SK 60	Ⅳ～Ⅴ	●	●														●				●	●			●						●																			●	●													
SK 59	Ⅳ～Ⅴ？	●	●													●	●				●	●	●								●									●								●			●													
SK 103	Ⅴ	●	●		●				●												●	●	●																																									
SK 105	Ⅴ	●	●												●	●					●	●	●		●	●							●																		●													
SK 135	Ⅴ	●	●														●				●		●											●	●																				●									
SK 147	Ⅴ	●	●			●													●	●					●																																						
SK 148	Ⅴ	●	●				●									●		●		●	●	●	●	●				●						●	●																	●		●											
SK 152	Ⅴ	●	●									●		●				●		●	●	●		●		●						●				●																													
SK 159	Ⅴ	○	○												○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●				○	○	○	○	○	○			○	○											○	○	○	○										
SK 160	Ⅴ	●	●									○	○	○	○	○	○	●		●	●	●	●	●	●	●	●	○	○			●	●	●	●	●	●				●											●		●	●								●		
SK 208	Ⅴ	○	○										○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	●		●	●	●				●	●	○	○	○	○			○	○					○	○					○	○	○	○										
SK 211	Ⅴ	○	○															○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○															○	○	○	○										
SK 239	Ⅴ	○	○															○	○	○	○	○	○																												○	○												
SK 24	Ⅴ	●	●																		●	●					●				●	●	●	●														●			●	●												
SK 243	Ⅴ	●	●														●					●	●			●	●	●	●				●		●								●								●	●			●										
SK 254	Ⅴ	●	●															○	○	○	○	○	○			○	○					○	○			○	○															○	○	○	○										
SK 27	Ⅴ	●																				●	●			●	●																									●													
SK 351	Ⅴ	○	○															●		○	○	○	○			●			●			○	○	○	○	○	○															○	○	○	○	●									
SK 352	Ⅴ	○	○															○	○		●	●	●			●	●	●				●	●	○	○	○	○															○	○	○	○										
SK 353	Ⅴ	●	●						●									○	○	●	●	●	●	●		●	●					●	●	●	●	●	●									●						●	●		●										
SK 354	Ⅴ	○	○															○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○			○	○											○	○												
SK 355	Ⅴ	○	○															○	○							○	○					○	○	○	○	○	○															○	○	○	○										
SK 356	Ⅴ	○	○															○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○									○	○					○	○												
SK 358	Ⅴ	○	○															○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○			○	○					○	○					○	○	○	○										
SK 36	Ⅴ	●	●													●			●	●	●				●	●					●		●																		●													
SK 363	Ⅴ	○	○												○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○			○	○					○	○					○	○	○	○										
SK 40	Ⅴ	●	●	●								●		●				●		●		●	●	●		●	●	●		●		●		●	●	●	●	●			●	●									●	●			●	●									
SK 53	Ⅴ	●	●												●						●	●	●		●	●							●																	●	●				●									
SK 55	Ⅴ	●																				●																														●													
SK 85	Ⅴ	●	●						●						●		●	●		●	●	●	●	●	●	●	●					●	●													●					●	●													
SK 87	Ⅴ	●	●																		●	●												●																															
SK 89	Ⅴ	●	●														●				●	●	●			●	●	●			●																				●													
SK 91	Ⅴ	●	●																●		●		●		●																										●													
SK 01	Ⅴ？	●										○						●						●			●	○					●		●	●			●																			●									
SK 104	Ⅲ～Ⅴ	●	●														●				●	●	●										●		●																													
SK 107	Ⅲ～Ⅴ	●	●														●				●	●																																										
SK 119	Ⅲ～Ⅴ	●	●						●													●	●	●								●																																	
SK 368	Ⅲ～Ⅴ	○	○																			○	○									○	○	○	○	○	○																											
SK 73	Ⅲ～Ⅴ	●	●														●				●	●	●		●	●																									●													
SK 74	Ⅲ～Ⅴ	●	●									●					●					●	●				●		●			●				●										●					●														
SK 81	Ⅲ～Ⅴ	●	●																		●	●	●												●																													
SK 86	Ⅲ～Ⅴ																					●	●			●								●																		●	●												
SK 94	Ⅲ～Ⅴ	●	●																		●																														●													
SK 98	Ⅲ～Ⅴ	●	●						●												●	●	●				●																					●	●			●													
SK 362	Ⅲ～Ⅴ？	○	○																	○	○	○	○			○	○							○	○											○	○																		
SK 78	Ⅲ～Ⅴ？	●	●																	●	●	●	●	●											●																														
SD 07	中世	●																																																													

Tab. 29 遺構出土瓦敲打痕分類

遺構名	遺構時期	3Ba								3Bb				3Bc		3Bd		3Be		4						5										6																		無文	
		1		2-1 賀茂		2-2 賀		3		4		1		2						A		Ba		Bb		A		B		C		D		E		A a		A b		B		C		D		E		F		G		H		I		J		K	
		平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK 57	Ⅱ																											●								●						●																○	○
SK 69	Ⅱ																																			●						●										●						○	○
SK 70	Ⅱ																											●		●												●										●						○	○
SD 235	Ⅲ																																																								
SD 270	Ⅲ																									○	○																															○	○
SK 155	Ⅲ？																									○	○																															○	○
SK 224	Ⅲ？																																																								
SB 11	Ⅲ以降																																																								
SD 06	Ⅲ～Ⅴ																																																								
SK 05	Ⅲ～Ⅴ																																																								
SK 23	Ⅲ～Ⅴ	●																										●								●																●		●				○	○
SK 66	Ⅲ～Ⅴ																											●		●						●																●						○	○
SK 72	Ⅲ～Ⅴ																											●								●						●										●						○	○
SD 252	Ⅳ							○	○																	○	○	○	○							○	○															○	○					○	○
SK 100	Ⅳ																											●								●	●					●										●							
SK 151	Ⅳ																	●								●		●								●				●		●										●		●				○	○
SK 207	Ⅳ																									○	○	○	○							○	○			○	○											○	○					○	○
SK 229	Ⅳ																											○	○	○	○					○	○																					○	○
SK 246	Ⅳ																									○	○									○	○															○	○					○	○
SK 249	Ⅳ																											○	○																														
SK 251	Ⅳ																																																								○	○
SK 255	Ⅳ			●				●				●		●				●		●						○	○	●		○	○					○	○			○	○	●	●							●		●						○	○
SK 261	Ⅳ																									○	○									○	○															○	○					○	○
SK 262	Ⅳ																									○	○	●								○	○			○	○	○	○	○	○					○	○					○	○
SK 38	Ⅳ																	●								●		●		●						●						●										●						○	○
SK 54	Ⅳ																											●						●		●	●					●										●						○	○
SK 56	Ⅳ																	●								●		●		●						●				●		●										●		●				○	○
SK 61	Ⅳ																											●		●						●	●					●										●		●				○	○
SK 62	Ⅳ																											●								●						●										●		●				○	○
SK 75	Ⅳ			●						●																●		●	●	●					●	●	●					●	●									●						○	○
SK 80	Ⅳ																											●								●	●					●										●	●					○	○
SK 82	Ⅳ	●					●									●										●		●								●						●										●	●	●				○	○
SK 90	Ⅳ																	●												●						●																●		●				○	○
SK 92	Ⅳ																									●										●	●					●	●									●		●				○	○
SK 93	Ⅳ																											●														●										●						○	○
SK 83	Ⅳ以前																											●												●												●						○	○
SK 84	Ⅳ以前																											●								●						●										●						○	○
SD 357	Ⅳ～Ⅴ	○	○	●		○	○											●		○	○					●	●	●	●		●				●	●					○	○	○	○							●		●				○	○
SK 60	Ⅳ～Ⅴ																																			●						●																○	○
SK 59	Ⅳ～Ⅴ？																											●		●						●						●										●						○	○
SK 103	Ⅴ																	●									●	●								●						●										●						○	○
SK 105	Ⅴ																	●										●								●						●										●		●				○	○
SK 135	Ⅴ									●																		●								●						●		●								●						○	○
SK 147	Ⅴ															●												●																														○	○
SK 148	Ⅴ	●														●												●				●				●				●		●								●		●		●				○	○
SK 152	Ⅴ																	●								●		●								●				●		●										●		●				○	○
SK 159	Ⅴ	○	○	○	○	○	○									●		○	○							○	○	○	○							○	○			○	○	○	○							○	○	○	○			○	○
SK 160	Ⅴ	○	○	○	○			○	○				●			○	○	●								○	○	○	○	●		○	○			●	●	●				○	○			○	○					●	●	○	○	○	○	○	○
SK 208	Ⅴ	○	○	○	○	●	●	○	○			○	○	○	○				●	○	○					○	○	○	○	○	○					○	○			○	○	○	○	○	○	○	○					○	○	○	○			○	○
SK 211	Ⅴ	○	○	○	○																			○	○	○	○					○	○			○	○			○	○	○	○									○	○	○	○			○	○
SK 239	Ⅴ																																																								
SK 24	Ⅴ	●														●																										●																○	○
SK 243	Ⅴ	○	○	○	○			○	○																	○	○	○	○	○	○	●	●			○	○			●		○	○	○	○							○	○					○	○
SK 254	Ⅴ															○	○									○	○									○	○					○	○	○	○													○	○
SK 27	Ⅴ																									●	●	●								●																●						○	○
SK 351	Ⅴ	○	○	●		●	●											○	○							○	○	○	○	○	○					○	○					○	○	○	○													○	○
SK 352	Ⅴ	○	○	●		●	●	○	○							○	○									○	○	○	○			●										○	○	●	●	○	○					○	○					○	○
SK 353	Ⅴ			○	○	○	○																			○	○	○	○	○	○					○	○					○	○															○	○
SK 354	Ⅴ	○	○	●		○	○																			○	○															○	○	●														○	○
SK 355	Ⅴ	○	○	○	○	○	○																									●				○	○							●	●													○	○
SK 356	Ⅴ			○	○	○	○																					○	○							○	○							○	○													○	○
SK 358	Ⅴ	○	○	○	○	●						○	○	○	○											○	○	●		○	○	●				○	○							●	●							○	○	○	○			○	○
SK 36	Ⅴ																																			●						●												●				○	○
SK 363	Ⅴ	○	○	○	○	○	○							○	○			○	○							○	○	○	○	○	○											○	○	○	○							○	○	○	○			○	○
SK 40	Ⅴ	●		●			●									●										●	●	●		●		●				●						●										●						○	○
SK 53	Ⅴ																									●	●	●								●						●										●						○	○
SK 55	Ⅴ			●																																●				●												●						○	○
SK 85	Ⅴ																											●	●			●				●	●					●								●		●	●		●			○	○
SK 87	Ⅴ			●																																●																						○	
SK 89	Ⅴ	●		●																								●				●	●			●								●						●		●							
SK 91	Ⅴ																																											●								●						○	○
SK 01	Ⅴ？	●																●																						●																			
SK 104	Ⅲ～Ⅴ																											●								●																●						○	○
SK 107	Ⅲ～Ⅴ																																			●																●						○	○
SK 119	Ⅲ～Ⅴ																									●																										●						○	○
SK 368	Ⅲ～Ⅴ																																																				○	○				
SK 73	Ⅲ～Ⅴ																											●																														○	○
SK 74	Ⅲ～Ⅴ																															●				●																						○	○
SK 81	Ⅲ～Ⅴ						●																					●								●																●						○	○
SK 86	Ⅲ～Ⅴ																											●								●																●		●					
SK 94	Ⅲ～Ⅴ																																			●						●																○	○
SK 98	Ⅲ～Ⅴ			●																								●								●						●										●		●				○	○
SK 362	Ⅲ～Ⅴ？			○	○																					○	○																															○	○
SK 78	Ⅲ～Ⅴ？																											●														●										●						○	○
SD 07	中世																																																								

Tab. 30 遺構出土瓦敲打痕分類

遺構名	遺構時期	縄目		1								2						老	
				A		B		C		D		A		B		C			
		平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SD 1045	Ⅱ～Ⅴ	●												●					
SD 1116	Ⅱ～Ⅴ	●	●																
SG 1115 (SD08・10)	Ⅱ～Ⅴ	●	●														●		
SG 1054	Ⅱ	●																	
SX 15303	Ⅱ	●																●	
SX 1078	Ⅲ～Ⅴ																		
SD 17001	Ⅳ～Ⅴ	●	●											●					
SG 1046	Ⅴ以降	●	●	○		○		○		○		●		●		●	●		
SX 1245 裏込め	Ⅰ	●																	
SA 18370	Ⅰ～Ⅲ																		
SP 18295	Ⅰ～Ⅲ	●																	
SP 18606 SP 18607	Ⅰ～Ⅲ	●																	
SM 1132 g 840	Ⅱ前	●	●		●														
SA 1104	Ⅱ	●	●																
SA 1237	Ⅱ	●	●											●					
SA 18601	Ⅱ	●																	
SK 1128	Ⅱ	●	●											●				●	
SK 1124	Ⅱ	●	●											●					
SK 1125	Ⅱ	●	●											●				●	
SK 25043	Ⅱ	●	●											●					
SB 1228	Ⅲ	●												●					
SK 1262	Ⅲ	●	●								●						●		
SK 14511	Ⅲ	●															●		
SK 1246	Ⅲ以降	●	●																
SK 1110	Ⅲ～Ⅴ	●	●																
SK 1231	Ⅲ～Ⅴ	●																	
SK 1258	Ⅲ～Ⅴ	●	●					●								●	●		
SK 1259	Ⅲ～Ⅴ	●	●				●												
SK 1269	Ⅲ～Ⅴ	●	●				●							●					
SX 19500	Ⅲ～Ⅴ	●	●	●													●	●	
SB 17702	Ⅲ～Ⅴ	●																	
SD 1122	Ⅲ～Ⅴ	●	●														○		
SK 1118	Ⅲ～Ⅴ	●	●																
SK 1121	Ⅲ～Ⅴ	●	●																
SK 1265	Ⅲ～Ⅴ	●	●																
SK 1267	Ⅲ～Ⅴ	●	●																
SK 1270	Ⅲ～Ⅴ	●	●											●		●	●	●	
SK 1271	Ⅲ～Ⅴ	●	●																
SK 18290	Ⅲ～Ⅴ	●																	
SK 21123	Ⅲ～Ⅴ																		
SK 21127	Ⅲ～Ⅴ	●	●																
SX 19512	Ⅲ～Ⅴ	●	●																
SX 1245 前面	Ⅲ～Ⅴか	●	●																
SK 14271	Ⅳ																		
SK 14273	Ⅳ	●																	
SK 14277	Ⅳ															●			
SK 14513	Ⅳ	●	●	●												●			
SK 25049	Ⅳ																		
SK 25051	Ⅳ													●					
SK 25052	Ⅳ																		
SK 1273	Ⅳ以降	●	●											●					
SK 1274	Ⅳ以降																		
SK 1276	Ⅳ以降	●	●													●			
SK 1277	Ⅳ以降	●	●																
SK 1264	Ⅳ～Ⅴ	●	●											●					
SK 18310	Ⅳ～Ⅴ	●	●													●			
SK 14339	Ⅳ～Ⅴ	●	●																
SK 18286	Ⅳ～Ⅴ		●																
SK 18364	Ⅳ～Ⅴ	●																	
SK 18377	Ⅳ～Ⅴ	●	●																
SK 1255	Ⅴ	●	●	●															
SK 21125	Ⅴ	●	●																
SK 14188	Ⅴ	●																	
SK 14510	Ⅴ	●	●																
SK 14529	Ⅴ																		
SK 18313 SK 18385	Ⅴ	●																	
SK 18328	Ⅴ																		
SK 25044	Ⅴ	●			●														
SX 18500	不明	●	●																
SX 19610	不明	●	●											●					

遺構名	遺構時期	3Aa													
		1						2							
		1		2		3		1a		1b		1c		2	
		平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SD 1045	Ⅱ～Ⅴ														
SD 1116	Ⅱ～Ⅴ														
SG 1115 (SD08・10)	Ⅱ～Ⅴ					●									
SG 1054	Ⅱ														
SX 15303	Ⅱ														
SX 1078	Ⅲ～Ⅴ														
SD 17001	Ⅳ～Ⅴ														
SG 1046	Ⅴ以降	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SX 1245 裏込め	Ⅰ			●					●						
SA 18370	Ⅰ～Ⅲ														
SP 18295	Ⅰ～Ⅲ														
SP 18606 SP 18607	Ⅰ～Ⅲ														
SM 1132 g 840	Ⅱ前								●					●	
SA 1104	Ⅱ			●			●								●
SA 1237	Ⅱ														
SA 18601	Ⅱ														
SK 1128	Ⅱ			●		●		●							
SK 1124	Ⅱ														
SK 1125	Ⅱ														
SK 25043	Ⅱ														
SB 1228	Ⅲ		●	●		●		●		●				●	●
SK 1262	Ⅲ	●		●	●			●	●						
SK 14511	Ⅲ	●							●						
SK 1246	Ⅲ以降		●					●							
SK 1110	Ⅲ～Ⅴ			●				●							
SK 1231	Ⅲ～Ⅴ				●										
SK 1258	Ⅲ～Ⅴ	●	●	●	●	●		●	●	●				●	●
SK 1259	Ⅲ～Ⅴ	●		●	●			●	●	●				●	●
SK 1269	Ⅲ～Ⅴ	●	●	●	●			●	●		○			●	
SX 19500	Ⅲ～Ⅴ	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●
SB 17702	Ⅲ～Ⅴ	○	○												
SD 1122	Ⅲ～Ⅴ				●			●							
SK 1118	Ⅲ～Ⅴ			●					●						
SK 1121	Ⅲ～Ⅴ			●											
SK 1265	Ⅲ～Ⅴ			●		●		●	●						
SK 1267	Ⅲ～Ⅴ														
SK 1270	Ⅲ～Ⅴ	●	●	●	●	●	●	●			●			●	●
SK 1271	Ⅲ～Ⅴ			●				●							
SK 18290	Ⅲ～Ⅴ					●		●	●					●	
SK 21123	Ⅲ～Ⅴ														
SK 21127	Ⅲ～Ⅴ				●										
SX 19512	Ⅲ～Ⅴ	●		●		●		●		●		●		●	●
SX 1245 前面	Ⅲ～Ⅴか				●									●	●
SK 14271	Ⅳ				●										
SK 14273	Ⅳ			●	●										●
SK 14277	Ⅳ	●		●				●							
SK 14513	Ⅳ	●		●	●				●						
SK 25049	Ⅳ														
SK 25051	Ⅳ														
SK 25052	Ⅳ			●				●							
SK 1273	Ⅳ以降	●		●				●							
SK 1274	Ⅳ以降	●		●	●			●			●				
SK 1276	Ⅳ以降			●	●			●	●	●				●	●
SK 1277	Ⅳ以降	●									●				
SK 1264	Ⅳ～Ⅴ	●	●	●	●			●	●					●	●
SK 18310	Ⅳ～Ⅴ	●	●	●	●	●		●	●					●	
SK 14339	Ⅳ～Ⅴ	●						●							
SK 18286	Ⅳ～Ⅴ			●											
SK 18364	Ⅳ～Ⅴ	●								●	●				
SK 18377	Ⅳ～Ⅴ			●		●		●							
SK 1255	Ⅴ	●	●	●	●	●		●	●	●	●			●	●
SK 21125	Ⅴ	●	●	●										●	
SK 14188	Ⅴ	●													
SK 14510	Ⅴ			●				●						●	
SK 14529	Ⅴ								●						
SK 18313 SK 18385	Ⅴ			●						●					
SK 18328	Ⅴ							●							
SK 25044	Ⅴ			●	●			●							
SX 18500	不明	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○	●	●
SX 19610	不明			●	●			●	●					●	

遺構名	遺構時期	3Ab																	
		1		2		3		4						5		6			
								a		b		c				a		b	
		平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SD 1045	Ⅱ～Ⅴ	●																	
SD 1116	Ⅱ～Ⅴ																		
SG 1115 (SD08・10)	Ⅱ～Ⅴ																		
SG 1054	Ⅱ																		
SX 15303	Ⅱ																		
SX 1078	Ⅲ～Ⅴ																		
SD 17001	Ⅳ～Ⅴ	●																	
SG 1046	Ⅴ以降	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SX 1245 裏込め	Ⅰ																		
SA 18370	Ⅰ～Ⅲ																		
SP 18295	Ⅰ～Ⅲ																		
SP 18606 SP 18607	Ⅰ～Ⅲ																		
SM 1132 g 840	Ⅱ前	●																	
SA 1104	Ⅱ																		
SA 1237	Ⅱ																		
SA 18601	Ⅱ																		
SK 1128	Ⅱ												○						
SK 1124	Ⅱ																		
SK 1125	Ⅱ																		
SK 25043	Ⅱ																		
SB 1228	Ⅲ	●	●					●											
SK 1262	Ⅲ																		
SK 14511	Ⅲ																		
SK 1246	Ⅲ以降	●																	
SK 1110	Ⅲ～Ⅴ																		
SK 1231	Ⅲ～Ⅴ																		
SK 1258	Ⅲ～Ⅴ	●																	●
SK 1259	Ⅲ～Ⅴ	●		●															
SK 1269	Ⅲ～Ⅴ																		
SX 19500	Ⅲ～Ⅴ	●	●	●	●	●b		●					●	●					●
SB 17702	Ⅲ～Ⅴ						●												
SD 1122	Ⅲ～Ⅴ																		
SK 1118	Ⅲ～Ⅴ																		
SK 1121	Ⅲ～Ⅴ																		
SK 1265	Ⅲ～Ⅴ			●															
SK 1267	Ⅲ～Ⅴ																		
SK 1270	Ⅲ～Ⅴ																		
SK 1271	Ⅲ～Ⅴ																		
SK 18290	Ⅲ～Ⅴ																		●
SK 21123	Ⅲ～Ⅴ	●																	
SK 21127	Ⅲ～Ⅴ																		
SX 19512	Ⅲ～Ⅴ															●			
SX 1245 前面	Ⅲ～Ⅴか																		
SK 14271	Ⅳ																		
SK 14273	Ⅳ	●																	
SK 14277	Ⅳ																		
SK 14513	Ⅳ			●												●			
SK 25049	Ⅳ																		
SK 25051	Ⅳ		●																
SK 25052	Ⅳ																●		
SK 1273	Ⅳ以降																		
SK 1274	Ⅳ以降	●		●										●					
SK 1276	Ⅳ以降																		
SK 1277	Ⅳ以降	●																	
SK 1264	Ⅳ～Ⅴ	●																	○
SK 18310	Ⅳ～Ⅴ	●		●	●														
SK 14339	Ⅳ～Ⅴ																		
SK 18286	Ⅳ～Ⅴ																		
SK 18364	Ⅳ～Ⅴ																		
SK 18377	Ⅳ～Ⅴ																		
SK 1255	Ⅴ	●	●	●															
SK 21125	Ⅴ	●																	
SK 14188	Ⅴ	●		●															
SK 14510	Ⅴ				●														
SK 14529	Ⅴ																		
SK 18313 SK 18385	Ⅴ			●														●	
SK 18328	Ⅴ																		
SK 25044	Ⅴ																		
SX 18500	不明	●	●	●	●			○		○		○		●					
SX 19610	不明		●	●															

遺構名	遺構時期	3Ac													
		1						2							
		1		2		3		1		2		3		4	
		平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SD 1045	Ⅱ～Ⅴ														
SD 1116	Ⅱ～Ⅴ														
SG 1115 (SD08・10)	Ⅱ～Ⅴ														
SG 1054	Ⅱ														
SX 15303	Ⅱ														
SX 1078	Ⅲ～Ⅴ														
SD 17001	Ⅳ～Ⅴ														
SG 1046	Ⅴ以降	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SX 1245 裏込め	Ⅰ					●									
SA 18370	Ⅰ～Ⅲ														
SP 18295	Ⅰ～Ⅲ														
SP 18606 SP 18607	Ⅰ～Ⅲ														
SM 1132 g 840	Ⅱ前														
SA 1104	Ⅱ														
SA 1237	Ⅱ														
SA 18601	Ⅱ														
SK 1128	Ⅱ														
SK 1124	Ⅱ														
SK 1125	Ⅱ														
SK 25043	Ⅱ														
SB 1228	Ⅲ						●					●			
SK 1262	Ⅲ														
SK 14511	Ⅲ														
SK 1246	Ⅲ以降														
SK 1110	Ⅲ～Ⅴ														
SK 1231	Ⅲ～Ⅴ														
SK 1258	Ⅲ～Ⅴ														
SK 1259	Ⅲ～Ⅴ														
SK 1269	Ⅲ～Ⅴ														
SX 19500	Ⅲ～Ⅴ	●	●	●		●									
SB 17702	Ⅲ～Ⅴ	○	●												
SD 1122	Ⅲ～Ⅴ														
SK 1118	Ⅲ～Ⅴ														
SK 1121	Ⅲ～Ⅴ														
SK 1265	Ⅲ～Ⅴ														
SK 1267	Ⅲ～Ⅴ														
SK 1270	Ⅲ～Ⅴ	●													
SK 1271	Ⅲ～Ⅴ														
SK 18290	Ⅲ～Ⅴ														
SK 21123	Ⅲ～Ⅴ														
SK 21127	Ⅲ～Ⅴ														
SX 19512	Ⅲ～Ⅴ	●		●											
SX 1245 前面	Ⅲ～Ⅴか			●											
SK 14271	Ⅳ														
SK 14273	Ⅳ														
SK 14277	Ⅳ					●									
SK 14513	Ⅳ														
SK 25049	Ⅳ														
SK 25051	Ⅳ														
SK 25052	Ⅳ														
SK 1273	Ⅳ以降														
SK 1274	Ⅳ以降					●									
SK 1276	Ⅳ以降														
SK 1277	Ⅳ以降														
SK 1264	Ⅳ～Ⅴ					●									
SK 18310	Ⅳ～Ⅴ														
SK 14339	Ⅳ～Ⅴ		●						○						
SK 18286	Ⅳ～Ⅴ														
SK 18364	Ⅳ～Ⅴ														
SK 18377	Ⅳ～Ⅴ														
SK 1255	Ⅴ	●		●	●										
SK 21125	Ⅴ														
SK 14188	Ⅴ		●												
SK 14510	Ⅴ														
SK 14529	Ⅴ														
SK 18313 SK 18385	Ⅴ														
SK 18328	Ⅴ														
SK 25044	Ⅴ														
SX 18500	不明	●	●	●	●			●	●	●	●	●	●	●	
SX 19610	不明	●													

Tab.31 遺構出土瓦敲打痕分類

遺構名	遺構時期	3Ba								3Bb				3Bc		3Bd		3Be		4						5								6																						無文	
		1		2-1 賀茂		2-2 賀		3		4		1		2						A		Ba		Bb		A		B		C		D		E		A a		A b		B		C		D		E		F		G		H		I		J		K			
		平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SD 1045	Ⅱ～Ⅴ																																																										
SD 1116	Ⅱ～Ⅴ																																																										
SG 1115 (SD08・10)	Ⅱ～Ⅴ															○																																											
SG 1054	Ⅱ																																																										
SX 15303	Ⅱ																																																										●
SX 1078	Ⅲ～Ⅴ																																																										
SD 17001	Ⅳ～Ⅴ																																																										
SG 1046	Ⅴ以降	●	●	○		○		●				●		●	●			●	●	●	●	●		●		●	●	●		●						○	○	○	○	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●								●	●
SX 1245 裏込め	Ⅰ	●															●									●																										●							○	○
SA 18370	Ⅰ～Ⅲ																																																										○	○
SP 18295	Ⅰ～Ⅲ																																																										○	○
SP 18606 SP 18607	Ⅰ～Ⅲ																																																										
SM 1132 g 840	Ⅱ前	●																																								●		●															○	○
SA 1104	Ⅱ																																																			●							○	○
SA 1237	Ⅱ																																																										○	○
SA 18601	Ⅱ																																																										○	
SK 1128	Ⅱ																																																			●							○	○
SK 1124	Ⅱ																																																										
SK 1125	Ⅱ																																							●																				
SK 25043	Ⅱ																																																										
SB 1228	Ⅲ	●						●		●		●				●	●									●		●														●				●													○	○
SK 1262	Ⅲ	●														●																																				●							○	○
SK 14511	Ⅲ																													●																													
SK 1246	Ⅲ以降	●				●																					●			●																				●									○	○
SK 1110	Ⅲ～Ⅴ																																																			●							○	○
SK 1231	Ⅲ～Ⅴ			○																																																								○	○
SK 1258	Ⅲ～Ⅴ	●																										●														●						●		●	●	●							○	○
SK 1259	Ⅲ～Ⅴ	●		●				●		●				●														●												●										●								○	○
SK 1269	Ⅲ～Ⅴ																										●			●																													○	○
SX 19500	Ⅲ～Ⅴ	●		●		●	●					●		●						●	●	●		●		●	●	●	●	●						●				●		●		●				●		●							○	○
SB 17702	Ⅲ～Ⅴ	○	○																																																									
SD 1122	Ⅲ～Ⅴ																																																										○	○
SK 1118	Ⅲ～Ⅴ																											●																																○	○
SK 1121	Ⅲ～Ⅴ																																																			●							○	○
SK 1265	Ⅲ～Ⅴ																																																										○	○
SK 1267	Ⅲ～Ⅴ																																																										○	○
SK 1270	Ⅲ～Ⅴ	●														●																																											○	○
SK 1271	Ⅲ～Ⅴ																																																										○	○
SK 18290	Ⅲ～Ⅴ																										●	●																																
SK 21123	Ⅲ～Ⅴ																																																										○	
SK 21127	Ⅲ～Ⅴ	●																																																										○	○
SX 19512	Ⅲ～Ⅴ	●		●																																																								●	●
SX 1245 前面	Ⅲ～Ⅴか	●								●							●																																											○	○
SK 14271	Ⅳ	●																										●																								●								
SK 14273	Ⅳ	●										●																●														●			●					●								
SK 14277	Ⅳ																									●																																	
SK 14513	Ⅳ																		●									●														●								●								
SK 25049	Ⅳ																											●																															
SK 25051	Ⅳ																																																										
SK 25052	Ⅳ																																																										
SK 1273	Ⅳ以降																																																										○	○
SK 1274	Ⅳ以降																											●																								●								
SK 1276	Ⅳ以降																											●		●																						●							○	○
SK 1277	Ⅳ以降																													●												●																	○	○
SK 1264	Ⅳ～Ⅴ	●																									●	●		●												●										○							○	○
SK 18310	Ⅳ～Ⅴ	●																	●							●	●	●												●	●										●							○	○
SK 14339	Ⅳ～Ⅴ			●																●				●																				○						●									
SK 18286	Ⅳ～Ⅴ																											●																															
SK 18364	Ⅳ～Ⅴ	●																																																			○			●				
SK 18377	Ⅳ～Ⅴ																											○																															
SK 1255	Ⅴ	●		●										●		●	●										●	●																			●					●							○	○
SK 21125	Ⅴ	●																																																									○	
SK 14188	Ⅴ					●						●				●																												●										●					
SK 14510	Ⅴ																											●																								●							
SK 14529	Ⅴ													●																																													
SK 18313 SK 18385	Ⅴ																			●	●			●				●																															
SK 18328	Ⅴ																							●																																			
SK 25044	Ⅴ																											●																															
SX 18500	不明	●	●	●		●	●	●	●			●		●				●	●	●	●	●		●	●	●	●	●		●										●					●		●		●		●							○	○
SX 19610	不明																											●								●																							●	○

③貿易陶磁器（Fig.46 ～ 54、Tab.32）

貿易陶磁器は外国使節が行き来した第Ⅰ、Ⅱ期では、唐三彩の陶枕や統一新羅産の印花文土器などがあるが、出土量は少なく、外国使節の将来品であることを示している。

新羅や唐の海商による交易活動が盛んになる第Ⅲ期からは、貿易陶磁器類は増加していき、この時期では越州窯系青磁碗や邢窯系白磁碗が主体で、他の器種はわずかである。越州窯系青磁については、後述する浙江産と福建産があり、前者の方が主体である。長沙窯製品は褐彩黄釉水注、碗などあるが、青磁や白磁に比べるとかなり少ない。イスラム陶器はこの時期から出土するようになる（新羅土器、長沙窯などの詳細は④で触れる）。

鴻臚館での呉越の海商の滞在の記録がみられる第Ⅳ期では、量や器種ともに激増する（Fig.46）。この時期で主体となるのは越州窯系青磁である。これらは精製品と粗製品の二種類に大別され、前者が浙江産（１～ 16 ほか）、後者が福建産（懐安窯）（17 ～ 24 ほか）と理解されている。鴻臚館跡出土品は前者をＡ類、後者をＢ類に分類し、胎土や釉色から細分している（田中克子　2013『鴻臚館跡 20』）。器種は碗や坏、水注や鉢などがあり、このほか、褐彩陶器の水注（33）や鉢（39）、褐釉陶器の灯盞（燈明皿）（41）や香炉（40）、無釉陶器の茶碾輪（薬研）（42）、朝鮮半島産無釉陶器（43）、華北の定窯白磁（25）など多彩な製品が見られる。

第Ⅳ期の貿易陶磁器の廃棄土坑 SK38・56・75・80・82・255 の出土資料を Fig.47 ～ 53 に示した。これらの土坑から出土した貿易陶磁器は越州窯系青磁が主体で、組成には顕著な差が認められる。SK80 は福建省産とみられる粗製の越州窯系青磁（Ｂ群）が過半数を占め、中でも碗の占める割合が高い。これらの製品は火災により廃棄されたものではあるが、碗の見込みに溶着防止の粘土が付着した状態であることから、選別の手間を省くため、窯出しの状態で持ち込まれたと考えられている。SK56、255 は産地や器種にバリエーションがあり、複数の産地の様々な器種を集めたような構成である（Tab.32）。これらの器種構成の相違は海商と生産地との関係を示すもの、あるいは日本向けの商品の供給のあり方が反映しているものかもしれない。

第Ⅴ期になると、華南の景徳鎮窯白磁（56 ～ 61）が出現し、青磁は減少傾向となる（Fig.46）。白磁は口縁を折り返して玉縁状にした碗や皿が主体となる。青磁は毛彫りや片彫りの劃花文を施した碗（46 ～ 49）や水注（52、53）など、前代には見られなかったものが出土している。懐安窯製品は激減して見られなくなる。朝鮮半島産無釉陶器は壺や甕の大型品が見られる（Fig.54）。この段階では景徳鎮産白磁の底部に「綱」などの墨書したものが見られるようになる。このような墨書は 11 世紀後半以降、博多遺跡群で大量に出土する白磁にみられ、貿易集団の組織を示す「綱」に関わるものとして注目される。

第Ⅴ期の廃棄土坑 SK01・208 の出土資料を Fig.54、55 に示した。白磁の占める割合が高くなり、青磁の量が減少していることがわかる。出土状態を見ると破片の状態で廃棄されており、完形品が少ない。廃棄の様相が異なるものと考えられるが、第Ⅳ期のような粗製品が少なくなったことも関連するのかもしれない。

以上、鴻臚館跡では外交施設であった第Ⅰ・Ⅱ期と交易の場となった第Ⅲ期以降では貿易陶磁器のあり方が大きく変わったことが分かった。特に中国の海商たちの滞在の記録がみられるようになる第Ⅳ期以降は、彼らにより大量の越州窯系青磁などが商品として鴻臚館に持ち込まれたと考えられ、鴻臚館は本格的な貿易施設として様変わりする。

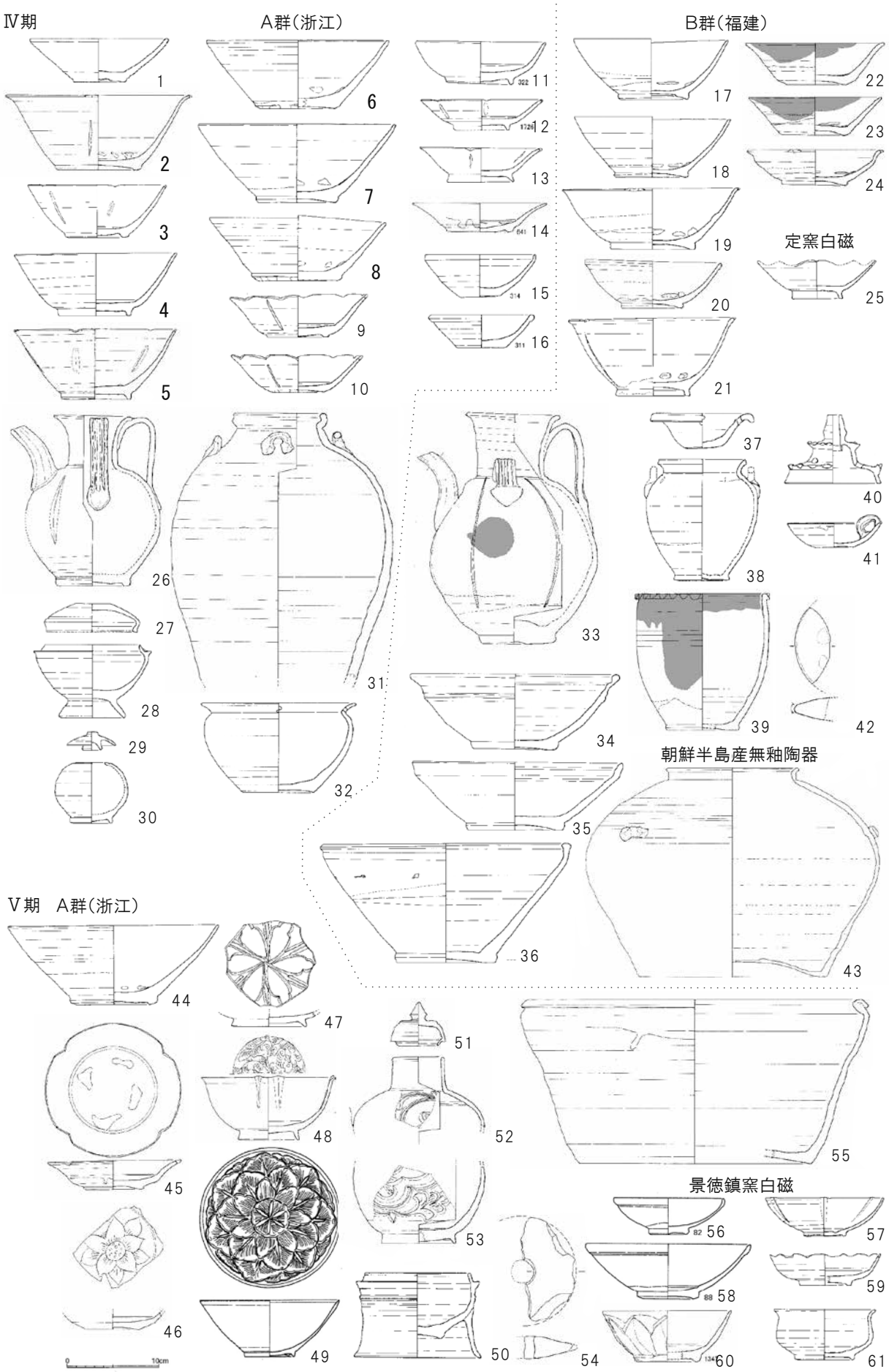


Fig.46 第Ⅳ・Ⅴ期陶磁器分類図（1/6）

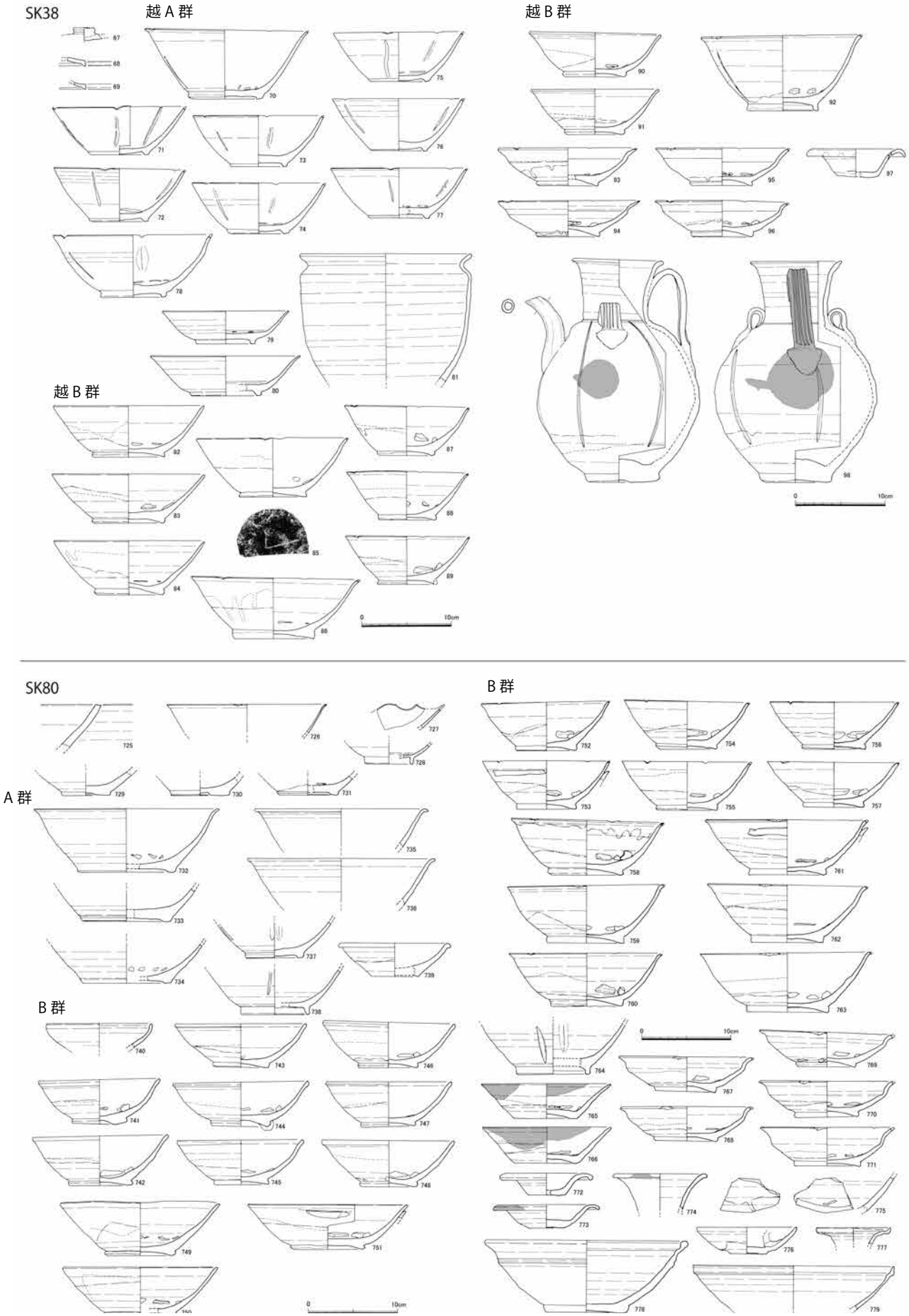


Fig.47 南館廃棄土坑出土第Ⅳ期陶磁器類実測図１（1/6）

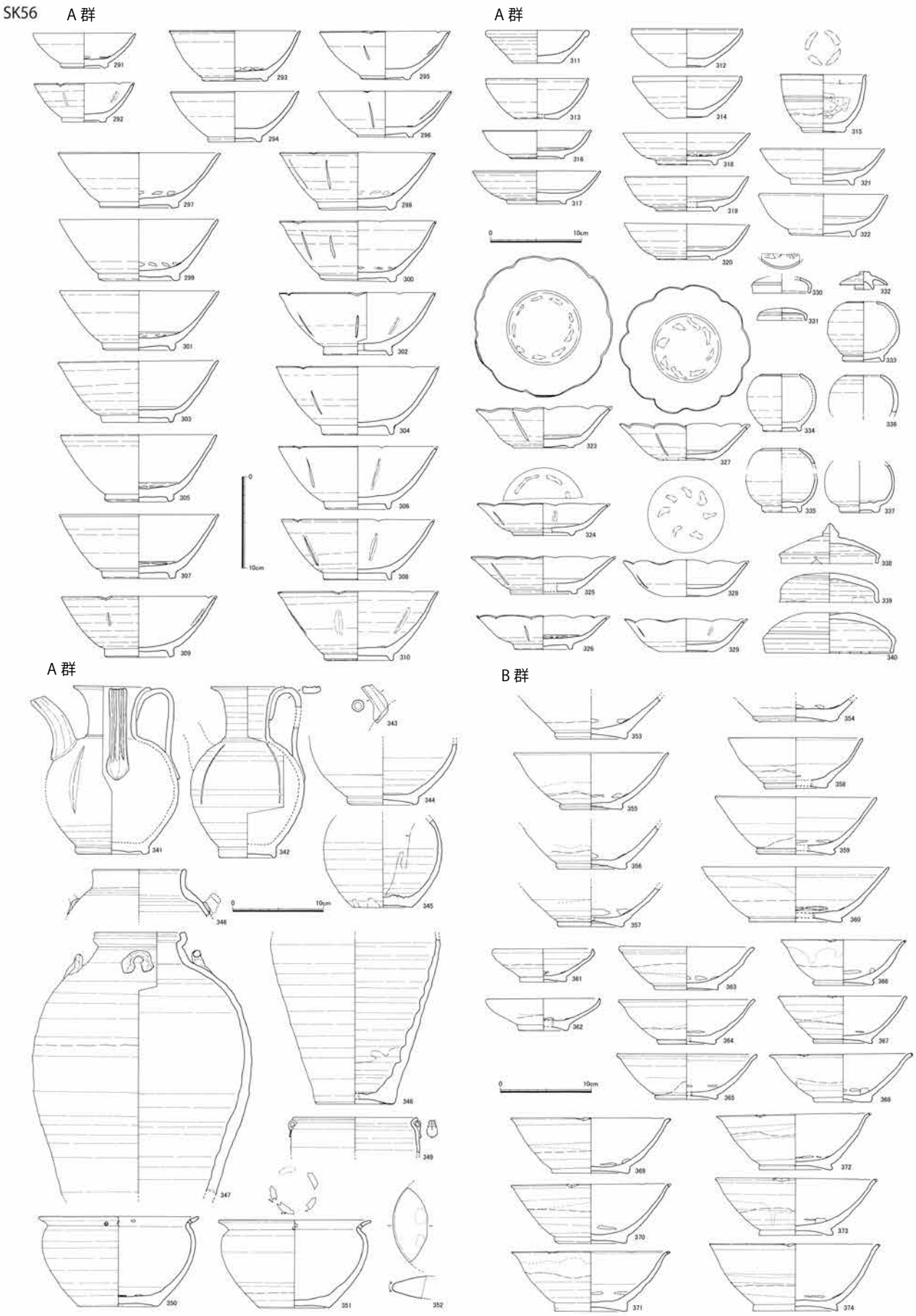


Fig.48 南館廃棄土坑出土第Ⅳ期陶磁器類実測図 2（1/6）

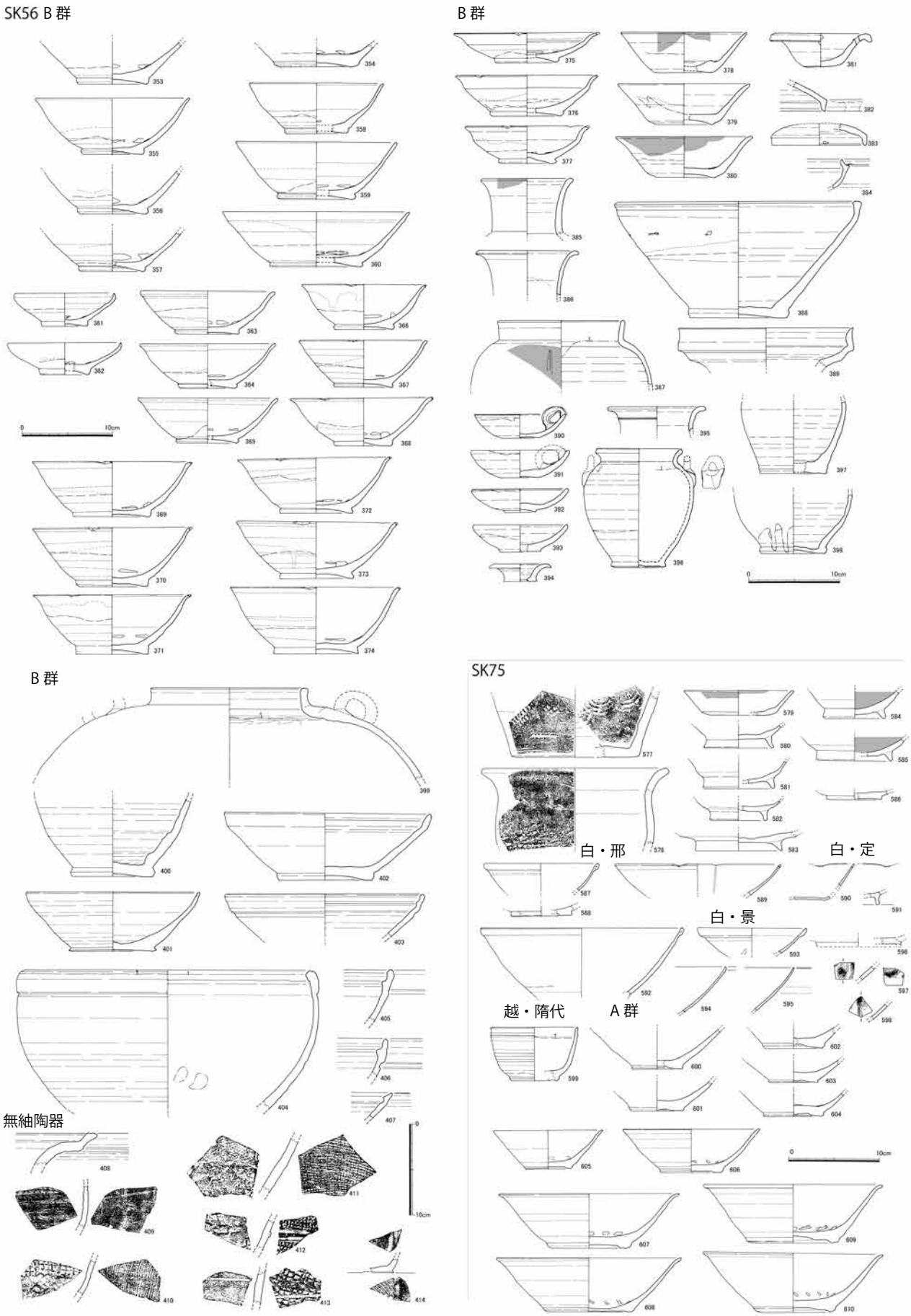


Fig.49 南館廃棄土坑出土第Ⅳ期陶磁器類実測図 3（1/6）

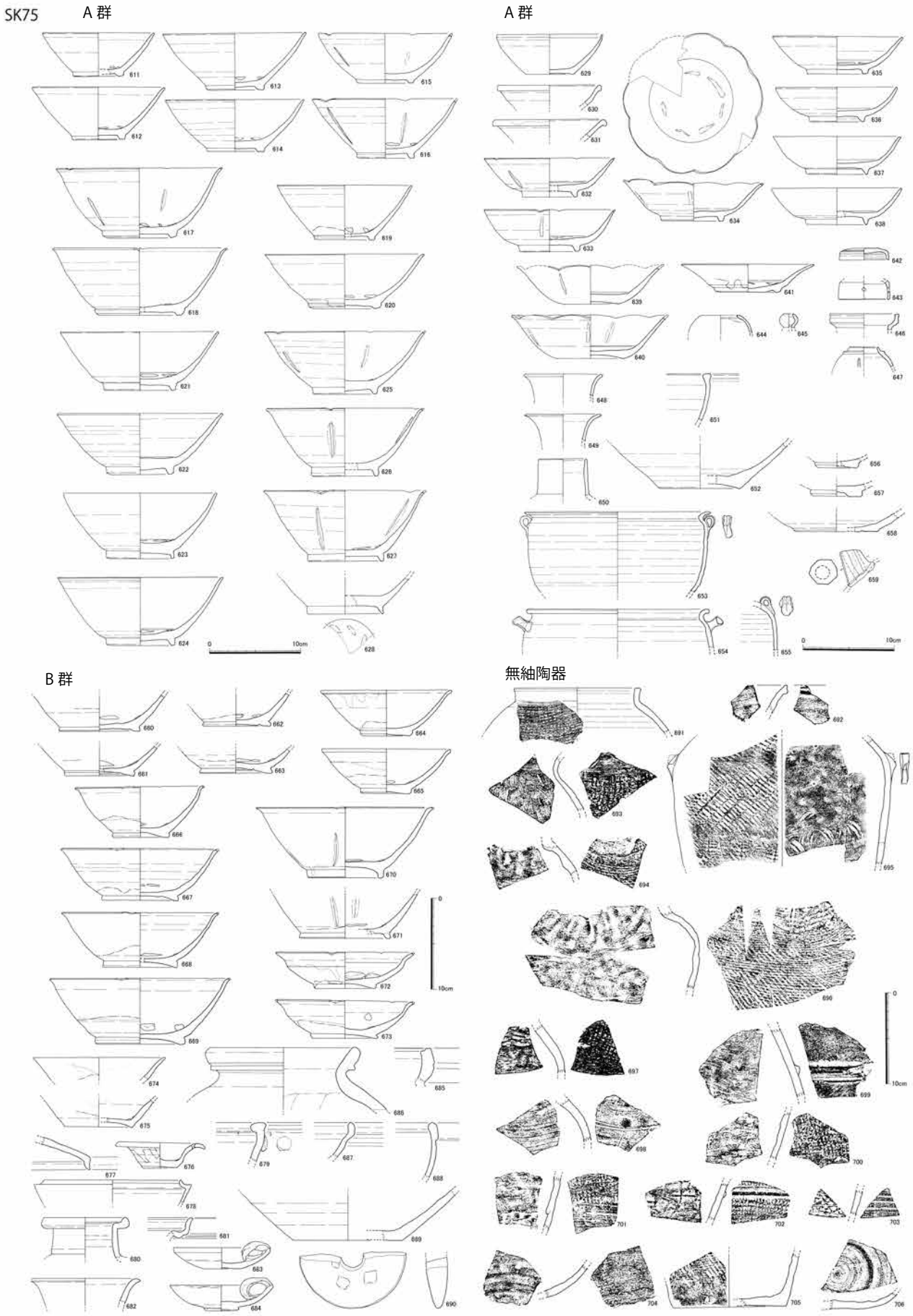


Fig.50 南館廃棄土坑出土第Ⅳ期陶磁器類実測図 4（1/6）

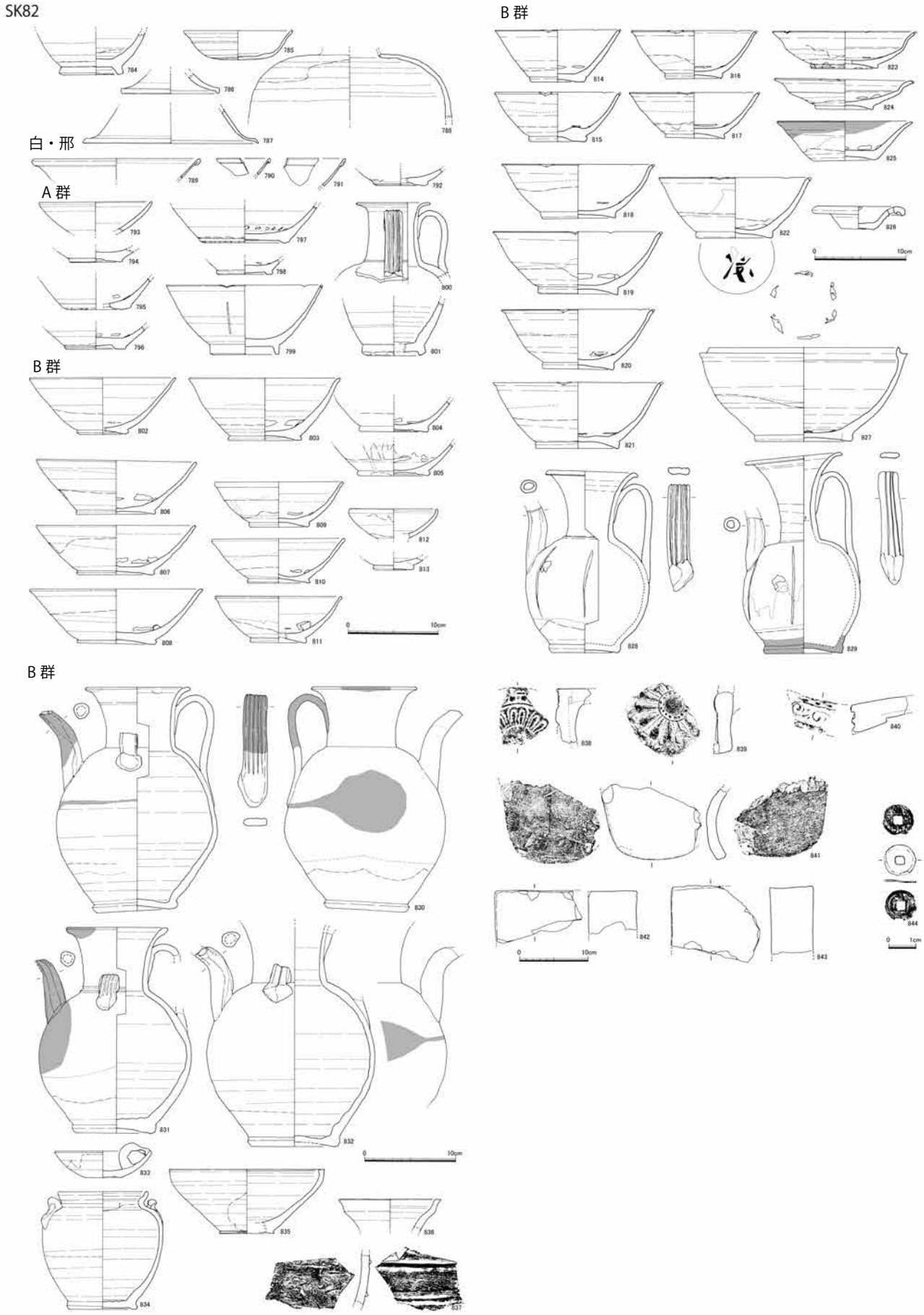


Fig.51 南館廃棄土坑出土第Ⅳ期陶磁器類実測図 5（1/6）

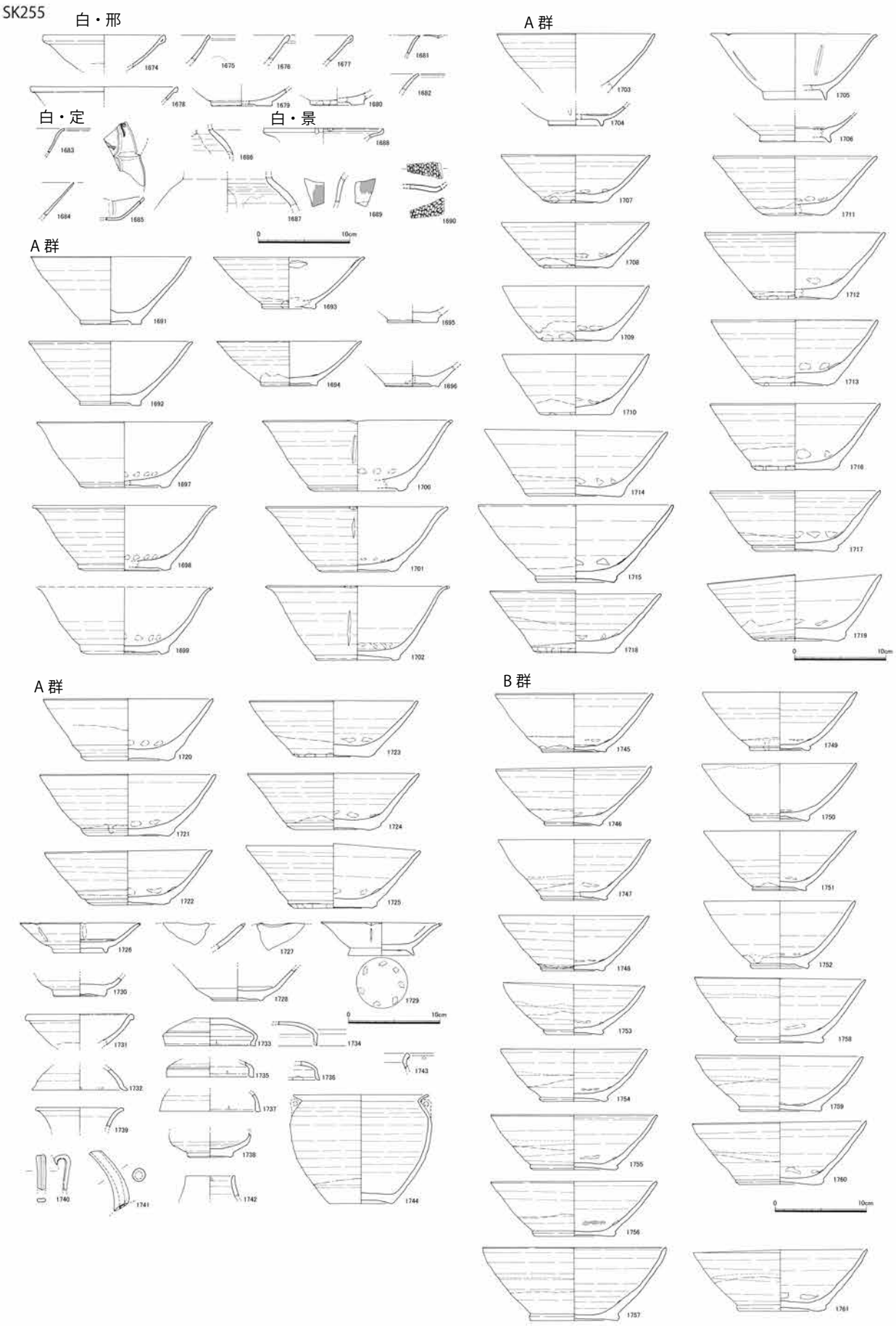


Fig.52 南館廃棄土坑出土第Ⅳ期陶磁器類実測図 6（1/6）

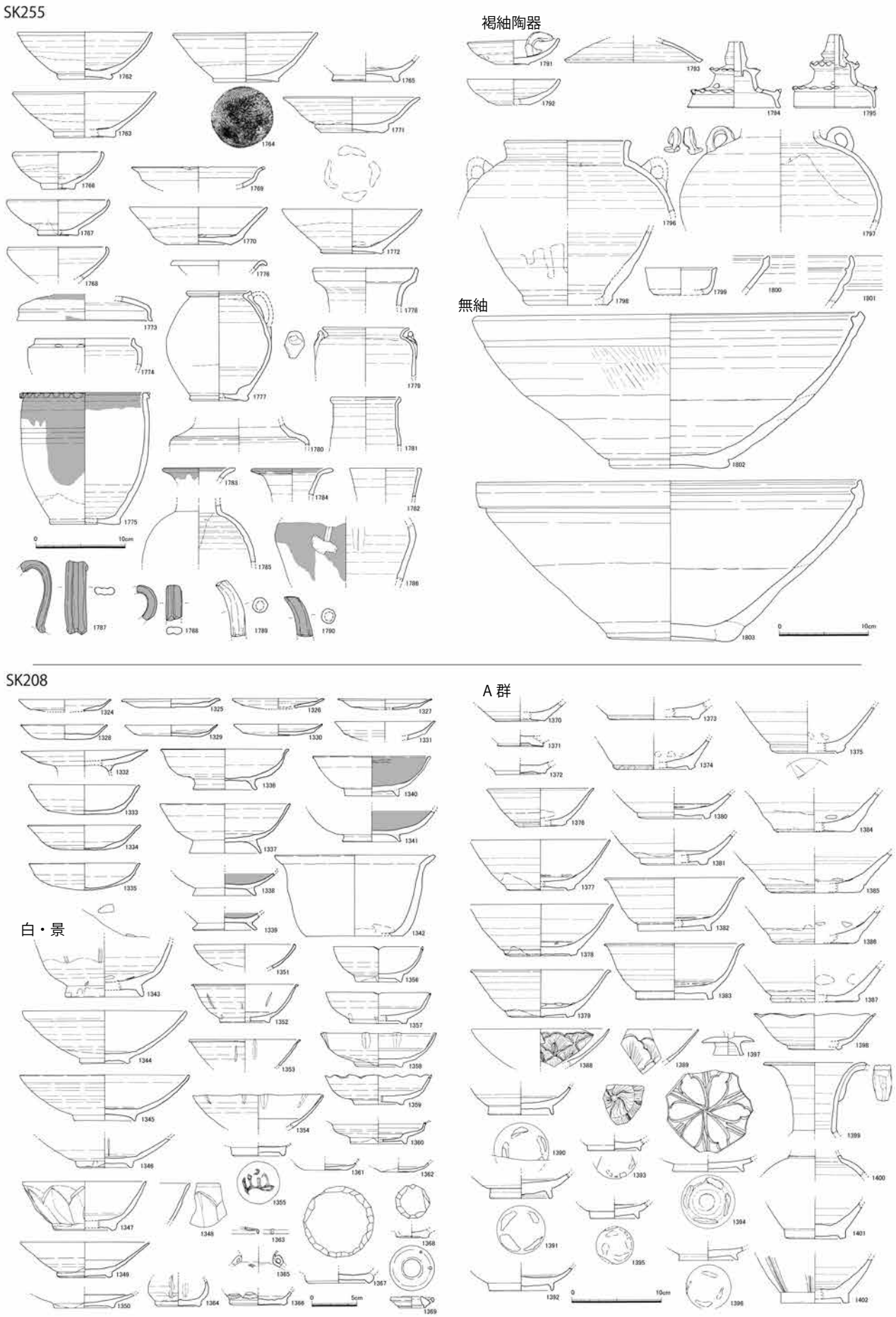
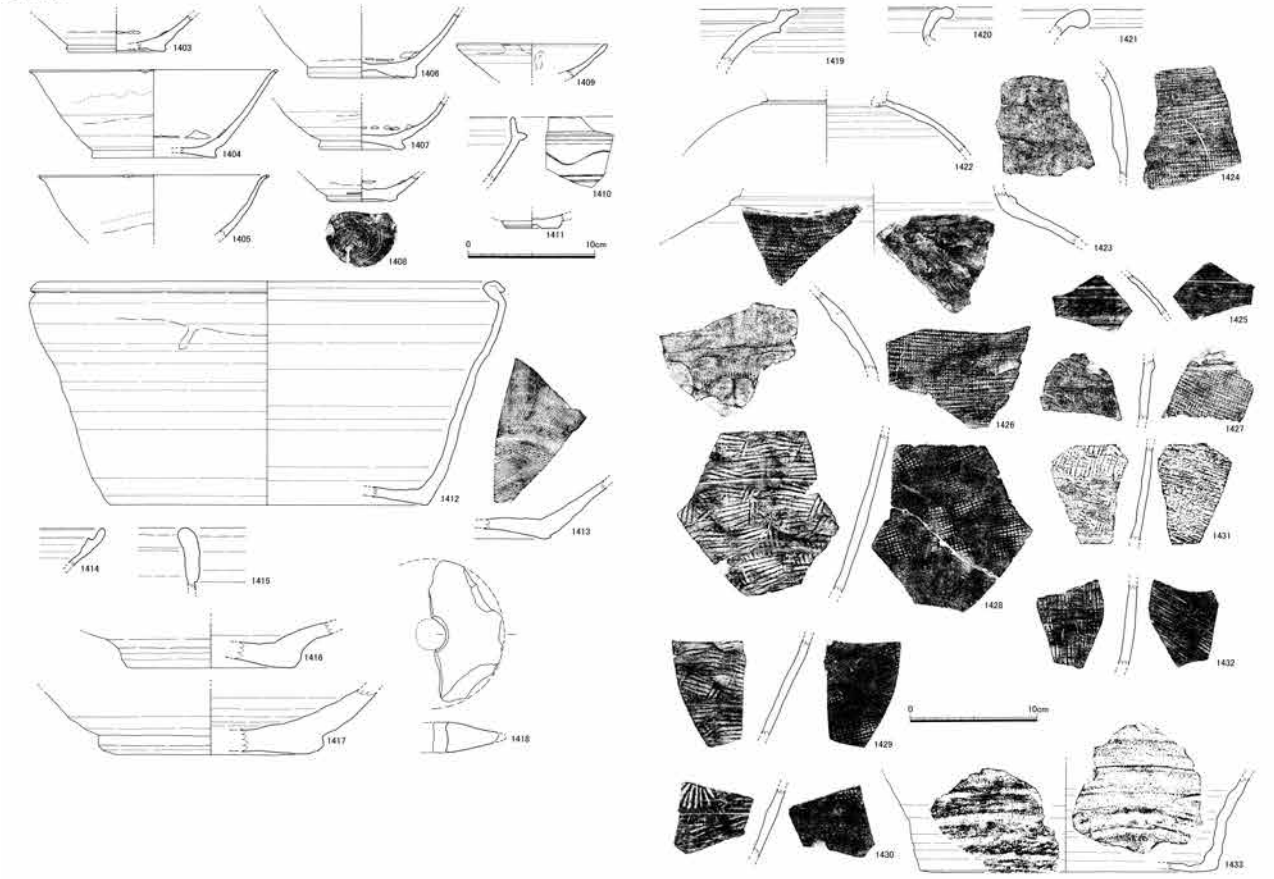


Fig.53 南館廃棄土坑出土第Ⅳ・Ⅴ期陶磁器類実測図 7（1/6）

SK208　B 群

無紬陶器



SK01　白・邢

白・景

越

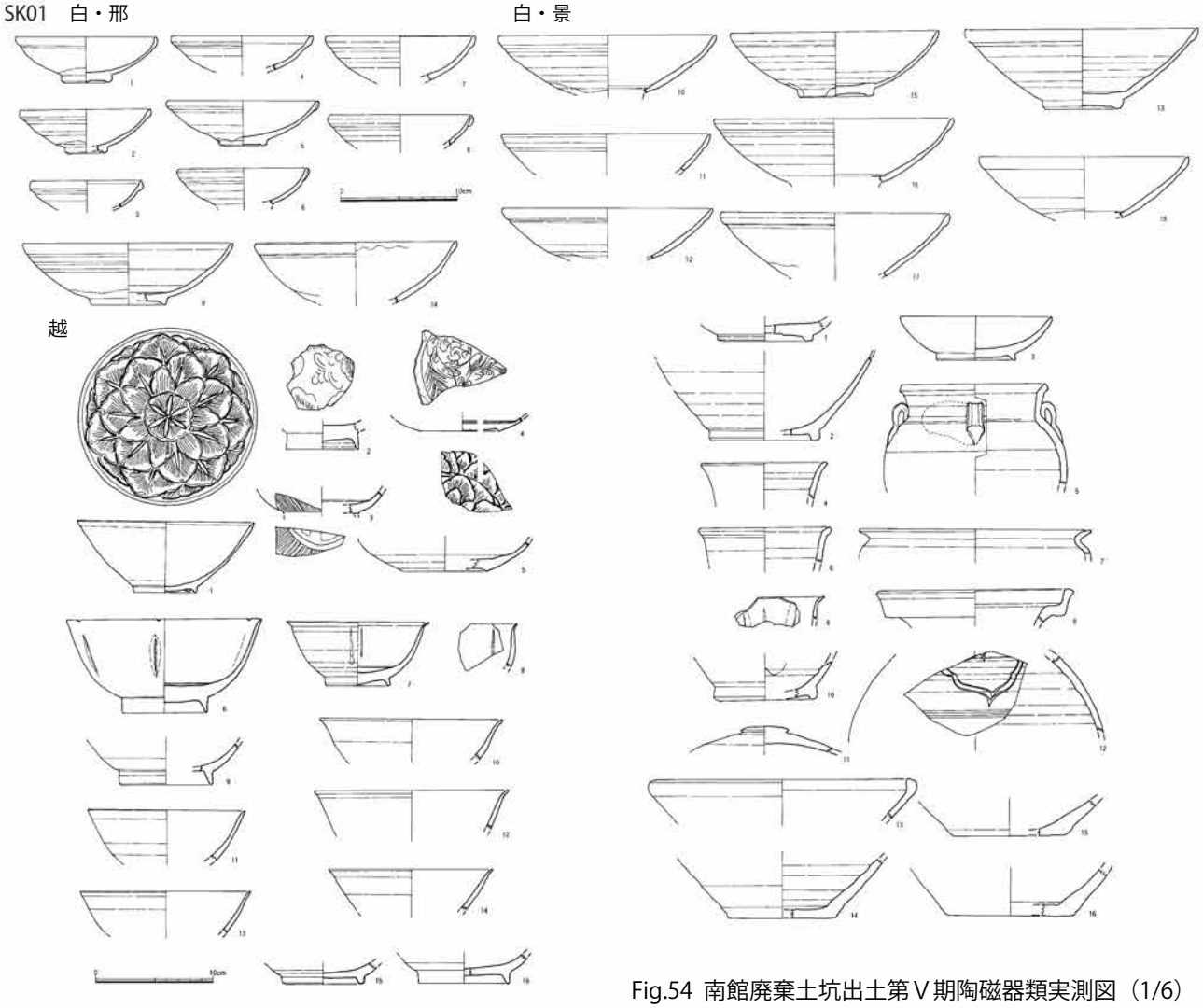


Fig.54 南館廃棄土坑出土第Ⅴ期陶磁器類実測図（1/6）

Tab. 32 一括廃棄土坑における越州窯系青磁と共伴遺物の出土状況

型式	形式		調査番号	8829 SK 38	8910 SK 56	8910 SK 61	8910 SK 82	8910 SK 75	8910 SK 80	9130 SK 246	9130 9236 SK 255
A1	碗		1		○	○	○	◎	○	○	◎
			2	○	○	○	○	●	○		◎
			3	●	⬤		○	⬤	○		
			4	○	●	○	○	●	○		○
			5			○		○			
	皿		1	○	●			◎			
			2							○	○
			3								○
			4								
		(稜花)	1		○			○			○
			2		○	○		○			
	坏		1		◎			○			
			2		○			○	○		○
	隋代坏				○			○			
	広口壺			○		○					
	水注・壺類				●		○	◎	○		○
	小型壺				●			○	○		
	蓋				○			○	○		○
	香炉蓋									○	
	合子				○			○		○	◎
		(小型)			○			○			
	鉢				○	○		○			○
	茶碾輪				○						
A2	碗		1								
			2								◎
			3								
	皿		1					○			
A3	碗		1		○	○					○
			2								
			3		○	○				○	●
	皿		1								
B	碗		1		○	○	○	○		⬤	●
			2	●	◎	○	○		○	○	●
			3	●	●	●	●	○	⬤	○	
			4	○	○	◎	○	○	●	○	○
			5		○	○	○		○	○	○
			6	○				○	○		○
	皿		1	○	○	○	○	○	◎		○
	坏		1		○	○	○	○	○		○
	水注・壺類			○	○		○	○		○	●
	蓋			○	○	○	○	○			○
	合子				○		○大型	○			○
	鉢				○			○			○
褐釉陶器	灯盞				○	○	○	○	○		○
	壺類				○	○	○			○	○
	蓋				○						○
	香炉蓋										○
陶器	壺類				○	○		○			◎
	捏鉢				○	○	○	○	○		●
	坏										○
	茶碾輪				○			○			
白磁	邢窯系	碗			・	○	・	○		・	○
	定窯系	碗							・		・
		皿			○				・		
	景徳鎮系	鉢			○						
		碗				・	・	○		○	
	不詳	小壺			○						
長沙窯系		碗			・						
白釉緑彩陶器		碗						・			・

点数(目安)
○ ～5
◎ 6～9
● 10～
⬤ 20～
⬤ 50～
・ 小破片

(鴻臚館跡 20 所収の田中克子氏の分類表を基に作成)

④新羅土器、特殊な貿易陶磁器（Fig.55、56、Tab.33）

印花文を施した新羅土器は第Ⅰ期、Ⅱ期に見られ、新羅使を迎えたことに関係するものである。1～4は坏蓋である。1は天井部に縦長連続馬蹄形文がつくもので、7世紀後半に位置づけられる。2は天井部に竹管による花文を5カ所つく。5は石製の蓋であるが、新羅産と考えられる。6は蓋で、短いかえりがつく。印花文は見られない。7は鉢で、短いかえりがつく。8は坏で縦長連続馬蹄形文がつく。9は蓋で、肩部に綾杉文がつく。10は台付壷、11、12、16～19は壷である。20、21は壷で肩部に波状文がつく。22は骨壺である。23、24はトイレ状遺構SK57、70から出土した無文の樽型瓶で、23は外面に沈線と波状文がつく。これら以外に無文で薄手の壷、甕があるが、統一新羅から高麗にかけての資料で、多数の廃棄土坑が分布する南館で多くみられる（Tab.33）。

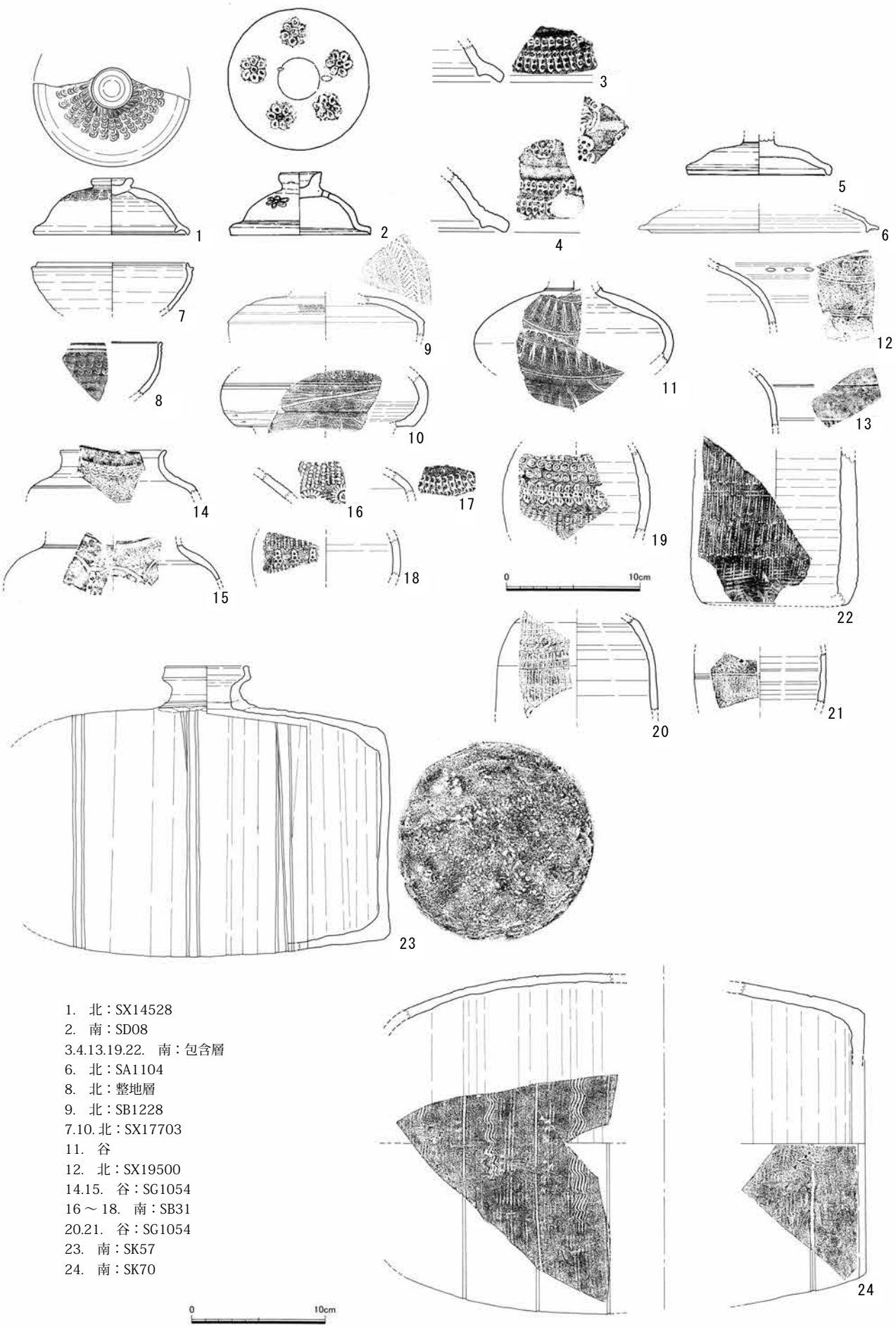
唐三彩の出土量は少ないが、1は晩唐に比定される白化粧した白地に緑釉・黄釉で斑点を打つ盤である。2は三彩鴛鴦文陶枕で、鴛鴦を挟んで中央部分に青、他は緑釉が残るが、東京国立博物館蔵の同類製品の例から恐らく黄釉も使用されていたであろう。

3～20は長沙窯製品で、Ⅲ期、Ⅳ期に見られる。3～6は陶枕で深い青緑釉がかかる。7～10は青磁碗で、外底面は露胎である。11、12は擂鉢で、見込みに櫛描きの卸目がつく。13、14は見込みに線描きの魚文を施した鉢である。外面は底面まで釉がかかるが、見込みは露胎である。15～21は黄釉褐彩貼花文の水注である。21は褐彩方形縦耳の部分である。

イスラム陶器は破片資料が大半であるが、外面に貼付文を施し、コバルトブルーの釉薬をかけた大型の壷（28～41）がある。Ⅲ期以降のもので、中国でのイスラム系の商人の活動の拡大に伴って、中国の海商により持ち込まれたと考えられている。

Tab.33 新羅陶器出土点数

器形	計			調査次数／(調査番号) 北														中央谷		南									
	谷込合計	北館	南館	18次(0008)	19次(0109)	20次(0218)	22次(0415)	23次(0502)	24次(0617)	25次(0706)	26次(0821)	27次(0906)	28次(1013)	29次(1116)	30次(1205)	31次(1314)	17次(9910)	21次(0309)	3次(8747)	4次(8829)	5次(8910)	6次(9005)	7次(9130)	9次(9236)	11次(9420)	12次(9537)	13次(9620)	14次(9736)
坏	6	1			1												2	3										
高坏	1																	1										
脚	1																1											
椀	5	1						1										4										
蓋	13	7	4		2	2		1						2			1	1	1	3								
樽形瓶	2		1														1				1							
瓶	6		6																	2	2		1	1				
俵壷	1	1						1																				
壷	194	30	107	4	13	1	2	2		1	2		1	1	1	2	50	7	24	16	13	5	23	22	3			1
甕	157	21	124	2	9		1	6					1	1		1	11	1	48	18	12	22	11	10	3			
鉢	5	2	3					1						1						1		2						
転用硯	1	1						1																				
小片(主に壷・甕破片)	384	6	308	1	3			1						1			7	63	10	139	118	26	6	4	4	1		
	776	70	553	7	28	3	3	14		1	2		2	6	1	3	73	80	83	179	146	55	41	37	10	1		1



1. 北：SX14528
2. 南：SD08
3.4.13.19.22. 南：包含層
6. 北：SA1104
8. 北：整地層
9. 北：SB1228
7.10. 北：SX17703
11. 谷
12. 北：SX19500
14.15. 谷：SG1054
16～18. 南：SB31
20.21. 谷：SG1054
23. 南：SK57
24. 南：SK70

Fig.55 新羅土器実測図（1/6）

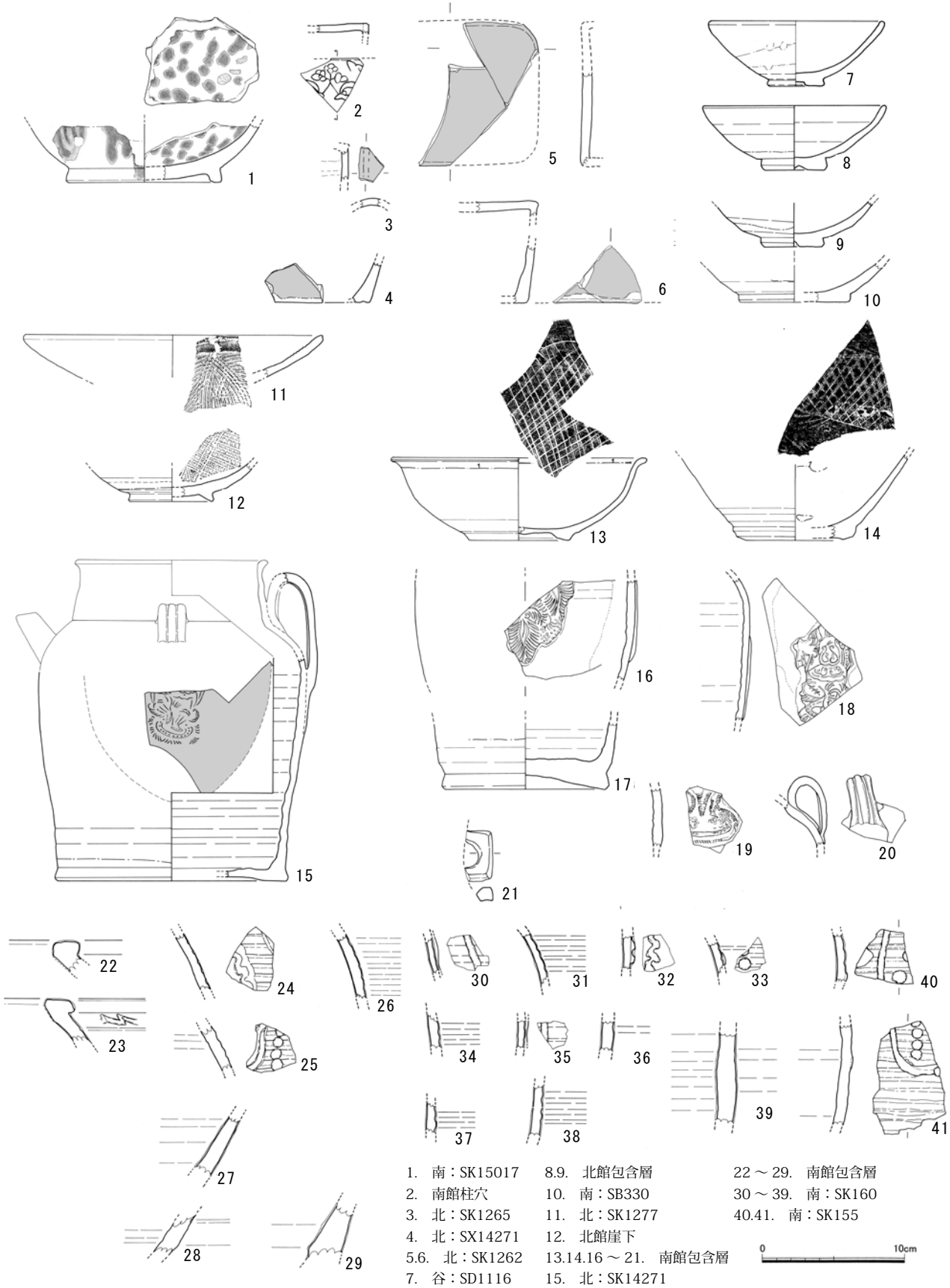


Fig.56 唐三彩・長沙窯系青磁・イスラム陶器実測図（(1/6)

⑤刻書・墨書土器、墨書陶磁器、墨書磚（Fig.57）

刻書土器は内面に「那賀」（那珂郡か）の文字が刻まれた須恵器大甕がある。

墨書土器の出土数は少ないが、「中」（２）「伴」（３）「縣」（４）などを記した須恵器がある。中でも注目されるのが８世紀後半の皿の底部に「城」（５）と記されたもので、続日本紀の寶亀３年（772）年11月辛丑の条にある「罷筑紫営大津城監」の記述から存在が議論されている「大津城」に関連する可能性が指摘されている。10世紀代に位置づけられる土師器碗では外底部に「厨」（６）と記されたものがある。

貿易陶磁器は多量に出土したが、その中に外底部に墨書を記したものが少数だが存在する（７～16)。越州窯系青磁に記したもの（８）（判読できないが）もあるが、大半は白磁碗、皿である。判読できるものでは、船主を示す「綱」(10）や中国人名の「呉」(11)「李」(12)「鄭」(13）などがある。12世紀代に博多遺跡群で多く見られる墨書土器に類似するものであり、鴻臚館での交易に関わる中国海商の存在を示すものである。

墨書磚は表面に「荷」「物」などの習書及び人物の頭部らしき絵画を描き、背面に婦人・馬などの絵画を描いたものがある。

⑥木簡、籌木、木製品（Fig.58、59、Tab.35、36）

木簡はトイレ状遺構SK57、SK1124から出土しているが、判読できるものは少ない。SK57出土の木簡の大半は両側から切り込みが入る荷札形式のものである（Fig.58)。それらには地名や物品、数量が記載されており、地名では筑前国内の「京都郡」（８、12）や「鞍手郡」(63)、肥後国の「天草郡志記里」（１）や肥前国の「比羅郷」(23)、更に讃岐国の「三木郡」(55）など大宰府管内、管外のものがある。地名に「里」と「郷」が見られることから養老元年（717）以前と以後の時期のものを含むと考えられる。物品は「米」（８、12、26、63)「鹿乾脯」（鹿の干し肉）(48)「魚鮨」（７）「伊支須」(23）などがあり、この場所で使われた食材であったと考えられる。このほか、題籤軸や物差しもある。SK1124は墨書が残るものがほとんどないが、二列に竹冠と京と推測される墨書があり、「筑」「京」と読めば地名か。

トイレ状遺構からは籌木が多量に出土している（Fig.59)。概ね長さ20～30㎝、幅1.5㎝前後、厚さ約５㎜の大きさのものである。形態は割り箸状に粗く削ったもの（中段）が一般的ではあるが、使用後の木簡を割って籌木に転用したもの（上段）も多く見られる。また、一端が焦げた棒がある（中段右）が、火付け木として使用されたものか。

木製品は非常に少ないが、１はSk1124で出土した横櫛である。２は刀子の柄である。３はシャベルの先端のような形状をなす木製品で、基部を窪ませ、窪みの両端に先端に向けた穿孔を施す。２、３はSK57出土。４はSK69出土の漆器皿の漆皮膜で、中央に「二坊」の針書がある。使用していた施設を示すものか。５はSK70出土で、板状の木製品で、3 ヶ所の小さな釘孔があり、孔中に木製の釘が残る。

⑦硯（Fig.60、Tab.37）

硯は須恵器の円面硯や転用硯といった国産品と石製で中国産と考えられるものがある。

定型化した須恵器の硯は少なく、大半は転用硯である。１は数少ない資料で、北館の第Ⅱ期の整地層から出土した円面硯である。転用硯には蓋や甕などがある。２は摘み付きの蓋を転用したもので、内面を硯面とし、摘みは脚としている。

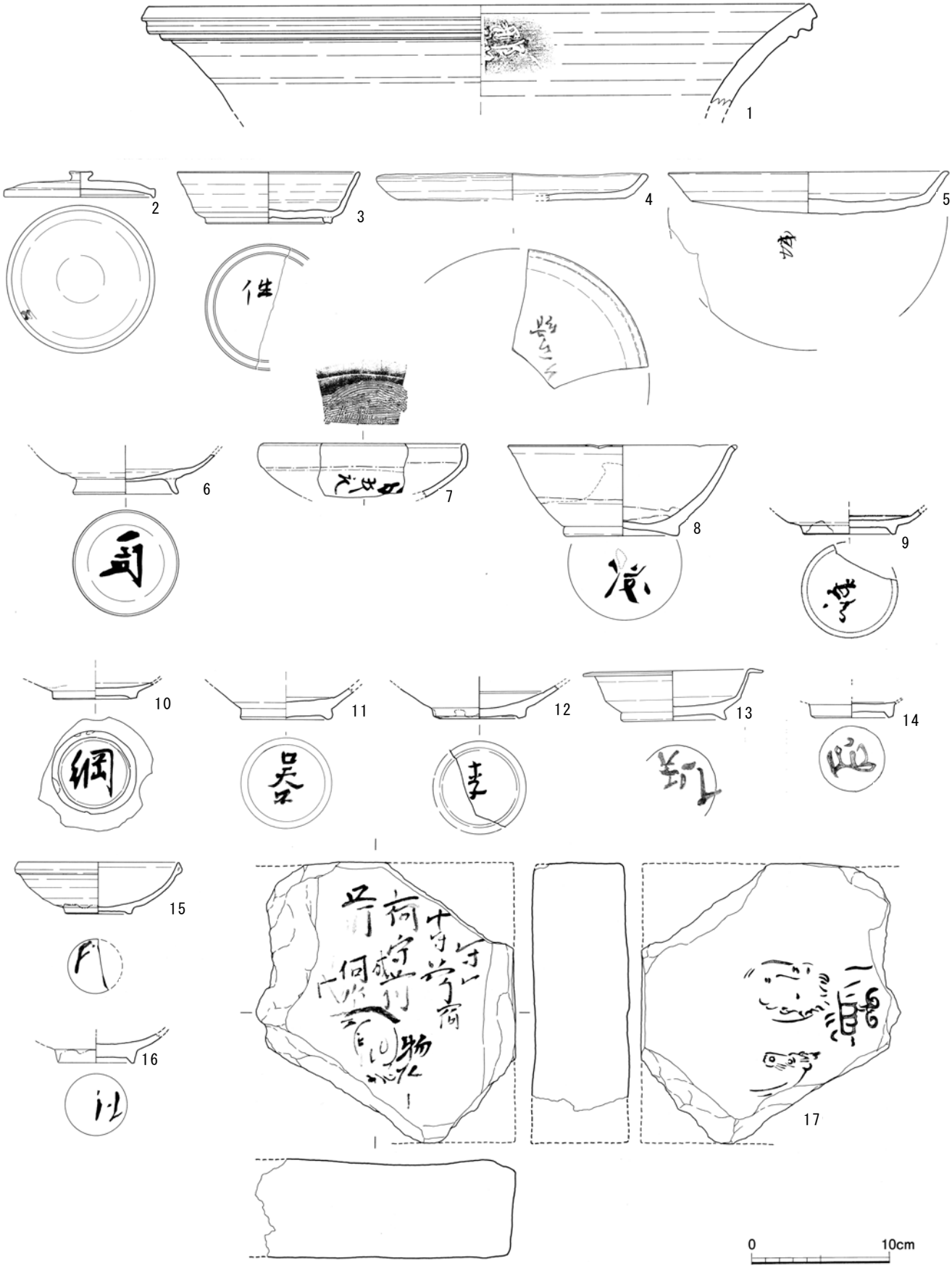


Fig.57 墨書土器・陶磁器類実測図（1/4）

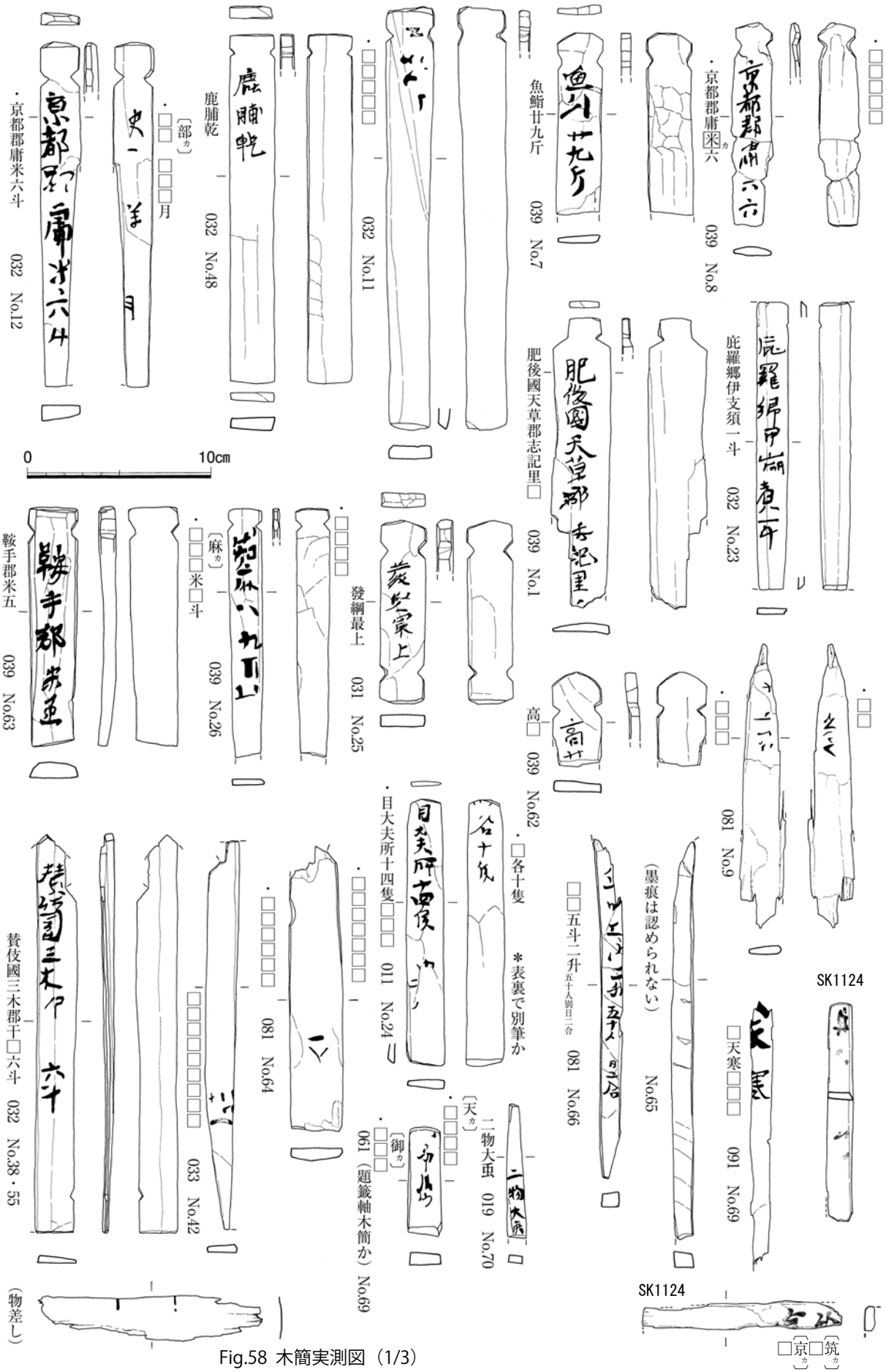


Fig.58 木簡実測図（1/3）

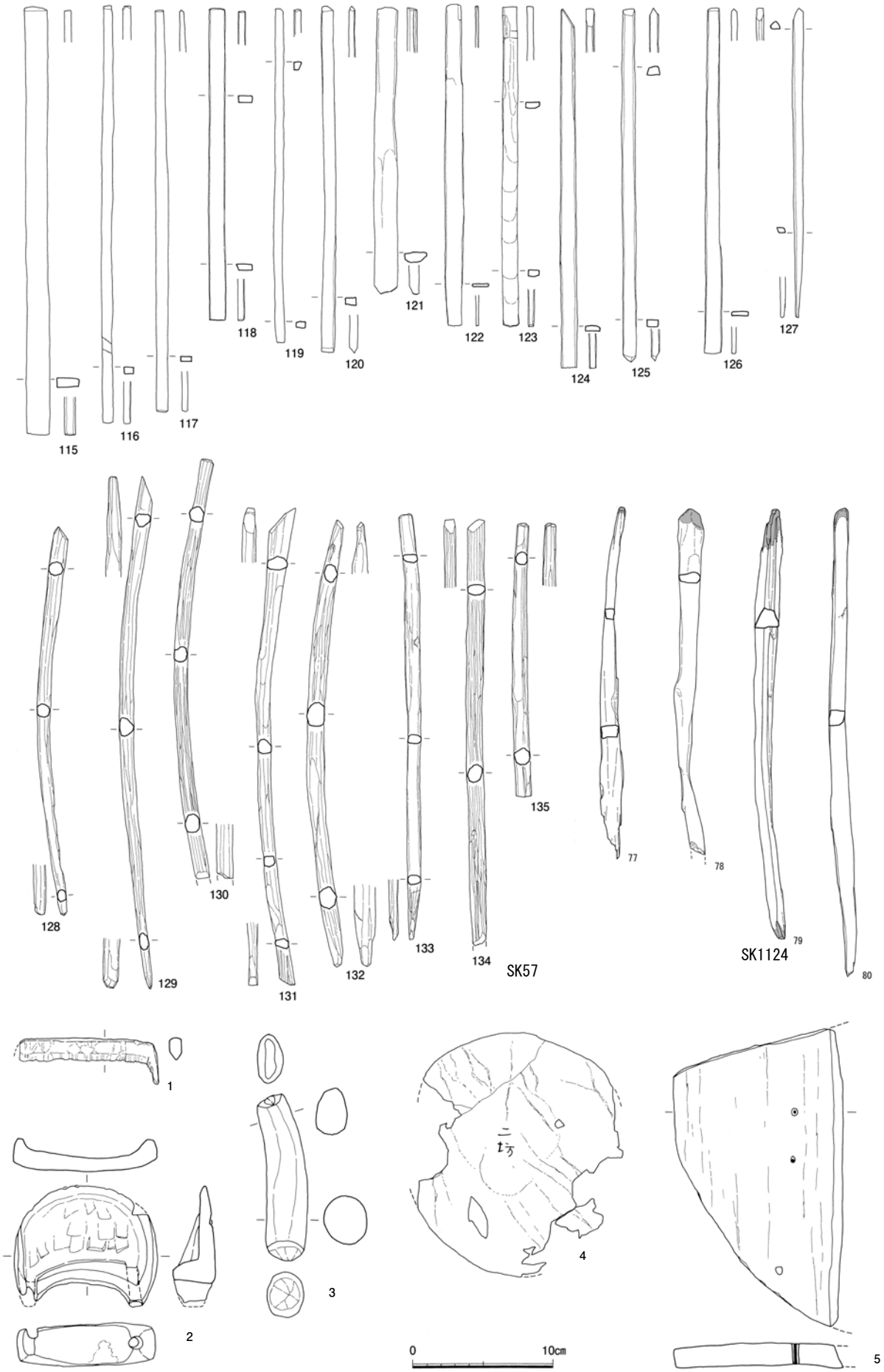


Fig.59 籌木及び火付け棒、木製品実測図（1/4）

Tab. 34 文字資料

No.	釈文	種類	備考	時期	地区	遺構番号	調査次数（調査番号）	掲載報告書	頁-挿図番号
1	「那賀ヵ」	**須恵器 甕** 口縁部片	刻書，5層	**Ⅱ期以降**	中央	**SD 1045** (Ⅱ～Ⅴ期)	7次 (9910)	1022集	p.33-fig.15-44
2	「十」	須恵器 坏蓋	墨書，内面	Ⅱ期	北	SK 1124 (Ⅱ期)	21次 (0309)	1300集	p.90-fig.92-1
3	「伴ヵ」	須恵器 坏身	墨書，高台内； 内底に墨痕判読不能	Ⅱ期	北	SK 1125 (Ⅱ期)	21次 (0309)	1300集	p.99-fig.99-10
4	「縣□□」	須恵器 皿	墨書，外底	Ⅱ期	北	SK 25043 (Ⅱ期)	31次 (1314)	1300集	p.106-fig.106-27
5	「城」	須恵器 皿	墨書	Ⅱ期	南	SK 57 (Ⅱ期)	5次 (8910)	1175集	p.31-fig.29-3
6	厨	土師器 脚付椀	墨書	Ⅴ期	南・中央	SD 15052 (Ⅴ期)	21次 (0309)	1175集	p.106-fig.103-31
7	判読不能	陶器 卸皿	墨書，1行4字分か	Ⅴ期	南・中央	SD 15098 (Ⅴ期)	21次 (0309)	1175集	p.120-fig.116-23
8	判読不能	青磁 碗	墨書	Ⅳ期	南	SK 82 (Ⅳ期)	5次 (8910)	1213集	p.74-fig.75-822
9	不明	青磁 皿	墨書，高台内	Ⅲ～Ⅴ期	南	SD 06 (Ⅱ期前)	3次 (8747)	270集	p.36-fig.18-3
10	「綱」	白磁 碗	墨書，4層上部焼土層	Ⅴ期	中央	SD 1045 (Ⅱ～Ⅴ期)	7次 (9910)	1022集	p.33-fig.15-33
11	「綱ヵ」	白磁 碗	墨書	Ⅴ期	南	SK 351 (Ⅴ期)	9次 (9236)	1175集	p.77-fig.72-10
12	「綱」の可能性	白磁 皿	墨書	Ⅴ期	南	SK 159 (Ⅴ期)	6次 (9005)	1213集	p.104-fig.107-1065
13	「李」	白磁 碗	墨書，高台内	Ⅴ期か	北	包含層	23次 (0502)	1326集	p.92-fig.90-1
14	「吳□」	白磁 碗	墨書，ＸＩ類	Ⅴ期か	中央	SG 1046 (Ⅴ期以降)	7次 (9910)	1022集	p.56-fig.30-10
15	「鄭ヵ」	白磁 皿	墨書，高台内	Ⅴ期	北	SK 1255 (Ⅴ期)	19次 (0109)	1326集	p.17-fig.12-14
16	「□」花押か	白磁 碗	墨書	Ⅴ期	南	SK 208 (Ⅴ期)	6次 (9005)	1213集	p.125-fig.127-1355
17	習書・頭部絵，(背面)婦人・馬絵	磚	2面に墨書	不明	南	SK 83・90 (Ⅳ以前)	5次 (8910)	1213集	p.80-fig.80-887

Tab.35 木製品1

No.	種類	法量(cm)	遺物情報 「釈文」木簡型式-鴻臚館木簡番号	地区	遺構番号	調査次数 (調査番号)	掲載 報告書	頁-挿図番号
1	櫛	(10)×(3) 背幅(0.9)	解き櫛，黒漆塗布か，歯全て欠損，9層出土	北	SK 1124 (Ⅱ期)	21次 (0309)	1300集	p.94- fig.96-29
2	籌木(木簡)	(1.4)×(18)×(0.8)	板目材の板断片，2行の文字が書かれている，1行目は竹冠，2行目は「京ヵ」 081	北	SK 1124	21次 (0309)	1300集	p.94- fig.96-30
3	籌木(木簡)	(11.8)×1.4×(0.8)	墨痕あり，判読不能，　081	北	SK 1124	21次 (0309)	1300集	p.94- fig.96-31
4	籌木 (軸状木製品)	24.3×1×0.4	断面蒲鉾型，両端直裁	北	SK 1124	21次 (0309)	1300集	p.94- fig.96-32
5	籌木(折敷)	16.2×0.9×0.2	1辺16.2cm折敷の底板断片，角面取り	北	SK 1124	21次 (0309)	1300集	p.94- fig.96-33
6	籌木 (荷札)32点	長 12～28 (15～22cmが多い) 幅 0.4～2.7 厚 0.2～0.6	墨痕なし 34～36：033，　37：頭部欠損， 38～40：031，　41～54：032， 55～64：039，　65：頭部欠損	北	SK 1124	21次 (0309)	1300集	p.94・95- fig.96・97- 34～65
7	籌木 2点	(20.6)×1.5×0.2 (28.8)×2.3×0.3	板状の部材を割ったもの	北	SK 1124	21次 (0309)	1300集	p.95- fig.97-66～ 67
8	火付け木	長 12～33 (16～25cmが多い) 幅 1～2.2 厚 0.3～1.4	一部掲載，棒状，一端が焼け焦げる	北	SK 1124	21次 (0309)	1300集	p.95- fig.97-68～ 81
9	笄か	(7.2)×1.2×0.6	棒状の木製品，黒漆かけ，5層出土	北	SK 1125 (Ⅱ期)	21次 (0309)	1300集	p.100- fig.100-18
10	籌木(木簡)	18.6×2.1×0.8	「・京都郡庸米六斗」 「・□部ヵ　□□□月」032-No.12	南	SK 57 (Ⅱ期)	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-37
11	籌木(木簡)	18.6×2.4×0.7	「鹿脯乾」032-No.48	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-38
12	籌木(木簡)	22.8×2.6×0.7	「□□□□□」032-No.11	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-39
13	籌木(木簡)	9.7×2.4×0.4	「魚鮨廿九斤」039-No.7	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-40
14	籌木(木簡)	11.0×2.1×0.5	「・京都郡庸米ヵ六」 「・□□□□□」039-No.8 樹皮付木簡	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-41
15	籌木(木簡)	13.0×2.7×0.9	「鞍手郡米五」039-No.63	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-42
16	籌木(木簡)	13.4×1.8×0.3	「・□麻ヵ□米□斗」 「□□□□」039-No.26	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-43
17	籌木(木簡)	9.8×2.4×0.7	「發綱最上」031-No.25	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-44
18	籌木(木簡)	15.5×3.1×0.5	「肥後國天草郡志記里□」039-No.1	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-45
19	籌木(木簡)	5.1×2.6×0.6	「高□」039-No.62	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-46
20	籌木(木簡)	15.6×1.7×0.4	「庇羅郷伊支須一斗」032-No.23	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-47
21	籌木(木簡)	21.3×2.1×0.4	「賛伎國三木郡干□六斗」 032-No.38・55	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-48
22	籌木(木簡)	20.9×1.6×0.4	「□□□□□□□□□」033-No.42	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-49
23	籌木(木簡)	15.4×2.9×0.7	「□□□□□□」 「□□□□□□□」081-No.64	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-50
24	籌木(木簡)	15.2×2.0×0.5	「・目大夫所十四隻□□□」 「・□各十隻」011-No.24　別筆の可能性	南	SK 57 (Ⅱ期)	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-51
25	籌木 (題籤軸木簡か)	5.9×1.7×0.6	「・□御ヵ□」 「・天ヵ□□□」061-No.69	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-52

Tab.36 木製品2

No.	種類	法量(cm)	遺物情報 「釈文」木簡型式-鴻臚館木簡番号	地区	遺構番号	調査次数 (調査番号)	掲載 報告書	頁-挿図番号
26	籌木 (木簡再加工)	7.3×1.1×0.4	「二物大[ノの下に虫]」019-No.70	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-53
27	籌木 (木簡再加工)	18.1×1.2×0.9	「□□五斗二升五十人別日二合」081-No.66	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-54
28	籌木	(21.6)×1.2×0.7	墨痕なし　No.65	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-55
29	籌木(木簡)	15.2×2.4×0.4	「□□□」「□□」081-No.9	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-56
30	籌木 (木簡削屑)	14.6×1.1	「□天寒□□□」091-No.69	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-57
31	籌木 (物差しか)	(12)×(2.4)	細線3ヵ所，間隔は3.1cm・3.2cm	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.36- fig.33-58
32	籌木(木簡)	14.7×1.9×0.3	墨痕なし　No.4	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.37- fig.34-59
33	籌木 (木簡)48点 籌木 (木簡)7点	長 4～24 幅 0.6～3 厚 0.3～0.9	墨痕なし,110頭部方向に穿孔1，111頭部に穿孔1，SK57出土竹簡 fig.35-105は別記載 61・80・90・108・110・113・114　はSK69出土	南	SK 57 SK 69 (Ⅱ期)	5次 (8910)	1175集	p.37- fig.34-60 ～ P.38- fig.35-114
34	籌木 (竹簡)	19.3×1.7×0.4	竹節あり,墨痕なし　No.15	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.38- fig.35-105
35	籌木	長 20～35 幅 0.7～1.8 厚 0.3～0.9	長方形に整形，木簡等を割った転用品か	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.39- fig.36-115 ～127
36	籌木	長 20～35 幅 0.9～1.5 厚 1.2～2	枝状の自然木の表面を面取りしたもの	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.39- fig.36-128 ～135
37	刀子柄	12×径3(楕円)	変形	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.40- fig.37-136
38	不明木製品	8.7×10.4×3.0	両端に穿孔	南	SK 57	5次 (8910)	1175集	p.40- fig.37-137
39	漆器盤	径16.8	刻書「二坊」，被膜のみ残存	南	SK 69 上層 (Ⅱ期)	5次 (8910)	1175集	p.40- fig.37-138
40	不明木製品	(21)×(12)×1.5 孔径5mm±α	板状，釘孔3ヵ所あり，孔内木釘残存	南	SK 70 (Ⅱ期)	5次 (8910)	1175集	p.40- fig.37-139
41	建築材か	(20)×14×(6) 孔径5mm±α	中央楕円形窪みあり（未貫通）	南	SK 70	5次 (8910)	1175集	p.40- fig.37-140

３は南館 SK224 出土の石製の風字硯である。断面台形の脚が二つ付く。周辺は欠損しているが、硯頭は小さく立ち上がりの部分がわずかに残る。硯側は外湾し、硯尾は弧状に張り出すものか。形態から晩唐～五代の所産と考えられる。４は南館 SD06 出土の石製の風字硯で、内湾する硯頭の周堤部分に７個の珠文が浮き彫りされる。硯側は直線的に広がる。型式的に３より新しく位置づけられる。

５は昭和 25 年、高野狐鹿氏が旧平和台野球場の南側で採集した硯である。硯面の左半と下半が欠損している。陸から海にかけての傾斜は緩やかで、明確な段差は見られない。石材はやや赤味をおびた灰蒼色を呈し、硯面には節理が見られる。石材の特徴は、広東省の端渓石に類似する。硯背は中央がややくぼむ平底で､｢之年／胡承璉鐫／小蒋置此硯瓦｣の線刻がある。銘文の内容は制作年と硯を彫った工人の名、この硯を買った人の名前であると考えられている。硯の持ち主の蒋は中国人海商の可能性が指摘されている。また､形態は銘文に示すとおり､瓦硯を模したものか。現存の法量は長さ 11.3 ㎝、幅 8.0 ㎝、高さ 2.0 ㎝。出土地点から鴻臚館の南館の範囲と推定されるが、これまでの発掘調査では類似の資料は出土していない。なお、硯については、佐賀大学名誉教授竹之内裕章先生より貴重なご教示を得た。記して謝意を表す。

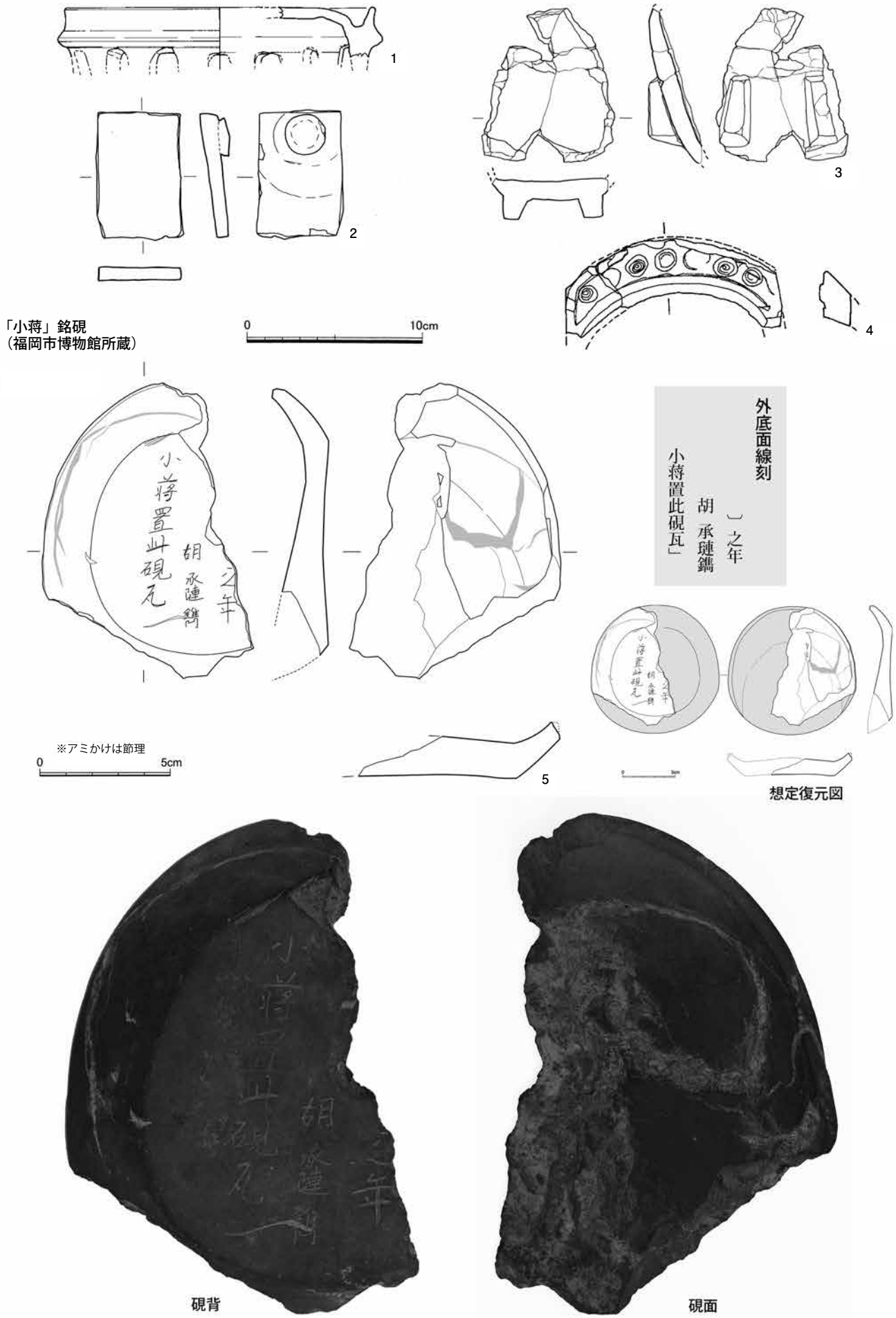


Fig.60 硯実測図（1/2、1/3）

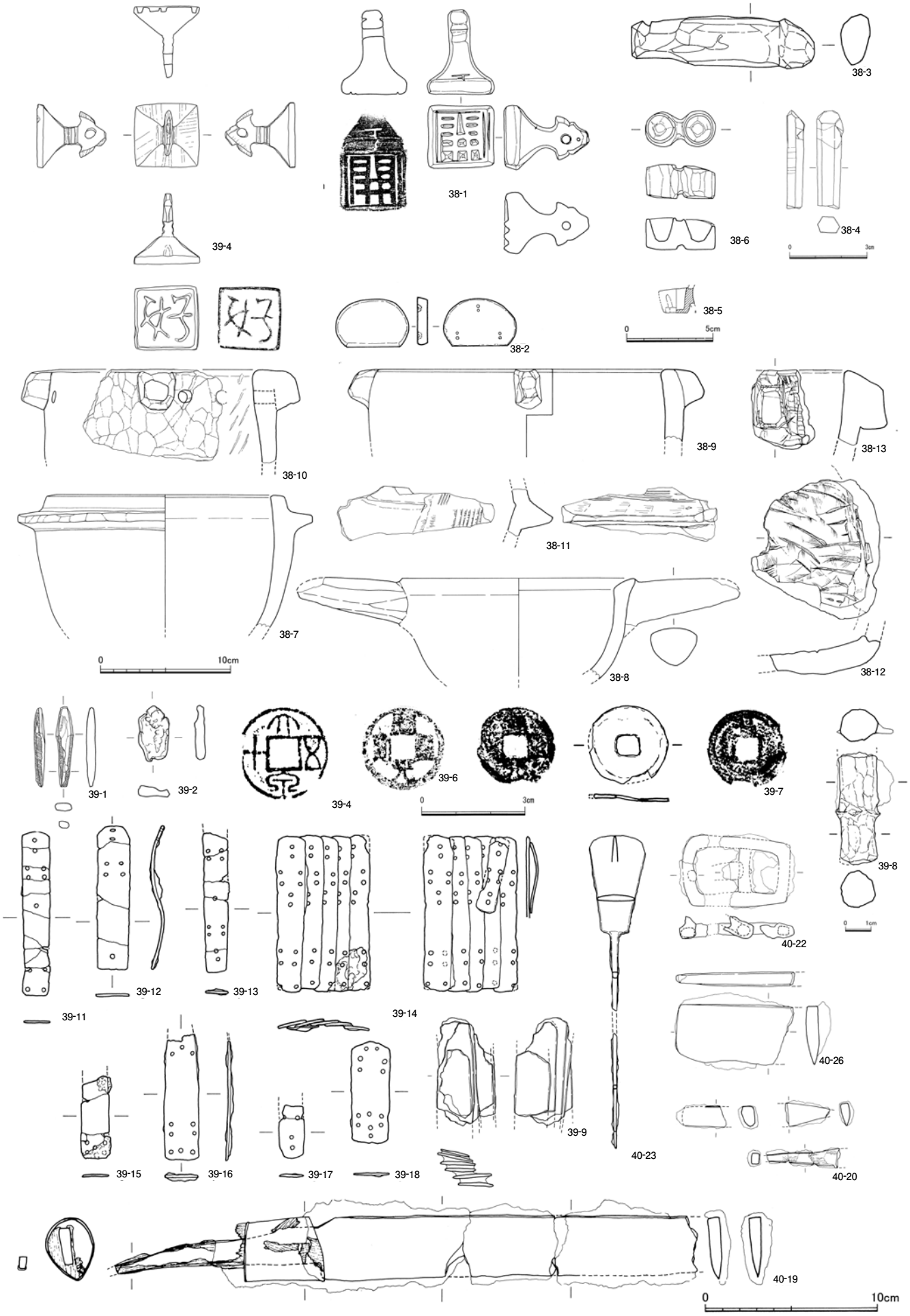
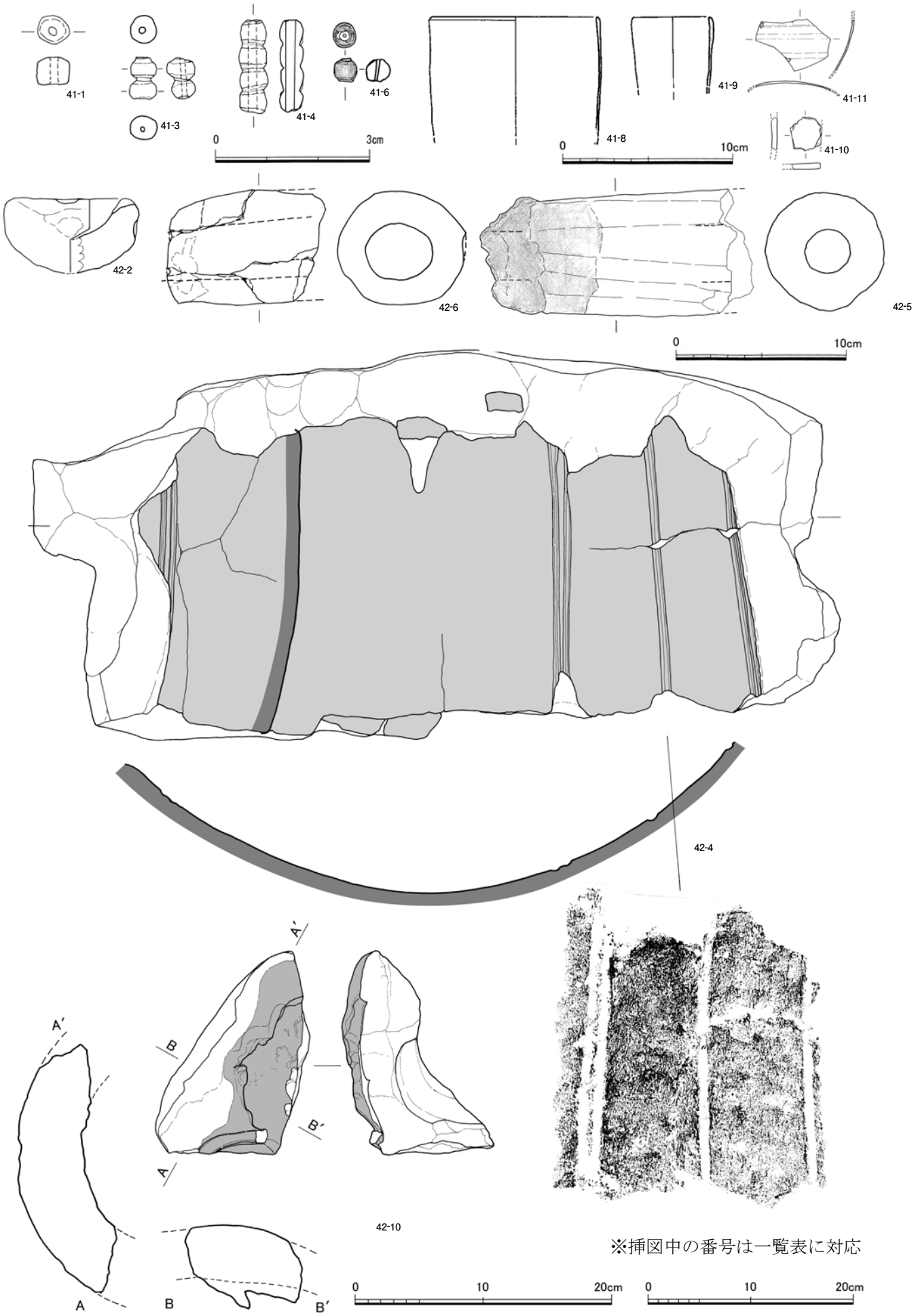


Fig.61 特殊遺物、石鍋、鉄製品ほか（2/3、1/2、1/3）

※挿図中の番号は一覧表に対応



※挿図中の番号は一覧表に対応

Fig.62 ガラス製品、るつぼ、羽口、鋳型ほか（1/2、1/3、1/4、 1 /5)

Tab.37 硯一覧

No.	種類	法量(cm)	遺物情報	遺構時期	地区	遺構番号	調査次数（調査番号）	掲載報告書	頁-挿図番号
1	石製	長3.4×幅4×厚0.5	赤間石小破片,研磨面一部残,国産初例の可能性	Ⅴ期	北	SK 14510	20次（0218）	1326集	p.62-fig.61-5
2	石製	長3.4×幅12.3×厚2.1	風字硯,海壁部破片,縁平坦面に枠線内珠文7陽刻,粘板岩様の堆積岩	Ⅱ期前	南	SD 06	3次（8747）	315集	p.66-fig.31-8
3	石製	長9×幅7.6×厚1.2,脚高1.2～1.4	風字硯,断面台形の脚2あり	Ⅲ～Ⅳ期	南	SK 224	6次（9005）	1213集	p.134-fig.138-1498
4	陶器	—	灰釉陶器蓋転用，内面天井摩耗，墨痕あり	Ⅱ～Ⅴ期	中央	SD 1116	0008（18次）	1022集	p.90-fig.54-2
5	陶器	—	新羅陶器転用，凹面に削痕（→擦痕？），全面墨痕	—	中央	03・04-Tr.2	0502（23次）	1022集	p.107-fig.67-11
6	須恵器	—	転用，坏蓋（宝珠撮み）破片，5層上半出土	Ⅱ～Ⅴ期	中央・南	SD 1045	17次（9910）	1022集	p.39-fig.21-198
7	須恵器	—	転用，長方形に整形，坏蓋（宝珠撮み）破片	Ⅱ～Ⅴ期	中央	SG 1115	18次（0008）	1022集	p.87-fig.53-15
8	須恵器	—	猿面硯，大甕破片転用，側面研磨	Ⅱ～Ⅴ期	中央	SG 1115	18次（0008）	1022集	p.87-fig.53-16
9	須恵器	—	猿面硯，大型品の胴部破片を転用，凹面全体に墨痕	—	中央	05-Gr.5西壁	23次（0502）	1022集	p.149-fig.96-24
10	須恵器(3点)	—	転用，坏蓋破片，宝珠撮み，うち1点撮み残存	Ⅱ期	中央・南	SG 1054	17次（9910）	1022集	p.75-fig.43-9～11
11	須恵器	—	蓋転用か，天井部内面が著しく摩耗，墨痕なし，破片	Ⅲ期	北	SK 14307	20次（0218）	1326集	p.57-fig.54-18
12	土師質	—	猿面硯	Ⅳ期	中央・南	SK 15017	21次（0309）	1248集	p.106-fig.76-131

⑧特殊遺物、石鍋（Fig.61、Tab.38）

銅印は第Ⅴ期の包含層から出土したもので、方形の印面に「好」の銘が正字で鋳出される。押印すると逆字となる。紐は荅紐で、印面の法量は3.7㎝四方となる。滑石製の石印は第Ⅴ期の溝から出土したもので、「開」の一字を刻み出す。紐は荅紐で、銅印の形態を忠実に模している。

滑石製品では陽物形や小型の二連鉢がある。後者は博多遺跡群でも多く見られ、カマドを模したミニチュアという説もある。

北館の第Ⅲ期の整地層から出土した水晶は、先端が黒色に変色しており、火打石として使用したと考えられる。養老律令では兵士50 人ごとに火打1 具を持たせることとあり、また延喜式には遣唐使の朝貢品として定めがある。

石帯はこれまでに1点出土したのみである。淡い緑色を呈するが石質は不明。裏面に2個の小孔からなる綴じ穴を3カ所に穿つ。潜り穴内に銅線が残る。幅4.2×高さ2.8㎝。

石鍋は第Ⅳ期、Ⅴ期の遺構から出土した。形態は短い縦耳をもつもの、鍔状を呈するものがある。石鍋の編年では縦耳から鍔状という変遷が一般的であるが、海ノ中道遺跡や鴻臚館跡において、縦耳の石鍋に先行する鍔状突帯の石鍋が出土している。これ以外に把手付きの石鍋も見られる。

Tab.38 特殊石製品

No.	種類	法量(cm)	遺物情報	遺構時期	地区	遺構番号	調査次数(調査番号)	掲載報告書	頁-挿図番号
1	印	3.6×3.7 高5.0 印面3.3×3.3	滑石製,印面「開」陽刻,側面下部「上」印刻,莟鈕,銅印形態を模倣,石材硬質	Ⅴ期	南	SD 15052	21次 (0309)	1175集	p.117-fig.113-186
2	丸鞆	長2.7 幅4.2 厚0.6	淡緑色石製,4層下層	Ⅱ～Ⅴ期	中央	SD 1045	17次 (9910)	1022集	p.33-fig.15-45
3	陽物	高10.8 幅1.8 厚1.9	滑石製,石鍋破片再加工,4層下層	Ⅱ～Ⅴ期	中央	SD 1045	17次 (9910)	1022集	p.33-fig.15-46
4	火打ち石か	長3.8 幅1.1 厚0.6	水晶,被熱剥離,先端部黒変	Ⅲ期	北	SB 1228 SD 1216間整地層	19次 (0109)	1300集	p.119-fig.119-70
5	二連鉢	径2.0　高1.4	滑石製,うち1個欠損	Ⅴ期	南	SK 01	3次 (8747)	315集	p.39-fig.19-8
6	二連鉢	幅4　高1.8 奥行1.9	滑石製,一部欠損	Ⅴ期	南	SD 15052	21次 (0309)	1175集	p.117-fig.113-185
7	石鍋	径(18.6) 高(10.2) 鍔基部厚1.5	滑石製,鍔付,仕上げ精緻	Ⅳ期	南	SK 15027	21次 (0309)	1248集	p.138-fig.99-310
8	石鍋	径(18) 高(7.5) 把手長6.4 基部厚3	滑石製,把手付,残欠	Ⅳ期	南	SK 255	7次 (9130)	1213集	p.160-fig.164-1831
9	石鍋	口径(21) 高(5.4)	滑石製,縦耳,外面煤多量付着	Ⅴ期	南	SD 15052	21次 (0309)	1175集	p.117-fig.113-188
10	石鍋	口径(14.5) 高(7.2)	滑石製,縦耳,耳右脇に円形穿孔2ヵ所残	Ⅴ期か	北	崖下平坦面瓦溜まり	31次 (1314)	1326集	p.138-fig.140-11
11	石鍋	長2.4 幅8.2	滑石製,鍔付,破片	Ⅴ期	北	鴻臚館終末整地層(斜面)	31次 (1314)	1326集	p.136-fig.138-20
12	石鍋	長10.5 幅10.5	滑石製,煤付着,底部破片	不明	南	SK 43(瓦溜り)	4次 (8829)	1213集	p.189-fig.188-2254
13	石鍋	長6.3 幅4.8	滑石製,縦耳,口縁部破片	―	南	SG 51(近世)	6次 (9005)	1213集	p.189-fig.188-2253

⑨金属製品（Fig.61、Tab.39、40）

金製矢じりは細長い棒状に成形した金塊をヤスリ状の工具で面取り整形したものである。約85%が金、15%が銀である。砂金（13）は商品の対価でもあり、鴻臚館での交易に関わる資料の可能性があるが、共伴遺物が少なく、年代を特定することはできない。長さ16.08㎜、幅8.9㎜、最大厚３㎜、重さ2.75gを測る。99.5%の純度の高い金である。

銭貨は少なく、大泉五十１点と開元通宝２点があるのみで、皇朝十二銭の出土例はない。

挂甲の鉄小札は重なった状態で十数点出土している。革紐等で綴じ合わせたものであろうが、紐は遺存していない。武器に関するものでは鉄鏃や小刀、馬具では絞具が出土している。先に触れた貞観11年（869）の鴻臚館への甲冑の配備、延喜式における駅馬の分置にも関わるものとして注目される。この他、金属製品は銅製容器や鉄製包丁、刀子などが出土しているが、数は少ない。

⑩ガラス製品（Fig.62、Tab.41）

ガラス容器は少量であるが、ワイングラス風もしくは瓶のような形態のものが出土している。色調

Tab.39 金属製品 1

No.	種類	法量(cm)	遺物情報	遺構時期	地区	遺構番号	調査次数（調査番号）	掲載報告書	頁-挿図番号
1	金鏃形	長2.35 幅0.5 厚0.25	棒状,ヤスリ等で面取り整形,金93.9wt% 銀5.9wt% 銅0.1wt%(2018年度蛍光X線分析),金銀のみの合金に比しやや赤みを帯びる, ガラス小玉(ガラス-1)と共にSB1228鎮壇具の可能性	Ⅲ期	北	SD 1216 (SB1228に伴う雨落ち溝)	19次 (0109)	1300集	p.119-fig.119-71
2	砂金	長16.08mm 幅8.9mm 最大厚3mm 2.75g	金99.5wt% 銀0.5wt%(蛍光X線分析参考値)	古代	北	SP 14258 埋土上層	20次 (0218)	1326集	p.89-fig.87-14
3	鉛 不明品	長5.85 幅1.2 厚0.7	扁平棒状,折り返しあり	Ⅴ期	南	SK 01	3次 (8747)	315集	p.11記述
4	銅合金印	3.7×3.7×高4.1	印面「好」正字陽刻,側面1方に縦窪み1条(天地判別のためか),莟鈕･途中に2条の沈線,銅70wt% 鉛25wt% ヒ素5wt%(2018年度蛍光X線分析)	Ⅴ期	北	鴻臚館終末整地層(斜面)	31次 (1314)	1326集	p.139-fig.141
5	銅銭	径2.75 方形孔1.2 厚0.28 重3.92g	「大泉五十」初鋳7年,土坑底面から出土,対読	Ⅴ期	南	SK 01	3次 (8747)	270集	p.20-fig.9-37
6	銅銭	径2.42 方形孔0.62 厚0.13	「開元通宝」初鋳621年,磨き,字つぶれ,2片接合	Ⅲ期	南	SK 15014	21次 (0309)	1248集	p.86 -fig.63-36
7	銅銭	径2.3 方形孔0.66 厚0.12	「開元通宝」初鋳621年,著しく被熱,歪みあり,端部欠損,X線判読	Ⅳ期	南	SK 82	5次 (8910)	1213集	p.76-fig.77-844
8	銅 容器の足	長(4.4) 幅1.5 厚1.5	把手の可能性,腐食	Ⅳ期	南	SK 75	5次 (8910)	1213集	p.63-fig.65-717
9	鉄小札	長3.8～5.9 札幅2.1～2.3 厚0.2	6枚銹着塊1点,綴じ穴確認できず	9世紀前後(Ⅲ)	北	02-2～3トレンチ谷上層包含層	20次 (0218)	1326集	p.89-fig.87-15
10	鉄小札	長(4) 幅2.5 厚0.2	破片, 綴じ穴確認できず	—	北	トレンチ6	30次 (1205)	1300集	p.150-fig.150-40
11	鉄小札	長9.6 幅1.5	中央2孔-左右2孔-中央1孔---左右2孔	—	北	包含層	23次 (0502)	1326集	p.92-fig.90-2
12	鉄小札	長(8.4) 幅1.8	S字状に曲がっている,中央2孔-左右2孔----中央1孔	—	北	包含層	23次 (0502)	1326集	p.92-fig.90-3
13	鉄小札	長(8.1) 幅(1.5)	(欠損)-左右2孔-中央1孔-左右2孔-中央2孔	—	北	包含層	23次 (0502)	1326集	p.92-fig.90-4
14	鉄小札	長9.0 幅1.7 総幅5.4	5枚小札綴じられた状態で銹着,中央2孔-左右2孔-中央2孔--左右2孔-左右1孔,裏面に小型小札1点(中央2孔-左右2孔-中央2孔)が銹着	—	北	包含層	23次 (0502)	1326集	p.92-fig.90-5
15	鉄小札	長(4.8) 幅(1.5)	(欠損)-残存端部に複数孔	—	北	包含層	23次 (0502)	1326集	p.92-fig.90-6
16	鉄小札	長9.0 幅1.7	(欠損)-中央1孔-左右2孔---左右2孔-端部3孔横並び	—	北	包含層	23次 (0502)	1326集	p.92-fig.90-7
17	鉄小札	推定長4.5 推定幅1.2	(欠損)-左右1孔-中央2孔	—	北	包含層	23次 (0502)	1326集	p.92-fig.90-8
18	鉄小札	長5.84 幅2.2 厚0.15	圭頭,中央寄り左右1孔-左右2孔-3孔横並び-中央1孔	—	北	包含層	23次 (0502)	1326集	p.92-fig.90-9

Tab.40 金属製品 2

No.	種類	法量(cm)	遺物情報	遺構時期	地区	遺構番号	調査次数(調査番号)	掲載報告書	頁-挿図番号
19	鉄刀	茎長(7.5) 刀身長(26) 身幅3.5 背幅0.6 責金具厚3	責金具内側に木質残存	Ⅴ期	南	SK 87	5次 (8910)	1213集	p.80-fig.80-882
20	鉄刀子	長(1.5) 身幅(1.2) 背幅0.6	刀身部破片2点, 茎部破片1点	Ⅳ期	南	SK 56	5次 (8910)	1213集	p.43-fig.45-424～426
21	鉄縁金具 責金具？	長2.8 身幅2.4 背幅(0.7)	薄い鉄を折り曲げている	Ⅴ期	北	鴻臚館終末整地層(斜面)	31次 (1314)	1326集	p.136-fig.138-17
22	鉄鉸具	長6.1cm±α 幅4.2	2片, 接点なし, 70%残	古代	中央・南	SK 1080	17次 (9910)	1248集	p.77-fig.58-155
23	鉄鏃	復元長18.25cm 幅3.3	平根, 長頸, 茎一部欠損,90%残	Ⅳ期	中央・南	SK 15017	21次 (0309)	1248集	p.107-fig.77-150
26	鉄包丁か	長(6.8) 身幅3.5 背幅0.7	破片	Ⅳ期以降	南	SK 66	5次 (8910)	1213集	p.55-fig.58-562
27	鉄包丁	長(13.5) 身幅(2.4) 背幅(0.5)	腐食が著しい	不明	南	SK 59	5次 (8910)	1213集	p.45-fig.47-450

Tab.41 ガラス製品一覧

No.	種類	法量(cm)	遺物情報	遺構時期	地区	遺構番号	調査次数(調査番号)	掲載報告書	頁-挿図番号
1	小玉	長0.55 幅0.6 孔径0.13	ライトブルー,金鏃形(金属-1)と共にSB1228鎮壇具の可能性	Ⅲ期	北	SD 1216 (SB1228に伴う雨落ち溝)	19次 (0109)	1300集	p.119-fig.119-72
2	小玉	径0.46 厚0.35 孔径0.15	黄色不透明	Ⅳ期以前	南	SK 92	5次 (8910)	1213集	p.83-fig.82-902
3	2連玉	径0.51 長0.83 孔径0.1	2連鋳式,淡灰色半透明,表層銀化か,真珠光沢	Ⅳ期	南	SK 56	5次 (8910)	1213集	p.43-fig.45-423
4	4連玉	径0.5 長1.8 孔径0.2弱	4連鋳式,灰青色不透明	Ⅳ期	南	SK 61	5次 (8910)	1213集	p.50-fig.52-523
5	小玉	径0.3 厚0.2 孔径0.1	紺色透明	Ⅳ期	南	SK 61	5次 (8910)	1213集	p.50-fig.52-524
6	小玉(金)	径0.46 厚0.47 孔径0.1未満	金箔巻き込み	Ⅳ期	南	SK 75	5次 (8910)	1213集	p.63-fig.65-718
7	玉	径0.7×厚0.5 孔径0.3	変質白色化	Ⅴ期	南	SK 01	3次 (8747)	315集	p.39-fig.19-9
8	杯	口径(10.0) 高(7)	イスラム,薄緑色透明,若干気泡あり,器体薄い,底部欠損	Ⅳ期	南	SK 02	3次 (8747)	315集	p.48-fig.23-9
9	杯	口径(4.8) 高(4)	イスラム,瑠璃色半透明,気泡多量,器体薄い,底部欠損,瓶口頸部の可能性	Ⅳ期	南	SK 02	3次 (8747)	315集	p.48-fig.23-10
10	容器か	2×1.8	縁辺打ち欠き,円形整形を意識したか,緑色,気泡含む,遊具の可能性	Ⅴ期	南	SK 208	6次 (9005)	1213集	p.132-fig.134-1467
11	容器	厚1mm強	破片,淡緑色,気泡あり,SK224出土ガラス小片(未図化)と同一個体か・未接合接点なし	—	南	表採	6次 (9005)	1213集	p.188-fig.187-2248

※SK70出土遺物は混入物につき除外

Tab.42 生産関係 1

No.	種類	法量(cm)	遺物情報	遺構時期	地区	遺構番号	調査次数(調査番号)	掲載報告書	頁-挿図番号
1	板状粘土	長5.4 幅5 厚0.8	灰白色,肌理細かく砂粒を含まない,土師器生地か	Ⅲ期	北	SK 14308	20次 (0218)	1326集	p.50-fig.46-42
2	坩堝(金)	径(7.8) 高(4.2)	金微粒子2件付着,調査時鉄分付着か,著しい被熱により灰色化,内面に発泡付着物	Ⅴ期	南	SK 208	7次 (9130)	1213集	p.132-fig.134-1468
3	坩堝	長3.0 幅4.2	口縁部破片,内面ガラス化,被熱著しく硬質化,黒灰色	Ⅴ期	南	SK 01	3次 (8747)	315集	p.39-fig.19-4
4	梵鐘外型	残存上半部高80cm程度,総高150cmか 駒の爪外径84cm 下帯高10cm 草の間高10cm 中帯幅20cm 池の間高35cm	池の間外型,縦帯2ヵ所,表面の薄い鋳物土と厚い粘土から成る,鋳型表面に水平方向旋条痕(挽き出しの際に回転させたもの),池の間より上半は残存なし	Ⅳ期	中央・南	SK 15027	21次 (0309)	1248集	p.132-fig.95-225
5	鞴羽口	径6.9 長(15.6) 孔径2.5	炉挿入側が溶融する	Ⅱ期	北	SK 25043	31次 (1314)	1300集	p.106-fig.106-29
6	鞴羽口	径7.5 長(9) 孔径3.5	断面楕円形, 同層で須恵器壺・甕破片出土,5D層	Ⅱ～Ⅴ期	中央・南	SD 1045	17次 (9910)	1022集	p.35-fig.17-82
7	鞴羽口	径(4.8) 長(10) 孔径(1.8)	B層	Ⅲ～Ⅳ期	北	SX 19500	26次 (0821)	1300集	p.156-fig.156-49
8	鞴羽口	長(18) 幅(10)	破片, 溶融した銅が顕著に付着,溶解炉に挿入されたもの	Ⅳ期	中央・南	SK 15027	21次 (0309)	1248集	p.132-fig.95-226
9	鞴羽口	径(6.8) 長7.6 孔径(1.9)	残欠	Ⅴ期	南	SK 01	3次 (8747)	315集	p.39-fig.19-3
10	炉壁(3点)	—	溶解炉の炉壁破片	Ⅳ期	中央・南	SK 15027	21次 (0309)	1248集	p.132-fig.95-227～229
11	製塩土器	口径(18) 高(13.5)		Ⅱ期	中央・南	SG 1054	17次 (9910)	1022集	p.77-fig.44-24
12	製塩土器	長6.6 幅5	玄界灘式,胴部外面平行叩き・内面平行当て具痕,胴部破片	Ⅳ期	南	SK 85	5次 (8910)	1213集	p.78-fig.79-846
13	製塩土器	径(15) 高(8)	被熱	—	北	SG 51(近世)	19次 (0109)	1326集	p.24-fig.18-7
14	製塩土器	長6.9 幅5.4	破片,被熱	Ⅳ～Ⅴ期	北	SK 1264	19次 (0109)	1326集	p.24-fig.18-8
15	石錘か	長(11.5) 幅(8.5) 厚(3.5)	滑石製,釣錘形か	Ⅳ期	北	SK 14307	20次 (0218)	1326集	p.57-fig.54-22
16	石錘	長11 幅5.6 厚3.8	1条筋縦方向1周,端部一部欠損	Ⅴ期	南	SK 351	9次 (9236)	1175集	p.78-fig.73-34(1213集 p.189-fig.188-2255)
17	砥石	長(3) 幅2.2 厚1.8	小破片,142層出土	Ⅰ～Ⅱ期	北	SX 17704	23次 (0502)	1300集	p.68-fig.69-26
18	砥石	長(7) 幅(4.4) 厚3.2	砂岩,下層出土	Ⅱ～Ⅴ期	中央	SD 1045	17次 (9910)	1248集	p.77-fig.58-151
19	砥石	長(6.5) 幅(3.2) 厚3.2	砂岩,下層出土	Ⅱ～Ⅴ期	中央	SD 1045	17次 (9910)	1248集	p.77-fig.58-152

Tab.43 生産関係 2

No.	種類	法量(cm)	遺物情報	遺構時期	地区	遺構番号	調査次数(調査番号)	掲載報告書	頁-挿図番号
20	砥石	長(4.8) 幅4.2 厚(4)	砂岩,破片	Ⅲ期	北	SB 1228	19次 (0109)	1300集	p.117-fig.117-37
21	砥石	長(7.5) 幅(6) 厚(2.6)	玄武岩,使用により砥面が大きく湾曲する	Ⅳ期	北	SK 14277	20次 (0218)	1326集	p.55-fig.51-48
22	砥石	長(5) 幅5 厚2	同一遺構から鉄釘 (8本) ・鉄刀子出土	Ⅳ期	南	SK 56	5次 (8910)	1213集	p.43-fig.45-422
23	砥石	長(10) 幅(6) 厚5.2	残欠	Ⅴ期	南	SK 208	6次 (9005)	1213集	p.132-fig.134-1472
24	砥石	長(10) 幅11.5 厚5.4	残欠	Ⅴ期	南	SK 208	6次 (9005)	1213集	p.132-fig.134-1473
25	砥石	長(9) 幅(7) 厚1.5	硬質砂岩,砥面3面,e790出土	Ⅴ期以降	中央	SG 1046	17次 (9910)	1022集	p.59-fig.32-32
26	砥石	長(17) 幅5.4 厚4.3	棒状自然礫を使用, 粘板岩か	古代か	南	SK 364	9次 (9236)	1213集	p.189-fig.188-2272
27	砥石	長(10) 幅2.7 厚1.8	棒状の自然礫を使用か,凝灰岩か	古代か	南	SK 41 (瓦溜り)	4次 (8829)	1213集	p.189-fig.188-2271

は透明、緑色を呈する。蛍光X線分析では西アジア系ソーダ石灰ガラスの特徴に類似する。また、カラス小玉には連玉のものや金箔を巻き込んだものがある。

⑪生産関係遺物 (Fig.62、Tab.42)

生産関係の遺物では鍛冶や鋳造のほか、製塩土器や石錘、土錘なども出土しており、施設の維持・管理、食料の調達などに関して様々な人々が関わったことがわかる。

南館SK208から出土したるつぼは、内面に金の粒子が２カ所見られ、金の溶解に使用されたと考えられる。南館では梵鐘の鋳造も行われており、関連するものが注目される。

羽口は少量であるが出土し、鉄器の修理などで鍛冶が行われていたことが窺える。

南館Sk15027で出土した鋳型は梵鐘の池の間の外型で、二ヶ所の縦帯が見られる。縦帯は中央が一条、左右が二条の縦線からなる。この鋳造に関わる溶解炉に挿入された羽口部分には右二分の一ほど溶融した銅が付着する。

出土遺物を見ると、交易に関わる品々が目立つ一方で、官衙で特徴的な帯金具や墨書土器、国産の須恵器や土師器、緑釉陶磁器などの出土量は少ない。蕃客などの滞在施設であった施設の在り方を象徴するものと考えられる。

４．　まとめ

（１）筑紫館出現以前の外交関係

日本書紀の持統２年（688）の記事に初出する筑紫館が鴻臚館の前身とされ、大宰府の外交施設として、蕃客の安置・供給・饗応の役割を担った。筑紫館登場するまでの四半世紀は、東アジアの動乱の中で、ヤマト王権にとって対外・対内的に激動の時代であったと言える。

天武２年（673)、天皇の即位を祝う賀騰極使・金承元らと、天智天皇の喪への弔いで金薩儒らが来日する（『日本書紀』)。前者は入京したが、後者は筑紫大郡で饗応を受けた。筑紫大郡は、この記事が初出であり、以後の史料では見られないが、筑紫での饗応はここで行われたと考えられている。

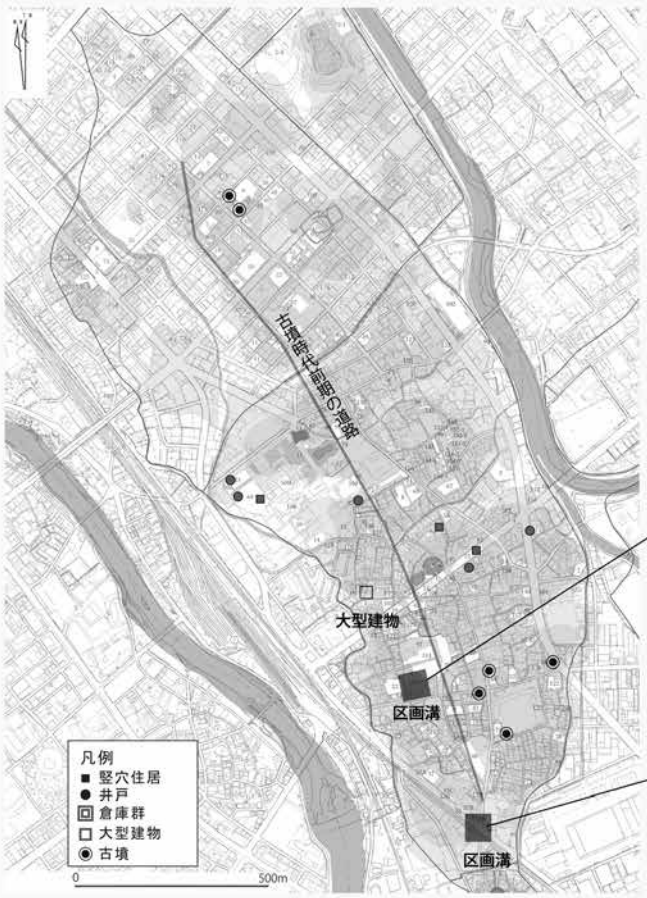
筑紫大郡の機能と構造は不明確であるが、難波大郡に共通するものと考えられている。難波大郡は『日本書紀』の欽明 22 年（561）の記事に登場し､難波津にあって､宿舎としての難波館と一体となり、百済や新羅、高句麗、唐などの外国使節を迎え、饗応や儀式を行うための施設と考えられている。筑紫大郡についても同様に、宿舎となる館が併設されていた可能性が高いが、史料では館の記載は見られない。所在した場所は特定されていないが、鴻臚館跡の発掘調査では対応する時期の遺構は確認されておらず、那津に近接する場所がふさわしいと考える。

那津官家関連の倉庫群が検出された比恵遺跡群の南側に隣接する那珂遺跡群では、比恵遺跡群と同様の倉庫群は確認されていないが、６世紀後半以降、集落が拡大し、7 世紀になると、大型の倉庫や牛頸窯系の初期瓦が検出されるようになる。中でも、第 23 次、114 次調査では 7 世紀前半から後半にかけての大型倉庫や東西長 90 ｍを図る区画溝などが確認されている。この地点周辺では牛頸窯系瓦も多数出土している。遺跡群の南端に当たる第 56 次・第 117 次調査では 7 世紀初頭から後半にかけての長舎建物や区画溝が確認されている。

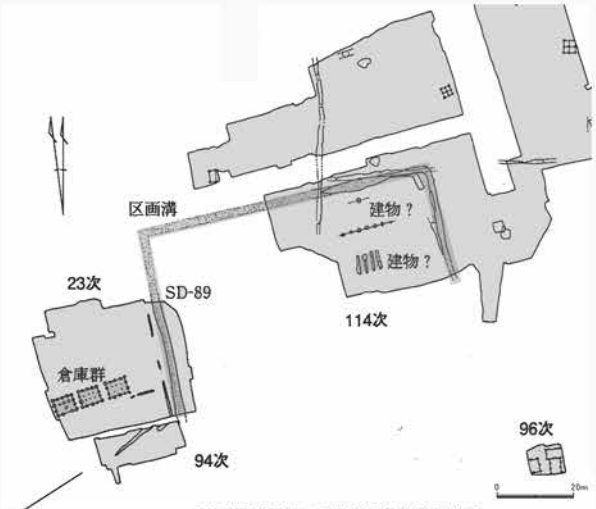
これらの施設については、相互をつなぐ道路の存在も想定されている。比恵・那珂遺跡群では比恵遺跡群北側から南に延びる古墳時代前期の幅６～７ｍの側溝を伴う道路状遺構が検出されており、那珂遺跡群第 114 次調査の東側を経て、遺跡群南端付近まで確認されている。7 世紀代の道路状遺構は確認されていないが、この道路状遺構周辺では初期瓦の出土例が多く見られ、第 114 次調査や第 56 次調査地点を結ぶような位置関係にあることから、このルートが再整備された可能性も考えられる。また、それぞれの施設は那珂川に面した立地にあり、河川の利用や港湾施設の存在も想定される。

このような遺構・遺物の様相から、那津官家から繋がる公的な施設や外交使節の招来などに関係した施設の可能性が推測される。河口に隣接する立地、クラやヤケ、タチなどに想定される遺構の存在、難波屯倉と難波大郡との関係などを参考にすると、那珂遺跡群は筑紫大郡が所在した有力な比定地と考えられる。更に、河口部にある博多遺跡群では７世紀後半の高句麗土器が出土しており、高句麗遺民の派遣との関係が指摘されている［白井　1998］。今後の調査が待たれるが、那珂川河口域は 7 世紀の外交使節の安置・饗応に関して拠点的役割を担ったと推測される。

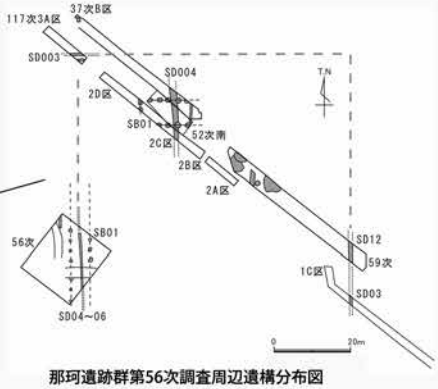
筑紫館については、『日本書紀』の持統２年（688）の記事に、新羅使金霜林らを饗応した施設として登場する。それは鴻臚館跡第Ⅰ期の建物群に対応すると考えられている。この施設が那珂川河口域ではなく、湾を挟んだ西側に立地することや宿舎である館で饗応を行っていることなど、筑紫大郡と一線を画するものであったと推測される。おそらく筑紫館は、律令体制を確立していく中で、外国使節にかかわる制度や施設の整備が行われ、新たに造営されたものであったと考えられる［菅波 2018］。



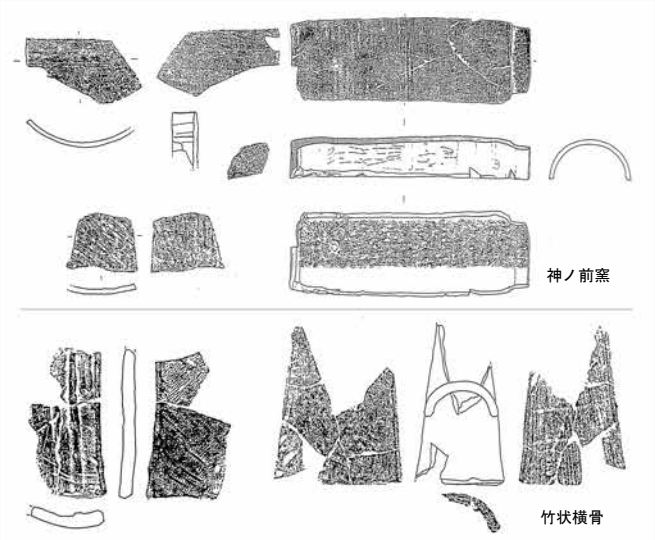
比恵・那珂遺跡群　7世紀中頃～後半の主要遺構分布図

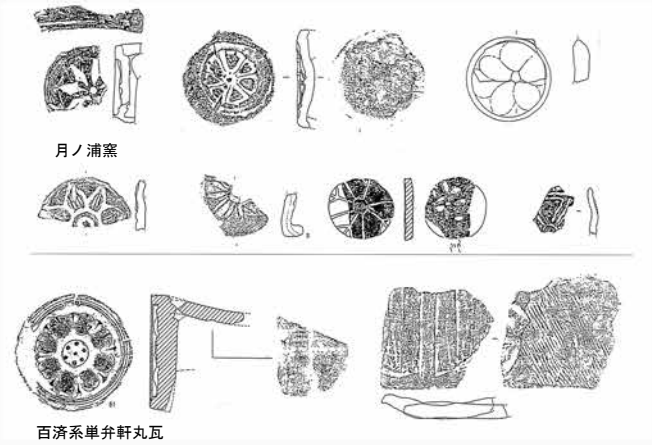


那珂遺跡群第114次調査周辺遺構分布図



那珂遺跡群第56次調査周辺遺構分布図





那珂遺跡群出土の初期瓦及び百済系単弁軒丸瓦

Fig.63　那珂遺跡群第 114 次、第 56 次調査周辺区画溝及び出土初期瓦実測図

（２）筑紫館の成立と変遷

これまでの調査で、筑紫館に関連する遺構は第Ⅰ期、第Ⅱ期のもので、創建年代は史料にある、７世紀後半と考えられる。第Ⅰ～Ⅱ期にかけての建物構成を整理すると以下のような変遷が追える。

第Ⅰ期（７世紀後半～８世紀前半）

第Ⅰ期は、丘陵に入り込む谷で南北に隔てられた施設（以後、それぞれを南館、北館と呼ぶ）が造営される。南館・北館とも掘立柱建物で構成される。後世の造成により、不明確な部分も多いが、南館と北館では建物等の主軸方位や構成が異なっている。検出された建物の状況から、南館建物群は長舎建物がロの字形に配置されたと想定される。内部にある建物は中心建物であった可能性が高い。北館は建物を塀で囲むもので、内部に数棟程度の建物が想定される。主軸方位はN－1°　30′　－Wをとり、復元規模は東西約 54 m×南北約 39m となる。

建物構成に注目すると、長舎建物が中心建物を取り囲む構造は初期の郡庁の建物配置に類似する。郡庁は政務の実務的な場である一方で、儀式や饗宴の場としての機能も想定されている。また、饗宴施設の建物配置モデルとして取り上げられている、奈良県石神遺跡のＡ３期東区画建物群にも類似する［小田 2014］。これらの事例を参考にすると、第Ⅰ期の南館には儀式や饗宴施設の機能が想定される。一方、北館の構造は建物を塀で取り囲むものであり、その構造から部外者との接触が避けられた外交使節が滞在する館（宿舎）の機能が想定される。つまり、海側に近い北館は宿舎であり、一段高い位置にある南館は儀式や饗宴施設となり、外交使節の宿泊、管理、饗応の機能を備えた施設の姿が浮かんでくる。

筑紫館以前の外交施設についても同様の構造や機能が想定され、筑紫大郡、小郡の構造などの解明にもつながるものと考えられる。

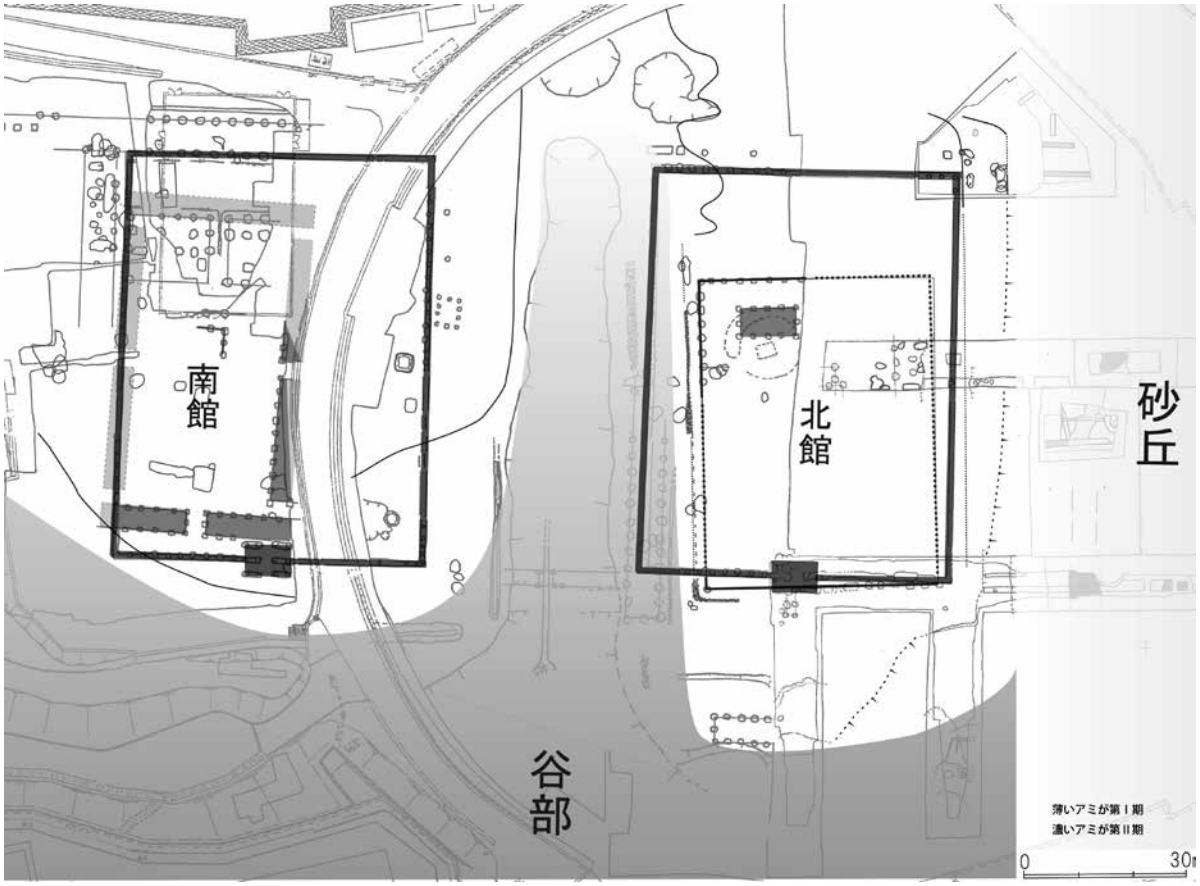


Fig.64 第Ⅰ期・Ⅱ期建物配置復元図

第Ⅱ期（８世紀前半～末）

第Ⅱ期は、およそ南北二町、東西一町の範囲を大規模に造成して敷地を広げ、規格性の高い建物配置が行われている。南館・北館は東西長約 74 m、南北長約 56 mの長方形区画の布掘りの塀が巡り、東側に八脚門が付く。塀の主軸方位はN −1° 30′ −Eをとる。門は梁行5.3 m×桁行7.5 m、中央間3.5 mを測る。塀の内側では建物の柱穴や礎石は確認できず、削平で失われたと推測されるが、鴻臚館式軒瓦が葺かれた建物で、第Ⅲ期と類似した長大な南北棟と考えられる。

南館と北館は同一主軸、同一規模の相似形をなすものであるが、造営の時期に若干の差が認められる。南館の布掘り塀と門、トイレ状遺構の造営時期は８世紀前半～中頃に比定される。一方北館は、石垣は８世紀前半の築造、石垣に後出する布掘り塀は、８世紀中頃～後半に造営されたと考えられる。

つまり、第Ⅰ期の長舎建物から変わる形で、南館が先行して布掘り塀と門、それに伴う施設が造営される。8 世紀前半～中頃に造営される南館は、第Ⅰ期の北館と同様、塀による区画施設をもつもので、宿泊施設として再整備されたと考えられる［菅波 2017］。8 世紀中頃から後半に造営される北館については、宝亀 4 年（773）の渤海使に対して旧例に従い大宰府を経由すべしという、大政官の通告（『続日本紀』）により必要になった可能性が指摘されている［坂上 2018］。

⑶ 筑紫館の変質

大宝律令の施行に伴って、大宰府の官制は整備され、律令国家の対外的機能、軍事的機能の一端を担い、かつ、西海道を統括する機関となる。これに対応する朝堂院様式の大宰府政庁第Ⅱ期の建物は、海外の使者を送迎する儀礼の府としての姿に相応しいものであった。政庁第Ⅱ期の造営の時期は、和銅年間（708 ～ 715）から霊亀年間（715 ～ 717）を経て養老年間（717 ～ 724）頃までというのが有力な説であり、第Ⅱ期の筑紫館の造営もこれに続いて行われたと考えられる。このことは政庁第Ⅱ期の所用瓦が筑紫館で使用されていることからも看取される。また、『続日本紀』の天平４年（732）の記事に、「造客館司」を初めて設置したとある。こうした動きは８世紀第２四半期の造営とされる太宰府市客館跡や第Ⅱ期の筑紫館の設置や改修にも関わるものであり、新羅や渤海との外交関係の強化をめざした造営事業として一体的に捉える必要があろう。

第Ⅱ期の筑紫館の役割は、遣唐使や遣新羅使の風待ちの場所でもあったが、一義的には新羅との外交政策のための施設と言えよう。ただし、新羅使は来朝しても筑紫館での饗応記事がないことから、大宰府で饗応を受けたと考えられる。大宰府客館もその関連の施設であろう。したがって、筑紫館の主な役割は新羅使の安置・供給に変わったと想定する。

この時期の日本と新羅の関係は、朝貢を求める日本とそれに改めたい新羅の姿勢により、次第に亀裂を生じていく。天平６年（734）、国号を「王城国」に改めたと告げた新羅の使節を返して以来、一時は新羅討伐の計画が立てられるほどの状況になる（『続日本紀』）。一旦、小康状態が続いた後、宝亀 10 年（779）を最後に新羅使の行き来が途絶えることになる。結果として、外交施設としての筑紫館の役割は低下していくことになる。

（４）鴻臚館の変遷

第Ⅲ期（９世紀初～後半）

第Ⅲ期は、乱積みの基壇を持つ礎石建物が設けられた時期で、建物配置から第Ⅱ期の建物方位や中軸線を踏襲した回廊状の建物とその内部に長大な南北建物が配置されたと考えられる。南館、北館とも回廊状の建物と想定されるが、北館は南館より南北の長さが一回り小さい復元案が示されている。

この時期の施設の様子を示すものとして、天安２年（858）、唐から帰国した円珍に対して、鴻臚館に滞在した中国海商の送別詩の題に「鴻臚北館門楼」という記載があり（『唐人送別詩並尺牘』）、この時期の北館は重層の門であったと想定される。

第Ⅲ期は外交施設としての役割が低下する一方で、施設は威容を誇るものとなる。第Ⅲ期開始期の弘仁年間（810 ～ 824）は、施設の名称を唐風に呼び変える時期であり、改変の契機も唐風化の風潮に関連するのかもしれない。大きく様変わりした鴻臚館には外国からの使節に変わり、新羅や唐の海商が来着するようになり、施設の役割も大きく変化していく。それまで使節により人々やモノは行き来していたが、外国商人が主体となるように変わっていく。第Ⅲ期の前半は、黄海に交易ネットワークを構築した新羅の海商が交易を求めて来日するようになる。しかし、承和８年（841）の清海鎮の張宝高の暗殺を契機として、新羅人の入境が禁じられたことにより、唐の海商が交易の担い手となる。

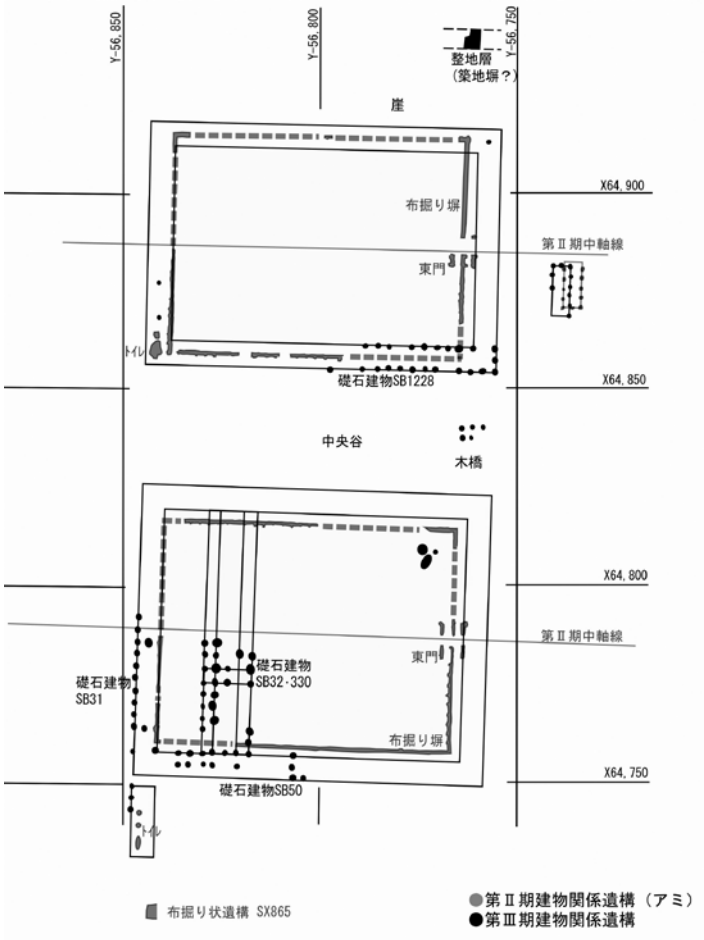


Fig.65 第Ⅱ・Ⅲ期建物配置復元図

第Ⅳ期以降（９世紀後半～ 11 世紀前半）

第Ⅳ期以降は、中国海商の来着の記事が多くみられ、この場所が唐物の取引の場として、活況を呈していたと推測される。

ただし、建物遺構の遺存状況は悪く、施設構造は不明確である。しかし、瓦類は多量に出土しており、特に 10 ～ 11 世紀代の特徴を示す瓦も多く含まれることから、瓦葺き建物は存在したことは確かであろう。また、梵鐘鋳造遺構が確認されていることから、鐘楼などの存在も想定される。

第Ⅳ期では、貿易陶磁器の量、種類とも激増し、福建産も含んだ越州窯系青磁が大量に持ち込まれる。この背景には陶磁器の産地である呉越国（浙江）や閩国（福建）が海外貿易を盛んに行い、窯業にも力を入れていたということが指摘されている〔田中　2018〕。この時期の海商の記録では、承平５年（935）の蒋承勲（呉越国）、天慶８年（945）の蒋袞（呉越国）の来日が知られる。第Ⅴ期になると、華南の景徳鎮窯白磁が出現し、越州窯系青磁は減少傾向となる。この時期の宋海商の記録では、正暦元年（990）の周文徳・楊仁紹、長徳４年（998）の曾令文、長和元年（1012）の周文裔、長和５年（1016）の周良史、長暦２年（1038）の莫晏誠などの来日があり、そのうち、周文裔や周良史などは６～８年と長期に滞在して交易をおこなっていたことが知られる〔渡辺　2010〕。

建物遺構が不明確なこの時期であるが、南館では貿易陶磁器を大量に廃棄した土坑が多数検出され、第Ⅳ期からⅤ期の貿易陶磁器の様相に変化があることがわかった。それは、当時の東シナ海を介した中国海商による交易の在り方にも関わるものであると考えられる。

（5）鴻臚館の変質

鴻臚館の役割の変化を遺構・遺物の状況から考えてみると、瓦の出土状況や廃棄土坑の様相から南北の機能差を窺うことができる。つまり、南館には貿易陶磁器類の管理や取引、北館には宴会や飲食、宿舎といった役割が想定できるのではないかと考える。第Ⅳ期以降の様相はそれより前に比べ、整然さが欠けるような印象であるが、そこには贈与や宴を介して、中国海商との関係を維持した大宰府官人の姿も垣間見えるのかもしれない。

交易以外の面で鴻臚館の役割を見ていくと、『日本三代実録』貞観 11 年（869）5 月 22 日に、新羅海賊に豊前国年貢の絹綿が略奪されたことに対応して、同年 12 月には鴻臚館へ統領 1 人･選士 40 人、甲冑 40 具､翌年正月には甲冑 110 具を移している。また､『延喜式』には大宰府の兵馬 20 疋のうち 10 疋、牧馬 10 疋を分置するとあり、防備の拠点強化も進められている。

鴻臚館の防備に関して、北館の北側の崖下で第Ⅳ期に位置づけられる塀の積土もしくは積土が崩壊堆積したものが検出されている。全容は不明であるが、北側の外郭を示すもので、第Ⅴ期まで継続したと想定される。なお、第Ⅱ期・第Ⅲ期の外郭を示す遺構については確認されていない。第Ⅳ期以降の鴻臚館の役割は外交施設から中国海商との取引の場と変わり、合わせて新羅海賊などへの防備も強化される。それらのことから、ここで検出された外郭施設も外交施設の外観より、防備を重視していた可能性も考えられる。

（6）鴻臚館の終焉

鴻臚館の最末期の第Ⅴ期になると、宋海商の滞在期間は 6 ～ 8 年という長期にわたって滞在する例も見られるようになる。来航の年数を規定する年紀制により、規定年数まで居住した後、わずかな年数だけ帰国し再び来航するという形態で貿易を行う宋海商が現れた結果、鴻臚館では常駐化する宋商人がいたと想定されている。この時期に見られる「綱」「呉」「李」「鄭」などを墨書した陶磁器の存在がその傍証と言えよう。また、このことは後の博多における「住蕃貿易」に繋がるものものとして評価されている［渡邊 2010］。

11 世紀中頃以降は、『扶桑略記』永承２年（1047）の「大宋国商客宿房」放火犯人の捕縛の記事と整合するかのように、鴻臚館に関わる遺構や遺物は皆無となり、焼失した鴻臚館は再建されなかったと考えられる。ただし、史料に示される事件と考古学的な変遷とでは整合の取れていない点も多い。11 世紀中頃の史料である藤原明衡『雲州消息』下末所収文書に見られる「客館」「鄭十四客房」や『香要抄』にある「唐人王満之宿坊」などは鴻臚館焼失後のものであり、その場所が鴻臚館であるか博多であるかの検証が必要である［山内 2010、亀井 2015、大庭 2015］。

廃絶後の鴻臚館及び跡地に関する記録は皆無であるが、北館北東隅の調査では 14 世紀前後と 15・16 世紀に大規模な造成が行われていることがわかった。前者については、元寇との関係も視野に入れる必要もあろう。後者については、これまでの調査で板碑や懸仏などの信仰関連遺物や崖下の低地部で掘立柱建物が確認されており、寺院や集落の造営に関わるものと推測される。

（7）鴻臚館から博多への移行について

古代における「博多」に関して、『続日本紀』天平宝字３年（759）3 月 24 日条の「博多大津」があげられるが、広義の博多湾を指したもので、古代の博多の様相を示す文献史料はほとんどない。発掘調査の成果がその様相を知る手がかりである。

遺跡群では８世紀以降、区画の溝や竪穴住居跡、井戸などの遺構が確認されており、那珂川河口の

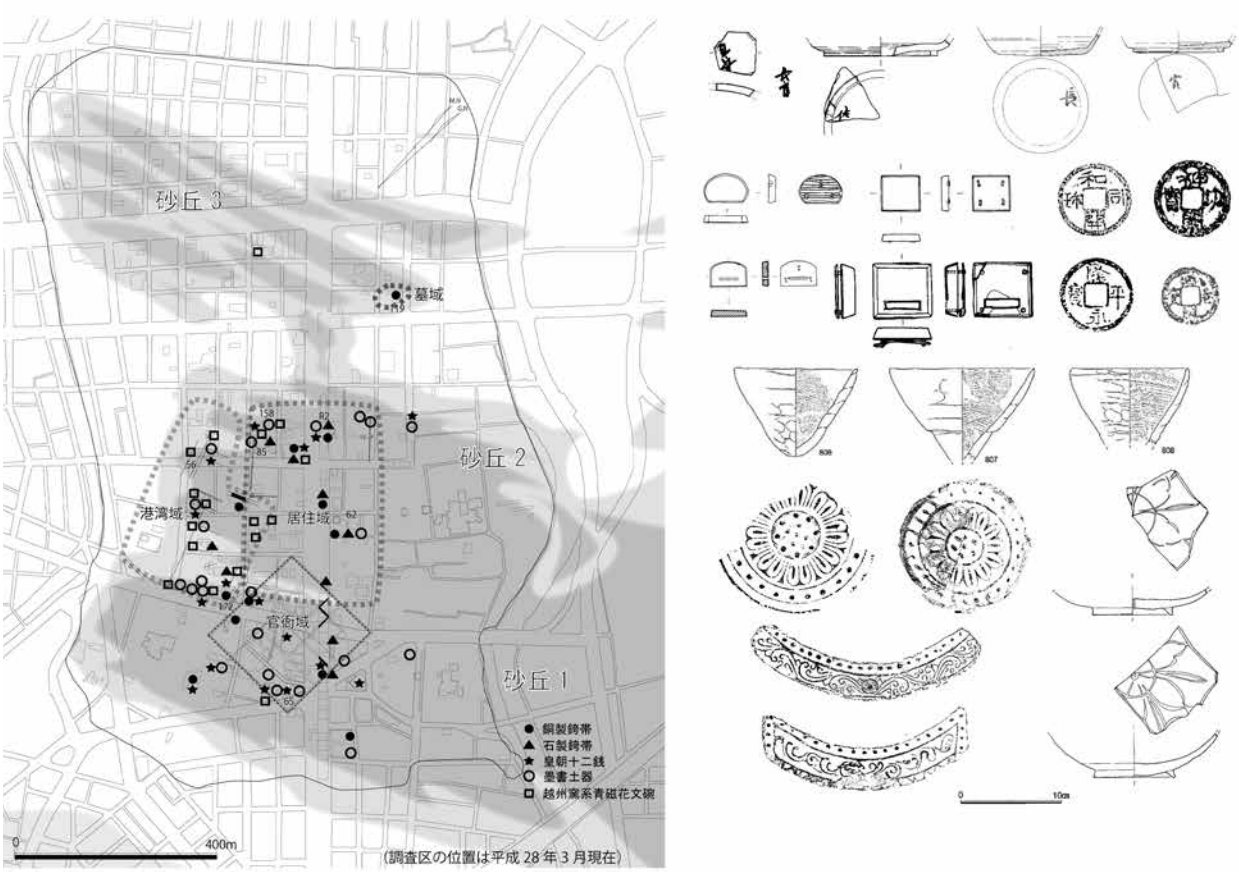


Fig.66　博多遺跡群古代遺物分布および出土遺物実測図

北西側は港湾域と想定されている（Fig.66 左）。それらの地域からは官人層の存在を示す帯金具や墨書土器、硯などの遺物が確認される。また、鴻臚館跡には数量的には劣るものの、越州窯系青磁・邢窯系白磁・長沙窯の製品、イスラム陶器など初期貿易陶磁器が出土している（Fig.66 右）。数量の多い越州窯系青磁についてはほぼ全域で出土している。

10 世紀後半から 11 世紀前半になると、鴻臚館跡でも多く見られる、見込みに花文を施した越州窯系青磁碗や華南産白磁碗などが港湾域を中心に出土するようになる。この段階では鴻臚館跡で検出されたような貿易陶磁器の廃棄遺構は検出されていないものの、鴻臚館跡と同様の陶磁器類が多量に出土しており、中国海商との交易に関連するものと言えよう。

この時期は鴻臚館の第Ⅴ期にあたり、宋海商が滞在して交易活動をおこなっている。大宰府による管理貿易では、公的な交易が終わった後に民間の交易が行われるが、博多は民間交易の場となっていたと考えられる。鴻臚館焼失後の 11 世紀後半以降、その新たな拠点となったのは博多であるが、それに先立って交易活動の一端が博多にも存在していたことが推測される。

（8）おわりに

古代における博多湾は、遠近の国々が朝貢してくる場所であり、警護武衛の要の地として管理されていた。鴻臚館は約 400 年間の存続期間の中で、対外関係の変化と連動して、施設の性格が変容しており、遺構や遺物からもそのことを窺うことができる。例えば、外交の施設であった第Ⅰ期・第Ⅱ期の建物の様相と大宰府政庁への機能分化、本格的に交易の場となった第Ⅳ期以降の膨大な量の貿易陶磁器、更に新羅海賊の侵入などに対して、兵士や武器・兵馬等を配備して防備の強化などがあげられる。

鴻臚館に関しては隣接地や関連遺跡の調査による全容解明が待たれる。鴻臚館に付属したと考えられる倉庫や馬の厩舎、博多津の防備を行った「警固所」などについては考古学的に確認されておらず、これらの検証も鴻臚館の全容解明につながる課題と言える。

今回の総括では調査成果を十分に精査し、鴻臚館の実像にせまることが求められたが、膨大な資料と報告者の力不足からその責を果たすことができなかった。今後予定される史跡鴻臚館跡東側の高等裁判所跡地は、これまでの調査では両者の間の深い谷の存在や古代瓦を含む整地層が確認されており、関連施設の存在が期待される。今回の不備を補いたい。また、博多遺跡群をはじめとした関連遺跡の調査・研究についても、鴻臚館の全容解明には不可欠であり、その点についても取り組んで行きたい。

最後に、これまでの調査成果によって描かれた鴻臚館の歴史像は市民と共有し、史跡の整備に活かす必要があり、国際交流都市福岡の原点となる文化財をよりわかりやすく、魅力を伝えられるよう努めていきたい。

参考・引用文献

大庭康時　2015 年「博多津唐房以前」『博多研究会誌』第 13 号　博多研究会

小田裕樹　2014 年「饗宴施設の構造と長舎」『長舎と官衙の建物配置　報告編』第 17 回　古代官衙・集落研究会報告書　クバプロ

亀井明徳　2015 年「鴻臚館と唐房の構造と機能」『博多唐房の研究』亜州古陶瓷学会

九州歴史資料館編　2002 年『大宰府政庁跡』吉川弘文館

坂上康俊　2018 年「筑紫館の風景」『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館

佐藤鉄太郎　1994 年「実在した幻の城―大津城考―」『中村学園研究紀要』第 26 号

白井克也　1998 年「博多出土高句麗土器と 7 世紀の北部九州」『考古学雑誌』第 83 巻 4 号　日本考古学会

菅波正人他　2017 年「鴻臚館跡 23―北館部分の調査（２）」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第 1326 集　福岡市教育委員会

菅波正人　2017 年「鴻臚館の道路と景観」『日本古代の道路と景観―駅家・官衙・寺―』八木書店

菅波正人　2018 年「鴻臚館の成立と変遷」『大宰府の研究』高志書院

田島　公　1995 年「大宰府鴻臚館の終焉―八世紀～十一世紀の対外交易システムの解明―」『日本史研究』三八九　日本史研究会

田中克子　2017 年「鴻臚館時代の貿易陶磁器と交易」『よみがえれ！鴻臚館―行き交う人々と唐物―』福岡市博物館

田中史生　2016 年『国際交易と古代列島』角川選書 567　ＫＡＤＯＫＡＷＡ

田村圓澄　1990 年『大宰府探究』吉川弘文館

長　洋一　2005 年「大宰府鴻臚館前史への試論」『海路』第２号　海鳥社　「海路」編集委員会

平野邦雄　1990 年「鴻臚館の成立」『古代文化』42　古代学協会

山内晋次　2010 年「『香要抄』の宋海商史料をめぐって」『東アジアを結ぶモノ・場』勉誠出版

山崎覚士　2007 年「九世紀ににおける東アジア海域と海商－徐公直と徐公祐」〔大阪市立大学大学院文学研究科紀要』第 58 巻

吉武　学　2012 年「鴻臚館跡 19―南館部分の調査（１）」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第 1175 集　福岡市教育委員会

吉武　学　2013 年「鴻臚館跡 20―南館部分の調査（２）」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第 1213 集　福岡市教育委員会

渡邊　誠　2010 年「鴻臚館の盛衰」『日本の対外関係３　通交と通商圏の拡大』吉川弘文館

報　告　書　抄　録

ふりがな	しせき　こうろかんあと
書名	史跡　鴻臚館跡
副書名	－総括編 －
巻次	鴻臚館跡 25
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1383 集
編著者名	菅波　正人、光吉　千里
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒 810-8621　福岡市中央区天神１丁目８－１電話番号　092-711-4784
発行年月日	2019 年 3 月 2 5 日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
史跡鴻臚館跡・ 史跡福岡城跡	福岡市中央区 城内１－１	40134	0192	33° 35′ 12″	130° 23′ 11″	871225 ～ 140328	(計 32、319)	範囲確認

所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡鴻臚館跡・ 史跡 福岡城跡	集落 官衙	古墳時代 ～現代	掘立柱建物 石垣 布掘り塀 礎石建物 便所状遺構 溝 土坑 柱穴 整地層 包含層	須恵器 土師器 中国陶磁器 朝鮮陶磁器 瓦 石製品 鉄製品 銅製品	古代の客館である 鴻臚館 （筑紫館）跡

史跡　鴻臚館跡

鴻臚館跡 25

－総括編－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1383 集

2019 年（平成 31 年）3 月 25 日

発　　行　　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８－１

印　　刷　　株式会社親和プロセス

福岡市博多南区塩原１丁目４番４号